

あの日の戦友たちは今敵となる

ゼノア plus +

俺がみんなを守るなんて、もう言わない。言う資格も無い。

もうそれは過ぎたことだから、今度こそ、今度こそ俺はこの世界で生き抜く、そのためにも

本来は存在しない、変わることの許されない未来、それを俺は作ってみせる。

亡国企業実働部隊モノクロームアバター所属織斑一夏として、全ての任務を遂行し、破壊する。そのためだけに平和な日常を捨てたのだから…

12巻の内容も取り入れる予定ですのでネタバレにご注意ください。今までの話に修正を加えましたがそれほど今後に影響が出ることはないと思います。

リアルでの環境が少し変化し投稿速度が不定期になっています。ご了承ください。

目次

番外編

俺に力を貸せ！○○○○○！

懐かしきあの日々は今はもう未来の話

プロローグ

回想 1

回想 2

回想 3

未来は現実となり変わっていく

交流（社交辞令）開始

俺だって言われてばかりじゃない。

個性強くない？

1

1

27

27

35

44

53

65

65

77

91

It w a k e d u p

↳邂逅↳そして出撃

g a m e s t a r t

試合終了

決定↳報告オータム:スマン

授業 黒歴史なんぞ俺は知らん(震)

主役のいないパーティーって楽しい?

再会は陰キャには辛いだけ(作者のこと)

新たな任務(無理ゲー)

招かれざる客は必然に

ユニコーン、展開

状況終了

弱くなった

俺の望む未来のために

そうだ、倉持に行こう！.....

They are strangers（奴らは変態）.....

天災は忘れた頃にやって来る.....

静かな蝶の目覚め.....

決着はあっけなく.....

Sの休日①.....

Sの休日②（S成分少なめ）.....

Sの休日③.....

設定（現在まで）

人物紹介現在まで【亡国企業】.....

人物紹介現在まで【IS学園】.....

IS紹介（小話有り）.....

変わる現実は何を望む

転校生は強烈 山田先生もエグい

山田先生の実力と入社テスト

クラスメイトのボーデヴィツヒ

完成品と不良品

それぞれの思いを胸に

嵐のような一日

初めての

デュノア

VS ボーデヴィツヒ

縛られし狼と解き放たれし一角獣

頼ることの大切さ

久方ぶりに平和な1日

亡霊は踊る……………	644
妹を想うバケモノ……………	670
望んだ未来は虚構となりて……………	693
天災、世界最強、化け物、そして少女の序章……………	693
少女達は海と共に輝いて……………	722
乙女の会合と亡霊達の密会……………	741
予想内の最悪……………	764
撃滅、並びに……………	783
努力……………	808
空を駆ける戦姫達……………	825
勝利の余韻に現を抜かし……………	851
ユグドラシル……………	871
戦いの果てに……………	892

麗しき夏 血に染めて

サラ・ウェルキン、亡国にて……………

裏と面の狭間で……………

新生モノクローム・アバター初陣……………

祝福の花火……………

親 娘 家族……………

予想内の予想外……………

番外編

俺に力を貸せ！○○○○○！

はいどうも、研修先の外国が40度だった日に帰国すると日本が6度で34度の気温差に風邪をひきかけた作者です。

なんとなく思いついて書いてみましたが、グダリすぎて何も言えません。

ちなみにこれは投稿の1時間前から書き始めて投稿したのですが、文字数的には皆様どれくらいが良いのでしょうか？ちなみに本編が2000文字程度でこれが6000文字程度です。

どうも一夏です。今は訓練をしています。

「ふう：今日の訓練はここまでにするか：ん？はいもしもし、Sです」

亡国ナンバーからだけどこんな朝早くに誰からだ？

『Sよ、貴様に任務を与える。至急研究所に行け』

突然スギィ！まあ行けるけど。

「ボスですか、任務了解しました。つかぬ事をお聞きますがどのような任務で？

」

『ああ…それなんだがな…私もよくは聞かされてないのだが研究所の方から来てくれとしか言われてないのだよ。まあ命に関わるようなことは私がさせないから安心したまえ』

いや怖いわ、うちのマッド共にまともについて行くとろくなことにならねえよ。

「は、はあ…分かりました。それでは失礼します」

まあ行くか。おっとシャワーくらいは浴びとかないとな。IS スーツは…一応着るか…



「ああよく来たね一夏君！待ってたよ！さあこっちへ」

俺はできれば来たくなかったです。ちなみにこの人はレイさん。この研究所の所長でマッドサイエンティスト筆頭だ。

「それで？任務の内容は？」

「せっかちななあ……ただの新作ISの起動実験とそれに伴う性能調査、オプションもあるよ」

オプションは余計だよ!?

「じゃあ早速開始しましょう、ISスーツも着てますし。どんな機体ですか？一応俺全距離で試せますけど……」

「それなんだがね、説明が難しいのだよ。どちらかといえばまあ……近接型に分類するか。あ、全身装甲だからよろしく」

まあ変なもん作ったんだな……そして扉が開き始めた。

「これは、まさに君のために用意したといっても過言ではない伝説の機体だ」

白がいた。そこには、わかる人には必ずわかるあの伝説がいた。角ばったボディに何よりも印象的な頭から生えている角。

「はあ…めんどくさい…」

「そう！ユニコーンガンダムだ！」

ああうん、そういえばこの人ロボットアニメの大ファンだったな。どうせ俺の聲がほぼ同じだからとか何とかでまた作ったんだろうな。(CV同じです)研究所の金で…

「さあ一夏君早く乗ってくれ！ビームマグナムから、シールド、ブースター、ビームサーベル、NTDまでしっかり再現したのだよ！さあ早く！」

あえて言おう。何やってんだアンタァァ!!

「レイさん、たしか今ってレーザー兵器が開発されて間もないくらいでしたよね？イギリスのブルーティアーズ型とか。」

「おお！さすがボスのお気に入り！よく勉強してるね！あんなのはレーザーでもなんでもないただの光だよ。レーザーを名乗るんならコロニーレーザーくらいのを作らないと私は認めない！」

いやあれは宇宙にあるから。そんな技術どこかの天災ウサギでも無理だから。

「そうですか…ていうかNT-Dはダメでしょ！え、何？あれ再現したの？ニュータイプなんかいないのに？」

イヤイヤ、レイさんや、名前がアムロと同じだからってそれは無理でしょ？

「まあそれは流石にISに反応するようにしたさ。もちろんサイコフレームも再現したからしつかりアニメを再現できるよ！」

「それが目的か!? この女、世界初の男性操縦者をなんだと思ってやる!」

まさかオプシオンって台本のことか!?

「何を言ってるんだい? 私の大事な研究資料だよ!」

この女、なんかある意味束さんと通じるところがあるんですけど!?

「言い切りやがったよ! 貴重なISコアをこんなことに使うとは…どうせNT-Dもエネルギー消費する燃費の悪い機体だろ!」

白式が遠距離戦も出来るだけでしょ? あれ? 普通に強くない?

「なぜ分かった!? で、でも操縦者に負荷はかけないようにしたし、ビームも原作通りカードリッジつけてるし、サイコフレームに独自にエネルギー貯めてるからそこまで燃費は悪くないはずだよ!」

それはもう原作のユニコーンから外れてんですけど…

「いやだからなんであんたは、エネルギーパックとかISのエネルギーをパーツに貯めておくシステムやら作れるんだよ!? 明らかにコアいじってるよね!? じゃないとなんな技術無理だから!」

この人はマッドというかヤバイ!



約30分くらいだろうか。俺たちはずっと言い合いをしていた気がする。時間なんて気にしてられないよ…

「ハアハア……」

つ、疲れた…仕方ない、折れるか。

「分かりましたよ。乗ればいいんですよ！ですけど俺の期待通りじゃなかったらボスに報告しますからね！」

「フン！今回は今までより真面目なものだからね！乗ってみればその素晴らしさがよくわかるはずだよ！」

この人は全く…

そして俺はユニコーンに乗ろうとした。だが…

「あれ？全身装甲の機体ってどこから乗ればいいんですか？」

「あ……ちょっと待って！wait a minute！」

「やっぱ欠陥機じゃないですか!? なんなの!? 乗れない機体を作って何がしたいんですか！」

「やりました…。やったんですよ！必死に！その結果がこれなんですよ!!」

「それは俺が言わないと意味がないでしょうがアアアアアア!!!!」

そんなこんなで約1分。ドッグタグ型の待機形態作ってきやがったよ…分かった。俺はもう何も気にしない…

「本来なら一度専用機として登録しないと待機形態には出来ないんだけどね。忘れ

て……そこまで考えが至らなかったから急いで君の生体情報を登録したのだよ！
だから乗れるはずだ！」

努力の方向性を間違えてなければ束さんに次ぐかもしれない研究者だと思うんだ
けどなあ。あと俺の耳にはしっかり忘れてたって聞こえましたよ？

そんな事はもう面倒なので今度こそ俺はユニコーンを展開した。

「あ、展開するときは、俺に力を貸せ！ユニコーン！でお願いね？」

「時間の無駄なんで普通にやります」

「手厳しい!!」

構ってられるか。さてとどんなもんかな、アニメの再現というのは。

「ん？フムフム…へえ…視界はカメラか、壊れた時のために頭部はヘルメット型になっていると。しかも全身装甲なのに動きに違和感がない。これは…ああマグネツトコーティングか。ユニコーンにもあったんだな。レイさん？これ俺にめっちゃ馴染むんですけど？」

違和感が無さすぎて逆に違和感がある。まるでこの機体が俺自身みたいだ。俺がガンダムだ！なんてな。

「そりゃあ展開出来るように君の情報を登録したからね。待機形態のドッグタグも君の情報がしっかりあるよ」

ふーん。よくわかんねえけどまあ展開出来るんならいいか。…ん？俺の情報を登録した？

「レイさん!? まさかこの機体俺の専用機になってません!？」

「え？ ああ!? ホントだ！ 一夏君以外展開できない！ これはマズイかも……ふう：逆に考えるんだ私。アニメでもユニコーンの搭乗者はバナージでロックされてたはず。そう考えれば……行ける！」

行けねえよ！ ああ……大切なコアが……初期化するの面倒だろうなあ。

「はあ……もういいですよ。機体は初期化すればいいですし。とりあえずテストだけ済ませましょう」

早く終わらせて報酬だけもらいたい。

「そうだね。じゃあまずは基本的な移動、関節部の可動域、ブースターを使った移動をしようか」

「了解です」

そして機体の起動実験が始まった。



だいたい2時間ほど経過した。

「お疲れ。いやあ、いいデータが取れたよ！とりあえず武装面までの試験は完璧だね！まさかここまでなんの問題もないとは流石に思わなかったよ！」

この機体、体に負担ほとんどかからない。負荷は無くしたって言ってたけどそれだけでどうにかなる問題じゃないだろ。あとは武装だ。正直言って危険すぎる。ビーム兵器がヤバイ…なんといってもヤバイ。なんだよラファール二体の装甲抜けるとか聞いてねえぞ。シャルが泣くぞおい？でも多分まだ行けるな。俺の予想だ

と…五体は行けるか…

「たしかに順調すぎますね。まあこのまま終われるわけではないと思いますけど…」

「よくわかってるねえ。まあ大丈夫だよ、これで最後だから。じゃあ今回の目玉！ NT-Dを試してみよう！ 流石に反応するかわからないから無人機を相手にしてね」

「なんで無人機あるんだよ!? あんた実は束さんだろ!? あの人以外まだ無人機なんて作れねえよ!」

「君から聞いた記憶から私なりに考えて作ってみたんだよ。まあコアを使わずにエネルギーパックを核にしてるだけのISモドキだよ」

この人、束さん超えてる気がしてきた。

「分かりましたよ……えっと起動方法は……ああこれか。てか単一能力ワンオフアビリティなのか、じゃあ使い方分かるわ。」

そして俺は起動させた。

ユニコーンは各パーツのロックを解除、中にあるサイコフレームを引き出していく。更に頭部に違和感、顔がガンダムフェイスに変わり角が割れる。この時点で大分身長が伸び違和感がある。次に背中のビームサーベルの柄が上上がり掴みやすい位置に、最後にサイコフレームが赤く光り輝いた。変身完了、といったところか。

「うお！機体出力が大幅に上がってる!? おいおいこれじゃシールドエネルギーがすぐに尽き……てない！こいつは凄い！アニメみたいにパイロットに負荷もかからない。うわぁ、白式の10倍は出力が出てる……俺これ使えるかな……」

「どう？私の傑作は。ちなみにサイココミュ・ジャックも出来るよ。ちょうどいいところに試しに作ってみたファングとファンネル、シールドビットとユニコーン用

のシールドファンネルがあるから試そうか！」

アンタそんなにニュータイプ用兵器好きか。セシリアとかイギリス泣くぞ。

「どうすれば良いんですか？」

「んー、シンプルにイメージ・インターフェイスを使う様に遠隔操作を思い浮かべれば行けるんじゃないかな？ まあ物は試した。なんでもやろう！」

研究者としては超一流で言ってる事は正しいからまともに反論できない。

「セシリアは確かBT適正は高かったけどそれでも移動しながらの操作は出来なかった。だとするとなかなか難しいはず。こんな感じか？」

俺は試しにMK・VとかSガンダムとかが持つてる有線式のインコムを思い浮かべ

てみた。するとどういう事だろうか。全ての遠隔操作兵器が宙に浮かび上がった。

「うぐっ……これはなかなかきつい……これ程までに集中力が必要だとは……もう無理だ。やめよう!」

その瞬間全ての兵器が地に落ちた。成果を聞くためにレイさんに視線を向けると目を開き口を大きく開けてポカンと立っているではないか。どうした?

「一夏君……今何したの?」

「何って普通に兵器たちを使用しようとしただけです? 集中が続かなくてすぐ落ちましたけど」

何をそんなに驚いてんの?

「いや君自分が何をしたかわかってるの!? 私が遊び半分いや遊び8割で作ったファンネル達を全て、50はあったはずのものを全て動かしたんだよ! そんなことをしたら脳に負荷がかかりすぎる! 今すぐ検査をしてもらいに行って!」

え? 今のそんなに凄いいことなの?

「分かりました。でもちょっと今動けなくてですね、難しいかもです…」

俺が覚えているのはその言葉までだった。



眼が覚めると真っ白な天井が目に入った。ここはアレだな。

「知らない天井だ…」

これは決まった。

「残念。あなたも何回も来たことある検査室ですよー」

なん…だと…

「これはお恥ずかしいところをお見せしました。ところで私はどうしてここに？」

「何言ってるんですか？新ISの実験中に無理しすぎて倒れたんでしょう？レイ所長から聞いてますよ。あと脳には特に異常は見つかりませんでしたので今日はしっかり休養を取れば、明日からは普通にしていっても問題ありません」

そういやそうだったな。結局あの後どうなったんだろう？途中で止まっちゃったから…ハッ!? 任務遂行できなくて報酬無し!? ヤバイ、それだけは回避したい

！今月はガンダム○ンラインの新機体が面白そうだから課金したいのと俺はPS4が欲しいんだ！

「ありがとうございます。それで、レイさんは何か言っていました？」

「目が覚めたら社長室に来て欲しいと言っていましたよ」

うわー絶対任務失敗の話だ。しかもボスに直接のパターン。俺死なねえかな？



「よく来たなS、いや今はいいか。ようこそ一夏君。任務お疲れ様。おかげでいいデータが取れたとレイ君も言っていたよ」

え？怒られる感じじゃないの？

「ありがとうございます。しかし私は途中で倒れました。それは問題だと思いますが？」

「まあ任務が完璧ではなかったというのは確かにある。実は私は、今回の実験を見ていたのだよ。君が大量の遠隔操作兵器を使えたら理由、それはおそらくナノマシンによる並列思考と演算能力、空間認識能力が向上しているためだと思う。更にユニコーンと君の相性もよく、さらにミスとはいえ君の専用機になってしまった」

やっぱコアが俺のものになったのは問題だよな。

「まあコアが君のものになったのは大した問題ではない。もともと定例議会で君に専用機を持たせる話があったからな。よって、ユニコーンガンダムをS、君の専用機として正式に認める。亡国として動くときはユニコーンを使って任務を遂行したまえ」

あれえ、話がおかしな方向に進んでいる気がするぞ？え？任務でアレ使うの？まじかー。

「わ、分かりました。貴重なISコアと機体、ボスのご期待に添えるよう使わせていただきます」



そんなこんなで次の日

また研究所に呼ばれた俺はレイさんとユニコーンのカスタマイズについて話していた。

「武装の基本構成は何かいい？それから機体の色、名前も」

「そうですね、拡張領域にもありますが基本的なビームマグナム、ビームサーベル、ビームマシンガン、ハイパーバズーカ、あとはファンネルとファング、シールドビットを入れてください。色は白い部分は黒に、サイコフレームは紫に発光するようにさせてください。名前は…【ウルティオ】でお願いします」

正直言おう。俺は少し厨二病だ。

「拡張領域は結構余裕があるからビーム兵器のカードリッジを大量に入れておくね。色と名前は…ちょっとまって。ガンダムブレイカーでちょっと試してみる」

ゲームかい！シミュレーター使えや！

「こんな感じかな、それじゃ調整するから2日ほど時間ちょうだい！」

「了解です」

こうして俺は亡国の任務の時、黒いユニコーンを使うことになった。

裏の世界では俺は、【黒い一角獣】とか【闇落ちバナージ】とか【ロマンの塊】と呼ばれるようになってしまった。一つ目はまだ分かるよ？ 後の二つは何があったんだい？

俺はもう気にしないよ…

懐かしきあの日々は今もう未来の話

プロローグ

初めましてゼノア plus と申します。

駄文ではありますが読んでくださると嬉しいです。

矛盾や誤字などありましたらご指摘いただけると有難いです。

（2回目でも結構キツイものだな）

「全員揃ってますねー。それじゃあSHR始めますよー」

いつもと変わらないヴァ○ルキリー○ライヴ並みのメロンを2つお持ちである

このIS学園一年一組副担任

山田先生だ。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「よろしくお願いします」

「[[[[「……………」]]]]」

まあこうなるよな。前と同じ事になっている。

あ、俺は挨拶したぞ？泣かれても変な雰囲気になるし。

「そ、それじゃあ自己紹介をお願いします。え、えっと出席番号順で…」

（私そんなに威厳無いのかな…）」

「[[[[[.....(*A,*).....]]]]」

俺の発言は全く意味をなさず山田先生は涙目だ。最後声出ちゃってるよ…

(ていうか君たちはどうした？揃ってそんな顔できるならちゃんと挨拶しろよ…

分かるよ。気持ちは分かるよ？)

さて、突然のこととでわけがわからないような皆様に俺の番が来るまで無能な作者の代わりに説明するか仕方ない。「え？」 by 作者☆

ん？三行で？良いだろう。

俺は織斑一夏だ

タイムスリップした。

ファントムタスク

今亡国機業所屬だ。

はい完璧！

これ以上ない説明だ。略しすぎ？面倒なんだよ。作者がしないから仕方ない。

「いや待てそれはおか（ry

なんか聞こえたが気のせいだ…

「……くん。織斑^{おりむらいちか}一夏くんっ」

「ん？ああもう俺の番ですか。」

「そ、そうなんです。だから自己紹介お願いできるかな？」

前よりはまともになっているな、それでもやっぱり声が震えてるけど。

「分かりました」

ここで決めないと世界最強出席簿の一撃が炸裂してしまう。是が非でもやり遂げねば…

「俺の名前は知っての通り織斑一夏です。趣味は機械いじりです。嫌いなものは、女尊男卑の考え方ですが」

ISが使えるというだけの一般的な男子です。これからよろしくお願いします。」

「[[[[「……………」]]]]」

え？俺なんかまずった？普通に良くなかった？俺はこの空気の中でどうすれば良いんだ…

なんでスコールの姉貴はこんなとこに俺を放り込んだんですかねえ…

第2回モンド・グロッソで俺はテロリスト共に拉致された。

狙いは簡単、俺、織斑一夏の姉であり第1回モンドグロッソで優勝した証であるブリュンヒルデの名を持っている

織斑千冬の2連続優勝阻止だ。

この時は千冬姉が助けに来てくれたおかげで何事もなかった俺だがその代償として千冬姉は不戦敗、テロリスト共は捕まったが

その代償として2度目の世界最強の座を逃してしまったのだった。

それから俺は何事もなく中学の悪友たちと過ごしその生活も終わりを告げた。

高校受験の時、間違った受験会場に入ってしまったいそこにあったISを動かしてしまったのだ。

ISとは、現存する兵器をはるかに凌駕した能力を持ち、空を縦横無尽に駆け回

る、天災籙ノ束しののたばねによって作り出された最強の兵器だ。

尚、この兵器には致命的な欠陥がある。

そう、女性しか乗れないのだ。

これにより、女性の優位性が証明され男尊女卑ならぬ女尊男卑の風潮が広まってしまった。

話がそれた。

このISに世界で唯一乗ることができた俺はなんやかんやあってIS学園に入学し、愛機である白式と出会い、

箒やセシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、簪、楯無さん、のほほんさん、その他にもたくさんの人と出会った。ほとんど女性だけど…

そしてあの日、大量の無人機達によるIS学園襲撃事件が起こり、専用機持ち達がある程度目かという実戦に向かった。

最初は亡国機業の仕業かと思っていたが、束さんと共に現れ、俺たちと一緒に戦ったことから他にも敵となる組織があるらしかった。

そして俺は……………死んだ。突然現れたISの攻撃は避けきれなかったのだ。

この時点でもうお気付きの方も多いかもしれないが、これは1回目の話だ。俺は過去へタイムスリップしたのだ。

駄作ではありますが読んでいただきありがとうございます。

僭越ながら原作はうろ覚えで書いていますので分かりにくい部分があるかと思われますが、

基本この方針ですのでよろしくお願いします。

今回はプロローグのつもりですので次からはもう少し長くなります。

回想 1

最近荒〇行動にどはまりしてます。 まあP〇PG買う余裕がないだけなんですけどね。

無いA I M使って砂をメインアームとしているのですがすぐやられます。正直ショットガン持って突っ込むほうが楽過ぎて辛い：

2 回目

「あばよ、坊主、恨むならお前を見捨てた織斑千冬かその弟として生まれた自分、俺たちを恨め」

そう言ってこの誘拐犯は俺の額に拳銃を当てた。

その時だった。

「一夏アアアアアアア！……！！！！！」

いつも聞いているよく知った声だった。

（なんだこれは、まるであの時と同じじゃないか。俺は…死んだんじゃないのか？）

勢いよく壁を破壊して入って来たのは、ISを纏った千冬姉だった。

「なに!? 織斑千冬だと!? 今は決勝戦の途中だろ! どうしてここに!？」

「貴様らに答える義務はない!」

千冬姉はそういい、周りにいた誘拐犯を全員気絶させた。

「大丈夫か一夏!? 私がわかるか？」

「千冬……姉？」

「そうだ！お前の姉の千冬だ！一夏、もう大丈夫だ。一緒に、家に帰ろう」

（そうか、夢か。いや死んだんだから夢も見れないか……じゃあこれは現実？）

「おい一夏？聞いているのか？」

「ん？ああ……聞いてるよ。」

それから俺は少しだけドイツで過ごして日本に帰った。

【織斑家】

とりあえずは環境も落ち着いた。とりあえずここで状況を整理しよう。

俺の仮定だが、ここは過去、俺はタイムスリップした。恐らく現実だろう。

だったら俺はどうすれば良いのだろうか、あの時と同じようにするとまた悲劇が繰り返される。

でも変えてしまつて良いのか？俺が、歴史を…

いや今更か…世界初の男性操縦者、千冬姉と同じ『零落白夜』、
世界にほばいない第三形態 サードフォーム e t c…

ほとんど俺が原因のようなものだ。

（だったら…やり直せるのか？俺のこれからを、全て？）

もしそうだとしたらそんなことが可能なら…

俺は守りきれなかった。守る前に、俺が死んでしまった。あの後どうなったのだろうか？

みんなは無事だろうか？

いや：そんなことを考えてももう全ては遅いんだ。

この世界に慈悲なんてない。ISは兵器。簡単に人を殺せる。殺すための武器。俺にそう認識させたのは、この世界だ。

まあこんな事を考えていても仕方がないんだけどな：

そうと決まれば早速行動だ！どうしようかな、束さんの連絡先知らないし、今IS作ってなんて言えないしなあ。

どこかに手っ取り早く鍛えられる場所ないかな：

あ、あるな：一箇所だけでもなあ基地知らないよなあ：

ていうか亡^{ファントムタスク}国機業の基地なんて知ってるの束さんぐらいだろうなw

まあそんな簡単に見つかれば苦勞しないな。とりあえず少しずつ体鍛えとくか。あ、でもバイトもしな「織斑さーん。郵便でーす。」

おっと行かなくては。

「お疲れ様でーす。」

なんか分厚いな。

「ん？これは、バイトの募集か。丁度いい。」

前とは違うバイトがいいな。

「朝刊配達：はやったな、ドリーム町？あのショッピングモールか、お？Phantom corporation？」

そんな会社あったっけな？あっ！前に楯無さんと亡国機業に潜入するのに、こ

んな会社から入った覚えがある！

いやあの時は本当に死ぬかと思った。会社にISなんて置くなよなあ。

こっちは展開したら身バレするから使えなかったし…」

確かあの時は、楯無さんが合言葉を知っていたから中まで入れたんだっけ？
えっと…あああれか。

「……よし！いくか！」

【Phantom corporation本社前】

「確か…受付の左の人だったよな。間違ってたら俺の命が危ないな」

「おはようございます。本日はどのような用件でしょうか。」

「すいません。ここで働いている知り合いを探していました」

「お名前をお願いします。すぐ調べますので少々お待ちください。」

「亡霊と会うのに名前も時間も必要ないですね？」

「∴!?!少々お待ちください。」

どうやら合っていたようだ。まさかこんなガキがここの関係者だとは思わなかったのだろう。

受付の人はとても驚いている。

楯無さんが入った時は、社長が誰かまでは突き止められなかった。

だれがくるんだろうか？

「エレベーターで9階に上がり突き当たりを右に曲がった所にあります部屋に入りください。」

社長がお待ちです。」

ここ9階とか言う高さじゃないだろ、普通社長って最上階にいるもんじゃないのか？（偏見）

そういえば、楯無さんはチップも渡してたっけ？

「分かりました。ありがとうございます。これ、少ないですが。」

俺は○世を一人？差し出した。突然俺を見る目が変わった気がするののは気のせいだろう…

回想 2

【Phantom corporation 9階】

「ここか、はあ…生きて帰れますように」

一人でぼやきながら扉の前に立つと、自動でドアが開いた。

「ようこそ、織斑一夏君、子供がこんな所に一人で何の用だね？」

身バレしてる!? なんでだ? まだISは動かしてないのに…

「初めまして。どうやらお…私の名前はご存知のようなので自己紹介はしません」

「ほう、大分肝が座っているようだな。後、話し方はいつも通りでいい。
おっと、自己紹介がまだだったな。」

私の事は…そうだな、普通に社長とも呼んでくれ」

言う気がないこの人…ますます油断できない。

「さて、本題に入ろう。率直に聞く。織斑千冬の弟だけの君が、何故この合言葉を知っている？

君は何をしに来た？」

とても嫌味ったらしい言い方だな…まあ実際その通りなんだけど。

「あなたの言葉をお借りすると、織斑千冬の弟だけの織斑一夏が、織斑千冬の弟

なだけではない事を証明しに来たのですよ。
ファントムタスク
亡国機業のトップさん？」

俺にはちょっと齧った程度の交渉術しか持ち合わせていない。だったら正面から

行ってやる。

「…ほう、なかなか知っているようだな。君には隠しても無駄になりそうだな。ではどうやって証明すると言うのだね？」

「俺にISを貸して下さい。コアの解明以外なら整備でも戦闘でもしましょう」

「君はISを使えると言うのかね？面白い冗談だ。私は子供の冗談を聞くほど暇な訳ではないのだよ…と言いたところだが、君の目は本気のようだ。良いだろう、ラファール・リヴァイヴの装甲と、研究中のコアが1つある。一時間ほど待ってくれるか？」

「もちろんです」

この人警戒心とかないんですかね？俺が銃持ってたら危ないでしょう…

「ISの装甲を使った防弾ベストを着ているからそこらの銃弾じゃ傷1つつけられないから安心したまえ」

なんで心読まれてるんですかね!? 1回目の時もそれで箒達に殺されかけたよなあ
…俺そんなに分かりやすい？

「はっはっは！ 仮にも秘密結社のボスを務めてるんだぞ？ これくらい出来なくてどうする？」

わゝお、この人あれだ。千冬姉とかと同じ匂いがする。人外の匂い。

「ていうか読心出来るなら俺が考えてる事ほとんどバレてますよね？」

「いやいや、私は人との会話を楽しみたいのだよ。人と会話する事で人について更に学べる。素晴らしいじゃないか！」

あ、俺この人結構好きかも。(ホモ疑惑加速中) その考え方については俺も同意だ。ああ、そう考えるともうちょっとしっかり簪と話しておくんだったなあ。今ならなかなか有意義な話ができる気がする。

「…分かった。一夏君、準備ができたようだ。今から地下の研究施設に行くぞ」

早いな。まだ30分も経ってないぞ？

「早くないですか？流石に装甲とのリンクにはもう少しかかると思うのですが？」

「ISについても学があるようだな。今連絡が入ったのだが、うちの研究者達を作った新しい装備を試していた機体があるらしい。それを使うことになった」

それって企業秘密なんじゃ…まあ良いや、使えるものならなんでも使おう。

【移動中】

「時に君は、何故自分がISを使えると断言できる？何か根拠でもあるのかね？」

あ、やっべ考えてなかった。

「…そうですね、そうなる未来が見えるとしても言いましようか」

なんか厨二病みたいだな。いやまあ、今までの俺そんな感じだったけども。

「まあいい、どうせすぐに分かる。着いたぞ。ここだ。」

扉を開けると一体のラファール・リヴァイヴがまるで操縦者を待っているように鎮座していた。

周りには恐らく研究者と思われる人たちがいる。

「さて一夏君、早速だかあの機体を動かしてみてくれ。出来るのだろうか？」

覚悟はとうにできてる。

さあ行こうか。

「こ、これは!？」

ああこの感覚だ。懐かしい、あの機体には及ばないが、見える。聞こえる。感じる……

「……これで理解していただけたか？」

「は……ははは……はっはっはっ！素晴らしい！素晴らしいぞ一夏君！良いだろう！君に敬意を！」

もしよければ、君とは個人的に話がしたい！」

えっ？何この人？突然テンション振り切れてるんだけど？

……ああうん、知ってる、こんな感じの人も俺知ってる。束さんだ。

マジかうこの人千冬姉と束さん二で割って足したような感じだ……

あれ？意外とまともじゃね？

「一夏君、とりあえず降りてくれるかね？研究者達が驚き過ぎて固まっている」

あっ、忘れてた。

「すいません、久しぶりの感覚に、感傷に浸ってました」

「ん？久しぶり？ああもういい、もう何も驚きやしないさ。ただ、君とはゆっく

り話がしたい」

「分かりました。こちらもお話したい事が沢山あります」

回想 3

それからというものの、社長との話し合いにより、俺の亡国入りが決定しその事について話をしている。

「ほう、タイムスリップとな。なるほどそれなら合点がいく。ISに乗れること、亡国機業を知っていること。なるほどなるほど、やはりこの世界は面白いな！」

そう、話したのだ。ボスには話してもいいと思った、まあ亡国内での信用問題にもかかわるからな、仕方がない。

「はい、そして俺は…PROJECT ORIMURAによって作られた人間を超えた…いや、人間の形をした化け物です」

長くなるから割愛させてくれ…

「君は自分の正体を知っていたのかね。PROJECT ORIMURA：織斑千冬のみが成功例だと思っていたが：別の個体が残っていたか：おっとすまない。ふむ、スコールとオータムか：ならばその部隊はモノクロームアバターだろう。最近作った部隊だったが、そうかそこまで強かったか：」

「はい、正直言って奇跡が重なったおかげで全員生きていたと思います。自分のことについては以上です。それと重ねてなんですが、織斑マドカについては：」

マドカとはなんとかして和解したい。ていうか俺妹欲しかったし：

「ああ、ここにいろよ。そうだな：よし！君をモノクロームアバター所属にしようではないか！そうすればコミュニケーションも取りやすいだろう！」

昨日の敵は今日の友ってか、いや、昨日じゃなくて2年後か。

「ならば話は早い！さっそく書類を作ろう。コードネームはSでいいな？サマーの」

「あ、はい大丈夫です…」

嵐のような人だなあ。ただ問題は、俺がまだ中学生だということだ。ISの操縦はどうとでもなるが、あまり目立った動きをするとバレる可能性がある。

「ああその辺は大丈夫だ。任務は訓練をしてからだからまだ先だ、ここに来る口実ならバイトとでも言えばいい。給料も出す。」

「そ、そうですか。ありがとうございます…」

ナチュラルに心読んでこないでもらえませんかねえ…いやまあ早く進むから良い

けど…

「連絡先を教えてください。準備が整い次第また報告する。」

「はい。何から何まで本当にありがとうございました！」

そして俺は家に帰った。やはり今日も千冬姉は帰って来ていない。全寮制の学園の寮長なのだから仕方ないと言えば仕方ないが…

連絡ぐらいたって良いと思う。まあ今の状況を知られるわけにはいかないから良いんだけど…

「寝るか…」

それからは地獄の連続だった。会社に行けば身体中に電極やらなんやら貼られ体を調べ尽くされた。その後は、スコールさんとオータム、マドカとの面会。やはり調べべきかマドカから挑戦状を叩きつけられた。お互い打鉄（うちがね）を使用した、経験の差と言うべきか俺の圧勝だった。そのあとはなんか懐かれたよ…1回目のあれはなんだったんだ…そして訓練。ただひたすら訓練をした。その過程でナノマシンを体に注入した。そのせいか生身の格闘戦では負けたことがない。表の世界では一般的な中学生を演じる。これがまたなかなかきつい。意識してないと物を壊してしまうし、何故かわからんがめっちゃ告白された。（顔と性格、鍛え抜かれた肉体のせい）そんなこんなで2年間を過ごした。感想行きます！どうしてこうなった…

一番焦ったのはマドカを叩き潰した後からマドカがブラコンになった事だ。どうしてこうなった…

そして中学二年生のあの日…鈴が中国に帰る日が来た。

「あ、あのね。一夏、私の料理の腕が上がってたら…その…毎日私の作った酢豚食べてくれる？」

鈴にとっては、毎日味噌汁を…と同じ意味の告白…俺は、どうするべきなのか…
「それは付き合ってくださいという意味か？」

違っていてほしい。

「え!?!…うん。その通りよ。」

でも俺は、いつかこの子の敵になる。

「そうか…鈴…その気持ちはすごく嬉しい。でも、ゴメン。」

そんな悲しそうな顔をしないでくれ。

「なんで…」

言えるわけがない。

「俺じゃ、鈴を守れないからだ。」

ダメだ。これ以上はダメだ。

「そんなこと！だったら、私が守ってあげるわよ！」

それじゃ意味がないんだ。この世界で、それは無理なんだ。

「本当にゴメン、鈴。でもさ、次会ったらまたお前の料理食わせてほしい。これは俺のわがままだけど…」

偽ることしかできない俺がそばにいて良いわけがない。

「…わかったわよ。次会ったら覚悟しておきなさいよ一夏！こんなに良い女振るなんて後悔させてあげるわ！」

それでこそ、鈴だ。

「ハハハ…楽しみにしとくよ。じゃあ、またな！」

…会わない方が、お互いのためなんだけどな。

「ええ！またね、一夏！」

そして俺たちは互いに背中を向けて歩き出した。

「良かったのかい？とても良い子じゃないか」

うわ!?いつからいた!?

「盗み聞きなんてやめて下さいよボス…てか仕事はいいんですか？」

「うん？いやぁ面白そうな気配がしたから三日分の仕事終わらせてソッコーで来たぞ！」

なにその無駄なハイスペック感!?俺、こっち側いてよかったかも…

「そ、そうですか。」

「まあそれだけでは無いのだがな。一夏よ、任務だ」

む…

「詳細は？」

「新機体のテストだ。私とともに本社に戻り遂行せよ」

俺テストパイロットばかりだなあ…まあ表に出れないし仕方ないんだけどな。

「任務了解しました！お供します！」

まあそのあとは割愛させてもらう。回想に浸りすぎだからな。

そして物語はプロローグの終わりにから始まる。(メタい)

5月3日変更点原作12巻の内容を加えました。

未来は現実となり変わっていく

交流（社交辞令）開始

実は私、明日からオーストラリアへ二週間ほど研修がありまして、二週間ほど失踪しますがああ逝ったんだな、くらいの気持ちでいてほしいと思います。感想などへの返信等することが出来ませんのでご了承下さいませ。

「危なっ!？」

「チッ…避けていいとは言っていないぞ織斑」

突然身に迫る危険。だが舐めてはもらっては困る、ナノマシンによって強化されたこの体ならあの攻撃を避けることもできるのだ。

「理不尽じゃないですかねえ……織斑先生……」

そう我が姉織斑千冬その人である。見ろよ姉さん、机から煙出てるぜ？あと女子がみんな固まっちゃってるぜ？どうにかしてくれ。

「貴様がこの空気を作ったのだろう？まあいい。諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使える程度には育てるのが私の仕事だ。私の言うことはよく聴き、理解しろ。出来なくてもいい、出来るまで教えてやる。ああそれと私の言うことには逆らってもいいが、聞け。分かったな？」

いやどこの暴君だよ……あっ!!耳栓しとかないと……

「「「キャーーーーー!」」」

おう!!なんだ!!最近の女子は叫びだけでソニックウェーブが出せるのか!!俺に

は無理だぞ…

「千冬様、本物の千冬様だわ！」

「生まれて来る前からファンでした！」

「お母さん、産んでくれてありがとう！今日から感謝するね！」

「流石千冬様！私達の想像を超えて来る！」

「そこに痺れる！憧れるうー！」

カオスウ…：というかさ、君たちあれだよ？本当は仲良いよね？絶対今日が初めての邂逅じゃないよね？あ、そうだ。いまの女子たちチェックしとこ。多分俺とか簪とかと同類だ。（アニメ的な観点で）

「はあ：毎年毎年よくまあこんなに騒げるものだ。あれか？私のところにだけこんな馬鹿どもを集中させてるのか？」

姉さん辛辣：でもまあどうせ：

「ああ!!千冬様からの罵倒！それもまたいい！」

「踏んでください！」

「あっ：濡れてきちゃった：

おい!?今のはまずいだろ!?俺の予想を超えてきやがった!?このクラスマジヤバいわ：

「黙れ、時間がなくなる。織斑、もう自己紹介はいいだろう、早く座れ。」

勝手だなあ。

「わかりましたよ、賢姉殿…痛あ!？」ゴスッ！

「織斑先生だ。公私の区別くらいしつかりしろ馬鹿者」

分かってますよそれくらい…俺の体が異常だからバレないように演技してるんですよ。言えないけど。

「賢姉って…織斑くんってもしかして千冬様の兄弟？」

「え!?!じゃあ織斑くんがISを使えるのってもしかして…」

また女子たちが騒ぎ始めた。本当に女子って話が好きなんだなあ。

「静かに！自己紹介も終わったことだ。これから授業に入る！」

「はい！」

軍隊かなここは？



簡潔に言って暇だった。いやね？復習みたいなもんだから……ていうかナノマシンが脳にまで働いてくれると思わなかったよ……

超絶覚えるのが楽になった。ハハ、チートだな俺。ちなみに今は一時間目が終わった後の休憩時間。十分しかないけど。

「ちょっといいか？」

この声は…

「ん？ああ！箒じゃないか！久しぶりだなあ！」

俺わざとらしいなあ…この子は篠ノ之箒。ISを作った篠ノ之束さんの妹で話
方や態度的にまさに武士って感じだ。

「少し話したいのだが…屋上に行かないか？」

悪いけどそんなに時間ねえぞ…

「話ならここでもいいだろ？それにしても箒、お前全然変わってないなあ。ポ
ニーテールのままだし。箒だっけすぐ分かったぞ。」

「そ、そうか」

「そういえば筈、去年の剣道の全国大会、優勝したらしいな。おめでとう！」

「な!?!なんでそんなこと知ってるんだ！」

新聞読んだらすぐにも分かるのだよ。

「いや新聞に載ってたし…」

「なんで新聞なんか見てるんだ！」

俺には新聞を読む権利すらないのか…

「新聞くらい自由に読ませてくれよ…そういうえば話ってなんだ？」

「そ、それはだn『キーンコーンカーンカーン』チャ、チャイムがなったから私は席に戻る」

タイミング悪いな…



そして二時間目。

今まで空気だった山田先生も自分の担当の授業では張り切っている。空回りしなけりゃいいんだけど…

「何かわからない点がありますか？」

沈黙。そりゃまあIS学びに来てんだからこれくらい分かるよな。

何事もなく授業も終了。



「ちょっとよろしくて？」

来た。思い返せば俺の中で面倒くさいランキングトップ3に入るこの出来事。鮮やかな金髪はロールがかかり、その改造された制服や雰囲気はいかにもお嬢様を思い浮かべる。セシリア・オルコットだ。

「はい、俺に何か用でしょうか？イギリス代表候補生で入試主席のセシリア・オルコット嬢？」

女尊男卑に染まっていた頃のセシリアには下手に出ないとすぐに癩癩を起こされるから要注意だ。

「まあ！ ISが使える男と聞いて、どのようなものかと思いましたが、多少の学と礼儀は弁えているようですわね」

言い方に若干皮肉が込められていて正直腹がたつ。

「私には期待されるようなことないですよ。ただISが使えるだけの男です。これから学友としてよろしくお願いします」

あくまでも学友としてだ。鈴みたいに悲しませたくはない。

「ええ、こちらこそ。よろしくお願いしますわ、織斑さん」

敵対した関係にならなくてよかった。

準備で全然書く時間ない…

俺だって言われてばかりじゃない。

先週の分サボってたわけではないんです。ちょっと原作一卷行方不明になってただけなんです。ありましたけども。許してくださいなんでもしますから（なんでもするとは言っていない）

どうでもいいことですが私、今日高校の入学式でした。知り合い以外誰にも話しかけれないと自分終わってる（白目）

「それではこの時間は、実戦で使用する各種装備の特性について説明する…と言いたいところだが、このクラスはまだクラス代表を決めていなかったな。ちょうどいいので今から決める」

ああ…これ面倒だったなあ…なんとしても回避したい。

「クラス代表とはそのままでの意味で、まあクラス委員長とほとんど変わらん。クラスの雑用係とでも思ってくれ」

その言い方でやりたいという奴がいたらそれはあんたの信者しかいねえよ…

「ちなみにクラス代表者は、再来週行われる、クラス対抗戦に出場する。一度決まると一年間変更できないのでそのつもりでいろ」

なつてしまったらコッチの仕事が出来ない。そうだ！オルコット嬢に押し付けてやればいいんだ。あの人はこの時は高慢ちきだから余裕でオーケーしてくれるだろう。

「はい！織斑君を推薦します！」

やっぱそういう奴居るよなあ。俺を選ぶ意味を一つもわかってない奴が。

「あっ、私も！」

「そうだよねっ、せっかくの男子だもの。活用しないではないわ！」

みんな好き勝手言ってくれるなあ…男子だからってだけで選ぶ。俺は表向きはISについてほとんど知らず、一度も乗ったことがないド素人だぞ？

「では候補者は織斑だな。他にいるか？自薦でも推薦でもどちらでも良いぞ」

さあ早く来るんだオルコット嬢！そしてこの大変面倒な現状を納めてくれ。姉さんは…無理だから。あ、ついでお土産も作るか。

ピッ…その音はとても小さく、誰にも聞こえないほどの音量で鳴った。

「待ってください！納得がいきませんわ！」

女性からそんな音を出せるのかと思ってしまふほどの勢いで机に叩きつけられたオルコット嬢の腕。そして勢いよく立ち上がった。すごい剣幕だなあ。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！その男は、まだ多少の教養と常識があるようですが？わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を味わえとおっしゃるのですか!？」

わあー、一回目より評価が上がってる、うれしいなー（白目）

「実力から行けば私がクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！私はこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ありませんわ！」

やっぱりこの時のセシリアは面倒だな、久しぶりに…キレちまったよ…とかはまあないけども、どうしようかなあ、言葉責めにするのもいいし、今録音してるレコーダーで脅すか…それともガン無視か…

「いいですか!? クラス代表は実力トップがやるべき、そしてそれは私ですわ!」

言ってくれるねえ、まあ表向きはそれで間違っではないんだけど。ちらっと姉さんを見ると…あ、ヤバイわ。後ろに鬼武者のオーラっぽいのが見える。キレてるなあ姉さん…他の日本人生徒も嫌な顔してるし。…はあ、面倒だけど仕方ない、やるかあ。

「大体、文化としても後進的な国でからさなくてはいけないこと自体、私にとっては耐え難い屈辱で…「その辺にしましうかオルコット嬢」な、なんですよの突然!」

「それ以上言うとアナタが面倒なことになりますよ。まあ、俺がISについてはド

素人なのは当たり前なので仕方ありません。ですが、そのあとがいけない」

少しずつ教えてあげるか、面白いし、あれ？俺ってSだけ？いや俺Sだけでも…（コードネーム的に）

「何がいけないと言うんですの！その態度、イギリス代表候補生であるこの私にとっていいものではないことがわからないのですか！」

なんか前よりウゼエ、ISがないと何も出来ないことがわからないオンナ共はこれだから！

「わかりませんね。自己紹介のとき言ったでしょう、俺は女尊男卑の考え方が嫌いだ。それよりも、そんなにも日本にいるのが嫌ならイギリスに帰ればよろしいでしょう？この学園に入ることを決めたのがアナタなのかイギリス政府なのかは知りませんが、ここは法的には日本ではないのですから」

そう、土地は日本にあるのに、アラスカ条約やらなんやら詳しくは覚えていないが、ここは日本ではない。

「あら？ イギリス政府が私に専用機のデータ収集を目的に入学させましたのよ？ 帰れるわけがありませんわ！」

それでいい、そのまま少しずつでも深海に足を踏み入れろ。

「なら我慢してください。アナタは代表候補生なのだから。それに、アナタの発言で、今まさに戦争が始まろうとしているのが分かりませんか？」

「はあ？ なんでですの？」

頭悪いな。ちなみに俺はオルコット嬢を酷評しているが、俺の知ってるセシリア

はもつと美しく気高かった。コレは俺の知ってるセシリアじゃないからな。氣にしない。

「ここまで言っても理解できないか、極東の猿？それが日本人のことを指しているなら前を見てみる。」

「前？前に何かあります…ヒッ！「オルコット、私は猿か？」い、いえ！違いますわ！」

我らが織斑先生はお怒りである。

「違う？このクラスの生徒大半と山田先生と私は極東の猿なのだろう？」

「そ、それは言葉の綾で…この男に向けて言ったのですわ！それと戦争がどう関係するといふのですの？」

コイツ本当にイギリスの代表候補生なんだよな？ まあブリュンヒルデ様にそこまで言えるからオルコット家の当主も務まるのか。

「少しは自分の頭を使え代表候補生。俺の知ってる代表候補生はもっと気高く、美しく、強いぞ。サラ・ウェルキン候補生がいい例だ」

以前の俺ならここら辺でやっちゃった感あるけど、別にコレくらい所属不明基地破壊作戦でデータ抜く前に電子機器全部壊してスコールの姉貴の的になったことの方が怖いわ。あ、一応姉貴に聞いとこ。

『あー…姉貴？ あれ？ 繋がってねえのかな？ あゝねきいゝ』

プライベート・チャンネル

コレはISの機能の一つで個人間秘密通信というものだ。まあ、IS操縦者同士の密会みたいなものだ。俺たちみたいな暗躍組織ではコレがないと声や内容が筒抜けだからな、頼もしい機能だ。

『そんなに呼ばなくても聞こえてるわよ。ていうか、コールかけて頂戴。いきなり呼ばれたから驚いたわ。それで用件は？』

現在こうやって話してはいるがオルコット嬢は絶賛キィキィ鳴いてる最中だ。俺はナノマシンでマルチタスクも出来るようになったから両方同時進行出来る。…まあ聞いているだけだけでも。

『ちょっとあの…今クラス代表決めてんだけど、女尊男卑のイギリス代表候補生がちょっといかけてきてバトリそうだから、どれくらいまでやっていい？』

『はあ…ちょっといかけたのはどうせアナタもでしょ？そうねえ…1割から3割でやりなさい。それくらいなら量産機でも余裕でしょ？あ、間違っても瞬時加速とかの技術関連使うんじゃないわよ？基本技術だけでやりなさい。後、手加減を覚えてきなさい！Mがそろそろ本当にマゾになっても知らないわよ。』

それは由々しき事態だ。早急に手を打たなくては。マドカとはいい関係を築けるから変なことになりたくない。後まあ大事な妹だからな。ていうかちょっとユニコーンで違法な研究所とかを焦土に変えただけなのに…アレそんなにマズかったかなあ…流石にビームマグナムをエネルギーパック2マガジン使ったのはやり過ぎたと思うけども…

『了解、通信感謝する。今度、お土産になんか買っていくよ』

そうして俺は通信を切った。今俺は常備してるチョーカー型のユニコーンで通信してました。起動がばれないようにステルスもつけて。どっかの生徒会長様は勘がいいからな。

「決闘ですわ!」

ほう、俺に決闘だと？いいだろう、血闘術とブラッドアーツで相手してやる………
突っ込んでくれる奴がいなくて悲しいな…

「織斑先生、こう言ってますが？」

大人に頼るって大事だよな！

「勝手に決めて後を教師任せにするな愚弟。しかし、まあいいだろう。来週の土曜
日、クラス代表決定戦を行う。アリーナは確保しておくのでそのつもりでいろ」

あーあ、結局こうなっちゃったよ。チェルシーさん苦勞してんだろなあ。もつ
と時間経ったらちゃんとこっちに引き込んであげないとな！あー試合面倒くさいー。
都合よく無人機とか現れてくれねえかな…そっちの方がまだやる気起きるわ。

ピッ 俺は忘れていたレコーダーの電源を切り亡国へのお土産を作った。人の弱

みを握るって意外と楽だったぜ。

ある日

「兄さん模擬戦しないか？ 久しぶりにまた訓練して欲しいんだが。」

「マドカか、いいぞ。ルールはどうする？」

「お互い量産機でシールドエネルギー尽きた方の負けでいいだろう。今は技術を上
げたい。」

「やっぱり仲がいいなSMコンビ。仲がいいからって禁断の関係にはなるなよ？」

「うるさいぞオータム！余計なお世話だ！」

「ジョーダンだよジョーダン！え、いやちよっお前ら、ウワアアアアアアア！……！！！」

その夜医務室からは女性の悲鳴が止まなかったとかなんとか。

個性強くない？

今は放課後、特にすることがなくなった俺は、訓練でもしようかと思っていた。

「訓練するって言うてもなあ…どうせここにいても山田先生が部屋について伝えに来るだけだし、サッサとホテルに行って休んでもいいと思うんだが」

することがないと言っても暇なわけではない。それこそ訓練なり報告なりこれらについても考えていなくてはいけない。やるべきことはたくさんだ。…報告は今日は面倒だしやらないけども。それっぽいことはしたし。

「あ、まだ教室にいたんですね織斑君。ちょうど良かったです」

見つかってしまったか…いや別に後ろめたいことがあるわけじゃないけども（あゝ）俺の自由時間が…頼めばいけるかな？

「山田先生、俺に用ですか？」

「はい、織斑君の部屋割りが決まったのでそれを伝えにきました」

やっぱそれか。

「部屋割り？ 政府からは一週間はホテルから通うって話でしたけど…やっぱ保護の目的ですか？」

山田先生が顔を近づけて来た。誰もいないから別に問題はないのだが…廊下にもいないということは気配でわかる。

「そうなんです。政府の特命もあって寮に入れることを優先したみたいです。後その…部屋割りの関係でどうしても女子と同じ部屋になってしまうんですけど大丈夫

ですか？もしどうしてもというのなら教員棟に使われてない物置部屋があってそこを片付ければ使えないことはないですけど」

そんなところがあつたんかい！全然知らなかった。

「山田先生とりあえず離れましょう、近いです。部屋割りに関しては先生たちの都合的に楽なほうでいいです。どちらを選んでも面倒なので。後、一度家に荷物を取りに行かなくてはいけないので週末にでも帰りたいんですが良いですか？」

そういうと山田先生はこの俺の目を持っても見えないスピードで俺のそばから離脱した。山田先生は人間をやめていなかったはずだけど？

「荷物なら、私が手配してやった。ありがたく思え」

どうせ着替えと日用品しかないに決まってる。

「と言っても生活必需品だけで良いだろう。着替えと日用品、携帯の充電器が入っている。それと部屋だが…」

やっぱりな：娯楽は携帯しかないか：パソコン家から持ってこようかなあ。

「流石に男女を同じ部屋にするのはまずいと学園長が言っていてな。織斑にはすまないが空き部屋を使ってもらう。安心しろ、背備品や設備などははっきり言って普通の寮より良いものだ」

アレ!? なんか違う？俺が違う行動を取っているから未来が変わっているのか？いやまあ1人の方が楽だけど…

「ありがとうございます織斑先生、山田先生。それと地図のようなものはないですか？流石に場所がわからないので」

「これだ。一応この学園の大体の見取り図が載っている。今覚えろ」

それ一般人には無理じゃないですかね!? 覚えただけど…

「無茶言わないでくださいよ。そんなことできるのはどっかの兎さんと世界最強だけですよ。ヤッ」
!! 痛った!」

「お前が余計なことを言うからだ。それと織斑、後で寮長室に來い。話がある」

訓練は今日は無理か。一応訓練室があるのは確認したけど。

「分かりました。ああそうだ織斑先生、荷物があるってことは一度家に戻ったのですよね? 俺は寮に住むのは聞いてなかったので水道と電気とガスを止めていないのですが、止めてくれましたか?」

もちろん嘘だ。

「な!? …すまん、やってない」

だろうな。

「ほう？ まあ後で話しましょうか？ それでは失礼します」

この時姉さんが山田先生が気づかないほど震えていたのはこのナノマシンで強化された目で見えている。

「織斑君、道草食っちゃダメですよ」

教員寮まで500メートルもないのに一体どこで道草を食えと？

「あ！ちょっと待ってください織斑君。お風呂についていうの忘れてました」

あ、忘れてた。

「すいません忘れてました。風呂ですか。風呂は入れないし部屋にシャワーなんてないでしょうから……どこを使えばいいんですか？」

「アリーナの備え付きのシャワーでいいだろう。教員寮から少し距離があるが背に腹は変えられん。」

あ、もう震えてない。復活早いなあ

「分かりました。では明日からもよろしくお願いします」



「教員寮、一夏の部屋」

「ここが俺の部屋か…」

「寮長室」

「織斑です」

「ああ入ってくれ」

「失礼します。なんのご用ですか？ 織斑先生…うわ部屋汚ねえ!!」

「なんだここは!? 魔境か!? 足の踏み場もないぞ!!」

）一時間後）

ガチャ

「全く姉さんは…いつになったら家事ができるようになるんだ…」

ちなみに部屋は俺が片付けた。姉さんが震えながら俺を見ていたのはきっと気のせいだろう、ソウニチガイナイ。

とつとと寝よう、気疲れした。

「ご飯にする？お風呂にする？それともワ・タ・シ？」

ガチャ

さて如何したものか。中には裸エプロンに見える水着エプロンの痴女。姉さんは酒を飲んでいるから駆除は無理として…山田先生…は無理だな。仕方ない、姉さんの部屋で寝るか。

とりあえずドアをしっかり固定してっと…
うし、出来た。

「あ、もしもし？姉さん？ごめんけど今日泊めてくれない？部屋に痴女がいて閉じ込めたから…」

◇

「水着エプロンの痴女」

「あら？入ってこないわね。私に欲情してトイレで自家発電でもしてるのかしら？まあ我慢よ、フフ、次こそは…」

◇

翌日

「な、なんで…なんで帰ってこないのよ！私一晩ここで待ったわよ！わざわざ水着エプロンに！寒かったから仕方なくベッドで待機したのに！」

全く、失礼しちゃうわ。部屋に戻って着替えよ…

…ドア開かないんだけど？なんで？

ガチャあ！開いたわ！

「いい朝だな、更識。さて…後悔と懺悔は済ませたか？」

…処刑執行人ブリュンヒルデがいました。それからの記憶はありません。

It w a k e d u p

「なあ一夏…テストパイロットになる気は無いか？」

「は？」

あ、ありのまま今起こったことを話すぜ！更識を閉じ込めた後姉さんの部屋に
来た俺は酒を飲んでいた姉さんに突然こんなことを言われたぜ。読者のみんなも何
を言っているかわからねえと思うが俺も（ry

「それがな、政府の決定で世界初の男性操縦者であるお前に専用機が与えられるこ
とになった。それでどこの企業に依頼するかなんだが…IS委員会の馬鹿どもが口
を出してきてな。私の専用機だった『暮桜』を作った『倉持技研』に依頼したらし
い。」

…なるほどな、それで俺に姉さんのISと同じ能力を持つ『白式』が来たわけか。まあ、今となつては都合がいい。『倉持技研』はすでに俺の口添えによって買収済みだ。所長の篝火ヒカルノは予想以上に秀才だったし、どうせ束さんが改造して俺に渡すんだから『白式』にも問題はない。ボスも、もともといつか買収する予定だったって言ってたし完璧である。

「そんなこと俺に言つて大丈夫なのか姉さん？俺もISについて結構調べたけど、倉持技研で確か、今は日本代表候補生の専用機作ってるんだろ？」

「よく知ってるじゃないか。勤勉なのはいいことだ。倉持の所長に聞いたら両方いい感じに進んでるから問題ないと言っていた。依頼を最後までこなしてこそ倉持だ！とも言っていたな」

当然だ、最近ヒカルノさんとレイさんが協力して開発しているんだからな。…変なもの作ってないといいけど。それにしても酒と俺が作るつまみがある時の姉さ

んは口が軽いな。ありがたいぜ。心なしかテンションも高い。ていうか、それだったら簪の機体は間に合いそうだな。ん？意外と簪をこちら側に引き込めないか？いや無理か？あの痴女がどこまでも追いかけてくるな…

「良いところじゃん。それで？」

「ああ、正直言ってお前は世界中から狙われる存在だからな、引き込もうとしてくる者は多いだろう。そこでだ、お前が倉持のテストパイロットになることで身の安全を守ると同時にISのメンテナンス要員も容易に確保することが出来るという訳だ」

お姉ちゃん頑張ったぞとでも言いたいかのような自慢げな顔で話す姉さんは、酒が入っていて顔が赤いせいかな駄目人間に見えた。すごく大事なことを言ってるけども…

「それで、どうだ？」

「ん？ああ、それほどにクライアントの仕事をしっかりこなすなら信用できるし、俺はテストパイロットになるよ」

もちろんそう仕向けたのは俺とボスだからな。

「そうか、ではまた連絡しておこう」

「よろしく」



「次の日」

ぶっちゃけ特にこれと言ったこともないから適当に…

まず部屋に戻った俺だが、何故か盗聴器を破壊したことに気づいてなかったらしく新しいものはなかった。あの痴女ザル警備すぎね？そして着替えて食堂に行ったら箒の姿はなく俺は気配を消してささと飯を食った。ちなみに鮭とご飯、味噌汁、納豆というまさに日本食だった。ごちそうさまです。

次に授業、…といっても今はまだISスーツを発注してないから座学のみ。全部知ってることだから正直暇です。

放課後、箒が「訓練してやる」と行ってきたのでIS訓練のためダメ元で借りる申請に行ったがもちろんダメ。世の中そんなに甘くない。その後剣道しろ！みたいな流れになった。ちなみに圧勝。ナノマシンで強化された目で達人の動きを見て覚えた甲斐があった。あ、これ写輪眼みたいに使っただけね。俺もう我流の剣だから剣道ムリです。

箒と剣道部部长がすごい迫ってきたけど適当にあしらった。俺部活入る気ないし…

見事に自主訓練の時間を逃しましたどうも一夏です…

side???)

(…ここは？私は…！？あなたは…そう…わかった)

何もない空間でその物は、静かに目覚めた。

(きっと…あの人は私を覚えていない…でも、今度こそは…役目を…)

その物は、思った。守れなかった者を守りたいと。

(もう少し…だから…待っててね、すぐに行くから…一夏…)

s
i
d
e
o
u
t

く邂逅くそして出撃

く翌週土曜日く

「なあ箒、一つ聞いていいか？」

「なんだ一夏？」

「なんでお前ここにいんの？ここは関係者以外立ち入り禁止だぞ？」

ここは今日俺とオルコット嬢の試合が行われる第三アリーナのAピットだ。
回目と同様、俺の愛機も今日運ばれてくる。

「な！私がここにいて悪いか！それに私はお前の幼馴染だからな、関係者だ。」

「その定義で行くと大体の知り合いが関係者なんだが…姉さんにどやされてもしらねえぞ？」

ていうか白式遅くね？束さん何してんの？

「織斑くん織斑くん織斑くん！届きましたよ！」

あ、最近出番が少なくなるとか目立とうとしてる山田先生だ。3回も呼ばなくても聞こえてます。慌てすぎです、箒が何事かと構えてるから…

「俺の専用機ですか？」

「そうだ織斑。すぐに準備しろ。時間もおしている、ぶっつけ本番でなんとかしろ」

「え、あの？最適化は？初期化は？ぶっつけって…」

「いいから一夏！早くしろ！」

「そうですよ織斑くん！」

異性3人から同時に迫られるってのもなかなかなお経験だな、1人姉だけど…

「早く！」

そして搬入口が開く。この時俺は、虫よりも小さい機械が侵入していることに気づいた。まあこんな作るの束さんだよねー。我が子の様子でも見に来たか？

「――――――――――」『白』――――――――――

まだ一次移行していないせいか純粋な白ではないが、それでも美しく光るそのボ

ディ。ああ、久しぶりだな俺の愛機。そして…初めまして。

「これが、織斑くんの専用IS、『白式』です！」

1 回目の時、俺はコイツが俺を待っていたようだった。と思ったが、今は違う。コイツは本当に、俺を待っていた！俺も待っていた。この時を、全てが始まるこの時を！

「時間がないからフォーマットとフィッティングは戦闘しながらやれ。出来ないイコール敗北だ」

分かりましたよっと。

ー俺は白式の装甲に触れたー

『お帰り、待ってたよ』

「?！」

「どうした織斑、何か異常があったか」

「いえ、大丈夫です」

今の声は：

そして俺は白式に乗った。

『少しだけこっちで話そうよ』

その瞬間俺の意識は闇へと沈んだ。

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
840
84

$\hookrightarrow$
 $?$
 $?$
 $?$
 $\hookrightarrow$

「っ…ここは？」

意識が戻った俺は現状把握のため周りを見渡した。足元が浸かるくらいの水があたり一面の広がっている。だが冷たいとかいう感覚は無いな…なんだこの空間は？

「こんにちは」

「っ!? 誰だ!?」

警戒しているのを隠さず俺は乱暴に声の主の方を向いた。

「なっ…お前たちは…」

そこには白いワンピースに麦わら帽子を被った女の子と、白い甲冑を着た背の高

い女がいた。

「初めまして、織斑一夏くん。あなたに会えるのをずっと楽しみにしていたよ」

知っている。この声もその容姿も。何故ならこの声は：

「私は白式のコアの人格主。あなたをここに呼んだのも私」

「……………」

白い甲冑を着た女は目元まで覆われているバイザーをしていて顔はあまり見えな
いが、こちらに視線が向いていることは分かった。

「本当に白式…なのか？じゃあ隣は…白騎士か？」

「っ！なぜ知っている？」

「悪いがそれには答えられねえなあ、それよりも何故俺をここに呼んだ？」

「言いたいことを言おうと思ったの。まあ宣言だよ」

「宣言？」

「そう、あの時守りきれなかったあなたへ、役目を全うできなかった私へのね」

あ・の・時・？・まさかコイツ…

「今度こそ守るから。貴方を絶対に死なせない」

そうか、お前もこ・っ・ち・に・来・て・た・の・か。

「白式：いや、ここは敢えて王理と呼ぼうか、相棒」

「っ!? 何故その名前を?…まさか!」

「改めて自己紹介だ。俺は織斑一夏、お前とずっと一緒にいた織斑一夏だ」

「え、あ…? 本当に…? 一夏、なの?」

「ああ、だからさ、もう一度俺を守ってくれないか?」

「うん! 任せて! そのためにも私達は、強くないとね」

もちろんだ。そのために俺は亡国入りしたんだからな。

「力を欲しますか？」

うお!?!…あ、ゴメン、白騎士の事忘れてた。力か…俺は福音事件の時、白騎士のからの同じ問いに飲まれかけた事がある。

「ただ破壊するだけの力はいらない。俺が欲しいのは、世界を変える力だ」

「…………世界を変える、ですか」

「そうだ、俺は見てきた。この世界の現実を。そしてやり直す機会を与えられたんだ。俺は…このチャンスを生かしたい」

「…………分かりました。この子にとっての害でしかない存在だったら、私が消すつもりでしたが…大丈夫ですね」

怖いこと言ってくれるじゃねえか。

「うんうん、白騎士からのオッケーも出たし、時間もないからじゃあまたね！一夏！」

また、か。そうだな。

「ああまたな、2人とも」

そしてまた、俺の意識は途切れた。

「おい一夏、大丈夫か？」

姉さんの声が聞こえてくる。どうやら無事に戻れたようだ。

「ああ、大丈夫だ。それじゃあ行ってくる」

俺の相棒とは長い付き合いになりそうだな。

「それではカタパルトデッキに乗ってください。すぐに発進させます」

「分かりました、山田先生」

行くか！白式！

『うん！』

「織斑一夏」

『白式！』

「『出撃します！』」

オリジナル

白式と白騎士の自我がはっきりしてる。

白式との会話が可能

試 合 開 始
game start

今更ながら私の文の短さとタイトル詐欺に気づいてしまった…

「あら、やっときましたわね。逃げたのかと思いましたわ」

「悪いなオルコット嬢。ちょっと準備に時間がかかってな」

目の前にいたのは鮮やかに青色の機体『ブルーティアーズ』とその操縦者、セ
シリア・オルコット嬢。

「あなたに最後のチャンスを与えますわ」

ビシッと俺に指をさしながらオルコット嬢はそう言った。それにしても、とうの

昔に試合開始の合図は出てるし攻撃したらいけないのかねえ…簪には悪いけど俺ヒーローの変身途中に攻撃すんの大好きなんだけど。

「あなたは初心者、わたくしは代表候補生。実力的に言ってわたくしが勝利するのは火を見るより明らかですわ。そこで、今ここで謝るというのであれば、許して差し上げても良くてよ？」

『一夏！ティアーズが私達をロックオンしてる』

（わかってるさ白式。敢えてだよ、高飛車なお嬢様の鼻っばしらをへし折ってやろうと思っただけ）

『い、一夏、なんか性格変わったね』

（そりゃあ色々あったからなあ）

『そうなんだ、じゃ、とりあえず!』

そうだな。

「…無言は否定と受け取りますわ!」

刹那、光、いや閃光が俺に向けて放たれた。

「危な!？」

初心者感を出すためにわざと大きく避けたが、せいぜい中、遠距離用のライフルだ。少し体をひねるだけでも十分避けられる。

「な!?! 躲したですって!?! マグレですわ!」

さらに放たれたレーザーが俺に目掛けて飛んでくるが、今の俺に当たるものなどあるわけがない。

「おいおい、代表候補生の実力とやらはこんなもんか！」

「!!言ってくれますわね、ルーキー！」

止まることを知らない射撃、まさにレーザーの雨とでも言うべきか、オルコット嬢は俺がいる位置に正確に撃ってくる。

「さあ、踊りなさい！わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズが奏でる円舞曲^{ワルツ}で！」

「あいにくとダンスは教養がなくなてな！だから…フリースタイルで踊らせてもらうぜ！」

スコールの姉貴から制限がかけられてるだけあって、やりきれない感はあるが、訓練だと思えばちょうど良い。

上空から飛んでくるレーザーを地面に近い位置で避けることによって射線を制限する。

「くっ！なんで当たりませんの！」

そろそろ飽きてきたし、俺も前に出るか…

（白式、武器くれ）

『ちよっとだけ待ってすぐに渡すから！』

ええ…じゃあちよっとだけくらか、どうせ後で一次移行して回復するし。

「くす！」

「あら、さっきまでの余裕はどうしましたの？まさかもう限界なんですか？」

「まだまだあ！これから本番だ！」

そう、これからがね。

試合が始まって10分。

「ええい！一夏は何をしている！不甲斐ないぞ！」

「そんな事はないですよ篠ノ之さん。逆にすごいと思います、確か織斑君はISを動かすのは2回目でしたよね？」

「ああ、そうだ。だが、機体に振り回されているな。」

ここはAピット。篠ノ之、山田先生、織斑先生が観戦している。

「しかも織斑、武器を出していないな」

「あ、確かに！出し方がわからないんでしょうか？」

「…さあな。だがアイツ、調子には乗ってないようだな」

「どうしてわかるんですか？」

「それはな篠ノ之、織斑は調子に乗ると利き手を握ったり開いたりするからだ」

ちよっと自慢げに話す織斑先生（ブラコン）

「へえ〜流石ご姉弟！弟さんのことをちゃんと見てるんですね〜！」

「ま、まあな…」（ブラコン）

――――

ところ戻ってアリーナ

「あら？さっきまでの余裕はどうしましたの？」

「オイオイ、初心者にはそれは無いんじゃないか？」

『初心者ってなんだっけ…?』

なんか相棒からの声が聞こえるが無視だ無視。ていうか早く武器くれ…

『あ、実は5分くらい前に一次移行の準備は完了してるよ』

(フア!?じゃあとつととしてくれ!演技に飽きてきた…)

『はいはい。じゃあポチッと』

え?そんな気の抜けた声で一次移行すん…うわアアアアアア!

試合終了

「な、なんですの!？」

ほとばしる閃光——後現れたのは…

「…俺、参上！なんつってなあ！本番はこれからだ！」

「それは一次移行!?まさか貴方、今まで初期設定の機体で戦っていましたの？」

「まあな、届いたのがついさっきで準備の時間がなかったんだ」

ま、東さんがいじってたんだろうけど…

「そうですか、運のいい男ですこと。ですがわたくしは、男には負けられませんわ

！お行きなさい、ブルーティアーズ！」

オルコット嬢の機体から4機のビットが射出され、ビームを放ってきた。

「おわ!? 危な！ ちよ、これ避けきれん……ぐっ！」

勘違いするなよ、演技だからな？

「これはブルーティアーズに搭載された第3世代兵装、『ブルーティアーズ』ですわ！ せいぜい逃げ回ることですね」

やっぱ紛らわしいわ！ 前から気になってたけどどっちがベースなの？ ビットの名前がブルーティアーズだから機体にも同じ名前をつけたのか？ それともブルーティアーズに載せる初めての第3世代兵装だからブルーティアーズとビットにつけたのか……謎である。

『一夏、遅くなってごめん！雪片出せるよ！』

（良いタイミングだ白式！）

そして俺は、白式の唯一の装備である雪片式型を出した。

「なら、せいぜい足掻かせてもらおうか！」

俺は回避行動を取る。この頃のオルコット嬢は相手の反応が一番遠いところを狙って来るため最初は翻弄されているように動きながら少しずつギアを上げていったらいいと思う。演技俺やっぱ俳優向いてる気がするんだが…

『バカなこと考えてないで、さっさと避ける！』

…バカって酷くね？

「あら？よそ見をしていて良いんですの？」

「む…」

ま、まずいぞ、いつのまにかブルーティアーズ（ビット）に囲まれてしまったー

（棒）

「わたくしの勝ちのようですわね」

瞬間、4機のビットからビームが放たれる。

「今だ！」

さらにその瞬間、俺は持っていた雪片を…オルコット嬢に向かって投げた。ち、な、み、に、零落白夜は発動させてるぞ♡

「自分の武器を投げたですって!？」

オルコット嬢のビームが当たるのが先か、俺の投げた雪片が当たるのが先か。

そして――――――

『セシリア・オルコット、ブルーティアーズ、シールドエネルギーエンプティ！勝者、織斑一夏！』



「わ、わたくし…は、負けましたの…?」

そう言ってオルコット嬢は気絶したらしく自由落下を始めた…じゃねえ！

「やっぱ、間に合え！」

「「キャー！」」

オルコット嬢が地面に激突する寸前観客席から悲鳴が聞こえた。今助けようとしてんだよ…

「間に合った！…全く、世話の焼けるお嬢様だ」

落ちてきたオルコット嬢を抱えている俺だがティアーズの角ばった部分とかのせいで持ちにくい。…IS纏ってるから落下ダメージなんてないでしょっていう意見は俺の独断と偏見で却下する。

そして俺はオルコット嬢を抱えたままピットへ戻った。



「織班一夏帰還しました。オルコット嬢を医務室に運んであげてください」

「勿論だ。山田先生、篠ノ之と一緒にオルコット嬢を医務室に連れてってやってくれ」

「分かりました。じゃあ篠ノ之さん、行きましようか」

「な、何故私もなんですか！」

「篠ノ之、ここは関係者以外立ち入り禁止だった筈だ。今までは見逃していたが流

石に目に余る。その罰だ、分かったな？」

おお、姉さんが理不尽なこと言ってない。若干機嫌が良いからか？

「ですが！「箒、頼むよ」…一夏…一夏の頼みとあつては仕方ないな」

これはオルコット嬢もチヨロインを譲らないといけないレベルだろう

「さて、2人も行ったことだ。改めて一夏、良い試合だったぞ」

これはプライベートモードか？

「ありがとう姉さん。でもマグレだ、一次移行のタイミングが良すぎたからな。じゃなきゃ初心者代表候補生に勝てるわけがない」

これは事実だ。いや、完封勝利出来るよ？でも初心者としては満点の回答のはず…

「まあそれもそうだが、まさか雪片を投げるとは思わなかったぞ？」

うぐっ！そこ突かれると厳しいな。世界最強が使ってた武器投げたんだから…

「いやあ、相手はビームめっちゃ撃ってて近づけなかったから仕方なく…」

「まあ良いだろう。それよりも、お前に言っておくことがある。ワンオフアビリティ単一能力についてだ」

「単一能力？」

「ああそれは――――」

長くなるんで割愛。まあみんな知ってるだろ。ぶっちゃけ必殺ワザだ、一撃必殺の方の。



自室にて

「なあ白式、なんであの事言ってくれなかったんだよ？」

『そ、それは…』

ちなみにあの時とは…

| |

遡る事、お互いの攻撃が当たろうとした時の事

『あ、一夏そういえばね。機体なんだけど最初から雪羅の武装使えるようにしておいたよ』

………は？…え、ちょ、h a？

『だ〜か〜ら〜、一次移行を雪羅にしたんだって。流石に王理にするのはは『E O S』が無いから無理だったけど』

そういう事は早く言ってくれ！

「ああもう！『雪羅』展開！シールドモード！」

左腕に多機能武装腕『雪羅』を即座に展開してエネルギーシールドを張る。

「キャア!!」

「グッ…! あつぶね、ギリギリ耐えたか…零落白夜でエネルギーバカ食いしてたから一瞬しか展開出来なかったが、セーフだな」

||||||||||||||||||||

こんな感じである。

『それは私がこの子にさせました』

あん? この声は…

「白騎士か。どうした、俺の言葉だけでは信用できなかったか?」

『…端的に言うとうそでした。が、貴方の戦いは信用に足るものであったため武装のロックを解除させました』

「信用？どこが？」

「貴方が雪片を投げた時、ブルーティアーズの本体を狙わずに足の装甲を狙っていました」

チツ…バレたか。

「ソレがどうした？」

「織斑一夏、貴方はまだ、捨てることが出来ていませんね」

試合後

「では織斑、ISを解除しろ」

「はい」

そう行つて俺は白式を解除した。待機形態は1回目のガントレットではなく、十字架の首飾りだった。

「それがお前のISの待機形態だ。これから共に戦う相棒だからな、大事にしろよ」

…十字架、任務で違法研究所などを人間ごと潰してきた俺にはちょうど良いじゃないか。白式は俺に、罪を背負って生きろって言っているのか…

『な訳ないじゃん。ガントレットだと蒸れるでしょ？首飾りにした方が楽そうだったし…十字架ってかっこいいじゃん？』

お前の趣味か!?今俺感傷的でシリアスな雰囲気出してたんだから察してくれよ…
台無しだ…

あ、蒸れは凄かったからお気遣いはどうも。

決定！報告オータム……スマン……

「では一年一組の代表は織斑君で決まりですね」

……ん？

「うんうん！やっぱり世界に唯一の男子がいるんだからこうじゃなくっちゃ！」

は？

「私たちは経験が積める。他のクラスの子情報が売れる。一粒で二度美味しい！」

聞き間違いであってほしい……

「先生、質問いいですか？」

まっすぐ伸ばした手。挙手の見本だろう。ていうか俺、この流れ見たことあるんだけど…

「何ですか、織斑君？」

う…そんな眩しい笑顔でこっちを見ないでくれ山田先生。言いにくいじゃないか。

「俺はクラス代表を辞退したはずなのですが、なぜ俺がなっているのでしょうか？」

「それはで…」「それはだな織斑」…私の出番…」

あ、姉さん。頼むから山田先生に気を使ってあげて。

「お前は自分の価値を理解しているだろう？つまりそういうことだ」

さいですか…要は、俺は世界唯一の男性操縦者で貴重な存在だから誘拐などもつてのほかだ。まあ、されたことあるけど…

自分の身を自分で守れるくらいには強くなってほしい。そのためには操縦の経験を積むのが一番。というわけで最も経験が積めて実力がつくのは大体のイベントなどの代表として試合をすることになるだろうクラス代表が一番都合がいいと。…め、面倒すぎる。

「それとオルコットの意見もあったからな。オルコット、発言を許す」

ん？

「はい、皆さんこの度は本当に申し訳ありませんでした。わたくしの不用意な発言

で、皆さんを不快にさせてしまったこと反省しております。織斑先生にクラス代表の話を持ちかけられましたが、あのような発言をしたわたくしにはその資格はありません」

何余計なこととしてくれてるんですかねえ！ああ、またあの仕事（パシリ）が起こつてしまうのか…これはゆゆしき事態だ。

「∴私は許すよ、オルコットさん」

「え？」

「私も！」 「言われた時はムカってしたけどちゃんと謝ってくれてるし」 「そうだね！」

ここの女子達って心広いよな？ 普通陰湿ないじめってあるだろ？

「み、皆さん……ありがとうございます。織斑さんも本当に申し訳ございませんでした」

織斑さん？

「ああ、他の子達が許すなら俺もいいよ。ていうか俺はそんなに気にしてなかったし」

「そ、そうですか。お心遣いありがとうございます」

セシリア・オルコットの境遇は亡国で聞いたから知っている。幼い頃に事故で両親を亡くし、従者に支えられながらも当主として努力してきたらしい。その際、父親が母親に媚びている様子が幼いオルコット嬢に強い印象を与えたのだろう。男は弱い。だから男より上でなくてはならない、そういった考えが自然と身についてい

たのだろう。まあオルコット嬢だけ事故に巻き込まれていないのは、両親のおかげなのだろうが。

「話はまとまったな。では授業を始める！」

「「はい！」」



（亡国機業日本支部 side マドカ）

おそらく初めましてだろう。私は織斑マドカだ。名前から分かるように織斑一夏、千冬の妹になるのだろうか？織斑千冬のクローンであるため本物とはいえないが、血縁関係があることは確かだな。今は亡国機業のモノクローム・アバターに兄さんとともに所属している。

「M、オータム、Sから連絡が来たけど一緒に話す？」

今兄さんは亡国の任務としてIS学園に入学している。スコールはたまに連絡をくれれば良いと言っているのにちょこちょこ送ってくる。

「お、アイツから連絡くるの久しぶりじゃね？」

私の隣でネットを見ていたオータムがアホなことを言っている。

「二週間くらい前にもあっただろうオータム。そんなんだから兄さんにいじられるんだ」

オータムが元から天然なところとアホが相まって兄さんによくいじられている。オータム自身も自覚はしているらしいが治す気がなさそうだ。

「くっ…反論できねえ」

じゃあ直せ。

「はいはい、じゃれあってないで、つなげるわよ？」

「ああ」「おう」

「あー、S聞こえる？」

『ああ、しっかり聞こえる。ん？他にもいるのか？』

「私とオータムがいるぞ兄さん」

『お、マドカか、どうだ、オータムのアホは治ったか?』

早速すぎるよね兄さん…(こっちが素)

「ああん!?なんだと一夏!それは直したくても直せねえ俺への嫌味かオラァ?」

『お前…自覚あったんだな…なんかゴメン…』

兄さん楽しそうだな〜私も加わろっかなあ〜(嘲笑)

「やめろよ、悲しくなるだろ…」

「だがオータム、確かこの前「天然女性の魅力をお届け!」という本を買っていたなあ?」

「な、なな…マドカ、見てたのか？………チクショーー！」「ダッ！

あ、逃げた。…フツ…勝った！

「2人ともあんまりオータムをいじめないで、本当に気にしてるのよ？」

『「いや、結構面白かったからつい…」』

ハモった。

「はあ…マドカ、慰めに行って来て。それからS、報告をお願い」

仕方ない、行くか。

「じゃあまたな、兄さん」

「ああ、またなマドカ。報告だがまずー」



side S(一夏)

自分の部屋で俺は、姉貴に報告をした。

『なるほどねえ、ティアーズのデータは取れた?』

「ああ、遊んでる時にユニコーンでしっかりと」

セコイと思ったがマドカが乗る予定のサイレント・ゼフィルスの下準備のためだと割り切った。反省はしているが後悔はしていない。

『じゃあ後でまた送っておいてね。そろそろ切るわ、2人に伝えておくことある？』

「そうだな、とりあえずオータムにはスマンと言っておいてくれ。後、今度何か奢るとも。マドカには…まあいい。さっき伝えたからな』

オータムマジでゴメン。

『分かったわ、余裕があったら戻って来なさい』

その一言で心が救われる気がするよ、姉貴…

「ああ、またな」

そうして通信を切った。

「ん？もうこんな時間か。明日は休みだが、寝るか。する事ねえし」

ーお休みー

ここまでの原作との変更点

- ・セシリアの一夏の呼び方が織斑さんにフラグ回避か？
- ・オータムは天然だった…
- ・モノクローム・アバターはアットホームな空間です

授業 黒歴史なんぞ俺は知らん(震)

原作と違う点がドンドン増えていっているので明らかに原作沿いとは言いきれない(泣)これがタグ詐欺か…

4月下旬…といってもスコールの姉貴に連絡してから少ししか経っていない。今日はこれからISを使った授業なんだが、ああ、トラウマと黒歴史が蘇る…

1回目の時、なぜ俺はクレーターなんか作ってしまったんだろうか…

ガゴツ!!

「イッタァ!?!」

「何をしている織斑、授業に集中しろ」

なぜ俺の姉は仮もナノマシンで強化されているはずの俺の体にダメージを与えてくれるのだろうか。

「ではこれからISを用いた実演をしてもらう。織斑、オルコット、試しに飛んで見せろ」

「はい」

(行くぞ白式。見世物みたいであまり気乗りはしないけど、我慢してくれ)

『……』

(ん？白式？)

『…ZZZ』

（…ISのコア人格も睡眠で取ることあるんだな）

まあいいや展開したら起きるだろうし。

『流石に起こすのは可哀想なので今回は私がサポートします』

（白騎士か、いいのか？お前は俺のISではないのに…）

『何を言ってるんですか貴方は。私は前から貴方をマスターとして認めていますよ？』

（は？）

『言いにくいのですが…少し前に私とこの子でマスターの記憶を見ていまして、始まりから終わり、さらなる始まりから今までを見たのです』

(勝手になにしてくれてるんですかねー。まあ見られて困る事ないからいいけど)

『なのでこれからは2人でマスターをサポートしていきます。改めてよろしくお願ひしますね』

(おう、よろしくな)

『…まだ言う時ではありませんね。本物の亡霊になるために優しさを捨てなければいけないことは』

(ん？なんか言ったか)

『いえ、それよりも…』

「何をしている織斑、熟練された操縦者は1秒もかからないぞ。現にオルコットは既に展開している」

相変わらず、セシリアは優秀だな。…そう、フラグ回避出来たと思った俺であったが、先日本人から「あ、あの…よろしければセシリアとお呼び下さい。オルコットではその、他人行儀ですの…」と言われた。上目づかいで言われたら流石に勝てんわ…さらに言ってしまうばなんであの時俺は「ああ、じゃあ俺も一夏でいいぜ！」とか言ったんだろう…悪化させただけではないか…

そして展開。展開すると少し浮くためジャンプしてから展開するようにしている。ちなみに0・7秒。手加減は忘れない。

「よし、2人とも展開したな。では飛べ、200メートルほどでいいだろう」

2人同時に飛ぶ。速度もセシリアに合わせてある。初っ端から瞬間^{イグニッション・ブースト}加速で行っても良かったかもな。

「何をしている織斑、スペック上では白式の方が上だぞ」

そうは言ってもね姉さん、俺表向きではまだISに乗って数回目くらいなんだけど……まあ姉さんは、自分が出来るのだから周りも出来るだろうという考え方を持っているから仕方ないが……

まあ究極の人間を目標として作られた俺たちに出来ることが束さん以外のただの人間に出来るかって言われたら、実際に無理なんだけどさ。てか俺に関してはもはや人間とは呼べねえけど……

「フフッ、焦る必要はないですわよ一夏さん」

「ああ、分かってはいるつもりなんだが、意外と難しくてな…」

謙虚に生きてもいい事ないってボス言ってたなあ…

「一夏さんは上達が早いから大丈夫ですわよ。そういえば、わたくしがISに乗り始めた頃は、上手くイメージできなくて墜落しかけてりましたが、一夏さんはどんなイメージで飛んでいるので？」

イメージか、そりゃもちろん立ち上がれ！僕の分身、ライド！って違うこれは高等なイメージだ。出来たらヤバイ…

「そうだなあ、俺は小さい頃に見たロボット系の番組だな、スラスター吹かすとかは参考になるし」

「ロボットですか…確かにイメージしやすいですわね」

映画でいくとトランスフォーマー、パシフィックリム、アニメだと、ガンダム、マクロス、クロスアンジュ、コードギアスとかだな。

「一夏！何をしている！とつとと降りてこい！」

通信で箒の声が聞こえたから下を見ると、山田先生から奪ったらしい通信機を使ったようだ。あ、姉さんに殴られた。

「全く、箒さんにも困ったものですわね」

そう言うセシリアの顔は少し笑っていた。どうやら、箒とセシリアは無事に友人関係になれたらしい。まあ恋敵ってのもあると思うけど…

「織斑、オルコット、急下降と完全停止をやってみる、目標は地表10センチだ」

「了解（ですわ）」

「では一夏さん私が先にやって見せるので無理せずににやってみてくださいまし」

なんか急に優しさが増したな、1回目もこうだったらなあ…

『記憶を見た限りではなかなか悲惨な目に遭っていましたね』

（ああまあ、今回はないと信じたい…）

『お疲れ様です』

お、セシリアは難なくクリアか。学年主席は伊達じゃないか。

あ、そうだ。

俺も始めよう。

せーの、瞬時加速。

「な!? 織斑止まれ! 全力でだ!」

俺は今急下降に瞬時加速を使っている、早いだろ? まあ姉さんが心配しそうだから流石にやめるけど。

「あ、危ねえー」

「…お前達、今ので見習うべきはオルコットだ。まあ織斑のはいい失敗例だ。今回はうまく行ったが普通はISごと地面に墜落だからな」

「大丈夫ですか一夏さん!？」

「ああ、ありがとうセシリア。大丈夫だ」

「そうですか、良かったですわ。それにしても一夏さん、いつのまにか瞬時加速を習得されましたの？」

ああ、やっぱりそういう風に見えたか。

「瞬時加速？俺は急下降って言われたから思い切り降りるのかと思ってな」

「ではあれは偶然…いやですg…「おい一夏何をやっている！昨日私が教えただろう！」…なんですかの？」

教えたねえ…擬音ばかりで意味のわからない説明のどこが教えているのか擬

音なしでご教授願いたいな。なんで俺は1回目の時キレ無かったんだろうか。もうキレても良いと思うんだが：

「うるさいぞ篠ノ之。さっきから授業妨害ばかりして、大人しくせんか！」

結局キレたのは姉さんだった。

「は、はい。すいません！」

「多少トラブルもあったが次だ。2人とも武装を展開しろ。織斑それくらいは自由にできるようになっているな？」

「はい、自信は無いですが…」

嘘です、自信しかありません。

イメージ、いつも俺とともに戦っていたあの刀。そうお前の銘は：

雪片式型

「ほう、0・55秒か初心者にしてはなかなかの記録だ」

お、珍しく姉さんがほm：「だがまだ遅い。0・5秒で出せるようになれ」

「…はい」

上げかけて落とすんだなあ。あー、辛い。

「では次オルコット」

「はい」

左手を肩の高さまで上げ真横に突き出す。一瞬の閃光の後、その手にはレーザー式狙撃銃《スターライトmkⅢ》があった。
だが。

「セシリア、多分その気じゃ無いんだろうけど銃を降ろしてくれ。俺も抵抗せざるを得ないんだけど……」

「え？ あっ、も、申し訳ありません一夏さん。そのような気は微塵もありませんわ！ ですがわたくしのイメージを固める為に必要でして……」

そう、セシリアの銃は、位置的関係も相まって、俺の頭部へとその銃口が向けられていた。言ってしまうばここからセシリアを無力化はおろか殺害も出来るが、いつもこのポーズであったし仕方ないな。

「オルコット、味方に余計な警戒心を与えなくては、そのポーズが無くとも展開できるような訓練しておけ。展開速度は流石代表候補生と言ったところだがな」

「っ！はい！」

うっわ、姉さんが褒めた。珍しい。

「織斑、今失礼なことを考えなかったか？」

「そ、そんなわけ無いじゃないですか……」

「まあいい、オルコット、近接用の武装を展開しろ」

「その事なのですが……今本国に送っていて使えないのですわ」

ん？ そんな事あったか？

「何か異常でもあったか？」

「いえ、先日の一夏さんとの試合では使いませんでした、わたくしの近接武装『インターセプター』は近距離戦ではどうしても見劣りしてしまう事に気付きました。本国の研究所に改良をして貰っているのですわ」

そうだったのか。なんかセシリア、1回目よりもよく考えてるな。何か心境の変化でもあったんだろうか…？

『…女性関連は大体貴方が原因だったと思いますが…いえ黙っておきましょう…』

白騎士が何か言っているがよく聞こえなかった。イヤーナンノコトカワカラナイ

ナー。

「そうか、確かに自分の弱点を把握しておくのも重要だ。だがオルコット、武装が届き次第報告はしておけよ？」

「了解しましたわ」

「うむ。おっともう時間か。今日の授業はここまで！次に遅れるなよ」

「「はい！」」

やっぱ団結力ありスギイ！



「???」

「やっと着いた。うーん、やっぱり変わってないわね日本は。…懐かしい。さて！行きましょうか、アイツ驚くかなあ」

ツインテールが目立つ小柄な少女は日本に降り立つ。「誰が小柄で貧乳ですって!!」…言ってます（by 作者）

「あたしは…諦めないからね！」

少女は決意を胸にある人口島へと向かう。

主役のいないパーティーって楽しい？

一夏「おい作者、今回こんなに時間をかけておいて文が短過ぎる理由を3行で答える。出来なかったらユニコーンのビームマグナムの的だ」

作者「3行!? 的!? ちょ待ってください一夏さん! 最近ただでさえガンダムオンラインでユニコーンの溶かされてんのにこんな仕打ちあんまり」5、4、3「
あぁー!」

大雨で

うちの墓が埋まったので

片付けで投稿出来ませんでした。

皆さま本当に申し訳御座いません!

一夏「む? 大丈夫だったのか?」

作者「まだまだ時間はかかりますがぼちぼちやっていこうと家族で判断したので」
一夏「そうか頑張れよ...だがな作者、その前に的の仕事もあるからな」ユニコー

ン展開

作者「え？」

一夏「4行だっただろ？」

作者「……………ああああ!!」

一夏「さらばだ作者よ」

作者「ストップ！ストップ一夏さん!!それだけh「作者死すべき慈悲はない。
ファイア！」くぁwse d r f t g y ふじこlp…」

一夏「作者は逝っちまったけど更新は頑張るので読者の皆様、駄文ではあります
が応援よろしくお願いします」

（IS学園正面ゲート前）

「やっと着いた…全く、分かりにくすぎるでしょうこの地図！あんのジジイ共もうちよいマシな地図よこしなさいっての！まああっちの女共よりかは良いけど…良いけどなんか腹がたつわね！」

泣く子も黙る丑三つ刻…というわけでもなく夜の7時ごろ。ある少女は新たな生活が待つ地へ足を踏みいれようとしていた。

「どちら様でしょうか？ここは関係者以外の立ち入りは許可していません」

「ん？ああ、すみません。これ身分証と入学手続き書です」

「…中国代表候補生!?し、失礼致しました！今すぐに案内の者を連れてきます」

正面ゲート前の警備をしていた男は受け取った物とその身分を知り、慌てふためく。

「あはは、そんなにかしこまらないでください。こっちは年下ですし」

「お気遣い感謝致します。しかし、仕事ですので」

この男は最近珍しいタイプの女尊男卑の影響をあまり受けていないタイプである。余談だが仕事に実直なタイプで堅苦しい物言いだが裏ではIS学園の（結婚できていない）一部の教師に人気だったりするが少女の知るところではない。

「お勤めご苦労様です」

「いえ、おっと、案内の者が来たようです」

＼side少女＼移動中

「では行きましょうか。IS学園一年一組担任の山田真耶です。これからよろしくお願ひしますね」

「あ、はいお願ひします。一年一組の担任ということはあたしは一年一組の所属で

すか？」

「そのことなのですが一組には現在、2人も専用機持ちがいて、平等にするためにおそらく二組か三組に入ることになると思います。四組までありますがすでに日本代表候補生が所属していますから」

…さっきから思ってたけどこの人、胸大きすぎない!? この脂肪の塊が気になりすぎて話が入ってこないんだけど!!

「そ、そうですか。分かりました」

私への当てつけかしら? この人派遣したやつ絶対シバく! もう泣くまでシバいてやる!

巨乳への怒りを覚えていた少女は通った建物で訓練をしていた少年を見逃していた。

）side一夏）

「というわけでっ！織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「「おめでと〜！」」

パン、パンパン。いろんなところから乱射されるクラッカーはほぼ全て俺に向かってきた。こらこら少量とはいえ火薬入ってるんだから人に向かって撃つんじゃないありません。

夕食後であるにもかかわらず大量のお菓子が用意されている寮の食堂、一組のメンバーは全員揃っている。ずっと言ってるけど仲良いな本当に。

というか様子を見る限り主役が来る前にはもう始めていたようだが？デジャブか？亡国で俺の誕生日を祝ってくれた「モノクローム・アバター」の男どもも俺が来る前からおっ始めやがって。（モノクローム・アバターは約30名ほどで構成されている）これもう騒ぎたいだけだよなあ!?

「お、おう。ありがとな」

そう入ったものの、俺が代表になるなんて微塵も考えていなかったわけで、全くめでたくないんだが…

「いやゝ世界初の男性操縦者がクラス代表！盛り上がるねぇ」

「うんうん！」

「同じクラスでよかったー！」

「ほんとほんと！」

…まあ一回目もだったし明らかにちょこちょこという一組以外の女子たちは気にしないでおこう。他学年の生徒もいるけど気にしないでおこう！何故か俺の死角になりそうな位置に特徴的な水色の髪をしたお調子者が「このすば」の駄女神の花鳥風月やってることも気にしたらいけないよな!! そうだよな！ハハハハハh…

「人気者だな一夏…」

「勝手に騒いでるだけのこの状況を見て誰が人気者に見えるか簿？」

「知るか…」

だいぶご立腹の様子で…。こう言っちゃなんだけどさ？俺やっぱ一度告白されてるじゃん？正直言って恋愛とかはするつもり無いんだけども、こうそういう気持ちがこの人にあったと分かれば今となっちゃ分かりやすいんだよな。1回目の時楯無さんに『祝！』『脱唐変木！』の二つの扇子涙ぐみながら出されるほどにはなったから…

「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑一夏君に特別インタビューに来ちゃいました！」

…その後の流れは1回目とほぼ同じだから割愛。まあ違う点といえば、パーティー

が終わった後は特にハプニングもなく部屋に帰りました。服に付いてた更識製の盗聴器なんてハプニングにも入りません。あ、写真は焼き増ししてもらいました。

ーお休みー

少女「絶対シバく！」

〔寮監部屋〕

？「む誰か私の噂をしたな？おそらくあの馬鹿ウサギが一夏だろう」

少女が人知れず世界最強に喧嘩を売ってしまったのは、きっと運が悪かったのだ
ろう。

再会は陰キャには辛いだけ（作者のこと）

「転校生？」

「うん、なんでも中国代表候補生だって噂で」

代表就任パーティーの次の日のホームルーム前、俺と箒が雑談しているとクラスメイトの鷹月さんが話しかけてきた。

中国の代表候補生、これに当てはまる人間は何人かいると思うが俺は確信を持って言える。鈴だ、と。

「あら、私の存在を今更ながら危ぶんでの転入かしら」

「……」

箒と鷹月さんが何か言いたげだが、一概に間違っているともいえない。今年の一年生はイギリス代表候補生、日本代表候補生、男性操縦者となかなか異例だからな。まあ鈴が中国政府に無理言ってきたんだろうけど。はあー気まずいなあ……あん

な事言つて（詳しくは回想3の話）今更どんな顔して会えばいいのやら…

『笑えばいいと思うよ』

白式：お前は何処からそういうネタを仕入れてくるんだ？てか笑えたらこんなに悩んでねえよ…

「中国の代表候補生か…」

「むっ、そんなに気になるのか？」

「いや…まあそうだな」

「ふん……」

おっと、怒らせたか。よく見るとセシリアもちよつと笑みが怖い。まあすぐ戻るだろうしほつといても大丈夫そうだな。

「お前、ほかの女子を気にしている余裕があるのか？来月にはもうクラス対抗戦だぞ？」

「そうですわ一夏さん！最近の模擬戦で、私の勝率が下がってきているのはいささか不服ですけど、訓練相手ならこのわたくしセシリア・オルコットが務めますわ！何せ専用機を持っているのはまだクラスでわたくしと一夏さんだけなのですから！」

お、おう。グイグイ来るなセシリア

「まあ訓練はしっかりしてるし、なんとかするさ」

「そんなことでどうするんですの一夏さん、もっと強気に行きませんか！」

「そうだぞ一夏、男がそんな弱気でどうする」

「織斑くんにはみんなの幸せがかかってるんだよ！」

レベルの高い女子3人から迫られ（深い意味はない）思わず身を引くが、プレッシャーすげえな。

その後はわらわらと集まってきた女子たちに埋め尽くされた。

「フリーパス期待してるよ！」

「頑張ってねオリム」

「今の所一年生で専用機持ってるのって一組と四組だけだしいけるよ！」

やいのやいのと騒いでいるがみんな分かってほしい。そろそろチャイムが鳴るので席につかないと織斑先生が来るということを。

「その情報古いわよ！」

え？と俺以外のクラスの声と考えが一致した。……マジでどうしよう。あえて見ないようにしてるがのほほんさんが「ちょっと様子見て来て」みたいに袖を引っ張ってくる。ちょっと待って、まだ心の準備が。

「2組も専用機持ちがクラス代表になったから。そう簡単には優勝できないと思いなさい！」

「鈴……その……久しぶりだな……元氣して……たか？」

「……………久しぶりね、一夏！会いたかったわよ！」

「……………誰？……………」

「今日こうやって会えただろ。元氣そうだな」

平常心だ、俺！

「積もる話もたくさんあるし、ちょっと場所変えない?」

「いかなせん時間が悪い。もうすぐチャイムが鳴ってしまふ。

「残念だけど、もうチャイムが鳴るから。教室に戻れって。じゃないと織斑先生が来るぞ」

「むう…仕方ないわね。じゃあ一夏。また後で会いに来るからね!」

「おう、時間的に昼休みにな」

「一難去ったか…。」

「鈴のやつ元気そうでなによりだ」

「一夏、今のは誰だ? 随分と親しそうだったな。まさか…恋人ではあるまいな…?」

「恋人!? 一夏さん、それは本当ですよ!」

「『『どうなの織斑君!』』」

クラスメイトからの質問の嵐。

「前にちよつとあつてな。簡単に言うと言白した方と、振った方っていう関係だ」

「「「告白!? 振った!?」」」

あ、そんなに騒いでると…

バシシシシシイン!

「何を騒いでいる! 廊下まで聞こえているぞ! チャイムはもうなっている、さつさと席に着かんか!」

幸い俺は先に席についていたから殴られなかったけど、これ俺のせいかな?…俺のせいだな。フツ…愉悦!

バン!

「痛あ!?! 織斑先生、俺なんで殴られたんですか! ちゃんと座ってましたよね!」
「その顔が見ていて不愉快だ。さらに言えばこの騒動はお前が原因だろう? さつき風がいたぞ」

「うっ…それを言われるとまあそうなんですが…」

後者はともかく前者の理由に異議を唱えたい。

「全員座ったな? では授業を始める!」



└─ side ─ 授業中

（なんなのだあの子娘は？一夏と親しくして！一夏も何だ。告白？振った？あいつが告白にまともに気づいたとでもいうのか!?）

（分からん！後で一夏を問い詰めるしかない！）

└─ シリア side ─

（何なんですのあの人!?一夏さんと仲良くして!…後で問い詰める必要がありますわね!）

シャーペンでノートに書いているのはただの円。授業を聞いていないのだ。

└─ 一夏 side ─

（気まずいな、若干というか殆どの女子の視線がこっちに向いてる気がする）

まあ、そんなに授業に集中してなかったらねえ？

バシィン！バシィン！バシィン！

「お前たち、私の授業はそんなにつまらないか？」

「「「す、すいません！」」」」

「…はあ。まあいい。大体理由はわかるからな。後で織斑をやるから、今は授業に集中しろ」

「何で!？」



「昼休み」

「授業を終わろう。号令！」

この挨拶が終わり、姉さんが教室を出た瞬間に俺は圧殺されるだろう。それを回避するには…

「起立！ 気をつけ！ 礼！」

「「「「ありがとうございます！」」」」

今しかない！

「一夏（さん）！」

「「「「織斑くん……」」」」

みんながこっちに注目する。だがもう時すでにお寿司（遅し）。

「な!?」「え!?」

「「「「いない!?」」」」

ふっふっふ。まあ見つけれないだろう。天井に張り付いていたらなあ！

「まだそう遠くには行っていないはず!」「者共！出会え出会え!」

武家屋敷かな？

「「「「おおー!」」」」

：行ったか。さてとじゃあ食堂に行くか。

「何してんのオリム（一夏）」

「何!？」

下を見ると教室に残っていたであろうのほほんさんと今しがた教室に入ってきたであろう鈴が俺を見上げていた。

俺は床に降りて椅子に座る。

「いやまあ、今の見たらわかるだろ？」

「ああ」

「で、鈴。取り敢えず食堂に行くか」

「う、うん。そうしましょうか」

「みんな、オリムゝいたよ」

待てのほほんさん、謀ったな!?

「あゝあ、行っちゃった。ほら、あいつらが来ないうちに早く行きましょ」

「行ってしまったからにはしょうがないか。行くか」

俺たちは食堂に向けて足を進める。

「いつ日本に帰ってきたんだ？」

「つい昨日此処に着いたばかりよ。お陰でまだ眠いわ」

「へえ。時差ボケか？」

「そんなに中国と此処離れてないでしょ。飛行機なんかしょっちゅう乗るもんじゃないし、疲れただけよ」

「そうか。お、着いたぞ」

「へえ、此処が食堂ね。なかなか広いじゃない」

相変わらず大賑わいだな、食堂は。ん？あれは…

「お待ちしておりましたわよ一夏さん？」
「は」

新たな任務（無理ゲー）

「お待ちしておりましたわよ一夏さん？」¹¹⁵

やあ、みんな大好き一夏だ（自意識過剰）。見ての通りだが俺は今まさにSYU★
RA★BA、に襲われている。こういうのには強くないんだよ俺…。

「や、やあセシリア。どうしたんだ、こんなところで？」

「あら？ お昼休みに昼食を取りに来ることがおかしいですか？」¹¹⁶

あー…すごい屈託のない笑顔なんだけど、それが余計にコワイ。

「ちよつとアンタ誰よ？ 私は今親友との旧交を温めようとしてるんだから！」

「わたくしのことをご存じない？ イギリス代表候補生、セシリア・オルコットですわ！ 旧交を温めるだけでしたら、わたくしが相席しても何の問題ありませんわよね？」

鈴さん…火に油を注がないでください。いや、そういう料理してるの見たことあるよ？ でも今はその時じゃないだろう…はあ、胃が痛い。

「あ、私他の国の候補生の事気にしないのよね。技術系はチェックするんだけど、

パイロットにはあんまり興味が無くて…」

鈴さあん!?

「なっ…なっ!?!」フ。ワ。ワ。

「はあ…ほら、もう行くぞ。大人数で食った方が飯はうまい」

これで収まって?

「まあ、一夏がそういうのなら…」

「興味が…無い…ですって…フフフ…」

セシリア…帰ってこい。

その後は多少いざこざはあったが普通に話をしながら飯を食った。セシリアと鈴は、性格は違いながらも、意気投合したらしい。1回目ではそこまでではなかったと思うけど何故だ?(あなたが鈴さん振ったから恋敵では無くなったからです by 作者)

うっせえ作者メタいわ。



「ふう、部屋の掃除でもするか」

放課後、いつも通り訓練を終えた俺は部屋へ戻った。

「えっと…ああ此処結構ホコリ溜まってるな。あ、此処もだ。掃除機…は借りれないよなあ。雑巾で我慢するか。いや…姉さんの部屋に行くか。突撃隣のゴミ屋敷ってな」

そう思い部屋を出ようとした時、部屋の扉をノックする音が聞こえた。

「一夏…いる？」

どうやらこの部屋初のお客様は鈴らしい。

「鈴か。鍵は空いてるから入っていいぞ」

「お邪魔しまゝす。結構綺麗じゃないこの部屋。本当に倉庫だったの？」

おいおい鈴よ。誰が掃除したと思ってるんだい？

「ああ、でもそこまで大変ではなかったしな。あ、鈴来てもらったのに悪いんだが10分…いや15分ほど待ってもらっていいか？」

「あ、なんか用事あった？悪いわね…」

用事…いや、家族会議だ。

「いや、ちょっと家族会議だ」

「……………あゝ心がぴょんぴょんするんじゃない」

解鈴は強い（メンタルが）



はつきり言おう。数週間経った。

いや待て、弁解させてくれ。これまでの経緯を含めて。

あれからは学校。訓練。スコールの姉貴への報告。姉さんへの説教。学園のネットワークへの侵入。これくらいしかなかったんだ。日常のことなんて特にいう必要もないだろ？ え？ 侵入の件？ もう10回くらいはしてるよ？ このセキュリティガバすぎるんだって…

そんなこんなで俺は今、放課後。箒の剣道の相手をし終わり、トレーニングルームで日課をこなしている。

「97…98…99…100。こんなもんか、此処じゃ限界があるな…」

学園の器具も悪くはない。けどやっぱ女子用ってのがなあ…俺には足りない。

「お疲れ…ってっぽいもなさそうね一夏。一応タオルとスポドリ持ってきたけどいる？」

「おう、ありがたくらつとく」

流れるような氣遣い。スポドリはぬるめ。やはりこいつはいい嫁になるな」

「当たり前でしょ。何年アンタに認めてもらえるように頑張ったと思ってるのよ」

「声に出てたか。ははは、俺にそんなに価値があるとは思えないけどなあ」

「何言ってるの。世界で1、2を争う価値でしょ、アンタは」

「そうだったな」

「全く、話がそらされた感じがあるけどまあいいわ。来週はクラス対抗戦よ。しっかりしなさい」

訂正、良いオカンにもなれる。

「まあ楽しみにしてくれ、戦うことになるかもしれないからな」

「かも、じゃないでしょ。戦うまで誰かに倒されるんじゃないわよ」

「へいへい、お前もな」

当日何が起ころか知ってる身としては不安しかないんだけどなあ。

「あら？一夏さんに鈴さん。お二人も訓練で？」

「此処にいたのか一夏。日々の精進は良いことだな」

「おう、セシリアに箒、お前たちもか？」

この面子が揃うのも久々か……いつも喧嘩してたなあ……あの頃は俺が原因だとは微塵も思ってた。若気の至りだな、ウンウン。

「……胸大きいなあ」

鈴さん聞こえてるから。

「わたくし達はお互いに近接と遠距離戦の訓練をしていたんですの。なかなか有意義な時間でしたわ（箒さんの説明は全くわかりませんでしたけど）」

「流石は代表候補生、正確な射撃だった。私も見習うべき点が多くあった（説明は理解できなかったがな）」

「そうか、じゃあ俺は此処らで失礼するかな、女子同士積もる話もあるだろうし」

「「そんなことありませんわ！ないぞ！」」

「はいはい、たまにはいいじゃない、この3人で話すっていうのも。女子会、しましょ？」

鈴のフォローもあり、俺は簡単にその場から抜け出せた。その時の箒の笑みを俺は見逃さなかった。箒よ、楽しんでこい。お前、女子の友達いなかったからな。

籌達を置いて自室へ帰った俺は恒例のスコールへの報告をする。

「姉貴、聞こえるか？」

『：ザザッ：ええ、聞こえるわよ』

「なんか回線悪くないか？」

『今ちょっと任務で研究所を潰したんだけど、IS用のジャミング装置を作ってたのよ。全く、面倒なことを』

おいおい、それって革新的な技術だよな？ ISコアを解析できたのか？

「それ、大問題だろ：全て消したのか？」

『ええ、データはもらったけど此処の奴らには綺麗さっぱり消えてもらったわ。そういうえば、何か報告ある？』

おっと、本題を忘れるところだった。

「現状は大丈夫なんだが：来週クラス対抗戦があつてな…」

『クラス対抗戦といえは：無人機だったかしら？』

「ああ、それでな：ボスに繋ぐことはできる？」

『ボスに？ んー：ちょっと待ってね』

鈴との試合の最中に乱入してくる無人機は今の世界の技術ではおそらく作れないだろう。それができる人物といえは1人しか思い浮かばない。もしあの人をこちら側に来させることができれば…

『S、大丈夫みたいよ。今から繋げるわ。私は今から帰還するから、2人で話してちょうだい』

「了解、ありがとうな姉貴」

『Sよ、私だ。』

「お久しぶりです、ボス」

『お前もな。さて、用件はなんだ？クラス対抗戦のことだと聞いたが…』

「はい、そこで乱入してくる無人機なのですが…おそらく篠ノ之束によって作られたものだと考えています」

『ふむ、まあそうであろうな。そのようなものを作るのは奴以外ないだろう』
「そこで提案なのですが、篠ノ之束をこちら側へスカウトすることはできないでしょうか？」

『ほう、スカウトか。出来ることなら最優先で行いたい…出来るのか？』

ぶっちゃけ多分無理です。

「確実に……とは言い難いですが、交渉なら出来ると思います」

『そうか、接触ができるだけでも十分な成果と考えるべきか……ふむ、Sよ、お前個人に新たな任務を与える』

「ハッ！」

『篠ノ之束との接触を最優先で行え。専用機の使用も許す』

それは……

「亡国として、という意味ですか、了解致しました。S、任務を遂行します」

『うむ、良い成果を期待している』

そうしてボスとの通信が終わった。

「どうやろうかなあ……俺と鈴の戦闘中に乱入してきたし、鈴にユニコーンを見られるわけにはいかないし。……これ無理ゲーじゃね？流石にノーコンテニユーは無理か。いやこれ2回目だったわ」

白式……なんかいい方法ないか？

『え……自分で考えてよ……』

お前はそれでも俺の相棒かよ……てか普段お前って何してんの？

『え、私？寝てるかお話してるよ』

誰と？

『ユニ子ちゃん』

誰!?

『ユニコーンだよ』

ああ……そっか、ISネットワークあるから話せるよな。俺にはまだ無理か……

『ユニ子ちゃんまだ恥ずかしいって。あんまり使ってもらってないし』

恥ずかしいのかよ。すまんユニコーン。今度刺激的な仕事が待ってるから期待しといてくれ。

『頑張る！だって』

頼んだぞ。最近調整も出来てないし、なんとかしないとな。

『あ、じゃあ私もしてよ。スラスターとか重点的によろしく』

今日は眠れないかな？

一夏、鈴、セシリアが昼食をとっている頃。

「ええい！一夏はどこだ！そう遠くは行っていないはず…。だがこの人数で探して見つからないとは。…ハッ！まさかあそこに！」

一夏が食堂に行っていることを知らない篠ノ之箒は、全くもって見当違いな方向へ向かって行く。

この後、1組の大多数の女子が、一夏を探し回ることに集中して昼食を取り損ねた事は、当たり前だっただろう。

もちろん、校舎中を走り回っていて、千冬から折檻をくらったことも。数名は喜んでいたようだが…。

招かれざる客は必然に

俺と鈴との試合当日。分かってたが第一試合は俺 対 鈴。つまりは一組対二組。運営よ、手を抜くなと言いたい。まあ、このころに簪と出会っても白式のことでもめるからある意味助かったんだろうな。なんか絶対的な力でも働いてんのかねえ、こう、運命的な？

『両者フィールドへ出てきてください』

おっと、出番か。こんなこと言うのも失礼だが鈴との勝負は楽だからいい。問題は無人機、対策や作戦はばっちりしてあるけどこれが初めての単独任務。初めてのこれで篠ノ之束との接触って、うちの組織ブラックかよ。いや、わかってますって、俺が意見具申したのは。だからこそ失敗はできない。任務のためなら、正々堂々でも真剣勝負でも、なんだってぶち壊してやるさ。どんなに汚くても、卑劣な手段だろうと、俺はもう明るいところの人間じゃない。俺は、今の俺らしくやってやる。なあ？ 白式、ユニコーン。

『もちろん！』

『……うん、ユニコーン、頑張る』

え？それを問うにはもう時すでにおす……遅し。俺はフィールドへと飛び出していた。

「来たわね一夏」

俺が所定の位置へ着いたとき、鈴は『甲龍』を纏ってその時を待っていた。正式名称なんだっけ？あ、シェンロンか。いつもこうりゅうって呼んでたから覚えなかったな。

「悪いな、なにぶん、公式試合は初めてでさ。緊張してたんだ」

「あんたはそんな玉じゃないでしょ。どうせあたしとどう戦うかとか悩んでたんじゃないの？」

「それが出来たらよかったんだけどな。俺はお前のISのこと、名前くらいしかわかんねえから無理だった」

「あら？悪いことしたわね。あたしはアンタのこと調べさせてもらったわ。おおよそ千冬さんの劣化ってね」

あー……すまん鈴。それ無駄になりそう。俺亡国入ってから、いろんな武装で手

数揃えるほうに変えたんだよね。一番手になじむのはやっぱり刀か剣だけど。

「姉さんは自分の獲物を投げるだなんて暴拳には出ないさ」

「あはは、確かにね。でも、手加減はしないわよ」

そうか、でもごめんな鈴。俺は半分以上手を抜かせてもらうぜ。

『それでは両者スタンバイ……スタート！』

ビーー！となるブザー。その音を皮切りに、両者とも少し距離をとった。

そして、お互い自慢の獲物呼び出し一気に距離を詰める。

ガキン！

俺は雪片式型、鈴は青竜刀で一度打ち合う。

「アンタの白式だっけ？あたしの動きについてこれるとはやるじゃない！」

「そこは素直に俺の実力だって言おうぜ？」

「ISに乗り始めてまだ半年もたっていないニュービーがなにいつてんのよ！」

つば競り合いをしていた俺たちだが鈴の力業で俺の雪片が弾かれる。

「動きが甘いわよ一夏！」

その瞬間、俺は機体を思いっきり右に回転させる。予想していたようにさっきま

で俺のいた場所を空気の弾丸が通り過ぎる。

「っ！あたしの龍砲を初見でよけるなんて!? アンタいったいどういう神経してんのよ！見えてないはずよ！」

そう、鈴の借るIS、『甲龍』は第三世代兵装である『龍砲』を装備している。この兵装は、周りの空間に圧力をかけ、そこに生じている衝撃を打ち出すというもの。簡単に言ってしまうえばあの国民的アニメの秘密の道具、空気砲だ。ただしこっちはもっと厄介で、空間に圧力をかけるというのは別に正面に限った話ではない。後ろや上など射角限界がなく、ハイパーセンサーと合わせれば360度どんな方向のもも不可視の弾丸を打ち出せるということだ。

「勘だよ。野生の勘ってやつ？」

「知らないわよそんなこと！これなら手加減は必要ないわね。代表候補生の力、見せてあげるわ！」

遠慮がなくなった鈴はすごい勢いで猛攻を仕掛けてくる。空中ならではの三次元機動、PICを使いこなした全方位への軸反転、決まった型がない、変則的な斬撃。どれも高い水準でこなしている。

（うーん、やっぱ鈴の操作技術って他の人と比べても飛びぬけていた気がするんだけど、俺の気のせいかな？白式？）

『他の人たちに埋もれちゃったところが大きいね。第二世代機で第三世代機にも勝つシャルロット・デュノアや遺伝子強化個体のラウラ・ボーデヴィツヒ。後は生徒会長とか、赤月……じゃなかった、紅椿を手に入れてからの篠ノ之箒とか』

だよなあ、やっぱ周りがおかしいだけだよなあ。俺なんてもうあの頃はな、毎日訓練という名のリンチだった。

『あはは……っ！一夏、右斜め下から衝撃砲！』

「あいよっと！」

「アンタ避けすぎ！まだ龍砲まともにくらってないじゃない！」

「なに、必死に訓練しただけだ！」

そろそろ、招かれざる客も来る頃だし、そろそろ準備しとくか。

「そろそろ決めるぞ！鈴！」

「なによ、楽しい時間はもう終わり？いいじゃない、二年間もほっとかれたあたしの愛もくらわせてあげるわよ！」

鈴ってこんなキャラだったか!? まず俺たちは付き合っていないだろ、しかもその言い回しじゃまだお前は俺のことが好きってことに…あ…マジ?

「行くぞ鈴! 白式!」

『うん!』

「『零落白夜』」

「あたしの全力、受け取りなさい!」

それは一瞬の出来事。二人が交差した瞬間、真上から飛んできたのは衝撃砲ではなく、レーザーでもなく、ビーム兵器。

「チッ! 間に合わなかったか! あ、鈴は!？」

ついにやってきた。世界初の無人機型IS『ゴレムi』人が入っていないからこそ、人型にしては不釣り合いなボディ。全身から出ているコード。まさに機械といったところか。

鈴との一騎打ちに勝利した俺は、今の衝撃で絶対防御が発動しISが解除された、
気絶状態の鈴を発見する。

「鈴!! 気絶か、不幸中の幸いか。すぐに運ぼう」

ビーー! ビーー! ビーー!

学園の緊急用アラームが鳴り響いている。生徒や教師たちは事の重大さを理解したのかパニックになりながらも必死に逃げる。

『一夏! ゴーレムからロックされてる! 来るよ!』

アリーナの防衛用バリアフィールドを破るほどの兵器を持った敵が、負傷者を抱えている俺をロック、しかも後ろには、いまだパニックになっている生徒たちと避難誘導をしている教師たち。なんで教師たちはISを展開していない! 馬鹿か!

「くっそ! お構いなしだよ、さすがは束さんだな! 興味がない人間はもはや見えてないらしい!」

鈴を傷つけないよう必死に動き回る。ゴーレムは固定砲台のようにひたすらこちらに向かってビームをうっている。

『織斑君! 聞こえますか! こちら山田です! 鳳さんと通信ができないのですが無

事ですか？』

山田先生がプライベート・チャンネルで状況報告を促している。

『山田先生ですか。嵐は最後の一騎打ちとビーム兵器の爆風で今気絶しています。誰でもいいので回収の向かわせてください！』

『わかりました！織斑先生、どうされますか？』

指示があるまではやるしかないか。

（白式、作戦開始予定開始までは後どのくらいだ？）

『五分くらい？』

なんで疑問形なんだよ…

『織斑君！いまオルコットさん向かわせています！オルコットさんに牽制射撃を任せますので一緒にピットまで後退してください！』

『了解！』

数秒後、セシリアから連絡が来る。

『一夏さん！用意が出来ましたわ。こちらへ！』

俺は、セシリアの姿を確認すると瞬時加速を使いすぐに移動する。あ、鈴はP I Cが機能するようにしてあるから問題ない。

「セシリア！ 鈴を頼んだ」

「一夏さん!? 頼むって申されましても!」

「あのISにロックされてるのは俺だ! 俺がひきつけてるからさっさと行け! 鈴を殺したいか!」

これは本音だ。こんなところで鈴を失うわけにはいかない。

「一夏さん: 承知いたしましたわ! ご武運を!」

そうしてセシリアは鈴を抱きかかえてピットに向かった。

『織斑君!? 何してるんですか! 早く戻って!』

『山田先生、本人がやるといっているんだ。やらせてみる』

『ですが!!』

『山田先生、私たちのやるべきことは生徒たちの安全確保だ。優先事項を忘れるな。安心しろ、奴を誰だと思っている? 私の弟だ』

ありや、俺の加わる余地なしにどんどん話がまとまったら。姉さんに関して

はあれだな。この間酒分の小遣い抜きにした私怨も混じってる。

『とりあえず落ち着いてコーヒーでも飲め。糖分が足りてないからイライラするんだ』

『織斑先生、今入れたの塩ですけど…』

『…』

これ聞かなきゃダメか？

『わが相棒ながら、恥ずかしい…』

（おわ！白騎士か、すまん…マジですまん）

後で無事だったらとどめもさしておかないといけなくなったな。身内の恥は俺が処さなくては。

漫才を聞くのが面倒になった俺は、さっきから沈黙を貫いているゴーレムの正面に立つ。

（白式、プライベート・チャンネル頼む）

『まっかせて！』…ほい！』

お仕事が早くて何よりです。

『束さん、俺は束さんの予想よりはるかに成長してる。だから、こいつを帰らせてくれないか？俺は無駄な被害を出したくないんだ』

.....

応答はなし。仕方ないか。ついでだからコアもお土産にもらって帰ろう。

「敵目標、未確認IS『ゴーレム』。戦闘行動に移る」

束さん、アンタがその気なら俺もその気になろう。篠ノ之束、覚悟しておけ。俺は、お前の期待する主人公じゃない。ただの破壊者で、任務を遂行するものだ。

プライベート・チャンネルで名乗る。

『織斑一夏……いや、コードネーム S 目標を破壊する！』

ユニコーン、展開

組織の一員として俺はゴーレムの前に立つ。

「行くぞ！」

まずは突撃。正面からゴーレムと相對する。

『……』

AIなのだろう、機械的な動きで俺を排除しようとゴーレムが動く。

「狙いがわかりやすすぎる！ 見え見えなんだよ！」

ゴーレムが行ったのは毎度お馴染みビームの砲撃。正直なところ真っ直ぐにしか飛んでこない攻撃など親の顔より見た。：親なんていないんすけどね。

そのまま雪片で切り上げ。ただし零落白夜は発動させない。終わってしまうからだ。

胴体を切り上げられたゴーレムから電撃が走る。

『……!!』

ゴーレムは苦痛そうな機械音をあげる。コア人格か？ ゴーレムはその大きな腕

で俺を掴み、おそらく全力で上に投げ飛ばす。

「うおっ!?…っと危ない!…って待てよ!」

態勢を立て直しゴーレムの方を向くと、すでに奴はすぐそこまで迫ってきていた。

「コイツこんなに機動力あったk…くっ!!」

『…!!…………!!』

1回目よりもはるかにゴーレムの動きがいい気がする。まさかあのゴーレム、俺の実力に合わせてレベルでも存在してるのか!

『一夏!流石に今の私じゃあのゴーレムには着いていけないよ。雪羅の武装を使つて!』

「駄目だ!今使うと全体にばれる!それだけは…それだけは絶対に駄目だ!…ぐっ!?!」

ゴーレムは俺をさらに追撃。でかい腕を使った殴打。白式の性能では耐えきれない。その勢いで俺はIS学園のアリーナを出てしまい、会場まで飛ばされる。

『お……ら……くん!!聞こえ………すか!?!』

山田先生からの通信か?なぜノイズがこんなにも酷い?

『あのゴーレムからIS用の通信妨害電波が出てる！多分だけど映像も駄目になってる！』

「何？前はそんなものなかった…。さっきの予想は当たってるみたいだな！」
篠ノ之束、そんなものがあるなんて聞いてないぞ。

「…いや待て。思ったより好都合か…？」

姉さんらは俺の状況が全くわからない。だったら…。

「白式！もっと向こうへ行く。耐えてくれるな？」

『任せて！一夏のこと、守ってみせるよ！』

流石は相棒、頼もしいな。じゃ、やるか！

）side out（

）side IS学園（

「織斑君との交信途絶！状況が一切分かりません！」

「なんだと？思っていたより事態は深刻か。しかも奴と織斑は外に行ってしまった…街の方に行っていないければ良いが…。教員部隊、まだ準備はできないのか!!」

IS学園の司令室では織斑先生や山田先生が中心となり、対応に追われていた。

「後10分程で出撃準備が完了します！それまでは織斑君に耐えてもらうしか！」
「織斑はまだISに乗り始めて2ヶ月も経っていない。まさかあの機体があれほどの性能だとはな…。一刻も早く出撃しろ！あのビームの威力、いくら専用機があるといっても長くは持たん！」

織斑先生が指揮を取っているが、IS学園のアリーナのバリアが破られるなど想定外のこと。この異常事態に教員のIS部隊といえど反応が遅れることは仕方ないことだろう。

「織斑先生！未確認のISがもう一機接近！…あ!?反応消失。恐らくは織斑君との通信が途絶したものと同じ現象だと思われます！」

「もう一機だと!?誰か偵察に行けるものはいないのか!!」

阿鼻叫喚。その言葉がこれほど似合う状況がないだろう。

「織斑先生！長距離ならばわたくしが行けますわ！どうか、出撃させてください

ませ！」

「オルコットか。行けるのか？」

出てきたのはセシリア・オルコット。ブルー・ティアーズならば遠距離機体という特性的に偵察にも向いているのだろう。

「凰さんは医務室に運びましたが、何も出来ないということはありません。やってみせますわ！」

「分かった。ただしブルー・ティアーズの限界距離での偵察に徹しろ」

「了解しましたわ。セシリア・オルコット、出撃しますわ！」

（頼んだぞ、オルコット。一夏…無事でいてくれ）

戦場に出ることのできない織斑千冬には弟の無事を祈ることしかできない…。

）side out）

）side 一夏）

山田真耶からの未確認IS発見報告の数分前。IS学園より2キロほど離れた海上。「白式。よく耐えてくれたな」

『いやー。めっちゃ疲れたよ。あの子の表舞台デビューしちゃう?』

「そうだな。俺が戦闘行動を取らない限り、あちらも手を出してこないしな。やるとするか」

『……………出番?』

「ああ、そうだ。待たせて悪かったな。ユニコーン」

いやあ、それにしても長かった。ようやくまともにお前を使える。

「それじゃあ、白式。お前はしっかり休んでな。後でメンテはしっかりしとくから」

『任せたよ。お休み』

軽い。いや、いつもこんなもんか。

白式を解除したことにより、体は自由落下を始めた。

「ユニコーン…展開」

俺の機体、ユニコーン。レイさんが乗りと趣味で作った機体だが性能は現在存在しているISでトップなんじゃないだろうかという機体。ぶっちゃけアニメでも性能凄かったしな。ただ、原作と違う点は、ボディが黒であること…? ん? 色が白に戻ってる。なんで!?

『私の自我が芽生えてから…正直…ダサかったから…名前も…色も戻したの』
「……………すいませんでした」

状況終了

結果から言うと、瞬殺した。

目の前にいるのは手足がないゴーレム。さつきからいろんなパーツから火花が飛び散っている。機能を完全に停止するのも時間の問題だろう。

「あっけなかったな。いくら束さんといえど無人機はこの程度か」

もうちょっと耐えてくれてもいいと思うんだ。ユニコーンを展開した瞬間にゴーレムのハイパーセンサーで認識できない速度で背後に行つてビームサーベル2本で手足を切り落としただけなのに……。ちょっと脆くない？

『ユニコーン、他の子とは性能が違うから仕方ないよ』

ああ、ユニコーンお疲れ様。まあ、仕方ないんだけどさ。あんまり楽しくなかった。もうちょっと強いやつとやりたいぜ。おっと、本題に移らないと。

「篠ノ之東、聞いているだろう。我々亡国機業は、貴方との同盟を望んでいる。貴方にその気がある……とは思っていないがこの話を聞いてくれるならこのゴーレムに送る座標まで足を運んでいただきたい。相応のもてなしをさせていたどころ」

こんなもんか。座標データも送ったし戦利品だけもらって帰るか。

「まずはコア。当たり前だよなあ。…もう機能停止させて良いよな？」

胸部装甲を無理やり開けてコアを抜き出す。ゴーレムの目に光はもうない。

「そういやユニコーン。もう喋るの恥ずかしいくないのか？」

パーツをモン○ンのごとく剥ぎ取りながら俺はユニコーンに尋ねる。

『まだとちよっと…恥ずかしいけど、慣れてきた』

「そうか、これからも頼むな」

『…うん！』

大抵の作業は終わった。あとは、俺だつてばれないように隠蔽工作しないと…

『その所属不明機！武装を捨ててISを解除しなさい！』

……ええ。なんでバレたの。ISの反応はゴーレムが出してたやつで阻害され…

て…アッ。

『さっき…コア抜いたから、機能停止しちゃったよ？』

忘れてたあ……。ヤバイ、今織斑一夏が行方不明とか学園で絶対言われてるだろ。これ姉さん来るパターンじゃね？マジでどうしよう……

『所属不明機、早くISを解除しなさい。周りでは私の部隊が包囲しています。逃げ場はありません』

訓練用のラファール・リヴァイヴ10機程度だがあんまり力を見せつけるのもよくない。逃げるのは確定なんだけどさあ……。織斑一夏が存在どうしよう。

『やられてたから……持ってくるって言ったら？』

それでも良いんだけどその後が……。いや、それで行こう。

『私は織斑一夏のいる場所を知っている。貴様らが私を通さないと言うのであれば

ば、私だけ離脱しても良いのだぞ？』

ボイスチェンジャーを使って聞いてみた。

『っ!?…そんな分かりやすい嘘が通じるとでも思っているのですか？』

そっちこそ分かりやすいくらい動揺してんじゃないか。まあ、構うだけ無駄か。俺はスラスター全開で逃げる。

『な!?速すぎる！追いなさい！アレを逃してはいけないわ！』

さーて、ユニコーン。俺の遺伝子さえ認識できれば機体は起動できるか？

『多分できるよ』

操縦は？

『頑張る！』

わかった。じゃあ俺の細胞を含ませたナノマシンを内側に薄く張るからお前は俺があちらに渡ったらステルスで逃げる振り。その後は待機形態に戻ってくれ。

『じゃあ私から…行くね』

おう、頼んだぞ相棒。

『え？…うん！』

（side out）

side教員部隊

学園の訓練機であるラファール・リヴァイヴに乗った教員部隊はあり得ない速さで逃げた所属不明ISを探していた。

「速度特化型の機体か…織斑君の姿は確かに見えないけどアレにさらわれたと考えるのが妥当かしら…」

「でも本当のことだったら織斑君の位置がわからないままなのでは…」

「最初に学園に来たISを倒したのもあのISっぽいですし、案外味方だったんじゃないですか？」

部隊の間で様々な憶測が飛び交う。

「ここで考えても仕方ないわ。とりあえず搜索範囲を広げましょう。あのISもあるな速度だと流星にもうエネルギーは残ってないでしょうし。遠くまで行っ

いはず…」

その時、

「ISの反応！近づいて来ます！」

「何ですって!？」

『約束を…果たしに来たぞ』

教員部隊の前に現れたのは、織斑一夏を抱えた先ほどのIS。

「何を考えているのかしら？」

『…今はまだ、貴様らの敵になるつもりはないという事だ』

「今はなのね」

『……さらばだ』

そう言って織斑一夏を渡し姿を消した。

「戻りましょう。織斑君を届けないと……。織斑先生になんて言われるかしら……」

教員部隊は何もできず、帰路に着いた。

（side out）

（side 一夏）

作戦は完璧だった。いや、やっぱ学園の教師弱すぎる。まともに戦えるの山田先生と姉さんくらいだろあれ。

逆にあの2人が強すぎるのか？つまり一般の操縦者はあの程度……ISの数が少ないのに一般ってなんだか変だな。

「織斑くん大丈夫？って寝てるわよね」

「ん……ん？先生……ですよ？」

「あら、起きたのね。体は大丈夫？」

「あ、はい大丈夫です。俺は…負けたんですね」

「仕方ないわよ。まだISに乗り始めて3ヶ月もたっていないじゃない。あまり大きな声で言えないけど、今回は織斑先生が無謀だったと思うわ」

へえ…。この先生は思ったより使えるな。てか、ISに乗っててそんな事言ったら…

『部隊長…戻ってきて報告が終わったら話がある。私の部屋でゆっくりと飲もうではないか』

「え!?!…わかりましたあ…」

南無三。でもその飲み会の後の片付けはどうせ俺なんですわ分かります。

「ありがとうございます。わざわざ助けてもらって…」

「え? いやいやいや! 謝るのはこっちよ。出勤が遅れたせいで織斑君が戦う羽目になったんだから!」

いえ、あの、ゴーレムが来たの理由俺なんで…すいません。とか言えるはずもなく、

「は、はあ」

下手な相槌しか出なかったよ。マジですいません。

『織斑、お前にも話があるからな？』

「……はい」

そんな話をしながら俺たちは学園に戻った。

「……いっくんが亡国機業に入ってたなんてね。全く気づかなかったよ。いっくんの様子からすると箒ちゃんもちーちゃんも気づいてないかもね」

「あの方が、束様のおっしゃっていたいっくん様ですか。聞いていたよりは随分たくましい方なんですネ」

「いや、流石の束さんもびっくりだよ。一体いつからISに乗ってたのかな？ IS

に人が乗ってないのにユニコーンガンダム？が動いてたし。ゴーレムがやられた後も私が見てた事に気づいてたっぽいね。東さんがISでわからないことがあるなんてね」

「ガンダムって確か、アニメでしたよね？」

「そうだよ。アニメの機体って浪漫あるね。ISとMSは意外と相性いいかも！だったらナイトメアフレームっていうか武装もいろいろいるんじゃない？フフフ、アレ作ったやつと会ってみたいね」

「東様が他人に興味を…。これは成長を喜ぶべき…。でしょうか。でも危ない方向に進んでる気がします」

また1人無駄に頭のいい馬鹿が生まれそうだった。

「そういえば東様、亡国機業からの招待。受けるのですか？」

「もちろろん。ひさびさにいっくんに会いたいし、開発者にも会いたいし、そして何より…」

「悪い話じゃないしね」

弱くなった

学園に帰った俺を待っていたのは精密検査だった。いや、おかしいだろ。表向きゴーレムに1やられてユニコーンという正体不明機に運ばれただけなのに。…当たり前だったわ。そして今は…

「聞いているのか一夏。あの時、何があった？」

「聞ってるよ。だからさっきから言ってるだろ？あいつにやられて、海に落ちると思ったらあの白いのに小さい島まで運ばれて、そこから記憶がないって」

姉さん直々の事情聴取の途中。まあどうせすぐ終わるさ。なぜなら…

「それより一夏、体は大丈夫なのか？」

「だから大丈夫だって！もはやその言葉の方が多く聞いたわ！ちゃんと事情聴取しろよ！」

公私混同とはまさにこのことだろう。全く、1回目の時のあの凛々しい姉さんは一体どこへ…

「いやしかし、お前はそれしかわからないのだろうか？それしか情報がないんだ。後は、予想しか出来ない」

「予想？どんな？」

「……いや、あくまで憶測の域を出ないからな。気にするな（言えない。多分、束が送ってきたなんて言えない。今の一夏ならきつと殴り込んででも説教しに行く気がする）」

「そう、じゃあいいや（きつと、俺が束さんに説教しに行くとも思ってたんだろうなあ）」

「ま、まあ一夏、今日は疲れただろう。事情聴取もこれで終わりだ。部屋でゆっくり休むといい。ああ、今回の騒動の事は…」

「わかってるよ。流石に言えねえよ。監視も嫌だしな。じゃあ、おやすみ姉さん」
「ああ、おやすみ」

そう言って部屋を出た俺は、自室へと向かって歩く。

（お疲れ様、白式、ユニコーン。今日は本当に助かった）

『一夏もおつかれ〜！全く、IS使いが荒いね！ユニコちゃんに操縦任せるなんてほら』

（そう言うなって。あれしか無かったんだ。俺がドジってたからな。てか、ほらって？』

ほらって言われても、こっちからはお前ら見えなただけだな。

『……ZZZ』

前言撤回。姿はわからないけど、状況は理解した。

（そうだなあ。ユニコーンには結構無理をさせたな。お前も休んでいいんだぞ？ユニコーンは無理だけど、白式の簡易なメンテナンスならしとく）

『あゝ、じゃあお願いするね。足の部分を特にしっかりやってほしいな。誰かさんが酷使したから』

いやマジで悪かったって。

(へいへい、お前こそ、人使いが荒い事で)

『いいじゃない。もうずっと、一緒に戦ってきたんだし』

(…そうだな。これからも頼むぞ相棒)

まだまだお前を酷使する予定なんだからな。

『そういえば一夏、結構距離があったし私も寝てたから微かにだけど、遠くからこっちを見てた奴がいるよ』

(何!? 誰か分かるか?)

不味い、さっきよりもっと不味い。人によっては…消さなくちゃいけなくなる。

『ごめん、ちょっと遠すぎて、見えなかった…』

（そうか、いやいい。それがわかっただけでも十分か）

まさか奴らが…。早急に報告しないと…

俺は足早に自室に戻った。

（side out）

（side セシリア・オルコット）

他の部屋とは全てが違う。天幕付きのベッドがある部屋、ベッドの傍には、場違いな寝袋が1つ。現在の部屋の主であるセシリアにスペースを奪われた被害者のものである。その部屋のシャワールームでは、セシリア・オルコットがシャワーを

浴びていた。

（一体あれは何だったんですの？）

自分の意中の相手が突然、あの角付きの白いISを纏った。かと思えば、瞬く間に黒い所属不明機を倒し、学園の教員部隊に囲まれた。

（わたくしは、遠距離からの観察だけに徹して正解だったかもしれません…もしあんなのが…）

想像するだけで恐ろしい。あれが無人機で無ければ、きっと、中の人は死んでいた。そう言う点では楽観的に見える。問題は、ISに乗り始めてまだ数ヶ月の人間がああ超人じみた動きをし無人機を倒した事。そして…2つ目の専用機を所持している事だ。

（一夏さんはいったい、何者なんでしょう。でも、そのあと一夏さんを抱えた

あのISが動いていましたし…織斑先生には報告内容を絞りましたがなんだか今になって正解な気がしてきましたわ。本人に直接聞くのもありですけど、触れたら不味い話な気がします…)

この時のセシリアにとって一番良かった事は、見たことをそのまま織斑先生に報告しなかったことだろう。もしそんなことをしていれば、命があったかも知れない。

(英国貴族としてのプライドを忘れたわけではありませんが、わたくしはまだ、死にたくありませんわ)

セシリアの知らぬところで、命が助かった。

side out

side 一夏

「はい、はい接触到成功。交渉にも応じてもらいました。え？ああ、ちょっと一悶着ありましたが大丈夫ですよ。あるとすれば、俺の事を当分見張っていた何者かがいた事です」

『む、お前の言う奴らか？』

「いえ、私の知っている奴らは気づかれるような事はしなと思います。今のところ織斑千冬にも伝わっている感じはありませんし、大丈夫でしょう」

『そうか、まあ警戒はしておけ。ではまた任務があれば追って伝える。ではな』
「ハッ！」

報告が終わり、することがなくなった。部屋ですることがないっていうのもなかなか平和なもんだな。あ、明日鈴の見舞いに行かないと…。

コンコン

部屋の扉を叩く音がする。

「どなたですか？」

「あたしよ、一夏」

鈴の声だ。

「ああ、開けてるから入っていいぞ」

「じゃあ遠慮なく、失礼するわね」

いつもの制服姿で入ってきた鈴だが、その見た目には傷などは見当たらない。よかった。

「鈴、体は大丈夫か？セシリアに渡した時は傷とか見えなかったが……」

「大丈夫よ、そんな柔な鍛え方してないから。代表候補生舐めないでよね。……アンタこそ大丈夫なの？あ、座らせてもらおうわ」

そう言って俺のベッド、俺の横に腰掛ける鈴。心なしか距離が近い。

「俺も問題ないな。運が良かったらしい」

「そう、流石ね一夏。あたしも気絶してなかったらなあ。結局試合もあやふやだし」
「お互い無事なんだからそれでいいじゃねえか。こっちだってヒヤヒヤしたぞ。お前を抱えてんのにあの野郎御構い無しにビームなんか撃ってきやがって…」
それに関しては嘘偽りのない本音だ。まあ、胸がない分被弾面積も少ないってことだな。

「なんか失礼なこと考えたでしょ？」

「いやいや全く」

「…まああたしが傷物になったら、一夏に責任とってもらうだけなんだから」

責任ねえ…ん!?

「は!?! どういうこと?..」

「言葉通りよ。全く、何度も言わせないでよね。…一夏、あの時言ったじゃない。
【俺には、鈴を守る力がない】って。でも、今はどう? 試合の勝敗はついてないけ

ど。あの時あたしは完全にISが解除されてた。つまりはあたしの負けよ。悔しいけどね」

だから…何だっというんだ…

「代表候補生の、しかもあたしを倒すほど力をつけた一夏なら…私を守ってくれる？」

…可愛いな鈴。なんかちょっとあざとくなった気がする。

「そういう言い方はちょっと卑怯だろ」

「こんな言い方しないと一夏は捕まらないわ。言ったでしょ？あたしほどのいい女振ったこと、後悔させてあげるって」

ハハハ、全く。あの鈴に負けないほど、お前もいい女だな。本当に、俺にはもっ

たいたい女だよ。

「…え、一夏？」

気がつく俺は泣いていた。

「ホントに…ずるいなあ。そんなに言われたら、受け入れたくなっちゃう」

「え？じゃ、じゃあ？」

「でも、ごめんな。後…後、1年待ってくれないか？それまでには、俺は全て、終わらせるから」

今すぐに、NOって言えない俺は、私情に流されるような俺は、本当に弱くなった。まだ、1回目。目の前に見えることで精一杯だった俺の方が、よっぽど強かった。

「……」

「ごめんなあ、今すぐに答えが出せない弱い俺で。こんなんじゃ、鈴に失望される

な。すまん少し風に当たってくる」

部屋を出ようとした俺に、抱きつくような感触。

「バカ！本当に、バカ：人間誰だって、泣きたい時くらいあるわよ！そんなことで失望するほど、あたしの気持ちは浅くないわ！一夏が何を抱えてるか、あたしは理解してあげられないけど、それでもこうやって側にいてあげることとは出来る！1年？そんな短くなくても、何年でも待ってやるわ！」

…ごめんな、鈴。そして…ありがとう。

「ありがとう、鈴。本当に、本当に。だからさ、ごめん
トンッ

「え…いち…か…」

ちゃんと気絶したらしい。さて、部屋に送らないとな。

『本当にそれで良かったの？』

（白式か、良いんだよ。そうじゃないと、そうじゃないと俺は…いや、なんでもない）

『…一夏がいいなら、良いんだけど…今の一夏、凄い辛そうだよ』

言わないでくれ。分かってるから、だから、聞きたくないんだ。

「すまん、鈴を送ったら、俺はもう寝る。この顔じゃあ、もう人には見せられんからな」

そして俺は鈴を部屋まで運んで、同室のティナ・ハミルトンに遊び疲れて寝たって説明して鈴を引き取ってもらった。

それで部屋に戻った俺は速攻寝ることにした。

じゃあ、お休み。

まずいですよ！ 鈴さんメインヒロインルート突っ切っちゃってますよ！…どう
しましうこれ…

俺の望む未来のために

そうだ、倉持に行こう！

最近は、興が乗っててめっちゃかけるんですよ。

鈴と話をした翌日。学校は休みになった。おそらく昨日の事件のあと処理なんだろう。まあゴーレムのパーツはほとんど回収したし学園側にできることといえば破壊されたアリーナの修復程度。俺が出来る事もないだろう。今日は金曜日だから、実質3連休だ。

まあ今日はユニコーンの整備を頼みに倉持技研に行くんだけど。ほとんど動かしてないとはいえ、コア人格に無理やり機体を動かさせたんだ。何か問題が見受けられてもおかしくない。

グウ…

…とりあえずは飯だ。学園が休みでも寮の食堂は空いている。俺は教員寮に住んでるから少し歩かないといけないんだけどな。そう考えたら昨日鈴はよくここまで来たな。途中には姉さんの部屋もあるのに。服は…制服でいいか。問題は女子の格好なんだよなあ。俺がいるのを理解していないのかやたら部屋着やらラフな格好で歩き回っていたりする。今となっては、俺は別にどうも思わないがそれで被害を被るのは結局俺なんだから気をつけてほしい。

「あ、織斑くん。おはようございます」

部屋から出ると、スーツ姿で少しクマが見える山田先生。後処理ホントにお疲れ様です。

「おはようございます山田先生これから仕事ですか？」

「ええ、でもその前に織斑くんにお話があるんです」

話？事情聴取は終わったし、守秘義務も守ると姉さんに言ったし、なんかあったか？

「話？何ですか？」

「引っ越しです」

は？

「は？」

「実は、今度入ってくる転校生がちょっと特殊な事情があつて、政府の方から織班くんと相部屋にしろと言われまして…何で、部屋は生徒寮の方に移動。2人部屋です。あ、これその部屋の鍵です」

チャリン…と渡された俺の新しい部屋の鍵。てか転校生？シャルやラウラはも

うちちょっと先だと思うんだが…

「部屋の移動は別にいいんですけど…転校生って言っても女子でしょう？男女を相部屋にするのは問題があるんじゃないですか？」

「私も話を聞いた時はそう思ったんですが…織斑くんなら大丈夫そうですね。ただ他生徒には言わないでくださいね。実は、新しい男性操縦者が来るんです。だから…」

はいシャル決定。

「俺の部屋では2人部屋に入って小さいし、他に空いている場所といえど生徒寮。しかも貴重である男を隔離するには相部屋にするべき、と…」

「え、ええ。大まかにはその通りです。だから、処理するのに大分時間がかかりまして…ちょっと寝不足です」

あ、目元のクマってそっちなのか。山田先生にはホント頭が上がない。姉さんの世話もしてもらってるし…

「お疲れ様です。とりあえず、話はわかりました。もう今から移動しても大丈夫ですか？」

「今からですか？大丈夫ですよ。でも、織斑くん朝ごはんはいいんですか？今からやっていると間に合いませんけど…」

飯はどこかで買ってもいいいいでしょ。俺の腹が許してくればだけど。

「今日はずっとISの整備をお願いしに倉持技研に行く予定でしたし、大丈夫ですよ。飯はどこでも買えますから。それに食堂は今女子で溢れてますし、格好が大分ラフなんで行ったらいわれのない誤解を受けます」

「ああ…確かにそうですね。そうだ、女子生徒に織斑くんが引っ越しすること伝えないと。私や織斑先生も言ってるんですけど治らないんですよね。困ったもので

す」

まあ、仕方ないよなあ。

「あ！もう行かないと。それでは織斑くん。引っ越しお願いしますね」

「分かりました。それじゃあ…」

山田先生は小走りで行ってしまった。揺れるモノが眼福です。ありがとうございます。

「さて、やるか」

といっても、荷物といえは大きめの鞆に入れてる着替え、ラノベ、漫画、DVD、パソコン、生活必需品くらいだから、一括で持っていけるな。無理そうだったらユニコーンに量子変換して入れればいい。使い方が雑でスマン。

10分くらいで荷造りを終え、移動する。途中クラスメイトに出会ったが、事情を説明し、他の生徒たちに話を広めてもらった。格好は普通の服でした。残念ではない、断じて違う。

「えっと…この部屋だよな？」

部屋番号はあっているからここだ。昔の苦い経験と痴女に気をつけなくては…

コンコン…

いなさそうだ。入るか。

「監視カメラと盗聴器は…は？ないだど？まさか更識にはまだ話が通っていない？嘘だろ…」

ユニコーンでも調べたが反応なし、万が一を考えて、自分でも探すが特に見つか

らない。

「……学園のこと更識に任せて大丈夫なのか？ いや、今代の楯無はあの通り、楯無としては良くないしな。はあ……これなら学園の警備は亡国に依頼した方がいいと思うぜ 轡木さん」

愚痴？を叩きながら荷ほどきをする。筆筒は2つあるからシャルと間違えることもない。男子として入って来るといえど、そういうのには敏感なお年頃な女子には特に気をつけなければいけない。

「あ、ラノベとか漫画とかどこに置こうか……」

本棚と言える場所は机に上の教科書を置く場所くらいしかない。そう考えると簪はどこに本類を置いてたんだらうか……

まさか……電子書籍か……？

仕方ない。筆筒を詰めて服は２段に収めよう。いやダンボールに詰めて置けばいいか？

「１時間くらい荷ほどきで悩んだので割愛」

「ふう…こんなもんか。ん、もう朝飯は無理か。道中コンビニくらいあるだろ」

まずはあらかじめ取っておいた外出届け（外泊届け）を提出しに行く。姉さんなら忙しくはないだろうと思いつながら職員室へ。

「失礼します。１年１組の織斑です。織斑先生少し良いですか？」

やっぱりいた。コーヒー飲んでる。

「ん？織斑か。どうした？」

「昨日のアレでISが壊れてないか心配なので、制作元の倉持に行こうと思うのですがどのくらいかかるかわからないので一応外泊届けも出しにきました」

「整備課の話では白式のダメージレベルはそこまで悪くないと聞いているが？」

俺はその話聞いてないんだけど？

「こういったら整備課の人たちに悪いんですが、この機体他とは違うじゃないですか。やっぱりこういうのは専門の人達に診てもらう方がいいです」

「一理あるな。わかった、外泊を許可しよう。ただ、お前は世界唯一の男性操縦者だ。その点はくれぐれも気をつけろよ、一夏」

お、名前呼びだ。珍しい、仕事中に。…ああ、なるほど。

「ありがとうございます。…部屋に酒おいたから今日はあるだけは飲んでいいぞ姉さん」

「本当か!？」

うお!? 焦った。他の先生がこっち見てるぞ。

「あ、ああ。でも山田先生も誘ってやれよ。なんかお疲れの様子だったから」
「確かに最近の山田くんは忙しそうだったな。わかった。誘っておこう」

酒が絡むと公私混同関係ないのかねえ……

「それでは行ってきます。織斑先生」

「ああ、気をつけてな」

姉さんに挨拶をして、俺は一旦部屋に戻って荷物を持つ。外泊の事はすでにボスには報告済みだし、レイさんや篝火さん達倉持にも伝えてある。とっとと行こう。

「む、一夏か、今用がなければ剣道に付き合ってくれないか？部活の先輩方は忙しそうだからな」

「ああ箒か。スマン、今からISのメンテナンスで制作元に行かないといけないんだ。剣道は今度でいいか？」

俺が廊下を歩いていると、自主トレをしていたであろう、箒が俺に話しかけてきた。

「昨日のアレか。いやこっちこそ、無理を言って悪かった。じゃあまた、一夏」
「ああ、またな」

気のせいかな？箒がちよっと丸くなったように感じたんだけど：あ、そういやこの時期は俺とのISの訓練でろくに部活に顔を出していなかったんだ。てことは：俺と練習してない分箒にも時間ができて、他人との交流時間が増えたのか！お

お、箒が成長してくれて、一夏さん嬉しいよ。

「この状態が1回目からだったらホントに良かったのにな」

今となつては照れ隠しやら嫉妬やらだとわかっているから、案外可愛いもんだと思う。まあ、痛いものは痛かったんだけど…

少し歩いて駅に到着。まだ時間があるから、コンビニに行く。

「さて、弁当は…食う時間ないよなあ。仕方ない、サンドイッチでも買うか」

サンドイッチかあ…サンドイッチ…う、頭が…

…俺はなぜここでセシリアのアレを思い出してしまったのだろうか。いや待て、アレはサンドイッチの皮を被った劇物だ。うん。

「織斑…一夏？」

ん？この声は…？

声がかけられた方を見てみると懐かしい青色の髪で、眼鏡型のディスプレイをか
けた少女。ちなみに手には一〇くじが握られている。少し視線を上げればもうクジ
がなくなっているためおそらく、ラスト〇ン賞だろう。俺ももうちょっとくるのが
早ければ…

「更識簪さんか」

「っ…苗字で呼ばないで。そう呼ばれるの、嫌いだから」

…この子も更識の被害者だったな。

「おっと、スマン。…いきなり名前呼びは良くないしな。まあ2人しかないし
呼ばなくてもわかるか」

「…まあそれでいい。じゃあ私買うものあるから」

そんなに一〇クジが欲しいか……。うん、俺も欲しい。ラス〇ワン賞。でも今は：

「買ったらず少し話してもいいか？ 話がある」

「私は無い、とは言わない。わかった」

く少し経ってく

「おまたせ。それで話って？」

「本当に済まなかった！ 俺の白式を作ったせいで、君のISが遅れてしまった。なにか、償いをさせて欲しい」

1 回目はなにも聞かされなかったし、今回はレイさんもいるから自分で作らないといけないということはない。けど、これは俺のせいだ。

「別に気にして無い。たしかに、貴方のISが優先されたのはちょっとと思うところが

あるけど、今もしっかり作ってもらっているから。償いなんていらぬ。…ISさ
えあれば、あの人も」

「そうか。本当に済まない」

やっぱり、姉に対するコンプレックスは健在か…なんとかしてやりたい気持ちはあるが、どうしようか…

「でもやっぱりちよつと腹がたつから、一発殴らせて」

「へ？ いやあのちよ…」

トスツ…

「これでいい。じゃあ、さよなら」

めっちゃ弱めのストレート。思ったより織斑一夏への恨みはなかったらしい。簪

は手に先ほど貰ったと思われるフィギュアを持っている。てかあれ…

「ユニコーンガンダム（NTD）じゃないか」

『…私？』

（ああ、ごめんユニコーン。お前のことじゃ無いんだ）

俺がユニコーン乗って、破壊活動しまくってた事は民間には報道されてないんだな。

「俺も行くか。てか後、5分しか無いじゃねえか」

そんなことを言いながら、俺は駅に急いだ。

飯を買ってないことを完全に忘れて…

They are strangers (奴らは変態)

篠ノ之東と篝火ヒカルノの口調が難しい…喋り方に違和感があるかもしれないがご了承ください。

「で？どうしてここにいるの？」

突然の一言でみんなも驚いているかもしれないが大丈夫だ。俺も分かる…
割愛

「俺はISのメンテナンスをしてもらいに行くんだけど、そっちももしかして？」

予定の駅で降りて倉持へ行こうした俺だったが、改札を出たところで、さっき会った簪に遭遇。この駅で降りるんだったら多分目的地も同じだろう。

「私はISのテスト。今回のテストをクリアしたら、完成する」

「目的地が同じなら、一緒に行かないか？まあ、君がよければだけど」

てか、一緒に行くしか無いだろ。

「…分かった。それと、簪でいい。君とか、ちょっと変な感じするから」

「じゃあ俺のことも一夏でいい。そういえばさ、簪さんが持ってるの、ユニコーンのラストワン賞だよな？」

ギラリッ、と簪さんの目が鋭くなった気がする。

「一夏ってガンダム見るの!?好きな作品は！機体は、キャラは!!」

すごい、剣幕だ。やっぱ、簪は簪だな。1回目の時、しっかり仕込まれたから

今なら趣味という点ではめっちゃ気があう気がする。後、気づいたら俺の漫画やら読んでた鈴もだけど。

「あ、ああ。とりあえず離れて。近い近い」

「え？ キャア！ ご、ごめんなさい…」

顔の赤くなった簪…やばい可愛いな。1回目の時はなんで俺は気づけなかったんだろうか、【好き】と言われたことを、アニメが好きって勘違いしたことを。

「ああ、大丈夫だ。見てない作品も多いんだが、俺は広く好きだからな。好きな機体もキャラも作品ごとにいるんだ」

「私はガンダム作品は全部見たし漫画とか小説とかも全部読んだけど一夏と同じかな。まあ強いて言うなら…」

「ここからは熱いアニメトークが倉持に着くまで延々と続いたので、わからない

読者の方もいると思うので割愛

「お、ついたな。ありがとうな簪さん。とても楽しい時間だった」

「ふふ、一夏とは良い友達になれそうだよ」

お、最初より明るくなったな。この時間ちょっとは楯無の事を忘れられたなら良いんだけど……

「1組の女子の大半が分かるだろうし、関わりやすくなるので言ったら2組の中国代表候補生の鳳鈴音とかもいるからさ。いつでも来たら良い」

最初の自己紹介で【そこに痺れる】のネタを使った奴らは大体いけるだろ。……ク
ラスの3分の2はいたから。

「1組って、同士の巣窟？もしかしたら4組にも多いのかな？」

巣窟って…

「そういや、簪さんは倉持にどのくらいいるんだ？」

「一応、日曜までは泊まるつもり。テストがうまく行くとはい限らないし」

同じ日程だったか。これはまた偶然だな。

「俺も日曜まではいるから…手伝いがいるんだって言うてくれ。その時空いてるかとはわからないけどな」

「うん、分かった。それじゃあ私行くね。またね、一夏」

「おう、じゃあな」

行ったか。さてと、さっきから寒気がするのとはなぜかなあ！？多分あの草むらなんだけど、少し見えてる外側に跳ねてる青い癖毛。楯無い…

アンタどうせ仕事サボって簪のストーカーという名の護衛してたんだろ…虚さん泣くぞコラ。大方簪と仲良くしてる男が気に入らないから、OHANASIしようとしたら俺で、どうしたらいいかわからないからこっち睨んでるってとこか…「さてと、たしか虚さんの番号は…これだよな。使い捨ての番号と匿名で、あの癖毛の写真を撮ってと」

SO ☆U ☆SHI ☆N

多分これで数分後にはハンター虚が獲物を狩るだろうから、気にせず入るか。

「アポイントメントはありますでしょうか？」

ん？この人Phantom corporationの受付の人じゃなかったっけ？

「これを」

俺はユニコーンのドッグタグを見せる。

「拝見いたします。：失礼いたしました。こちらへどうぞ、案内いたします」

ちょっと冷や汗が見える。俺そんなにやばい存在みたいに思われてんの？

「ここです。奥の扉にお入りください。では私はこれで：」

「ええ、ありがとうございます」

「勿体無いお言葉」

そういうのはもっと幹部に言うべき言葉だと思うんですが：まあいいや。

俺は扉を開ける。

「やあやあ待っていたよ！くくん！久しぶりだね！みんなのアイドル、束さんだよ！」

「助けてくれ…兄さん…」

……気のせいだな。

一回扉を閉めてしまったが、現実だったらどうしようか。レイさん、篝火さんはまだわかる。でも俺には天災が俺の親愛なる妹を抱いてこっちに話しかけて来たように見えたがきつと、きつと気のせいだろう。

もう一回開けるか。

「もういっくん、酷いじゃないか！突然閉めるなんて、束さん悲しいよ！」

「篠ノ之束…離せ…」

こんなにも直視しづらい現実もなかなか無いと思う…受け止めたくないなあ…
「お、お久しぶりです束さん…まだ、招待の日には早いと思うんですけど？」
「面白そうなのがあるのに、束さんが耐えられるとでも思ったのかい？いっくんがここに来るのは、新しい部屋に設置した盗聴器で知ってたからね」

ああ…やけに静かだと思ったわ…そりゃあ、天下の束製なら見つからなくても仕方ない。

「そうですか…とりあえず、マドカを離してもらってもいいですか？嫌がってますし…」

「むう。他ならぬいっくんの頼みだし、仕方ないなあ。抱き心地良かったのに」

ぬいぐるみじゃないんだから…

「ハア…ハア…兄さんありがとう。助かった」

「おつかれマドカ」

目に見えて顔色が悪い。よっぱど嫌だったんだろう。

「あゝ…ちょっとボスに連絡するんで待ってもらっていいですか？てか、レイさんも黙ってないでちゃんと saying てくださいよ…」

「ボスへの連絡は私がしておいたから大丈夫。ボスから好きにさせてやれって言われてたしさ」

…ボスが言ったんなら仕方ない。スマンなマドカ。お兄ちゃんは権力が一番怖いよ…

「そうなんですか。他には？」

「ついだからここでこの前の招待の内容も話してこい、だってさ。全く、私はこういうこと向いてないんだけどなあ」

いや、そのノリがあつたら大丈夫でしょう。

「今ですか。モノクローム・アバターのメンバーいない…俺とマドカがいたら十分でしたね。まあ、喋るのは基本俺がやりますしその方が束さんも聞いてくれるでしょう。ですよね、束さん？」

「んゝまあ内容によるよねゝ。私今1人じゃないし」

「ああ、クロエ・クロニクルですか？ 遺伝子強化試験体の1人の」

その時、束さんの目が細くなった。

「なんで知ってるの？ 流石のいっくんでも、内容によっては…」

「クロエ・クロニクルはちゃんと愛されてていいですね。言っただしょう？ 俺はアンタが思ってるほど弱くないし、俺は…」

少し言いにくいんだけど…

「真っ当な人間の粹からは外れてるんだから」

「へえ… 知ってたの。この事、ちーちゃんは？」

少し感心したような束さん。

「知らないですよ。表向き、俺は束さんの思惑通り動いてたんだから。偶々試験会

場で迷って、偶々ISを動かした、不幸な青年なんでね」

「ほほう。なかなかやるじゃないかいっくん。ちーちゃんでもまだたどり着いてないのに」

「まあ、俺だけの力じゃないんで。それより、そこで空気になってる篝火さんはどうしたんですか？」

「空気って、酷いじゃないか織斑一夏君。一応白式を作ったのは私たちなのに。それに私はここの所長だよ？ いてもおかしくはないさ」

ちよつと哀愁漂ってるのは気のせいだな。

「まあ白式については感謝してますけど、第三世代型ではないですよ？ イメージ・インターフェイスを使った武装もないですし、『零落白夜』は燃費が悪いのに

後付武装には実弾銃も入らない。第三世代型相応なのは機体性能だけ。白式に文句言われても仕方ないレベルですよ?」

「くっ…なかなか言うじゃないか。仕方ないだろう? 政府からのお達しだ。織斑千冬弟にはそれ相応の機体を用意しろって言われたんだから」

また、弟…か

「…レイさん、ちょっと日本政府潰してきていいですか? 久々にキレちゃったよ…」
「ちょ!?! マジでやめてって! わかるけど、君の言いたいことはわかるけど!」

こんなに焦るレイさんを見るのも2回目だな。ちなみに1回目は、サイコミュ・ジャックした無線の兵器を構えて追いかけてこした時だ。

「流石に冗談ですよ。俺もそこまでバカじゃありません」

「君の実力なら本当にやりかねないから…やめてくれよ…」

「ムムム、いっくんそんなに強いのか？」

突然の束さん。やっぱ篝火さん空気…

「篠ノ之博士、2年ほど前から減ってる違法研究所。それを消しているのはほとんど一夏君ですよ」

「へえ、うざったらしかったあいつらのほとんどをね。流石いっくん！後レーちゃんの機体！」

「いや、あの篠ノ之博士にお褒めの言葉をいただけるなんて、しかもまさかロマンを同じくする同士だとは！後ほどゆっくり語り合いましょう！」

へ？この2人仲良いのか？…これが世紀末か。まさかとは思うが…

「私も混ぜてくれよ。そう言うのは得意なんだ！」

「お？じゃあひーちゃんも同士！楽しいことになりそうだね！」

ダメだ。変態は変態を呼ぶらしい…これは俺が交渉するまでもなさそう…

「東さんが俺等以外に興味関心を持てるようになったのは嬉しいですけど、その…本題いいですか？」

変態開発者3人がワイワイやってる所に俺は問いかける。

「ん？あゝそうだったそうだった。なんだっけ？」

「我々、亡国機業に協力してほしい。報酬は、衣食住、安全、設備。そして…俺の体だ」

天災は忘れた頃にやってくる

「我々、亡国機業に協力してほしい。報酬は、衣食住、安全、設備。そして…俺の体だ」

「いいよ！じゃあこれからよろしくね！」

「軽!？」

俺結構勇気出して言っただけ…

「ちょっと一夏君！君の体も報酬に含まれているなんて、私聞いてないんだけど!？」

「私も聞いてないんだけど…兄さん？」

レイさんとマドカがすごい顔でこっちを見ている。マドカ、素が出てる。

「いや、今言ったし。篠ノ之束と俺の価値を比べたら妥当っていうか足りないんだけど…」

「いやいや、いっくん！君もうちょっと自己評価高くていいと思うよ」

え、なんで？

「ていうか束さん、いいんですか？率直に言ってウチって闇組織ですよ？」

「うーん。提示された条件はありがたいし、気の合いそうなものもあるし…何より面白そう！」

「そうですか、じゃあ…」

勝ったわ。今じゃなくても後々、束さんは入るし。今引き入れたんだったら多分、ゴーレム襲撃系と『銀の福音』も大丈夫だろう。

「でも、一個だけ条件がある」

「何ですか？」

「協力、じゃなくて亡国機業に就職するよ！」

「「「……？……！！？！？！？」」」」

その時、俺に衝撃が走った。

「た、東さんが…就職…？嘘だろ…そんなことは東さんが家事ができるようになることくらいありえないと思っていたのに！こ、これは姉さんに報告？いや、待て、今は亡国。ダメだな………フフフフ、ボス…助けてください」

「ちょっと！みんなして酷くない!!特にいっくん！たしかに東さんはそういうことは一切できないし、クーちゃんに任せてるから覚える気は無いけども、なんか酷くない!!後、いっくん帰ってきて!!」

数分後

「ええと、分かりました、篠ノ之博士。詳細は追ってお伝えしますが、おそらくボスとの面接は免れないでしょう」

「さっきのアレが嘘みたいにな…解せぬ。ていうかいっくんその喋り方無理してるよね？顔が引きつってるよ」

「今は仕事なんです。当たり前でしょう？束さんにはわからないと思いますが」
全く、これだから天災ニートは。

「いっくんがスツと毒吐いてくる…」

「ただ、ホントにこれだけはお願ひしたいんですが、ボスには敬語使ってくださいよ？」

「敬…語…？いっくん。ソレ本気で言ってる？」

束さんがありえないような顔でこちらを見ている。アンタにとって一番無理な言

葉だな。

「もちろんですよ。束さん、社会に出るにはそれ相応の態度が必要です。それがたとえ表に出ない組織でも、です」

「…グハア!? いっくんが…いっくんが私より大人だ…」

「バカなこと言っていないで、面接までに練習してくださいね。俺はもう行きますから。ら、レイさん。ユニコーンの整備お願いします。俺は白式直してくるんで」

「ああ、任されたよ。ついでにドリルでもつけるか…」

バチィ!!

「あ、最近ユニコーンの自我と話せるようになったんで、下手なことしないほうがいいですよ。俺の塗装とか剥がされましたし」

「そういうことは早く言って欲しかったよ…今、電撃食らった」

ユニコーン過激になったな。お兄ちゃん悲しいよ。

「変なことしようとするからですよ。じゃあ、頼みましたよ」

「いっくん、白式なら私が直すよ？ なんとたって白式は…」

「東さんが作ったんですね？ わかってますよ」

「むむ、だったら余計にでも私が」

（白式、どっちにしてもらいたいか、ディスプレイに出してくれ

「いっくん何言ってるの？」

おっと声に出てたか。

「東さんあれみてください」

「あれ？」

俺が指差した先には『母様には悪いけど、一夏にしてほしいです。白騎士も同意見です。by 白式』と書かれた文字。

「……………」

「ね？白式もういいぞ」

すつと、文字が消える。

「いっくん…いつのまにコアと会話できるようになったの？」

「白式に出会った時に。あ、こいつのコアが白騎士っていうのも知ってますよ。自我はまだいますし、マスターは俺だと認めてもらいました」

嘘偽りのない言葉、ただ今回。2回目っていうのは伏せる。

「いっくんがなんでコアと喋れるのか知らないけど、なんか…娘を取られた気分…」
「だいたいあってるんじゃないですか？でも、その娘を俺のところに送り出したのは他ならぬ束さんです。娘の成長を喜ぶべきでは？」

クロエ・クロニクルもね。

「…そう…だね。親の知らないところで、娘は成長するんだね。いっくん、ありがとう！」

「いえいえ、逆に俺からありがとうございます。白式と出会えてよかったです。それじゃあ、俺は行きます」

「あ、行つてらっしゃい」

そうして俺は整備課に向かう。束さん、ちょっと泣いてたな…1回目の束さんもあれだけ楽に話せたら良かったのにな。

（それにしても白式、俺で良かったのか？専門家に見てもらったほうが良かったんじゃないか？」

『えへへ。出会えて良かった。だって、白騎士』

『はいはい、良かったですね。それより、マスターが呼んでますよ』

…白騎士がすっかりお姉さんしてる件について。

『ん？ああ、私は今回は一夏がいいよ。なんせ初めてだし、今の状態の母様がやったら、絶対なんか弄りそうだし』

（そうか。…いつもありがとな。これからもしっかり酷使するから、頑張ろうな！）

『な!?一夏の笑顔がすごい黒い!』

『それがもとの私たちの役目でしょう?全く…』

白騎士も苦勞してんなあ…

そんな会話をしているうちに整備課についた。俺はあらかじめ持っているカードで扉を開ける。

「お仕事中失礼します。織斑一夏です」

「「…!?」」

中にいた数人がこちらに気づいて駆け寄ってくる。なんだなんだ、そんなに慌てて。

「「ようこそ、S様！お待ちしております！」」

「……………は？」

誰こいつら？なんで名前知ってるの？ほかの人たちもこっちに気づいて敬礼してるし。え、マジで何？

「あの、俺のコードネーム知っているのはまあいいです。でもなんでこんなに歓迎されているんですか？」

「何を仰いますか！経営難に陥りかけていた我々を、亡国の傘下に入ることですくってくださいしたのは、他ならぬS様ではありませんか」

…は？経営難とか初耳なんですけど、しかも救った？いや、技術がそこそこ良かったからボスに提案したただけなんだけど…

「いや一切そんなつもりはなかったんですけど…」

「それでも我々はS様のおかげでこうやって研究ができています！本当に、ありがとうございます！」

「『ありがとうございます！』」

「え…ええ、はい。どういたしまして？」

俺への信頼が厚くて逆に苦しい。隊の下っ端もここまできっちりしてないのに…
「ていうか、Sって呼ぶのやめてもらえませんか？今は、更識簪も来ているんです。よりによって彼女は更識なんですから、余計に気をつけてください。普通に一夏でいいですから」

「申し訳ありません。配慮が足りませんでした。それで、本日は何用で？」

おおっと、忘れるとこだった。

「整備課の施設を貸して欲しいんです。白式のメンテナンスをするんで。ちゃんとできるので大丈夫です。なんならそこら辺の人より十分にできます」

「分かりました。我々にも出来ることがあれば言ってください」

まあないと思うけど、特にダメージもないし、軽いメンテで済む。

「ありがとうございます。でも、更識簪のISを優先させてください。まだ完成してないんです。不具合があったら、楯無に潰されますよ」

「それは…勘弁いただきたいですね。分かりました。総動員して更識簪のISを完成させます」

そして、整備課の奴らは去っていった。

「やっと行ったか。さて、じゃあ白式。検診とマッサージの時間だ」

静かな蝶の目覚め

それから数時間、俺は白式のメンテナンスをした。やはりというべきか、スラスターの不具合が若干あった。まあ、少し強かったゴーレム相手に白式の性能ではよく頑張ったと言えるが、無茶な使い方したからな。

『IS使いが荒いね、一夏』

「当たり前だ。俺の相棒はこれくらいでくたばったりしないからな」

『もちろん！あ、それでさ。一夏は二次移行いつしたい？』

いつって…え？

「それは白式のタイミング次第だろ？」

『うん？一夏決めていいよ。なんなら今からでもするけど？』

ええ…軽いな。一応、二次移行って世界でも発現したの2桁もないはずなんだけど…

『それは、私達からの呼びかけに操縦者が気づかないからだよ。コアによっては、専用機として初めて乗られた時に気に入って、二次移行のアプローチかけてる子もいるんだから』

「二次移行って恋愛でしたっけ？ちなみにそのコアは？」

『えっと…確か…あ、銀の福音って名付けられてるね！』

ナターシャさんか。まああの方は、ISを我が子のように扱っているからな。そりゃあ、福音も懐く。

「ふーん。じゃあ、コアからの声に気づくにはどうすんの？」

『知らない』

「え？」

『私達は呼びかけるだけ。それに気づくかどうかは、人間次第だよ』

あー…

「そうか…人間はISを道具か、兵器として見てるからな。まさか声があるなんて思わないんだろう。かく言う自分も最初はそうだったし」

『まあそんな感じだね。で、どうする？』

「今はいいよ。早すぎるし、今の性能で困ってない。機体はもうちょっと頑丈にしたいけど…」

俺の5割くらいの力出したら多分装甲が逝くんだよなあ…

『二次移行するときは、頑張ってみるよ…』

「ああ、マジで頼む。死活問題だから。じゃあ、メンテナンス終わるからな。どうだ、普通に声を出す気分は？」

『いや／＼やっぱり良いね！人目を気にせず話せるし、わざわざ、こっちに意識を持ってくる必要もないし』

持ってくるって表現どうかと思いますよ？

「ならよかった。白騎士は？」

『白騎士は、表に出て万が一バレたらいけないので、だって』

「白騎士らしいな。まあ、白式やユニコーンもいるし退屈はしないだろ」

P I P I …

む、着信？誰からだ？

「はい、もしもし」

『あ、一夏？簪です。今大丈夫？』

簪さんか。そういえば名前を登録してなかったな。あとでしておかないと。

「今、ISの整備終わったから大丈夫だぞ」

『よかった。これから一緒に夜ご飯食べない？私もISが完成して、あとは2日かけてのテストだけなの』

お、ついに完成したのか、打鉄式。1回目は俺と簪、あと楯無生徒会長の3人で作ったからな。マルチロックシステムはちゃんと搭載されてるだろうか。俺が不用意に歴史を変えたせいで、簪さんにまで影響がないだろうか？

『……一夏？』

「…ッ、ああ。じゃあそうさせてもらおうかな。食堂集合でいいか？」

危ない、また意思が弱くなった…

『わかった。じゃあ先に行ってるね』

「じゃあまた、後で」

ふう…

「そういえば、俺簪さんと鈴以外のアドレス知らなかったな。聞かれなかったし…
まあいいか。行こう」

この後は、簪さんと夕食をとり、用意されていた部屋の備え付きのシャワーを浴びていつもと違う感触のベッドで寝た。

くイギリス、とあるIS研究所く

「ついてないな。外の警戒はスコール達に任せたのはわかるけど、潜入してるのが私だけっていうのはどうなんだろう？」

誰もいない通路を独り言を呟きながら歩いているのはイギリスの第3世代型ISサイレント・ゼフィルスの奪取の任務についている、コードネームM、織斑マドカだ。

「今頃、ほかの隊員の野郎どもは酒盛りでもしてるんだろうなあ……ああ、私も混ざりたい。さっさと終わらせて帰ろう」

本来の口調とは全く別物だが、あれはキャラである。もう一度、いや何度でも言おう。あれはキャラである。一夏と出会ってから、素を出すことが増えたのか、1人や一夏がいるときは素の口調が多くなっている。

「反応はあの扉のむこう……あとはISを待機形態にして持ち帰れば終わり。このミッ

ション意外と余裕？」

プシュー…

と、あらかじめ研究員から奪っておいたカードキーで、扉を開ける。

「おゝ、綺麗な青。さすが、名前の通り蝶みたいな形状」

Mの前にあるのは、青いカラーリングで蝶の羽のようなスラスタ―を持つ、ブルー・ティアーズ型二号機『サイレント・ゼフィルス』である。

「えっと、待機形態にするには…形状を思い浮かべるんだっけ？」

正確には違うのだが、まあここで言ってもあまり意味がない。

「あ、出来た。一応、誰でも使えるように指輪にしたけどよく考えれば指のサイズ、私の人差し指で考えてた…マズイかも」

普段は凛々しく隊員からも信頼の厚い彼女だが、本質はお兄ちゃん大好きのアホの子。オータムのことを言えないレベルだ。もちろんモノクローム・アバターの隊員達には周知の事実でありよくネタにされるが、それはマドカにいないところで行われる。誰もISにダメージを与えるようなナイフで刺されたくないのだ。

「ま、まあレイさんに任せたらなんとかなるでしょ…さうて、早く帰って開発部に渡そう！スコールに見つかる前に！うん、それがいい！」

「……………」

何をしているのだろう。それが、侵入者の知らせを受けて緊急出動してきた者の最初の感想である。名はサラ・ウェルキン。イギリスの代表候補生で、IS学園の

2年生だ。BT兵器適性が低いいため専用機は所持していないが、それを抜きにしても、ほかの代表候補生の中では実力が抜きん出ている。現在はイギリスにたまたま帰って、研究所でISのテストをしていた。学校を休みにし、サラに帰省する時間を与えた一夏様様である。

「貴女が、侵入者でいいのよね？」

「ッ!? 誰だ！」

声をかけられやっと自分以外存在に気づいたM。口調をキャラの方に戻すがもう遅いだろう。

「貴様、サラ・ウェルキンだな？今はIS学園にいるはず…なぜ？」

「たまたま休みが増えて帰って来たのよ」

まさか、この原因が自分の兄にあるとは、Mは知るわけがない。

「それより貴女、口調今更よ？さっきの現場見ちゃったし」

「なっ!? 忘れろ！ あれは、ちよつとミスをしただけで…」

痛いところをつかれたM、マスクをしているのでサラは気づかないが、顔は真っ赤である。

「さっきの方が可愛いわよ。やってることを抜きにしたらね。さて、侵入者さん、どうやってこの情報を手に入れたのか知らないけど、サイレント・ゼフィルスは返してもらおうわよ！」

そう言ってサラはラファール・リヴァイヴを展開する。装甲、武装共にカスタムのされていない一般機だ。

「ISだと…?」

「いや貴女だってあるんでしょ? こんなところにわざわざ1人で来たんだし」

そう言われたMは気まずそうに目をそらす。

「……………」

「…貴女…まさか…持って来てないの? ISを!」

ピクツ…とMの方が跳ねる。凶星のようだ。

「いやいや、そんなことあるわけじゃないでしょ? こんなところにISなんか必要ないよ。うん…決して忘れて来たわけじゃない」

「口調戻ってるわよ。あと貴女、忘れたのね…」

一応、侵入者と防衛という敵対関係なのだが、2人の間には別の意味で気まず

い雰囲気が流れる。

「ま、まあ捕縛しやすいからいいわ。敵じゃなかったら、仲良くなれそうなのね。残念だわ」

「……………」

動かないMにサラは疑問を感じる。

「抵抗は無し？ その方がいいわ。それじゃあ、獄中で会いましょう」

「……………今許可が出た」

「なんの？」

Mは仮面越しでもわかるのではないかと思うほどに笑みを浮かべる。

「私に、このISを与えてくれるそうだ。この意味、わかるな？」

「な…それでもフィッティングもパーソナライズもされてないISでまともに戦え

るわけじゃないでしょう！しかも貴女は性能も武装も把握してない」

「いや、私は知っている。私の…家族に教えてもらったからな。しかも私には適性があるらしい」

Mは先ほど待機形態にした、サイレント・ゼフィルスを取り出す。

「嘘…このISはまだどこにも公表してないはず。誰も知っているわけないわ！」

「正直なところ、私見聞いただけの話だからちょっとだけ不安がある。だから、今から試そうと思う。あの人も、出会ったばかりのISで、戦ったらしいからな」

Mは待機形態の指輪を前に突き出す。

「さあ、やろうじゃないか。サイレント・ゼフィルス！」

そしてMはゼフィルスを纏う。

「フィッティングとパーソナライズは戦いながら行えばいい。私のナノマシンも流して、生体データを送ればもっと早く終わるし。武装は…これか」

Mは主武装の一つである【スターブレイカー】を取り出す。

（マズイ。乗ったことがないとはいえ、話からIS乗りなのはわかる。第3世代機の火力をまともに受けたら、ラファールじゃ持たない…）

「へえ…エネルギー弾と実弾両方あるんだな…。じゃあ、行くぞ！サラ・ウエルキン。ISのテスト代わりだ！」

待機形態は、人間の意思では決める事は出来ず、ISによって異なりますが、一夏のようにISとの相性がいいので、自分の意思で待機形態を決めています。

決着はあっけなく

キリがいいので今回は短め。

「どうした、避けてばかりでは勝てないぞ！」

イギリス代表候補生のサラ・ウェルキンと戦闘しているMは大型のライフルである【スターブレイカー】で相手を牽制していた。

「貴女こそ、第2世代機相手にほとんど当たれてないじゃない。狙撃向いてないんじゃないの？」

「普段はラファールでアサルトばかり撃ってたからな。狙撃も経験はあるが慣れてはいないんだ」

嘘だ。Mの狙撃の腕は部隊の中でも群を抜いている。ちなみに一夏は戦闘に關してはキチガイだから数えていない。

「そう、いいことを聞いたわ！ だったらスコープばかり覗いてると、痛い目に見るわよ！」

ズドオン!!

「いつの間に!? 手榴弾なんていつ仕掛ける暇があった！」

「ならば！ 反撃のすきは与えない！」

さらに多くなるエネルギー弾。

「クッ：慣れてきてる!? 被弾が多くなってきた…」

Mは武装の感覚を掴んできたのか、サラに与えるダメージは多くなってきた。

「さて、使ってみるか。シールド・ビット！」

「なっ！本当にBT適性が…!?」

ゼフィルスから展開されたシールド・ビット2機が機体の周りを周回している。

「ッ…思ったより、くるものがあるな…短期決戦でいかせてもらう」

ゼフィルスが【スターブレイカー】を銃剣として使い肉薄する。

「武装の特性を特性まで把握されてる！マズイ、止めないと！」

サラは標準装備の一つである【ブレード・スライサー】を展開。Mと鏖迫り合

いになる。

「一次移行をしてないとはいえ、第三世代機のパワーに抵抗するか…貴様、なぜその腕で専用機が与えられない？」

「生憎と、BT適性が無かったのよ。だから、一号機のブルー・ティアーズのパイロットはセシリアになったの」

単純な戦闘能力だけでいえば、今のサラは、ラファールでセシリアに勝てる。だが、イギリスはBT兵器を主とした第三世代ISを開発しているためその適性が低いサラは不遇の扱いを受けている。

「なるほどな、これほどのIS乗りを放っておくとは、イギリスも噂に聞くほど大した上層部ではないらしいな。もったいない。実にもったいない」

「あら、今まさに敵対している相手に褒められるのも、案外悪くないわね！」

サラが一度押し返し、一度お互い距離を取る。

「むっ……すまない、通信が来た。少し待ってくれないか？」

「貴女ねえ…普通敵にそんなこと聞く？」

ちょっと顔を緩めたMと呆れた顔のサラ。先ほどまで高度な戦闘をしていた2人とは思えない。

「どうせ、相手になる奴が国家代表くらいしかいなくて退屈しているだろう？あとで存分に相手してやるからちょっと待て」

「うう…なんでわかるのよ…」

落ち込み出したサラをほっといて、Mは通信を始める。

『もしもし、M。そっちはどう？そろそろはサラ・ウェルキンは倒せたかしら？』

「すまない、思ったよりも苦戦しててな。今は落ち込んでるから問題ない」
『…ちよつと何があったかわからないけど、まあいいわ。それにしても、サラ・ウェルキン強いのね。誘ってみたら?』

スコールからのまさかの言葉に、Mが驚く。

「コイツを、か? 私はいいが、ボスや一夏は大丈夫なのか?」

『ボスからは、良い人材はどんどん勧誘しろって言われてるから良いわよ。で、M的にはどう?』

「…正直なところ、専用機があれば今の私よりも強い。イギリスでも幸いコイツの才能を持て余しているらしいしなちよつとやってみる」

「ちよ、ちよつとなんの話してるのよ? 私のこと?」

サラは何事かとMを見ているが、しっしと手を振られている始末。

『じゃ、よろしくね。勧誘が無理だったら殺して良いから。ちゃんと帰って来なさいよ。じゃないと、またアレ乗らせるわよ』

「ひっ!?! い、いや…アレはホントに…やめて。わかったから」

通信終了。Mはサラに向き直る。

「ふう、ヤバイ早く帰らないと…」

「どうしたのそんなに震えて？」

「い、いやなんでもない。それよりも話がある」

先ほどの震えた声から一新、戦闘中の真面目な声になる。

「ん？何？増援なら来ないわよ。お互いね」

「それも合っているが違う！お前、ウチに来ないか？」

「は？」

サラが女性らしくない低い声で返事をする。

「本気だぞ？というかお前にとっては好条件だ。私より強いIS乗りもいるし多分給料も高い。なんなら専用機だってここよりはチャンスがある。そしてお前たちが思ってるほど悪事はしていない。逆に私たちは違法研究所を潰してたりしてる。どうだ？」

「なにその職場。私にとって理想的なんだけど…貴女より強いって…それ誰？」

「それは、お前が正式に入ってからだな」

「むう…ケチ。でも国を裏切るのよね」

「いやいや、実力があるのに、放っておく方がおかしいでしょ！ウチならその腕、十二分に生かせる！」

「……………」

Mの素が出るほど熱い勧誘に、サラは深く考える。

「…少し考えさせてくれないかしら？ ちょっと情報量が多すぎて…」

「…いいだろう。ただし、このことを上層部には言うなよ。行った場合は…」

「場合は…？」

「ウチの最高戦力でイギリスごと、お前を殺しに行くからな？」

これまでで最も残酷な笑み。誰もこの顔が嘘を言うとは思えまい。

「わ、わかったわ」

「じゃあ、これ連絡先な。ちゃんとしまったか？」

「え、ええ。どうするの？」

「無傷だったら疑問に思われるだろう？ だから…」

すっと、隠れさせていたシールドビットのエネルギーバリアを展開させ、2つをサラを叩きつけ、挟み込む。

「キャア!!ちよつと！なにするのよ…！」

「謎の侵入者がサラ・ウェルキンを倒して逃走。機体は世代差もあり、敵の能力が未知数だったことも含まれるが、サラ・ウェルキンの失態である。代表候補生を解任させることも視野に入れなければいけない。良いだろう？ウチに来やすくなる」

「アンタねえ…!!」

「じゃあな。良い返事を期待している」

爆発。シールドビットには自爆用の爆薬が搭載されているため挟んだ敵を爆発に巻き込ませる、この方法は効果的だ。

「気絶したか。死んでは…ないね。バイバイ、また会おう。私のライバル」
青い蝶は、帰還のため、その顔に笑みを浮かべながら飛び立って行った。

スコールの言っていたアレとは。

一夏が篠ノ之束と倉持技研で出会った時、マドカは束に抱かれていた。この後、一夏が白式の整備をしている間にゼフィルス奪取の任務へと向かったのだが、日本からイギリスまでの距離がありすぎる。この時、

「だったら私が送ってあげるよ！同じ亡国の仲間になるんだからね！1

と束が言った。

「いや、まだ入ってないだろ？ボスの面接受けてないのに。まあ、助かるから頼むが」

「もう、ちーちゃんと似て可愛げがないな。でもそこが可愛い！」

と言った感じで、束のラボを呼び出しスコールとオータム、マドカを乗せ飛び

立ったのだ。しかし…

「おいしい!!これスピードどのくらい出てる!?人が耐えられるがじゃないぞ!」
「え?これくらいなら大丈夫でしょ?なんならもっと出せるよ!」

と言って、さらに速度をあげたりしていたら1時間以内に着いた。

ちなみにスコールは、静かに気絶し、オータムは泡を吹き、マドカは白目を向いていた。クロエは留守番中である。

束以外全員、ISを装備してこれであるからマドカのトラウマ具合も仕方のないことだろう。

この後は、束製の栄養ドリンクで強制回復し、任務に向かったのだった。

Sの休日①

休日2日目(土) 一夏視点

おはよう。突然だが、ここで重要な問題が発生してしまった。ユニコーンはレイさんによるメンテナンス中、白式も寝てる。簪さんは多分今日もISのために頑張っているのだろう。篝火さんも同伴。束さんは、今頃面接かなあ。多分ボスに性根を叩き直されているだろう。

まあ、このように知っている面々が大概何かしているが…察しのいい方は気づいただろう。

暇なんだ…

とりあえず午前中は訓練をすることは決まっている。IS学園の設備は十分だが自前のトレーニングをするには問題がある。トレーニングルームでアホみたいなスピードで何かしてる奴がいたら通報される。今日は1人しかいないだろうから、存

分にやれる。午後は…なんかあるだろ。娯楽類は置いて来たし、PCもWiFiに繋げてない。あー…久しぶりに隊の男たちと飲みに行こうか…？どうせ毎日のように酒盛りしてるだろうから、俺が行っても変わんねえだろ。

「朝飯どっかで買って、訓練するか…」

（30分後）

「くそッ、なんで近くの売店探すのにこんなかかるんだよ。ここわかりにくすぎるだろ…」

やっとの事で売店を見つけた俺だがさらなる悲しみに包まれる。

「すいません、なにが残ってますか？」

「初恋ジュースとおでんパンしか残ってないよ。いつも残るんだけど、なんでなんだろうねえ？」

そりやそうだよ！なんでゴッドイーターからしかないの!?おでんパンは美味しいからわかる。なぜ初恋ジュースなんて作っちゃったのか…この世界に荒ぶってる神なんていねえよ。ただただまずい飲み物じゃねえか…

「な、なるほど…じゃあ、おでんパンだけもらえますか？」

「はいよ〜400円ね〜」

高え…なぜだ、なぜこれに400円もかかる…ていうかさ、なんで今、おでんなの？美味しいよ？でもさ、今夏前なんだよ…

「…丁度で」

「毎度〜」

……いやさ、こんなこと言うのもあれなんだけどさ。某、幻想殺しさんに失礼だ
けどさ…？

不幸だ…

昨日から夜以外飯が食えなかったり、天才に出会ったり、飯が少なかったり…な
んなんだ一体。

「あ、美味しい」

悲しみを抱えた俺を癒してくれたのはやはり、たったひとつのおでんパンだっ
た。これからはゴッドイーター2で、もうちょっとナナを使おう…

3？PS4買っても置く場所とする時が無いから出来ないんだよ…

1人寂しくおでんパンを食ること5分。

「結構量あったな。一個で腹もたまったし、結構効率いいかもな。高いけど…」

俺は部屋に戻りながら、おでんパンの感想を言う。部屋に戻るのはタオルと着替えを持ってくるためだ。

「まずは…ランニングだな。スポドリ買いに行こう。死活問題だ」

ここからは俺の訓練時間だが、男が汗水、たまに血を流しながら訓練してるところなんか垂れ流しても需要ないからカット。

（昼）

血反吐を吐くまで訓練した俺は現在シャワーを浴びていた。汗とかやばかったからね。タンクトップ絞ったらめっちゃ水出た。まあ、これで多少は改善点が見つ

かった。俺はハイパーセンサーに頼りすぎているらしい。ハイパーセンサーなしでの攻撃、特に死角をやられると対応が0.08秒ほど、遅くなるらしい。

今度ボスに頼んで修正してもらわなくては。格闘戦は俺より強いし。このままボスと殺し合ったら、始まって3秒で13回は殺されると思う。あれ、ボス人辞めない？

グウ……

「あゝ、腹減ったな。食堂行くか。昼くらいはまともに食おう」

流石におでんパンだけでは持たなかったようだ。コンビニで買えばよかったのだが、20キロ走るのに荷物を持ちたくない。

『悲しみの向こうへとくたどり着けるなら』

いや別に悲しんでねえよ。て、この着信音にしたの俺だったわ。

「はいもしもし」

『一夏？今空いてるか？』

元気な声で言ってきたのは、現在IS学園に潜入中のアメリカ代表候補生ダリル・ケイシー、本名レイン・ミューゼル。名前からもわかる通りスコールの……姪？だったか。モノクローム・アバター所属ではないが、亡国所属だ。

「なんだ、レイ……ダリルか」

『レインで良い。今はフォルテもないしな』

フォルテとは、ギリシャ代表候補生でレインの恋人のフォルテ・サファイアだ。スコールも1回目の時はオータムと恋人だったので、血の繋がりはすごいものだ。まあ、今回のスコールは俺がいるせいかオータムと恋人関係にはなっていない。レ

インは…ミューゼルの血がすっかり覚醒してるみたいだな。

『ああ、要件な。今から暇か？』

「今から？ 飯食う以外はもう用事もないけど？」

『ならちようどいい。ていうか、お前年上に対する敬意はないのかよ？ まあ慣れたから良いけど』

「お前が良いんだったら良いだろ。てか、誰の戦闘データとアイデアにお陰でヘル・ハウンドがバージョンアップ出来たんだよ？ 逆に感謝して欲しいぜ」

『それについては感謝しかないな。お陰で最近はフォルテとの【イージス】も調子がいいんだ』

ヘル・ハウンドはレインの専用機。【イージス】はフォルテとのコンビネーションの事で、名前の通りとてつもない防御力を発揮するらしい。…俺なら秒もかからず潰せるけどな。

「…お前、フォルテ・サファイアに熱中しすぎて任務の本質を忘れてないだろうな？」

『当たり前だろ。私は亡国機業のレイン・ミューゼルだ』

この辺りは、俺がボッコボコにシバいて意識改革させた。ちょっとやる気がなさすぎたのと、甘い部分があったからな。…今の俺の方がよっぽど甘くなっただがな。

『こつちとしてはお前の方が心配だぜ一夏。最近代表候補生やらを囲ってるらしいじゃねえか？』

「囲ってないわ!!俺が意図的にそうしたわけではねえよ」

『…そりゃあ、余計にタチが悪い。もつと言え、ソレを自覚してるお前もな』

「うるせえよ、お前は今のうちにフォルテとしっかり幸せを噛み締めとけ」

ちょっと気にしてること言われたけど、まあ気にしすぎては仕方ない。まさか、

レインに言われるとは…

『へいへい。で、お前暇なんだよな？じゃあ、今から飲みに行くぞ。もちろんお前の奢りな』

「……飲みに行くのはいい。俺もその予定だったからな。だがなレイン、何故に俺の奢りなんだ？」

『決まってるだろ……人の金で飲む酒ってめっちゃ美味しいじゃん？』

あゝ、これは有罪有罪ギルティーですねぇ…

「テメェ…だからって俺に言うか？他にいるだろう…」

『IS学園にいるのに、酒飲みに行く奴も奢ってくれる奴もいると思うか？いないだろ、だから仕方ねえだろ？わかったらさっさと奢れ』

コイツ…奢ってもらおう立場で…

「…分かった奢ってやる。お前よりは給料いいしな。余裕を見せてやるよ」

『よっしゃ！じゃあ、すぐ行くぞ、すぐ！』

「は？今ってまだ昼だぞ？いつまで飲むつもりだ？」

俺はナノマシンでアルコール分解させるから酔えねえけど…

『潰れるまで飲むに決まってるんだろ。1時に〇〇の路地裏のBarに集合な』

プツツ…

通話が切れた。

レイン…酒臭くても、学園ではバレるんだぞ…

「はあ…行くか。どうせ俺が介抱することになるんだしな。葉持ってっとくか。エチケット袋と、白式は…留守番な」

俺は、着替えは適當。レインが言った場所はウチの幹部の部下が経営してる店。俺らが来たらすぐわかるし、かしこまった格好しなくてもいいってのは助かる。

あ、誰かに言っとかないと……玄関受付に言えば良いか。もしかしたらどっかに泊まるかもしれないな。やっぱ、レイさんには言っとこ。

「ボイスメッセージ、『レイさん俺はちよつとレインと飲みに行ってくるんで、今日は戻らないかもしれないです。別に面白いことはないので、茶化してたり余計なこととしてたら、前回より多めのビットで追い回しますから。じゃあ、そういうことで』……こんなもんか」

途中さらっと脅迫を入れるのは俺なりの茶目っ気。ヤンチャな年頃だからね、仕方ないね。

「じゃ、行ってきます」

「40分程経ち」

「ん、遅いぞ一夏。もう始めてるぞ」

「いや、それはおかしい。どうせ金持っていないだろ？」

俺がBarに着き中に入ったらレインがもう始めていた。

「いや、流石に持つてるぞ帰りのタクシー代とコンビニでなんか買う分くらいは」
「お前今日帰れると思ってんの？」

「……え!? い、一夏? いや、私にはフォルテがいてだな。しかも初めてで…!!」

一体コイツはなにを想像しているのだろうか…

「何言ってるの？酒なんか飲んで学園に帰ったら、匂いでバレるだろうが」

「なッ…!?なんだよ…そういうことか…」

「おやあ？一体思春期レインさんはなあにを考えたんですかあ？」

奢る分は弄ろう。そう思う俺であった。

「別に、何でもねえよ！それより飲むぞ！マスター、コイツにとりあえずウオッカだ。今日はコイツを潰すのが目的なんだな。まあ最初だからソーダで割ってくれ」
「お待たせしました」

頼んでから、10数秒。もうレインが頼んだ物が出てきた。早い、俺でも手の動きが見えなかった…

「あ、ありがとうございます。おい、レイン。初っ端からウオッカって…てことは

お前も、やっぱりか」

やはりコイツもウォッカを飲んでいた。というか、そのままだ。絶対長生き出来ない。

「まあ、来たからには楽しむが。今回のメインは何か用意してるのか？」

「フツフツ、よく聞いてくれた。今回は私だって手に入れるの苦労したし、もう財布も少ない。これを見たら私に跪くレベルだ」

レインが自信たっぷりに話す。これですごい物じゃなかったら、今度訓練してやろう。…本気で。

「なんと！なんと！ロマネ・コンティだ」

ガタッ!!

椅子が倒れるほど、俺は勢いよく立ち上がった。

「今…なんて言った？ ロマネ・コンティ？ 嘘だろ、一本200万はくだらないはず！ お前…勇者か…？」

「私の酒に対する執念、舐めてただろ？ 人生で一回は飲んでやると思ってたんだ。最近IS学園での任務ばかりだろ？ 毎日のことだから、久しぶりに口座を見た。…ありえない量が入っていたんだよ。よく考えたら当たり前なんだ、24時間の任務をもう3年目だぜ？ ボーナスがバンバン入ってくる。文字通り桁が違った…だからこの際と思ってな」

コイツ、勇者とかいうレベルを超えてた。こんな事ならいくらでも奢ってやるのに…！

「パーフェクトだレイン！ 今日こそそれ以外全て俺の奢りだ！」

「よっしゃー！今日は飲むぞ！」

「おう!! あ、マスターも一緒に飲みましょう。今日は、立場は関係なしです！」
「宜しいのですか？」

マスターが若干ソワソワしながら聞いてくる。フッフ、マスターも飲みたいだろう？

「良いよな？ レイン」

「当たり前だあ！ こんな素晴らしい日、全員で共有しなくてどうするんだよ！ マスターも飲むぞお！ でもロマネ・コンティは最後だからな！」

もうコイツ酔ってんじゃないかってレベルでテンションが高い。

「それでは私もいただきましょう。ロマネ・コンティは私も初めてなので楽しみです。上司にバレたら、恨まれますけどね」

「あ、マスターの分も俺の奢りです。今日は多分、迷惑かけるんで」

「ッ!? S様…それではお言葉に甘えさせていただきます。その代わり、今日のサービスはご期待ください」

レインがグラスを持って待っている。もう待てないか。

「よし！」

「それじゃあ」

「ええ」

「「乾杯!!」」

未成年？秘密結社にそんなもの関係ないのです。お酒の知識はほとんどありません。知っていた物をネットで間違っていないか確認しただけなので、間違いがあまりましてもご容赦ください。

ロマネ・コンティって聞いてもリゼロの怠惰担当さんしか出てこない…

Sの休日②（S成分少なめ）

ああ、どうしてこうなったんだろう…確かに、楽しい飲み会に最高峰の酒までついて、俺たちのテンションは爆上がりしていた。マスターだって、今までやったことのなかったレシピを挑戦したり、ロマネ・コンティの味見とか、めっちゃ堪能してた。レインだって、浴びるように酒を飲んでたしみんな各々楽しんでたんだろう。

でもさ、なんで俺はあの時あんな事を思ってたんだろうか？

誰が今の状況を予想出来るだろうか。だって…

「なんで俺は体が動かない挙句、ナノマシンの効果までほとんど使えなくて、貴女が俺の上に乗っかって居るんですかねレインさん!？」

「ん？ なんだっていいだろお。なあ、いちか」

「遡る事、約二時間程前」

「マスター、結構飲んでましたけど、酔ってないんですか？」

「ええ、私はアルコールに特に強い体質でして。私自身あそこまで飲んで、少ししか酔わないと思っておりませんでしたので驚いています。そういうS様こそ、私より飲んでいましたが…お体は大丈夫なのですか？」

「はい、俺は体のナノマシンでアルコールを分解出来ます。なので大丈夫です」

まあ、ロマネ・コンティをみんなで飲むときだけは、気分も味わえるようにナノマシンに分解させていない。だから少し酔い気味だ。

「なるほど…それでお代なのですが…」

「ああ、これだけあったら足りると思うのですが…どうぞ」

「拝見いたします。……ッ!? S様、この額は…?」

マスターが見たのは、俺がマスターに渡すように作った口座の番号と入っている

金額が書かれた紙。

「ええ、俺はこの店が好きですし今日は、遅くまでご迷惑をお掛けしましたから、遠慮なくどうぞ」

「しかし、これでは私達が飲んだ分の4倍以上……」

あんなにしつかり飲んでいたのに、勘定だけはきっちり数えていたご様子。流石っす。

「マスターの隊のために使っていただいても結構です。これは俺からの気持ちなので。それではここで寝てるレインは俺が連れて行きますので。また、来ます」

「は、はい！ご来店有難うございました。私も至福のひと時を過ごさせていただきしました。レイン様がお目覚めの際にはお伝えいただけますよう……」

「了解です。それでは」

そして店を出る。マスターの手には、0が7個ほど並んだ数字が書かれている紙が見えた。まあ、正式に隊に所属してるし、今まで任務でも研究所とか潰したのだから俺だし、今背負ってるレインには悪いけど給料って点なら俺の方が高い。：ボスからの直接指名なんかになるともう桁が変わる。

「さて、ここからどうしたもんか。倉持にアメリカ代表候補生連れて行くのはまずいし…ホテル行くか…」

携帯を取り出した俺は、またまた別の隊でホテルのオーナーをやっている者に電話をかける。ちなみに俺の直接の部下じゃないけど、命を救って恩を売ったからの大抵のことはしてくれる。

「もしもし、Sだが、今空いている部屋はあるか？あゝ、レイン・ミューゼルもいるんだ。少し融通してほしい。………最上階のVIPルーム？じゃあそこで頼む。金も持ち合わせているから大丈夫だ。……貰えない？商売だろ、そこは恩人

であっても割り切れ。金は払う。じゃあ部屋の準備頼んだぞ」

さて、行くか。ていうか、さっきから背負ってるレインの巨乳が背中当たって
凄い役得。酔ってる相手に手出しする気もないけど、大丈夫だよな？

そしてタクシーを見つけた俺はレインを押し込み目的地へと向かった。

30分ほど経ち、ホテルに着いた俺はレインをまた背負いオーナーに話を通して
部屋に案内してもらった。その時、オーナーから熱い視線を貰ったことはもう慣れ
たことだ。(オーナーは女性)

「とりあえずレインはベッドに寝かせたし、俺も少し休むか」

備え付けの机の椅子に座り俺は仮眠を取っていた…

そして話は冒頭に戻る。

「いや、お前も餅つけ！じゃなくて落ち着け！」

「えへへ、いちか」

「聞いてない!? てかなんで俺体動かないんですかレインさん! せめてこれだけ教えて!」

マジでまずい。いつもなら簡単に振りほどけるが今は体はおろかなノマシンまで作用しない。助けて白式!!

……置いて来てたわー

「ん? わたしたちはいつもナノマシンの作用を薄くする薬と筋弛緩剤を持ち歩いているだろ? 何言ってるんだよ」

は!? 持ち歩いてねえよ! 何が悲しくてそんな自分殺し持ち歩くんだよ!

「そんなことは無いですけどね!? ていうかこれいつ薬抜けるんだよ!」

「んゝ、5時間くらい？」

「長いわ!! そんな物使ってないするつもりだ!？」

「何って、決まってるだろゝ。ナニだよ」

「おいちよつと待てレイン。落ち着こ? な、一回ちゃんと落ち着こうな! な!!」

ホントにシャレにならなくなって来た:

「おいしいちかゝ! ぜんざい食わねば男の恥って言うだろゝ!」

「違う! 据え膳食わぬは男の恥だ! とにかくどけ! これ以上はダメだって!」

惜しいけど違う、そんな問題じゃねえ!

「どうでもいい? 言うじゃないかいちかゝ。じゃ、やつちやうぞゝ」

「絶対今やのニュアンス違ったよね!? ヤメテ! ホントにヤメ: アッ!!」

そのあと何があったかは言うまでも無い。

（翌日）

「……やっと体が動いた。ああもうこれ、どうしたら良いんだろうか……とりあえず片付けるか」

レインに一方的に襲われた俺は、この後の事を考え憂鬱な気分だった。

「まあ、俺動けなかったし。俺は悪く無いって言えばそうなんだけど、こうなるまで止めずに酒を飲ませた俺も悪いしなあ……」

酒の余韻に浸る為にナノマシンの効果を薄くしたのも、筋弛緩剤とかがしっかり効いた原因なのだろう。

「さて俺ができる範囲はこんなもんか…はぁ…姉貴になんて言えばいいかな。貴女の姪に薬を使われ一方的に襲われました？ いやいや、無理だって。絶対信じて貰えねえって。だったミューゼルだよ？ 同性愛者が多いって噂のミューゼルですよ？ しかもしっかり恋人持ちと事に及んでしまうとは…」

シャワーを浴び持ってきた服に着替えながら独り言を言い続けている俺。これが薄い本で有名な、賢者タイムなんだろう…

そんな時、

「うッ…頭いてえ…んあ？…ここは…？」

レインが起きたようだ。

「起きたかレイン。おいテメェ、昨日のアレはどう言うつもりだ？」

「あ？…一夏か。昨日？…昨日は確かマスターンとこで酒飲んでその後…ッ！…？！…？！…？」

見るからに顔を赤くさせ、こちらを見るレイン。いや俺は被害者なんですけど……
「忘れろ!! アレは夢だった! お互い酒に酔って同じ部屋で寝てたまたま2人が同じ夢見たんだ! いいな!？」

いや、無理ですよレインさん。アレは流石に忘れられん。

「お、おう……とりあえず、風呂溜めたから入れ。その間に俺は出て行くから」
「……分かった。分かってるよな? 夢だぞ?」

さらに行ってくるレインを後ろに、俺は扉の前に立つ。

「分かったって。あ、学園であっても普通にしろよ? 後、亡国メンバーがいるところでもだ」

「が、頑張る」

大丈夫かな…？

「ホントに頑張ってくれよ…？じゃあな。…責任は取る」

俺は扉を閉め、部屋を出た。

sideレイン

一夏が部屋を出て風呂に入った私はさっきのことを思い浮かべた。

「……うわああ！！！！ やっちまったああ！！！！」

私は顔を真っ赤にして頭を抱える。本当にやっちゃった。

「なんとかバレないようにしないと……スコール叔母さんはバレても仕方ないとして、問題はフォルテだ。アイツ勘が鋭いしもしかしたら気づくかも……いや、やった事は気づかないとしても男となんかあったことはバレるな……今日安全日だけど大丈夫だよな？」

ブツブツと独り言を発している私。側から見たらすごい変な人なんだろう。ここは私以外いないから大丈夫だけでも。

「でも……まあ一夏なら……」

……ん!? 私今なんて言った!? 一夏なら? いやいやダメだろう!! ていうか襲ったのは私じゃないか!!

……でも、案外悪くはなかったし。

「ああもう!!私が好きなのはフォルテなんだ!!何やってんだ昨日の私いい!!」

ジタバタと頭を抱え唸る私、こうでもしないと心が折れそうだ。

「はあ……はあ……はあ……。言っても仕方ない。とりあえず、水飲むか。騒ぎすぎて頭が痛い、二日酔いか?」

騒ぐだけ騒いで二日酔いで頭が痛くなった私は、水を取りに行った。そして水を飲んでいると電話がかかってきた。

「今かよ、誰からだ?…もしもし?」

『あッ!やっと繋がった!先輩どこ行ってたんスカ?電話に出なかったから心配したっスよ』

今一番危ないヤツから電話が来てしまった：

「ああ、フォルテか。ちょっと遠出したら学園の奴に出会ってな？盛り上がってそのままホテルでゲーム三昧だったんだよ。お陰で眠い…」

嘘は言ってない。学園の奴って言ったら女子が一夏、でも私は表向き一夏には出会ってないからフォルテからしたら女子しかない。

『あ、そうだったんスね。いや、てっきり外で男と逢い引きでもしてたのかと思っただけで心配してたんスよ』

「は、はは：そんなわけないだろフォルテ？私だぞ？」

コイツなんでピンポイントに当ててくるんだよ！ある意味怖いわ！

『そっスよね。ダリル先輩はですもんね』

「おい、自分で言った手前あんま言えねえけど、私貶されてる？」

『そんなことないっスよ。それより先輩、早く帰ってきてほしいっス！最近調子が良くて、また訓練付き合ってほしいんスよ！』

全く、フォルテは：私がこれほど悩んでも知らずにいつてくれるな。こんなに悩んでる私がバカみたいじゃないか。

「：ああ、分かったよ。すぐに戻るから。昼からでいいか？」

『ホントっスか!! 昼っスね!! 分かったっス。待ってるっスよ!! それじゃ!!』

フォルテがそう言って電話を切った。

「嵐が来たみたいだな：痛っ!?! うっ：フォルテが叫んだせいか：二日酔いどうやって誤魔化すかな…」

「部屋を出た後の一夏」

「あんなこと言って出てきてしまったけど、スコールの姉貴には言わないといけねえよなあ……」

流石に親族には伝えないとマズい。てか黙っててバレた時が一番怖い……

「朝早いけど出るか？ まあ、かけてみるか。………もしもし？ Sですが」

『あら？ 一夏？ どうしたの、こんな早くに……』

「いえ、その……早急に言わないといけないことがあります……」

なぜか敬語になる俺。

『どうしたの改まって？ 仕事の話？ 私、まだちょっと篠ノ之博士のアレの反動で体修理してるんだけど……気分も悪いし。オータムはまだ寝込んで、マドカは訓練

してるし』

東さんマジでアレ使ったのかよ。アレは流石にISがあっても常人は無理なんだけど…

「い、いえ…その姉貴に話がありました…」

『珍しいわね、どうしたの?』

「その…昨晚俺とレインで酒を飲んでまして…」

『ああ、ついにしちやったの?』

「え!? いやまあ、そのそうなんですけど…」

『私はいいわよ? そろそろあの子も男を知った方がいいと思ってたし。ちょうどよかったわ。何処の馬の骨かもわからない奴より一夏の方がまだ安心できるから』

ん? ……ん!?

「え、あの？姉貴？どういうことですか？」

『経緯はどうにしろ、まあ仕方ないんじゃない？あの子ナノマシンあってもお酒弱いから。貴方ミューゼル家は全員同性愛者だと思ってるでしょう？全然そんなことないから、どっちかって言う大胆なだけなのよ。男にも、女にも』

「いやでも…」

ミューゼル家のは今めちゃくちやビビったけど、アイツ酒弱いのかよ…

『もう！ぜんざい食わぬは男の恥って言うでしょ！！いいのよ。フォルテが大丈夫そうなら』

「アイツにそれ教えたのアンタか!!違うから!!それ言葉間違ってるから!!」
『あら、元気じゃない？これなら大丈夫そうね。じゃあ切るわね』

…………ミューゼル怖いわ。

Sの休日③

休日三日目最終日(日)

＼side一夏＼

えー、現在倉持に戻る途中です。スコールの姉貴にあんなこと言われるとはマジで思ってたなかったので今は逆に落ち着いています。どうも一夏です。

いやー人間ってこうも落ち着けるものなんですね。あ、俺もうまともな人間じゃなかったわw

……さて、多少イキってなんとかなると思ってたましたがダメなようです。やっぱり一番テンションが上がった時は殲滅系の任務ですね。え、敬語が気持ち悪い？ いやいや、いつもこうでしたって。違いますよ、あの時のレインを思い出さないようにしてるわけじゃないんですよ？

倉持まで後10分とちよっと。それまでにこの俺の気持ち悪さと顔を直さないと

いけません。じゃないと変態トリオに勘付かれます。

これでも、結構キレそうなんですよ？ 気づいてましたか、俺金曜日からほとんど食ってないんですよ？ 金曜日は引っ越しでその後すぐに倉持に來たし、土曜日はおでんパンと酒とツマミだけです。今日？ 食欲なんてありません。あんなことがあった後に美味しく飯なんて食えないんだよ!!

しかも今日は日曜日!! 今は10時！ 分かるか!? 俺はスーパーヒーロータイム逃したんだぞ!? なんならスーパー賢者タイムだったわ!! しかも部屋は引っ越したまま來たからテレビの録画なんてしてねえし！

「また、某幻想殺しっぽくなるけど…不幸だ…」

今日はもう学園に帰ってゆっくりしよう… パトラッシュ、俺はもう疲れたよ…

「みゃ」

ね・こ・が・い・た。違うよ！パトラッシュは犬だよ！今君求めてないよ！いや、可愛いけど！めっちゃ可愛いけどね！

ふん、と猫がそっぽを向いて何処かへ行ってしまった。あの猫、心でも読めるのか…？

「…健康に良くないからあんま買わなかったけど、カップ麺買っていくか…あ、久しぶりに料理したくなってきた。今度隊の奴らに振る舞うか」

そうこう言ってるうちに、テンションも普段通りに戻り、倉持についた。

「先にレイさんにユニコーン貰いに行くか。変な改造してなきやいいけど…」

そして俺はレイさんがいるであろう奥のフロアへ向かう。その途中…

「おや、一夏君じゃないか。へい少年私と一晩語り合わないk…ぶへえ!？」

ここの所長(笑)の篝火さんが俺の尻を揉みながらそう言ってきた。

「篝火さん…殴りますよ?」

「殴ってから言った!? くっ…いいストレートを貰っちゃったぜ☆これじゃあ新しい扉が開い ty…すいません! 今すぐ仕事してきます!!」

ちょっと殺気を向けたら飛ぶように逃げた。…研究ばかりの引きこもりでもあのスピード。流石だな。

…うん、何も無かった。

茶番を展開してるうちに着いた。

「レイさーん、戻りました。ユニコーン出来てます?」

「お、一夏君かい。出来てるよ。私はちょっと手が離せないから持って行ってくれないかい? そのハンガーデッキに機体の状態で置いてあるから」

少し遠くから聞こえるレイさんの声。

「分かりました。何してるんですか？」

「んー？新しい機体の開発をちょっとね」

新しい機体…？誰のだ？まあ邪魔になるからさっさと出て行こう。

「おまたせユニコーン。調子はどう…う…だ？」

俺の前に現れたのはどこかで見たことあるようなフルアーマーなユニコーンの姿が…どうせこんなことだろうと思ったわ。

『なんか…すごく強くなった気がする…!!』

「そ、そうか…良かったなユニコーン。お前が強くなってくれて俺も嬉しいよ…レ

伊さんに俺からプレゼントを用意しておこう…」

何がいいかなあ？しまつてあるファンネル全部出すか？いや…ぬるいな…独学の拷問術の練習相手が欲しかったんだよナア…

「ヒッ!?何か悪寒が…？いや、疲れてるんだよきつと。だって5徹だもんね…ちよつと休もうかな」

…許そう。流石に可哀想だ。遠くから聞こえてくるレイさんの声に同情を感じ得なかった。

「…そういえばユニコーンそのゴツい装備は標準なのか？」

『えっとね…パッケージとして追加されてるよ。だから…いつでも出せるし、しまえる』

へえ、便利だな。でもこの装備作るくらいだったら量産機の強化パーツ組んだ方が安いし効率がいいと思うんだが…やっぱあの人趣味で作ったな…どうせ作るならドダイとかミデアとか輸送できるものの方がありがたいんだけど。

「なるほどな。…お前って拡張領域めっちゃ広いな。入れてたファンネルは確か…256機だったか？外したのか？」

『入ってるよ…レイ？って人が…どうせ一夏君なら使えるでしょ。って言ってそのまま入ってる』

レイさんは俺のことどう思ってるんだろうか…流石の俺でも256機全部使ったら疲れるんだけど…しかもフルアーマーでだろ？そんなに投入しないといけない戦場ってどこだよ…正直アームドアーマーさえあれば良いのに…

「そうか…まあ、良いや。もう何言っても仕方ないな。新機体作ってんのにこんだけ強化してくれたんだ」

そして俺はユニコーンを待機形態のドッグタグに戻して首に掛けた。

「レイさーん、ユニコーンの事有難うございました。今度差し入れ持って来ます。後、休んでください」

「……………」

返事がない。ただの屍のようだ。…じゃない、あれ？逝った？

レイさんがいると思われる場所へ駆け寄るが、そこには大量に栄養ドリンクと寝ているレイさん。

「寝てるだけか…帰ろう。心配して損した」

俺は踵を返して扉に向かって歩く。その時、

「ん？…これが新しい機体か？…黒ベースの機体か。下半身も出来てないな。…っ

て、この足の部分どう見てもユニコーンだな。てことは……いや、流石に興味機体に貴重なコアを2つ目なんて使わないだろ。多分、装甲だけだな」

勝手に納得した俺は部屋から出て行く。

「うん？もう昼前か。部屋に戻って荷物まとめるかな。腹減ったし」

そして部屋に戻る。

『あー!!一夏、やっと帰ってきた!!なんで放って行っただの!』

我らが相棒はお怒りのご様子だ。まあ、持って行かなくてよかったけど。

「いや、正直ISを連れて行く場所でもないからな。ここなら安心だし、お前はどうせネットでなんかしてたろ」

『うッ…確かにアニメ見てたけどさあ…』

「じゃあ連れて行っても同じだろ？ちなみに何見てたんだ？」

『ダン○ール戦記。最近、配信してたから』

何!? やってたのか、後で見ないと…

「マジか、知らなかった」

『なんかプラモデルも再販するっぽいよ？最初の…ゲームの限定版のやつとか』

「それは…何というか…買わなきゃ！（使命感）」

いやゝあの頃は、そんな余裕なかったからな。あ、1人部屋じゃないから置く場所が…亡国の方に置くか。

ちなみにこの時、話しながら片付けをしていた為そろそろ終わりそうである。

「さて、こんなもんか。飯食って、学園に戻るか」

『あっ！私もちゃんと持って行ってよ？』

「分かってるって」

その後は、食堂で久しぶりにまともに飯を食った。何故かあったチャレンジメニューを完食したらすごい目で見られた。解せぬ：

特に簪と会ったりする事もなく俺は倉持から出ようとする。

「おっ、一夏君帰るのかい？」

「はい、お世話になりました」

「いやいや、いつでも来てくれ。君には生体データをもらったからね。有効活用させてもらうよ」

一体俺のデータなんて何に使われるのだろうか：

「ありがとうございます。それで、更識簪はどうしてますか？」

「簪君？ 気になるかい？ 今は寝てるよ。専用機のすべてのチェックが終わって休憩させてたらいつの間にかね。君のISのデータも流用させて貰ったから、思ったより早く終わったよ」

お、打鉄式式は完成したのか。

「なるほど、分かりました。少し話そうかと思いましたが、寝てるんなら仕方ないですね。俺はもう帰ります」

「ああ、またね、一夏君」

「はい、ではまた」

俺は駅に向かって歩く。まあ、今度メッセージ送ればいいか。

その後は、学園で戻った報告をして、新しい部屋でひたすら動画を見た。やっぱダン○ール戦記面白いわ。

活動報告にて行っているヒロインのアンケートはまだ継続しています。

シルスキー様

大和改三様

天地無双騎士団様

黒猫ユート様

零乃愛李様

白春様

ミチエ丸様

黒目玲愛様

あじら様

アンケートにお答えいただきありがとうございます。皆様の意見はしっかり参考

に
さ
せ
て
い
た
だ
き
ま
す
。

設定(現在まで)

人物紹介現在まで【亡国企業】

織斑一夏コードネーム:S

順調に原作を辿っていた一夏が無人機の襲撃の末に死に、過去に逆行した。自分の望む未来の為、過去の織斑一夏を捨て力を得ることを誓う。

中学生時代に帰った一夏は力を得るため、亡国機業に単独で乗り込みボスとに話し合いの上亡国入りした。現在はモノクローム・アバターという実戦部隊に所属していて、隊長のスコール、オータム、織斑マドカ(M)を筆頭として、工作や潜入を行う隊員が30名近くいる。

全身にナノマシンを注入し、己の限界まで体を鍛えた一夏は、ボスを除き対人戦では亡国内に勝てるものはいない。もともとの計画で人間を超えた存在として生み出された一夏は、自分のことを良くネタでバケモノと呼んでいる。ちなみに非童貞。白式の呼びかけにより白式、白騎士のコア人格と会話をすることが可能。その影響か、もう一つの専用機であるユニコーンのコア人格とも会話可能。白騎士のコア人格に本音を話し、真のマスターと認めてもらった。

専用ISは【白式】と【ユニコーンガンダム】

ボス（本名不明）

亡国機業のトップでISを用いない戦闘なら亡国に勝てるものはいない。一夏を亡国に入れた張本人でありがたい重度の語り癖がある。本名、出身、家族構成など全てが謎の存在であるが、そのカリスマ性から彼を尊敬するものは多い。亡国の人間は自分のために、と言う者が多いが共通して彼を信頼している。一夏もその1人である。

一夏の事を養子にしたいと思っている。そのせいかわからないが、一夏に直接任

務を任せることが増えてきた。

スコール・ミューゼル

亡国機業実働部隊モノクローム・アバターの隊長である彼女は体の一部を機械化している。1回目(原作)とは変わりオータムとは恋人関係にない模様。隊での立ち位置は、頼れるお母さん。IS技術は世界の操縦者でも指折りであるが、速攻で一夏に抜かされたことで最近鍛え直している。

専用ISは【ゴールデン・ドーン】

オータム

亡国機業実働部隊モノクローム・アバターのIS乗りである彼女は普段の言動から小物臭がすごいが、本当はただのアホの子。だが、実力はISを扱うものの中でも高くマドカと一緒に、一夏の訓練をよく受けていた。最近の悩みは一夏とマドカにいじられる事。

専用ISは【アラクネ】

織斑マドカコードネーム:M

織斑計画によって生み出された織斑千冬の妹。亡国入りした一夏によって思いっきりボコられ色々吹っ切れた模様。表向きの口調はキツイ言い方だが、感情的になると砕けた女の子口調になる。最近は感情が乱れることが多いため口調がヤバイことになることが多い。一夏に直接鍛えられたせいかわ、実力も桁違いに上昇している。訓練のキツさのせいで自分が性的にMにならないか心配しているのが最近の悩み。

専用ISは【サイレント・ゼフィルス】

レイ(本名不明)

亡国機業開発部主任。ボスと同じく出身、本名など本人に関することは不明。亡国では篠ノ之束並の頭脳を持つと噂されているが、人当たりも良く趣味全開の物を経費で作ること以外は常識人。ただISなど開発系の事になると我を忘れて色々し

だす開発の変態。最近、篠ノ之束と篝火ヒカルノという変態仲間を得たからか磨きがかかった模様。一夏の専用機ユニコーンガンダムを作ったのもレイ。自身がISに乗るなどの発言は一切なく専用機があるのかも不明。一夏の機体に謎の改造を施そうとした時(数回)は、一夏に、わざわざNT-D発動状態のユニコーンにサイコミュ・ジャックされたファンネルで追いかけている。一夏曰く「こんなに避けるのはなかなかないからいい訓練になる。レイさん? 誰それ?」だそうだ。

レイン・ミューゼル(ダリル・ケイシー)

スコール・ミューゼルの姪で現在IS学園に3年生のダリル・ケイシーとして潜入中。アメリカ代表候補生という肩書きもある。ギリシャ代表候補生であるフォルテ・サファイアと恋愛関係であるが、亡国の人間として折り合いはつけている。一夏が亡国入りする前はやる気のない性格だったが、それに見兼ねた一夏が模擬戦でこれでもかとシバいて改心した。酔って一夏を性的に襲ったことがあり、最近はそのことを思い出して行動が荒んでいる。

専用ISは【ヘル・ハウンドver2.5】

篝火ヒカルノ

倉持技研第二研究所所長。肩書き通り一応優秀な人物であるがレイと同じタイプの変態。一夏の案によって倉持技研が買収されたことに感謝の念がある。白式の機体開発も倉持で行われていて開発の中心は彼女だった。度々一夏にセクハラしようとするが成功する前に一夏に気づかれ、笑顔で追いつ返されている。尚一夏曰く、「未遂だからこれで済ませてやっているがホントにやったら命の保証はしない」だそう。

篠ノ之束

IS世界の大体コイツが悪い。全ての始まりである白騎士事件を引き起こした本人であり、ISの生みの親。その性格は親しいもの以外には容赦なく切り捨てる。幼少時代よりほとんど一人ででいたということもありコミュ症もあいまっている。一夏にゴーレムをズダボロにされてからはSF系のロボなどに関心を示し、レイ、ヒカルノと同じく変態に昇格。その際亡国入りを決めるが面接にてボスに性根を鍛え

なおされた模様。それでもコミュ症だけは治らず、喋り方が硬くなる。尚、これは明確な進歩であり世界中の人間が望んでいたことと言っても過言ではない。∴元が悪すぎたから。

人物紹介現在まで【IS 学園】

織斑一夏（表向き）

IS 学園 1 年 1 組の生徒。入学試験を受けにきていた時にたまたま IS を触り起動させてしまい強制的に入学させられた。もちろん IS については全くの初心者であるため操縦は素人のそれ……であると思われたが、才能があつたのか初戦でイギリス代表候補生のセシリア・オルコットに勝利。流石は織斑千冬の弟であると言われる。その後も有耶無耶になったが、中国代表候補生の鳳鈴音にも勝利するなど頭角を示してきている。以前よりその顔や性格から女性に好意を持たれることが多いが、やんわりとお断りしている。

専用 IS は【白式】

篠ノ之箒

篠ノ之束の妹であり一夏の幼馴染。一夏に好意を持っているが最近は剣道部に集中しているため、放課後などに一夏と話す時間が少なくなっているのが悩み。

専用ISはなし。

鳳鈴音

一夏の幼馴染で中国代表候補生。中学生の時に中国に帰る時、一夏に告白しているが一夏はこれを自分の弱さを原因に断った。学園に転入し、クラス代表戦の時に一夏に敗北。夜に一夏の部屋を訪れ、内に秘める想いを熱烈に告白。現在この小説でヒロイン独走中。…どうしてこうなったのだろうか(作者のせい)一夏に首トンされ目が覚めた次の日には、羞恥で悶えたらしい。

専用ISは【甲龍(シェンロン)】

セシリア・オルコット

イギリス代表候補生でありイギリス貴族オルコット家の当主。

一夏にクラス代表決定戦で敗北し好意を持つ。クラス代表戦の時のゴーレム乱入に後方偵察に出た時、ユニコーンを纏う一夏を発見するが見て見ぬ振り。教師陣には報告しなかった。

専用ISは【ブルー・ティアーズ】

サラ・ウェルキン

IS 学園 2 年生でイギリス代表候補生。實力は、現イギリス代表と互角以上に戦えるレベル。しかしイギリスは BT 兵器を主軸とするためその適性があまりなかったサラには専用機が与えられなかった。マドカによるサイレント・ゼフィルス強奪時には、ゼフィルスをもったマドカとラファールで互角の戦いを見せる。その後マドカに亡国への加入を勧められ、現在迷っている。

専用機はなし

更識簪

IS 学園 1 年 4 組の生徒であり、日本代表候補生である。日本政府お抱えの対暗部用暗部《更識》の次女でもあるため一夏は警戒している。一夏の白式開発のため簪の専用機に時間がかかったが、亡国が買収した倉持にはレイがいたため、無事完成までこぎつけた。姉に対するコンプレックスは変わっていないが専用機の不安が

なくなったことで一夏に対する態度は柔らかい。一夏とアニメなどの趣味が合い良く話す。簪にとっては初めての普通の友達。

専用ISは【打鉄式式】（レイにより若干魔改造の恐れあり）

織斑千冬

IS世界大会モンド・グロッソ優勝の称号、ブリュンヒルデであり、世界初のIS【白騎士】の操縦者。一夏の姉で、マドカの姉にも当たる。現在はIS学園で教師をしていて生徒から熱烈な視線をよく浴びる。いわゆる、残姉さんで生活態度はやバイ。一夏でさえ矯正が不可能だったほどに。……おっとこんな時間に誰か来たようだ。

専用ISはなし

山田真耶

IS学園の教師。以前は日本代表候補生で千冬が認めるほどの腕を持つ。1回目

より出番が少なく目立とうと頑張っている。…が、作者の手に委ねられているため無意味である。

専用 IS はなし

結構な量省いてますがその部分は原作と同じなので許してください。違うんです、亡国の設定書いたらだるくなったとかじゃないんです。

IS 紹介 (小話有り)

白式

一夏の専用機で欠陥機と揶揄された機体。1回目の記憶を持つコア人格。明るく陽気な性格だが、真面目なことをすることはガチ。1回目の最後に一夏を攻撃から守りきれなかったことから、今回こそは一夏を守り抜くと誓う。セシリアとの戦闘前に一夏に直接語りかけたが、一夏も1回目の記憶を持っていることを知りより一層絆が深まる。最近は通常のネットワークにつなぎ日本のサブカルチャーを楽しんでいる。時折白式から出てくるネタはここから。ユニコーンガンダムのコア人格という仲間が加わりよく話している模様。一夏とユニコーンが話すようになったのも白式のおかげである。セシリアとの戦闘時に何をしたのか、第二形態である白式・雪羅の武装、『雪羅』を展開できるようにした。

機体の武装：ブレード『雪片式型』

多機能攻撃腕『雪羅』

単一能力『零落白夜』

白騎士

白式のコアは以前の白騎士のコアを流用していたためそのコア人格が白式に残った存在。白式と一夏が再会した時、一夏を試すような事を言うが軽くあしらわれその後の行動により一夏を真のマスターと認識する。普段は白式と会話するか寝ている模様。戦闘時はたまに手伝ってくれる。

ユニコーンガンダム

レイがノリで作った機体だが、性能がよくボスに一夏の裏の専用機として認められた。コア人格は、アズール○ーンのユニコーン。最初は一夏と話すのを渋っていたが最近慣れて来たのか普通に話せるようになった。最近の悩みは、一夏の事をなんと呼ぶか。

武装：ビームマグナム

ビームサーベル×4

ハイパーバズーカ

バルカン砲

シールド×3

ビームガトリングガン×4

クシャトリヤのサイズのファンネル×156

フルアーマーパッケージ（フルアーマーの武装を一括で出せる）

ビームマグナム用ISエネルギーパック大量

単一能力『NT・D』

サイレント・ゼフィルス

原作通りしつかりマドカに強奪された。その際の戦闘でマドカの事を気に入った模様。

〈コア人格小話〉

アル○ジオの霧の会合場のような場所に、3人の姿がある。白式、白騎士、ユ

ニコーンである。

「えー、緊急ですが会議をしようと思います！」

「突然呼び出したと思ったらなんですか一体？」

「…寝てたのに、何？」

白式の元気のいい声に、他の二人から若干不満の声が上がる。

「最近の一夏の事だよ！これは緊急事態だって！」

「だからなんなのですか？眠いんですが？」

「……zzz、ハッ！…寝てない」

眠くて機嫌の悪い白騎士ともはや寝かけているユニコーン。

「白騎士ホントに眠い時機嫌悪いよね。ユニ子ちゃんはどう寝そうだし。まあ、い

いや。それよりね！この前一夏がね、私を置いていったんだよ！一日も！」

「なるほど、それは…大丈夫ではないのですか？」

「今、お兄…マスターに勝てる人間なんてほとんどいないから、大丈夫だよ」

今日は白式に容赦がない二人。

「えっ…い、いやそうだけど…でも、心配じゃないの？」

「私たちがいないくらいで死ぬようなマスターなら、私の見込み違いです」

「…実際無傷だったし、大丈夫だって。…マスター強いもん。きっとISも生身で倒せる」

「あー…確かに、一夏だもんね…」

変な雰囲気の流れる。

「話は終わりましたね。それでは、また寝てきます」

シュツ…と消える白騎士。

「…じゃあ、私も。バイバイ…眠い…」

ユニコーンも消えた。

「……すごい私にヘイトが向けられて話が終わったんだけど、これ私悪い？」

結局、一夏は人外。という話でまとまった。白式はただただ被害が増えただけである。ISにも人外認定される一夏って一体…

変わる現実は何を望む

転校生は強烈 山田先生もエグい

「ねえ、聞いた？ 今日転校生来るんだって！」

「え、そうなの？ どんな人なんだろう」

今日登校中にこんな話を聞いた。しかも部屋の前には不自然なダンボールがあった。シャルが来るの今日だったのか……

今はから教室に入る、と言うところだ。このクラスにも噂が出回っているのだろうか？

「むっ、一夏か。おはよう、今日は珍しく遅いな」

「あら一夏さん、おはようございます。今日もいい天気ですね」

教室に入ると箒とセシリアが挨拶して来る。いつも通りだ。

「ああ、おはよう箒、セシリア。ん？時間ギリギリか、いつもよりゆっくり来るとこんな感じなのか」

「あまり生活リズムは崩すものではないぞ。体に悪い」

流石は箒、スポーツ女子は違うな。とその時、

「おはようございます皆さん。今日はお話があるので席に座ってください」

山田先生が入ってきた。話の内容大体わかるってつまらないもんだな。

「じゃあ一夏後でな」

「ではまた、一夏さん」

「ああ」

クラスの生徒たちは席に座る。

「先生！話ってなんですか？」

そう誰かが聞いた。

「はい、今日はこのクラスに転校生が来ます。どうぞデュノア君」

あーもう先生言っちゃったよ。：君て

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

扉から入って来た転校生、シャルルがにこやかな笑顔であいさつする。元から知ってた俺以外のクラスメイトが固まる。…あつ、やっべアレ忘れた…鬱だ。死のつかないやどうせ死ぬか。

「お、男…?」

「はい、こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国から転入を…」

一応対策はするか。意味ないけど、はーい、3、2、1

「きゃあああああーっ！！！！！！！！」

カウントダウン通りに発生するソニックウェーブ。手で耳を抑えただけでは貫通するのだ。つまり一夏は耳栓を忘れたのである。

「男！織斑君に続く男よ！」

「織斑君はかっこいい系でデュノア君は美男子！完璧だわ！」

「ふふふ…一×シャル!!いやシャル×一もいいわね！今日から困らないわ!!」

そうかここが地獄か…俺は耳も強化されているため余計に音を拾う。…もちろん爆音も。めっちゃ耳がいたい…後、最後のやつ、一体何に困らないんだ…？

「静かに!!転校生はもう一人いる。ラウラ、入ってこい」

後から入って来た姉さんがそう言う。まあソニックウェーブ並みだからそりゃあうるさい。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

無音。まあこの頃のラウラだからね。仕方がないね。

「あ、あの、それだけですか…？」

「……………」

どうせ、ISをファッションと思ってる奴らに言うことはない、とか思ってるんだろうな。てことは次を取る行動は…

「…ッ！貴様が…!!」

ほら来た。ラウラが俺の席の前に立つ。

「貴様がいなければ!!」

ラウラが腕を振り上げる。軍人の本気の平手打ちを一般人が受けたらマズイだろう
(俺は例外)

「え？…なに…ぐうッ!？」

そう声をあげたのは俺…ではなくもちろんボーデヴィッヒ。

俺が平手打ちをされる直前、立ち上がり腕を掴む。そんでそのまま背負い投げの要領で床に叩きつけた。今ここね。

「織斑、ソレを下ろせ。この状況は一般生徒に見せていいものではない」

あの状態から拳銃を突きつけていた俺を姉さんが諫める。確かに、一般の生徒にはキツイか。

「そうですね。すいません、配慮が足りませんでした。まあ、正当防衛ですよ」

「そんなわけあるか、過剰だ。第一、お前どこで銃を手に入れた？」

「そりゃあ、世界唯一の男性操縦者ですから自衛の得物くらい持ってますよ。倉持

で貰いました」

全く……と言った感じに姉さんがため息をついている。山田先生は何が起こったのか分からずあわあわしている。小動物かって。

「ゴホッ……！私は、認めないぞ！貴様が教官の弟などと!!」

「今ソイツに投げ飛ばされた奴が何言ってるんですかね……全く、コイツ織斑先生の昔の教え子でしょう？教官って言ってますし。ちゃんと手綱は握っててくださいよ」

「私だって苦労しているんだ……とりあえず双方今回の事は不問にする。後織斑の拳銃は没収する」

えー、まあもう2丁あるからいいけどさ。

「織斑、デュノアの面倒を見ろ。同じ男だ。あー、これでホームルームは終わりにする。全員着替えて第2グラウンドに集合だ。今日は2組と合同で模擬戦闘を行う。遅れるなよ?」

姉さんがそういうクラスメイトが動き出す。さて俺たちも移動するか。

「デュノア…だったよな?すぐに更衣室に行くぞ。時間がないんだ」

「え?あ、織斑君だね。よろしく。すぐって?」

「とりあえず移動しながらだ」

俺はデュノアを率いて教室を出、移動を始める。

「男子はアリーナの更衣室で着替えることになっていてな、すぐ移動しないと授業に遅れる。そして授業に遅れると…死ぬ」

「死ぬの!?!」

「ああ、だから早く行かないと行けないんだ。しかも俺たちは貴重な男子。女子は珍しい物が大好きでな。見つかるかと最後だ。絶対に授業には間に合わない」

そうこうしている内（俺が女子に見つからないように丁寧に且つ迅速）に移動し、更衣室についた。

「さてじゃあ着替えるか。俺は一応下にISスーツをきてるからすぐ終わるんだが：デュノアは？」

「僕はすぐに着替えれるから。ここをまっすぐ行けばいいんだよね？先に行ってて」
「そうか？じゃあ行かせてもらうけど…」

確かに、デュノアの着替えるスピードは早い。女だとバレないための措置なんだろうが、残念ながらカメラがある。ぶっちゃけ盗撮だが、弱みを握るには丁度いい。

「一夏おはよう。いい朝ね」

俺がグラウンドに行くと鈴がいた。あんな告白されてちょっと気恥ずかしいが普通に返すしかない。

「ああ、おはよう鈴。一限目がこれじゃなかったらな」

「そんなこと言わないの。ISの授業こそ、この学園の特徴じゃない」

いや、まあそうなんだけど。朝一で自主練してたから若干怠いんだよ。

「あ、そうだ一夏」

「ん？」

鈴が寄ってくる。

「この前の事。本気だからね？」

小声ですっごい優しい笑みで言ってくる鈴。ヤベエ、可愛いすぎて死にそう。

「あ、ああ。分かってる」

「私待ってるからね。朴念仁だった一夏が治ったのは嬉しいけど、自覚してる分ちゃんと答えてあげないとダメよ？他の子も」

なんか、鈴がすごい大人に見える…他の子も、か…

「…分かってるさ。俺の責任なんだから」

「うん。ならばよし！もう始まるから行くわよ！」

バシッと俺の背中を叩いて歩き出す鈴。ホント、いい女になったよ。

「あ、織斑君。授業始まっちゃうよ？早く行こう？」

そのタイミングでデュノアも来る。カメラは…健在か。動画もちゃんと撮れてるな。工作班に送信して…っと。

「ああ、それと一夏でいい。苗字はあまり好きじゃないんだ」

「そうなの？じゃあ僕もシャルルでいいよ。僕も…苗字で呼ばれるのは好きじゃないから」

デュノアという苗字。フランスにある会社でISの世界にいる者なら知らない者は無いな。

こういう点では共感できるポイントがあるんだけどなあ…。方法がダメだ。スマートじゃ無い。

「了解、じゃあシャルル。行くか。織斑先生がこっちに気づいた」
「うん」

そして列に並び授業が始まる。何人かは俺とシャルルをガン見していて姉さんから制裁を食らっている。

「鳳、オルコット、前に出る。お前達には模擬戦をしてもらう」

姉さんが二人にそう言う。

「分かりましたわ。して、お相手はどちらに？ 鈴さんですか？」

「え、そうなの？ 地味にセシリアとは戦ったことなかったから丁度いいわね」

お互い姉さんに呼ばれてやる気になっている。が…

「違う、お前達には山田先生と戦ってもらおう。アイツに良いところ見せるチャンスだぞ？」

「ッ!?お任せください。やはりここはこのセシリア・オルコットの出番ですわ!!」
「セシリア:分かり易いわね。まあそこが良いところなんでしょうけど」

…姉さん1回目の時そんなやり方で二人のやる気あげてたのか。鈴はなんかセシリア見て呆れてるし。

ん?鈴がこっちを見てる?

「ちゃんと、見てあげなさいよ」

と口パクで言ってきた。分かってるって。

俺もそう言う意味を込めて頷く。

「む?へえ…なるほどな。よし、2人ともISを展開しろ」

「はい」

2人がISを纏う。その時：キィィインと甲高い音が。ああ、あったなそういえば：

「あああああーっ!!どいてくださいーっ!!」

訓練用のラファールに乗った山田先生が操縦をミスって俺の方に墜落してきた。：俺の方っていうか俺めがけて生徒がいる方、ね。

「全員離れてろ！白式！」

『はいよー!!』

俺は白式を纏い、ラファールを受け止める場所を作る。

ドゴォォォン!!と土煙が舞うほどの衝撃。

「ゲホッ！ゲホッ！大丈夫ですか山田先生？」

「え、え？あ、はい！大丈夫です!!」

なんとかラファールウイングスラスターを掴み、勢いを殺した。結構手が痺れるなこれ。耐衝撃の訓練には良いかも知れん。

ただ、ウイングスラスターを正面から受け止めたせいで山田先生と顔の距離がかなり近い。ん？熱源反応…？

シュン…と閃光。

「あら？外してしまいましたわね？次は…仕留めますわ…」

「セシリア…アンタ落ち着きなさいって…ハァ…」

激おこ状態のセシリアとそれを諫める鈴。それと別方向から箒の不機嫌そうな気配。あ、なんか箒丸くなった？

「…山田先生、ちょっと投げますね。命の危険を感じるので…」

スツツと山田先生を空に放る。今度はミスる事なく空中にしっかり止まる。実はこれ結構高等技術だ。わざとめっちゃキツイ体制になるように投げたから、山田先生の練度の高さが分かる。セシリアと鈴、シャルルがそれを見てポカーンとしている。まあ、流石にビビるよなあ？あ、ボーデヴィツヒも若干口が開いてる。

「…今分かったものと思っただろうが、山田先生が体勢を立て直した動きは並の者ができる動きでは無い。そうだろう、オルコット、鳳」

姉さんが満足そうに2人に聞く。またいやらしい事を…

「え、ええ…今のをまともにやると、体が裂けてもおかしくありませんわ…そんな動きはウチの代表でもこんな綺麗には…」

「山田先生って結構凄かったのね…見習わないと…」

もはや、鈴は聞いていない。てか、イギリス代表より山田先生の方が練度高いの？良い情報が聞けたな。

それもそのはず、何故なら…

「山田先生は元日本代表候補生だからな。これくらいのこと造作もない」

「いえいえ、昔の事です。候補止まりでしたし」

嘘つけ、知ってるぞ。姉さんが入るまでは飛び抜けて1位だった事。

「そう謙遜するな。とにかく！小娘ども、惚けてないで準備をしろ。模擬戦を始めるぞ」

「え、2対1ですか？それは不公平では…」

「バカッ、あんなの見せられてまだ1対1とか言ってるの？2人でやらないと速

攻で落とされるわよ！」

俺は白式を解き、準備を完了した2人を見守る。

「では、始め！」

これから学校の試験期間に入るので投稿ペースが落ちると思います。落ちなかったら：勉強してないだけです。ご安心を。

山田先生の実力と入社テスト

「では、始め！」

そう、姉さんが言って模擬戦が始まる。

「さてデュノア、山田先生が乗っているラファール・リヴァイヴの説明をしろ」

「分かりました。ラファール・リヴァイヴは皆さんもご存知の通りー」

ラファールは調べたから聞く必要はない。よくある量産機だからな。それよりも、今注目すべきは山田先生だ。あの技術、盗めるものがあれば盗んでおきたい。山田先生は学生時代「銃央矛盾（キリングシールド）」と言われていた。戦法は、遠距離戦が主だ。まあ皆様知っての通り、俺は1回目の時絶望的に射撃が出来なかった。今は、ユニコーンを使うために死ぬほど訓練したため、結構使えるのだが正直まだ甘い。だからなんとか色んな技術を盗もうとしているのだが、あれは無理だ。

俺は普通に銃などを扱うため、ISの武装もマニュアル操作にしているんだが……山田先生のはシステムを完全に理解してそれを応用しながら撃っている。あんな芸当ができる人間は世界に何人いるのだろうか……

と言うわけで俺は山田先生の技術を盗む事を諦め、戦うことになった時の対策を考えていた。ちょうどその時……

「デュノア、もういい。そろそろ終わる」

姉さんの宣言通り、鈴とセシリアは墜とされ模擬戦は終了した。ちなみに各個撃破だ。1回目は同時だったのに、今回は2人がいい連携をしていた。

「つ、強い……」

「まさか山田先生がこんな強さをお持ちだとは……」

「2人とも山田先生を相手によくやった方だ。動きの連携は初めてだろうか？お互いをカバーしながらよく動いていた。なあ、山田先生？」

姉さんが珍しく、人を褒める。よほど山田先生の実力に自信があったらしい。

「ええ、良いチームでした。ちょっと本気になっちゃいました」

「ありがとうございます」

「諸君、これで教員の实力は分かっただろう。以降は礼儀を持って接するように」
姉さんがしっかしめる。

「はい！」

うん。良い娘達だ。…これで態度が変わるとは到底思わないけど。

「さて、専用機持ちは5人か…では1グループ8人で実習を行う。リーダーは専用機持ちだ。分かっているな？ 男子に集中するような事はするなよ？ 出席番号順

だ。別れて始めろ」

1 回目とは違い、最初にしっかり注意している。女子達は計画が見透かされて一瞬苦悶の表情を浮かべる。…そんなに俺たちと組みたいか。

「一夏、頼んだぞ」

「ん？ 箒か、同じ班なのか。よろしくな」

「よろしくね！ 織斑君！」

箒と一緒にやってきたのは相川さん。

「まあ、俺がともに教えられるかわからないけど、出来るだけやってみるよ」
「むっ、やる前から卑屈になるのは良くないぞ一夏。情けない」

おっと、箒さんからのキツイ一言。俺言葉で教えるの苦手なんだよ。マドカの訓

練するときも欠点だけ言わずと戦闘してるし。

「そうだな、箒の言う通りだ。任せてくれ」

「各班別れたな。班で協力してISを持ってこい。ラファール3機に打鉄2機の早いもの順だ」

そう言う姉さんの声を聞いて、俺はすぐに始める。

「さてと、じゃあ取りに行くか。どっちが良い？おススメは打鉄だ」

「なんでなの織斑君？ラファールの方が扱いやすいって聞くけど」

「俺もそうだったが、初心者ってコケるだろ？ISへのダメージはシールドエネルギーがあるから大丈夫だけど、丈夫な方が操縦者への衝撃も少ないし、安全だからな。もちろん扱いやすさと言う点で言ったらラファールの方がいいと思う」

俺はそれっぽい理由を言うが本質は違う。…午後の整備の授業が面倒だからだ。

打鉄の方が硬いから凹むこともほとんどないし、ぶっちゃけ楽なんだ。

「じゃあ打鉄にしよう！」 「そうだね！」 「ああ」

班の意見も纏まってきたな。

「じゃあ取りに行ってくれ俺は織斑先生にISの使用許可を貰ってくるから」

もちろんもともと許可されているが、女子は俺に運ばせようってのが丸見えだから。面倒くさい。

「分かった！行こ！」

元気よく班員がISを取りに行く。箒もちゃんと混ざれてるし、良かった良かった。

じゃあ俺も、

「織班先生、白式の使用許可を。教えるので」

「ああ、もちろん許可する。その前にだな一夏…アレをなんとかしてくれんか？」

おや、授業中に名前呼びとは珍しい。そして姉さんの視線の先にはボーデヴィツ
ヒの班が。

「俺に非があるとしても言いたいのか姉さん？」

「お前がああやって返すからだろう？責任取ってこい。言い方は任せる」

「へいへい、仰せのままに我が賢姉殿」

また面倒な事が増えた。自分から近づく事考えてなかったな。班のメンバーはま
だ運んでるし、ボーデヴィツヒの班は雰囲気最悪だし…行くか。

「おいボーデヴィツヒ、なぜ始めない？」

「ISをファッションか何かと勘違いしている奴等に教えることなど何もない。それより、貴様だ！さっきの借り、返させてもらうぞ！」

そう言って、部分展開の砲を向けてくる。

「おいおい良いのか？ドイツの格が下がるぞ？ああ、姉さんのもな」

俺は笑いながら言う。

「なんだと？どう言う意味だ！」

「そう言う行為自体が、ドイツと姉さんの価値を下げてるんだよ。ドイツはこんなのか代表候補生にできないのか？織斑千冬はこんなのか育てられなかったのか？ってな」

「貴様!!教官と祖国への侮辱は許さんぞ！」

「だからお前のソレが原因なんだよ。しかもあれか？お前は自分の教官の言葉を無視して良いのか？教えろ、って言われただろ？」

「くっ…貴様に教官の何がわかる！」

「分かるさ、弟だからな。その強さも、態度も、私生活の悪s…あたあ!!」

突然別方向から出席簿が飛んでくる。

「余計なことは言わんで良い！全く、ボーデヴィツヒ！お前の考えは間違っているとは思わん。だが、ここは学園。全てが自分の思想通りになるとは思うな？」

「はっ、はい！申し訳ありません、教官！」

「私はもうお前の教官ではない。織斑先生と呼べ！良いな？」

「はっ!!」

ボーデヴィツヒは納得がいけないのか、険しい顔で通り過ぎようとしている。そこに俺はボーデヴィツヒにしか聞こえない声で、

「同じような存在としては、お前のことわかってるつもりだぜ？ ボーデヴィッヒさんよ？」

「…ッ!？」

俺は言い終わると、すぐに班の方に戻る。残念なことに、俺はアイツよりもっと醜い存在だな。

「おっ、運んだみたいだな。じゃあ始めるか」

「「「よろしくお願いします！」」」

いやいや、そんなかしこまらなくて良いから、恐れ多いって。箒も一緒に頭下げなくて良いから。

「出席番号でやるか、最初は…相川さんだな。じゃあ打鉄に乗ってみてくれ。…い

や、無理か。ちょっと待ってろ」

打鉄を見るとハンガーデッキにかかった時のままのように直立不動。このままでは1回目の二の舞になるため、俺は白式を展開して乗りやすいように打鉄の体勢を作る。

「こんなもんか、乗り方は分かるよな？」

「うん、授業で何回かやったから大丈夫」

そう言って相川さんはスツと打鉄に乗る。数回しか乗ってない割にはスムーズに行ったな。俺は相川さんを先導し、基本的な動きを教える。交代しながら何回か繰り返す。みんなスムーズに行くな。さすが、IS学園に入学するだけのことはある。箒もちゃんと乗れてるし。

少しずつレベルを上げて、ちやうど何周かした時に…

「今日はここまでだ。今から片付けを行う。午後から整備の授業のため、ISは格納庫に置け。授業開始時は班別で集合、専用機持ちは訓練機と専用機の両方を見ること」

姉さんの号令で終了。見た感じウチのところが最も進んでるみたいだな。ちなみに2位はシャルルだ。…いや、競争じゃないけどね？

「はい、じゃあ片付けるか。まあみんな頑張ってたし、最初よりすごく上手くなったから、ISは俺が持っていくよ」

「おお！さすが織斑君、わかってるね」「ごめんね、任せちゃって」「助かる」

思ってたよりみんな疲れてるな。

「じゃあ解散な、お疲れ様」

俺はISを運ぶ。言われた場所に持っていくと、ボーデヴィツヒの班員が作業に入っていた。

「お疲れ様。さっきはごめんな、怖かっただろう？」

「え？ 織斑君？ ううん、こっちこそ迷惑かけてごめんね」

そのうちの1人が代表して言ってくる。

「お陰で授業ちゃんと進んだよ！ ありがとう！」

また1人と元気な子がお礼を俺に言う。

「あのままだと織斑先生から折檻食らってたからな。…結果的に食らったのは俺だけだ」

「あはは…」

自虐ネタはあまり受けなかったらしい。まあ、経験者にとっては笑い事ではない。

「じゃ、俺は行くから」

そして俺は着替えるため更衣室に向かう。俺が人と話している間にデュノアはもう着替えて行ってしまったらしい。まあ、そうだよなあ。俺も別に率先して女性の裸体を見る趣味なんてないし。

第一に着替えといっても上に制服を着るだけだ。汗もかいてないし、わざわざISスーツを脱ぐ必要もないからな。というわけでそのまま昼飯に向かう。今日は弁当を作るのを忘れたから学食でも良いんだが、どうせシャルル目当てで屋上に誰もいないだろうから、1人寂しく食うかな。…女子達に囲まれるのも怖いし。

「さて、朝購買で飯買っておいで正解だったな」

屋上に到着した俺は、給水タンク？みたいなものがある所に登り見つからないように飯を食う。

「俺はなぜわざわざ隠れるような真似をしてるんだろうか……癖だな」

潜入任務とかの長期的なものまだないが、スッと入ってスッと爆薬設置してスッと出てきたことはある。汚い花火だった。

「シャルルを放っておくのも可哀想なんだけど、この際男子の辛さを知ってもらおうとしよう。そうしよう。うんうん！」

我ながら鬼畜の所業である。……昔は、率先してみんなで飯食ってたんだけどな。と、感傷に浸っていると……

ガチャッと扉が開く音がする。誰か来たか？

「あら、誰もいないようね。…はーあ、疲れた。全く、せっかく帰省したと思った
ら戦闘に駆り出されて、挙句失敗してすごい怒られるし…あの子の言う通りになり
そうで怖いわね」

来たのは金髪の生徒。あれは…サラ・ウェルキンだな。戦闘？俺にはそんな情
報入ってきてないんだが。一応録音しておこう。

「確かにあの子の言う通り、専用機も貰えてないし待遇は良くないけどさ…？も
うちよっと待ったらもらえるかも！…なわけないわよねえ…はあ…本当に入っ
ても良いかもしれないわね。亡国機業」

なっ!?ウチだと!?おいおい、なんのことだ？えーと、あ…

イギリスはつい最近ゼフィルス強奪したな。マドカがライバルと出会えたとか
言ってたし、勧誘もしたって……完全にそれじゃねえか…

「えっともらった連絡先は…これね。これって…一回使ったら二度と使えない秘匿通信の番号？○○○ー○○○…」

オイイ!!今あの人と言った番号俺が何個か所有してる内の一個なんだけど!?マドカのヤツ、俺に任せやがったな!!まずい、かけてくる前に俺から言わないとバレル。こんな時のためのボイスチェンジャーと仮面だ。拡張領域に入れておいてよかった。

「……あ、繋がったわ。もしもし?」

『もしもし、貴女が内のMに勧誘された者か?』

直接あちらに聞こえていないか心配だ。

「ボイスチェンジャー…ええ、そうよ。サラ・ウェルキン、イギリス代表候補生で専用機はないわ」

『ああ、すまない。大衆に聞かせられる声ではないのだ。許してほしい。話は聞いている。連絡していたと言うことは、そう言うことで良いのか?』

嘘は言っていない。世界唯一の男性操縦者の声は流石に無理だからな。あたりまえなんだよなあ…

「…ええ、そうね。私はあなたたちの組織に入りたい」

『良いだろう。しかし、流石に国の犬とも言わべき貴女をすぐに信用しろ、と言うわけには行かないのでな。テストをさせてもらう』

「テスト? 内容h…ッ!？」

俺はユニコーンをステルスモードで展開する。手にはビームマグナム。そしてウェルキンさんの前に現れる。

「驚いた…まさか学園にいるなんて…結構すごい職場に誘われたのかもね、私」

『勿論だとも。我らが亡国は所属するものにはしっかりとした待遇で迎えている』

そう言って俺はマグナムを突きつける。

「……」

『この銃は打鉄の装甲板を12貫いた実績がある。まあ、先に壁が壊れそうだったからそこで辞めたのだがな』

あの時は危なかった。マジでレイさんはとんでもないもの作るものだとは再認識した。

『まあ、こんなところで撃つつもりは毛頭ないが、貴女に、覚悟はあるか？ 全てを捨て、親しかった者と敵対し、殺す覚悟が』

「……無理よ。私はたとえどんなことがあっても、殺したくはない!!」

『その迷いのせいで、ほかの物を失ってもか!!』

事実、俺は失った。俺が堕ちたから、俺だけがこの時代に戻ってきてしまったから。

「それは……それでも、同じ人だもの……」

『……合格だ』

「……え？」

ちよつと意地悪が過ぎたか。

『最初からそんなことさせるわけないだろう？ 私達は無闇に血が流れることを望んでいない。その必要もない』

「じゃ、じゃあさっきの質問は……？」

あれは勿論、

『澄まし顔で知り合いを撃ち殺すような人間を亡国に入れてたまるか。そんな殺人鬼集団はウチにはいない』

「そ、そうよね」

『ようこそサラ・ウェルキン！我らが亡国機業に！』

そして展開を解く。

『私達は、貴女を歓迎する』

「……………」

なにやらウェルキンさんが微妙な顔をしている。普通の仮面だぞ？

「織斑君…無理しなくて良いわよ？」

『…なんのことだ？』

バレてる!? いや、声も顔も大丈夫だ。何故だ？

「黒髪で男子制服着てる IS 学園の生徒なんて、あなたしかいないわよ…」

『あっ…』

ユニコーン解くんじゃ無かった…バレたので俺は仮面とボイスチェンジャーを外す。

「えーその、亡国機業実働部隊モノクローム・アバター所属コードネーム S、織斑一夏です…試すような真似をしてくださいねでした…」

「無かったことにするのね。イギリス代表候補生サラ・ウェルキンよ。セシリアがお世話になってるわね」

お互い改まって挨拶する。俺はこっそりと録音機を止め、スコールの姉貴に送る。

「これからよろしくお願いね」

「はい、こちらこそ。それでなんですが、当分は専用機開発になるので仕事はまだないんですが、一度本部に行っていただかないといけません。…教育がありますから。大丈夫です、1日で終わります」

「了解したわ。場所は？」

お、今姉貴からも許可が帰ってきた。

「この紙に書いてあります。無くさないでくださいね？こんなに早く貴女を消したくはないので」

「…物騒ね。大丈夫よ、私物なくしたこと無いから。ん？へえ、Phantom corporationね。…名前そのままじゃない」

そこは突っ込んだらいけないよ…

「空いている日にお願ひします。上司からも許可が出ているので。あ、本部に多分Mいますよ」

「そうなの？じゃあ期待できるわね。それと、貴方とM？って兄弟？」

「ええ、まあ。姉さんに似てるからですか？」

最近は慣れたって言われてきてるから新鮮だ。

「いや、どこか抜けてるところがそっくりなのよ。M、IS持ってくるの忘れてたし」

あのバカ…なんでISを忘れることができるんだよ…

「貴方もさっきやっちゃったしね。Mの名前は？」

「マドカです。自慢の妹ですよ。俺が訓練してますから」

この人、マドカと引き分けたいらしいからな。絶対強い。」

「あら？じゃあ私も訓練してもらおうかしら？」

「え？いや良いですけど、俺の教え方肉体言語ですよ？」

「マドカって、それで良くあのレベルになれたわね…」

ベースが姉さんだからな。世界最強の遺伝子は強い。

「もしかしてお昼の途中だった？そこに食べかけがあるけど」

「え、いえ大丈夫ですよ。こっちの方が大事ですし」

「悪いことしたわね。お詫びになんだけど…」

そう言いながら先輩は何か取り出す。

「一緒に食べましょ？懇親会ってことで」

弁当を取り出した先輩がそう言ってきた。

活動報告にて、ヒロインアンケート決勝戦を行なっています。方式は変わらず、3人までとなっているので是非ともお願いいたします。メンバーは活動報告にてご覧ください。

クラスメイトのボーデヴィツヒ

「一緒に食べましょ？懇親会って事で」

「え？」

「あら、お嫌？」

「いえ、むしろ歓迎しますけど。いいんです？誰か来たら噂されますよ？」

俺は慣れてるけど流石に先輩がそうなるのは困る。

「いいわよ別に。噂ってだけなら慣れてるもの」

先輩は弁当を広げながらそう言う。

「いえいえ、仲間になるんですから。まあ、今日はシャルルに氣をとられてここに
来る人なんてそうそういないし……」

「あ、一夏さん！このようなところにいらっしやったのですか。私達も誘ってくださればよかったのに。…って、ウエルキン先輩!？」

入ってきたのは、セシリアとシャルルと鈴と箒。珍しく俺が居なくても纏まりがある。鈴のおかげか？

「居たわね」

「…居ましたね」

先輩と息が合う。

「ウエ、ウエルキン先輩？なぜ一夏さんと一緒にお昼を食べていますの？まさかもうそういう仲に…？」

「そんな訳ないでしょ。たまたま出会ってアンタがお世話になってる事を話してたのよ。セシリアはその…アレだったでしょ？迷惑かけてないかって」

「なっ！、わたくしはもう改心しましたわ！大丈夫ですわよ！」

2人が姉妹喧嘩？しているのを横目に、残りの3人が寄ってくる。

「一夏：僕の事見捨てた？食堂怖かったんだけど…？」

俺たちの名物、ハイライトが消えたシャル。いや、怖いだけなんですけどね？

「いやいやそんなことないって！今日はたまたま弁当作り忘れたから仕方なく購買で買ったんだよ」

「ふーん。そうなんだあ？でもさ、こうなるの経験済みだろうし、分かってたよね？」

「へ!? い、いやあ？流石に午前だけでこんなになると思ってたから…すまん!!」

その頃…鈴と箒は…

「なんだか、賑やかなのも良いものだな鈴」

「そうねえ、ちょっと想定外だったけど（あの人もライバル？でもそんな雰囲気じゃないし…？）」

だいぶのほほんとしていた。幼馴染組は凄いなあ。…助けろよ。

（数分後）

「で？みんな落ち着いた？」

「」「はい」「」

鈴の号令で一同静まる。

「みつともないとこ見せちゃったわね。改めて自己紹介するわ。私は二年のサラ・ウェルキン。イギリス代表候補生で一応

、セシリアの先輩になるわね。：私は先に行かせてもらうわ。お邪魔そうだし」
「ウェルキン先輩お気になさらずとも…」

「流石に、年上がいたら話しにくいこともあるでしょう？それじゃあね。あ、セシリア？」

先輩が笑顔でセシリアを見る。あ、これセシリア終わったな。

「なんですの？」

「アンタ4月にやらかしたそうじゃない。今度、鍛え直してあげるわ」

そう言って去っていった。いつのまにか昼飯食ったのか：気付かなかった。セシリアは、顔が真っ青だ。

「…先輩の……訓練？わたくし、生きて帰れるでしょうか？」

大丈夫だって、1回目で何も知らずにお前のサンドイッチ食った時の俺よりはマシな顔してるって。…うつ、頭が…

キンコーンカーンコーン

「「「「「あっ…」」」」」

昼からの授業の予鈴が鳴ったのだった。

「…お前ら、飯は？」

「食べてませんわ…一夏さんを探していましたので」

「私は食べたぞ。最近自分で作っているからな（なぜか味が全くないのだが）」

「私も食べたわ。…といっても少しなんだけどね」

「僕は…食堂が人で溢れかえっていて食べてない」

セシリアとシャルルか。…仕方ないな。

「2人ともこれ食べ。まだ開けてないし、食わないよりはマシだからな」

俺は購買で買った袋からおにぎりを取り出し渡す。

「よろしいのですか？」

「ああ、俺はそこそこ食ったしな」

「ありがとう一夏。助かるよ」

確か…午後の授業は…!?

「待て、急ぐぞ!! 午後からは整備の実習だった!!」

「ちょっと! それ不味いじゃない! ヤバイわよ。早く行かないと…!!」

こんな感じでドタバタと俺たちは走った。

もちろん間に合わないので全員漏れなく姉さんからの一撃を食らった。

「夜、一夏の自室にて」

さて、授業も終わり部屋に戻ってきた俺だが、シャルルも戻ってきた。あんまりふつうに接すると情がうつるからな。多少は距離を置く。

「これからよろしくな、シャルル」

「うん、こちらこそ」

俺たちはもちろん同部屋なので、互いに挨拶。

「細かいルールでも決めるか。まずは…シャワーの順番はどうする？俺は先でも後でもどちらでも良いぞ？」

「後で良いよ。一夏が先に使って」

前もこんな会話だった気がする。

「遠慮しなくて良いんだぞ？ 2人しかいない男なんだ。そういうのは無しだ」

…酷いけど、そろそろ亡国として接していこう。まずは男同士という事を繰り返して使って、罪悪感を植え付ける。

「大丈夫だよ。僕ってあんまり汗かかないから、あんまり気にならないし」

「そうか？ でも、なんかあったらすぐ言えよ。なんたってルームメイトで男同士なんだからな」

「……ッ……」

ちよつとだけ口元が動いた。反応してるな。

「あつ、そうだ。せっかくだしお茶でも飲んでみるか？日本に来てそんなに経ってないだろ。日本ぽいもの、どうだ？」

「お茶？あつ、なんか特別な技法を使って入れるものだよね？」

それは抹茶だな。確か購買にそれっぽいもにあった気がするけど……そこまで見えないな。今度確認しとくか。

「それは抹茶だな。俺が言ったのは麦茶とかほうじ茶とかそういうった類だな」

「ふーん。じゃあもらっても良いかな。お茶は前から興味があったんだ」

ニコツと笑顔で言ってくるシャルル。こういう自然な事で男子だと勘違いしてる女子が落ちるんだよなあ……。これが俗に言うニコポか。

「まあ、今はパックの物しかないけどな。これも十分美味しんだ。ほら、出来たぞ」

お茶を渡す。自白剤持つてるから入れても良いんだがもうちょっと後にする。今入れて、今度同じこととして飲んでももらえないとか嫌だしな。：何より、食事は楽しむものだ。

「わあっ！これ美味しいね一夏。なんというか、落ち着く感じがする」

そう笑顔で言ってきたのはおそらく、シャルロット・デュノアだろう。こう見ると、ちゃんと女の子なんだけどなあ：なぜ他の生徒は気づかないんだろうか？

「そうか、それは何よりだ」

そうして、夜は更けていった。ちなみに、白式をあえて遠くに置いてどうするか反応を見ていたが今日は何もしなかった。流石に初日からする勇氣はないようだ。

アレから何日か経ち俺は今、学園の射撃などの訓練場に来ていた。ここはいつも誰も来ていないのでほとんど俺が1人で使っている。

「…若干ズレてるな。後で修正しないと」

自前の拳銃を使ってひたすら射撃練習。あ、これは姉さんに取られたやつね。返してもらえたのだよ。ちなみにこの拳銃、無駄に高性能でな。マガジンにISの拡張領域が採用されていて装填しなくても弾が補給され続ける鬼畜仕様。無駄に高価である。

ちなみに撃った弾はもれなく人型の脳の脳天と心臓を完璧に捉えている。…様に見えるが実は若干ズレており俺的には不満足。やっぱ俺銃苦手だわ。狙わなくても当たる極太ビームとかだったら使いやすいんだけど…そんなもの要らない。

「他の2丁も使っとくか。メンテナンスしてないからなあ…」

そう言いながら2丁とも取り出す。これらは普通の拳銃、弾切れにはご注意を。

「サイレンサー付けとくか?…今更か。…ん?」

足音が聞こえる。こんな所に誰だ?

「ほう、此処が教官の言っていた場所か。なかなか良い施設ではないか。…ッ!? 織斑一夏!!」

やってきたのは銀髪、眼帯、現役軍人と設定モリモリの少女、ラウラ・ボーデヴィツヒ。あゝ、軍人ならそりゃ来るわ。

「ボーデヴィツヒか。ここは俺以外居ないから好きに使ってくれ。あつ、ISは使うなよ」

「黙れ! 誰が貴様などの戯言を聞くか!」

「ここ壊して姉さんにどやされても知らないからな…?」

うぐツ、っと正論を言われて後ずさるボーデヴィツヒ。

「そ、そういう貴様こそこんな所で何をしている? 貴様の様な一般人が来る場所ではないぞ、此処は」

「もう、世界的な有名人なんだがな…。いや、ISだって絶対じゃない。それは軍人のお前もわかるだろ? だから…」

「生身でも戦える様にする、か」

分かってるじゃないか。

「そうだ。この前お前を投げた時の技も、そういう理由で習ったものだ」

「……貴様を教官の弟だとは断じて認めん。だが…貴様はISが何か理解している様だな」

もちろん。ISとは…

「簡単に人を殺せる兵器だ」

苦楽を共にする相棒だ。

「なぜ人々がこんな簡単なことに気づかないのか、わからない」

なぜ人々がISの声に気づこうとしないのか、わからない。

『一夏…』

「…貴様の事は気に入らないが、話は通じる様だな」

「おっ？ そう言ってもらえるとありがたいな。クラスメイトとは出来るだけ仲良

くしておきたいからな」

後で利用しやすくするために…

「それにな？ 良く考えてみる。俺はたしかに姉さんの栄光を邪魔した本人だ。でもそのおかげで姉さんはお前らの教官となった。俺が誘拐されてなかったら、お前は姉さんに会えなかったかもしれないんだ」

「………確かに、その通りだな。だが、しかし…」

ボーデヴィッヒにはまだ迷いが見える。

「お前は姉さんに鍛えられたんだろ？ だったら自信を持って、姉さんに恥じない様にしろ。自分はあの世界最強の教え子で、ドイツ代表候補生のラウラ・ボーデヴィッヒだとな」

「………そうだな。その通りだ。感謝するぞ織斑」

おっ、呼び方が変わった。今までの修羅でも纏っているんじゃないかっていう雰囲気消えたな。

「ああ、気にするなって。クラスメイトだろ？」

「クラスメイト……クラスメイトか。じゃあ、そのクラスメイト様に一つ頼みがある」

ん？

「今日の放課後、一戦交えてほしい」

「ISか？良いけど、どうしてだ？」

「お前の実力が知りたい、と言ったら？」

あらやだ、誘い方が情熱的。

「ふーん、良いぜ。第三アリーナでいいか？」

「ああ、申請は私が通しておく。待っているぞ」

そう言って去って行った。え、戻るの…？

少しして顔を赤くして戻ってきたので、俺が代わりに出てった。なんか既に小動物感出てるな。

この度のヒロインアンケート決勝の結果を参考に、ヒロインを決定することができました。

アンケートにお答えいただいた、

零乃愛李様

ラビラビタンタンハザード様

あじら様

稼津斗様

キバット13世様

ムリエル・オルタ様

勝斗様

大和改三様

黒目玲愛様

松影様

サクラサク様

シルスキー様

ありがとうございます。ヒロインはまだ発表しませんが、これからの展開をお楽しみに！

完成品と不良品

今回は短め

時は放課後、ボーデヴィツヒとの模擬戦の約束があるためアリーナに向かっていく。
る。

「いやー、ボーデヴィツヒも思ってたより話を通じるじゃないか。1回目で俺がちゃんと対応してたらちよいでもマシだっただろうな…」

やっぱ姉さん至上主義はあるらしいけど全然マシになった。…クラスメイトへの態度が変わってないのは良くないけど。

「どうしよっかな。さっさとボーデヴィツヒのVTシステム発動させて倒してもいいんだが…あゝ、他にも練習してる人がいるからダメだな。…ん？」

前から大急ぎで走ってくる女生徒が1人。

「あっ!! 織斑君! 大変なの!」

何組の生徒だっただろうか? 一年生というのはわかるのだけだな。あと、走って揺れてる胸が眼福です、ありがとうございます。

「どうした?」

「今、アリーナで鳳さんとオルコットさんがボーデヴィツヒさんとISで勝負してて…鳳さんとオルコットさんが一方的に…」

「ボーデヴィツヒを痛めつけてるのか?」

いや、なんか今の2人なら出来そうだけど…

「逆なの！2人がボーデヴィツヒさんにやられてて、もうISが強制解除されそうなの！」

アイツら…1回目よりは落ち着いてるから大丈夫だと思ってたけど…

「わかった、すぐ行く！君は先生に知らせに行くんだ。いいな？」

「う、うん」

クソッ、思ってたよりボーデヴィツヒの実力が高かったか。急がないと。

「出番だ！白式、行くぞ！」

『おっけーい!!最近あの金髪ちゃんがいて話せなかったからね、ちょっとお姉さん溜まってるんだよ！ぶっ飛ばしちゃうよー!!』

お前がお姉さんとか…フツ。

『あー！笑ったね一夏！【零落白夜】使わせてあげないよ？』
「いやいや！それはマジで困る！悪かった。悪かったから！」

俺は急いでるのに何をしてるんだろうか…

『ふふん！よろしい。…あっ、見えてきたよ！』

アリーナに出るとISを強制解除させられ、床に倒れているセシリアと、ボーデヴィッツヒに片手で持ち上げられている鈴が…

「フンッ、イギリスと中国もこんなものか…むッ!!」

俺は衝動的に「雪羅」を展開、荷電粒子砲を撃つ。AICで止められたらしいがどうでもいい。

「ボーデヴィツヒ、何をしている？生徒間の戦闘は申請書を通してやるものだ。説明してもらおうか!!」

「何を怒っている？少し口が過ぎたのは認めるが先に手を出したのはコイツらだぞ？」

本当に理解していないのか当然といった表情で言ってくる。鈴はもう離れたらしい。

「シャルル」

「へ？あ、はい！」

今来たのだろう、専用機のラファールを装備したシャルルに声をかける。

「2人を回収してすぐに保健室に連れて行け。俺はコイツに用がある」

「わ、分かった、気をつけてね一夏」

「させると思うのか？」

俺はさらに雪羅を撃って牽制する。

「ボーデヴィッヒ、模擬戦は今からでいいな？」

「……フンッ、良いだろう。頼んだのは私だからな」

その間にシャルルが2人を連れてアリーナを出た。…よし。

俺とボーデヴィッヒ以外はこのアリーナにはいない。だからこうして雪羅を展開している。ここでバラすのはどうかと思ったが、面倒だから仕方がない。

「行くぞ織斑！」

ボーデヴィツヒがワイヤーブレードとプラズマ手刀を展開させ迫って来る。俺は空へ逃げ雪羅を構える。

「そのような武装、開示されたデータには無かったが二次移行でもしたのか？」

「そんな事、どうでも良いだろう？今は戦闘中だ」

「そうだな！」

追いかけてきたボーデヴィツヒが手刀を振るい俺は雪片で受け止める。

（白式、雪羅と零落白夜の出力を60%落として推進系に回せ）

『了解、無茶しないでね』

（ああ、余裕だ）

どうせ途中で姉さんに止められるんだからやり切った方がいい。

ボーデヴィツヒの手刀を弾き、今度はこちらから追撃する。雪片を振る直前『零落白夜』を発動、大幅に相手のシールドエネルギーを削る。そのまま雪羅の『零落白夜』の爪で追い打ちだったが近距離でボーデヴィツヒがレールキャノンを発射。俺は回避行動で距離を取る。

「どうしたボーデヴィツヒ。ドイツのISはこんなものか？」

「……何故だ？」

「あ？」

「何故そのような力を持ちながら、このような場所にいる!!」

…えーと、うん？

「こんなISをファクションとしか思っていない連中としては貴様の能力も生かさない。その戦闘力があれば、軍でだって十分戦果を期待できるはずだ！」

「その戦果が欲しいから、お前らを作ったんだろ？まあ、不良品しか出来なかつ

たらしいけどな」

「不良品…だと…」

「完璧に作られたんだったら俺なんかには負けないだろ？」

「私は不良品じゃない!! 貴様を倒して、教官に…教官にイイイ!!」

叫びながら突っ込んできたボーデヴィツヒ。ここまで負の感情があるんだったらシステムが目覚めると思っていたが、まだらしい。

「なんか、怒ってたのがアホらしくなってきたな」

アリーナの端に姉さんが待機してるのが見える。どうやらまだやって良いらしい。会話は聞こえてないみたいだな。よかったよかった。

じゃあ…狩るか。

「なッ……!?どこに行った!!」

刹那、ボーデヴィツヒの視界からは俺が消えたように見えただ。

バァァン!!

「

レールカノン、ワイヤーブレードを破壊した。レールカノンは爆発して装備していたボーデヴィツヒにもダメージが入り苦悶の表情。声にも出来ないようだ。

「な…ぜ…？何故貴様が…ソレを持っている？ソレは私だけの…」

ボーデヴィツヒの目線の先には両目が金色に変色、つまりヴォーダン・オージェが発動した俺の姿。

「俺のは完成されている。この意味がわかるな？」

「…ああ…ああ…」

俺はヴォーダン・オージエを解き目の色を戻す。ボーデヴィツヒにもう戦意はない。これ以上の戦闘はムダだ。…だが、

「ISはまだ動いているな。これで終わりだ」

俺が雪片を振り下ろす。

「そこまでだ織斑。全く、やりすぎだ」

打鉄のブレードで雪片を止める姉さん。

「2人とも暴れすぎだ。流石に止めさせてもらった」

「今回の罰則は？」

「2人とも…と言いたいところだが、申請書で許可は出ていたし、オルコットと鳳も合意で戦闘していたからな。今回は不問とする」

やれやれ…といったかんじの姉さん。毎度ご迷惑かけます。

「この決着は学年別トーナメントで決める。2人とも実力はあるからな。どうせすぐ当たる。それと織斑」

「はい？」

「その武装はなんだ？」

え？と思ったがもう時すでに遅し。俺の左腕には展開したままの雪羅が…

「…さっき衝動的に動いた時、気づいたら装備してました。詳細は分かりません」

目をそらしながら答える。多分ダメだろうなあ…

「…良いだろう。そういう事にしておく」

お、マジで？

「ただし、武装のデータは出してもらうぞ。もしかしたら東がいつのまにか追加したのかもしれない」

…違うんです。これ出したのは白式です。

『ちょっと一夏!? 売る気!!』

(いやいや、しませんって。後、事実ですから)

「
では、
解散だ
」

それぞれの思いを胸に

皆様どうも作者です。少し前より春休みに入りまして塾とか学校の勉強会とかで忙しく、家でもとろけるような生活をしているので更新ペースが大分伸びてしまいました。この文章を書いている今も塾の自習室でとろけております。

何話か前より新作のアンケートを実施しています。いつかは書こうとは思っていますが、今はコレに集中していこうと思います。書いたほうがいいのは分かっていますがプロットも作らず、ストックもしていないので小説の流れが落ちてきてきたら、新作も書いていこうと思いますのでお楽しみに！

全然関係ないのですが、ちょっと前にツイッターで流行ったDX難波会長の杖（コラ）を真面目に欲しいと思いました。杖を折りながら忠誠を誓いたいですね！（誰にやねん）

では37話をお楽しみください！

ボーデヴィツヒとの模擬戦の後、部屋に戻った俺は今日のことを思い出していた。
「ククク……ここで瞳のお披露目は早かったけど、思ったより楽しかった………あ？

楽しかった？

「……ふざけてるのか俺。中身が違ってアイツはラウラ・ボーデヴィツヒだぞ。
あんな蹂躪が楽しいわけが……」

全く、口には気をつけないと……災いの元だ。……天災の元？ いや違うな。

とりあえず、学年別トーナメントまで時間がある。早々にペアを決めて連携を強化するべきなんだよなあ……普通に考えてシャルルだけど、まだ正体を知ってない

事になってるしあまり深い接触はしたくない。というかできれば女子たちの犠牲になってほしい。俺はあの波に揉まれたくない。となると…鈴とセシリアはISの修復と合わせたらギリギリ間に合わないか。箒…はボーデヴィツヒとやるには実力が足りてない。悪くはないんだけどな。俺と合わせると両方前衛だから良くない。え、じゃあいなくね？…あっ、簪さん誘ってみるか。ISも完成してるし実力も十分だ。そうと決まれば早速連絡！…っと、その前に鈴とセシリアのお見舞いだな。部屋を出て校舎まで歩いているが誰とも会わない。何故だ？いや…ドシンドシと少しずつ足踏みの音が聞こえる。おいおい！こっちに來てるじゃねえか。隠れないと…ちようど良いところに男子トイレが!!

隠れていると…

「織斑君は部屋に戻ったって誰かが言ってたわ！扉前でガン待ちしましょう！」

「「「おおー!!」」」

……アレか。学年別トーナメントがペアで行われるって発表今日だったのか…ペ

アの申請書を持った女生徒たちがすごい気迫で通り過ぎていく。……隠れてよかった。

程なくして保健室についた俺だが……入って良いものか……

コンコン……

「1年1組の織斑です。入って良いでしょうか？」

「一夏？セシリア、入れて良いわよね？」

「え!?一夏さんですか？ちょ、ちょっと待ってくださいまし!!」

ドタドタと中から音が聞こえる。そんなに動いて大丈夫か？

「入ってきて良いわよ」

「鈴さん!?まだ心の準備が……」 「ハイハイ」

…本当に入って良いんだよな？

「じゃあ、失礼します」

扉を開け中に入ると、ベッドの上でおとなしくしてる鈴と、何かあったのだろう（決して俺は知らない）セシリアがいた。ちなみに2人とも包帯でグルグル巻きだ。

「大丈夫か2人とも？」

「アンタねえ…これ見て大丈夫に見える」

「ははっ、すまん。セシリアは？」

「え、ええ。まだ痛みはありますが動くのに支障はありませんわ」

セシリアは涙目で答える。無理しなさんなって。

「そ、そうか。それで2人とも、療養中で悪いが、何があった？」

「何って？」

「ボーデヴィツヒと戦ったんだろ？その経緯だよ」

なんとなく察しはつくが、一応聞いておかないと、次に俺がどこまでやって良いか分からない。

「あ、そのことね。まず…」

鈴の話に寄れば、2人で訓練しようとしたところにボーデヴィツヒが現れ俺と模擬戦する前のウォーミングアップだと言ったらしい。で、自分のことが眼中にないと暗に言われて怒ったセシリアがボーデヴィツヒに突っ込んでいき、それを止めようと鈴も参戦。それでボーデヴィツヒに色々煽られ、鈴もキレて2人で襲いかかったがボッコボコにされ俺がきた時の状況らしい。

「2人とも…」

「分かってるわよ、私もまだ煽り耐性がちゃんとついてなかったらしいわ。普段ならあれくらい大丈夫なんだけど、セシリアを止めなくちゃって焦ってたから」

「わたくしは…祖国の侮辱に対してどうしても許せなくて…」

鈴は昔よりマシになったけどまだまだっぽいな。セシリアを止めようとしたのはナイスだけど。セシリアは…仕方ないといえばそれまでだ。彼女の愛国心とプライドがそうさせたのだろう。…もう少し落ち着いても良いと思うが。

「まあ、何はともあれ無事でよかった。…いや、無事じゃないけど後に残る傷はないんだろ？」

「ええ、2人ともないわ」

「そうか、嫁入り前の娘に傷がついたらいけないからな」

ウンウンと一人で頷く俺。何をオヤジ臭いこと言ってんだか。

「もし傷物になってたら一夏に責任取ってもらうから私は良いわよ」

「なッ!!…全く、不意打ちでもそう言うこと言うのやめなさい鈴。自分の体を大切にしろ」

鈴からのまさかの一言にビビるが、そういうコイツちょっと前から大胆だったなとか思いながら頭を撫でる。

「一夏さん!?!ま、まさかお二人はすでにそういう仲なんですの…!?!」

「違うわよ。言ってみただけよ、ねえ一夏?」

鈴、そう言い方良くないぞ。俺が主に被害を被るような言い方は…目をそらしながら俺は…

「あ、ああ…もちろん俺も分かってたさ…セシリアも良く頑張ったな」

「あっ、一夏さん…!!!」

「一夏アンタ…(あの反応…若干顔も赤いし、意外と一夏私に脈ある?)」

セシリアの頭も撫で、回避する。鈴よ、その視線はやめてくれ。こういう風な回避方法良くないって自覚あるから。

「あつ、鈴。アレは取ったか？」

「んっ、これでしょ。まさかアンタの教えがこんなところで役に立つとは思わなかったわ」

鈴が俺に渡してきたもの、小型のレコーダーである。

「一夏さん…鈴さんに何を教えたのですか？」

「明らかに態度が悪い子供みたいなやつがいたら、暴言とか侮辱とかを言ってくるかもしれないから持っとけ、って言って持たせてたんだよ。中学の時からな」

「あの頃でも女尊男卑の風潮は結構濃かったからね。それが嫌で色々言ってくる同年代の男子も多かったのよ。私は何もしてないのに。…だいたい拳で黙らせてたから使うこともなかったけど」

イヤホンを刺して片耳でレコーダーの中身を聞く。あゝ、1回目とほとんど同じようなこと言ってるな。これじゃ難しいか。

「鈴、サンキューな。あんま、有効打にはならないかも」

「そう？まあ、使いどころもないし仕方ないわよね」

「お2人とも会話がゲスいですわ…」

おやセシリア、ゲスいなんてフレーズどこで覚えたんだい？

「あ、そうだ。ISは大丈夫か？トーナメント間に合いそうか？」

「あゝ、私は無理そうね。怪我も治らないし、機体もボロボロ」

「わたくしは怪我は治りそうなのですが…ISといいますか、BT兵器の予備がこれ以上なくて…本体も直りませんし」

聞くとところによると2人ともISの損傷レベルがCオーバーらしい。まあ、無理だわな。

「そうか。今回はタッグマッチらしいからな。大丈夫そうならどっちか誘おうと思っただけど、仕方ないか」

「え!!そういうことでしたら、全力でISを修復して一夏さんのペアをして差し上げますわ!!」

「落ち着きなさいよセシリア。アンタも私も体はボロボロ、ISもボロボロ。できることは療養だけよ。諦めなさい。私だって、出来るなら出場したいんだから」

なんか最近セシリアが子犬っぽいな。こう、餌を目の前にしたみたいにな。

「ま、そういうことだ。他のペア候補も決めてるしな」

「えーと、デュノアか箒？」

「いや、シャルルには女子達の犠牲になってもらうし箒はボーデヴィツヒと当たった時の実力が足りないからな。4組の日本代表候補生を誘う予定だ。ISの開発元も同じだからいい宣伝になるしな」

「4組の日本代表候補生と言いますと…更識簪さんですか？まだISが完成してないと聞いていました…」

この前すっかり完成したからな。無駄に最高峰の奴らが作ってるから性能も良いだろうし。…マジで変な改造されてないといいけど…

「この前俺が白式のメンテで倉持に行った時はもう完成間近だったからな。出来たって連絡もあったし」

「…一夏さん、もう連絡先まで交換してますの？」

「え？ああ、お互いアニメとかで趣味があったからな。そう時間もかからなかつ

たし、性格もいい人だぞ？ちょっと内気だけど、言うときははっきり言うし」

「へえ、会ってみたいわね。（一夏、随分入れ込んでるわね。最近、そういうの多いけど相変わらずみたい）」

セシリアは訝しげな視線を向けてくるが無視。どっちかっていうと鈴の見定めるような視線の方がきつい。

「ま、そういうわけだ。すまん、酷なこと聞きにきて」

「いえ、こちらこそですわ。せっかくお誘いにきてくれましたのにこのような状態で」

「命に別状はないし大丈夫よ。ほーら！セシリアとガールズトークするんだから、男は帰った帰った」

しっしと、鈴が手を振る。おいおい、分かってるけどもうちょっとやり方あるんじゃないか？」

「アンタ途中から声出てるわよ。分かってるんだったらいいじゃない。この前のアレ晒すわよ」

「早急に去らせていただきます!!」

俺は脱兎のごとく走った。…うさぎって言ってもどこかの天災殿ではないぞ？

＼保健室 鈴side＼

「ようやく行ったわね…」

「鈴さん…よかったのですの？あんな追い払いかたをして…」

「いいのよ。少しでも元気に振る舞わないとアイツいつまでも心配するから」

全く、私の惚れた相手にも困ったものね。隠し事も増えてるし…

「…お2人の関係が、少し羨ましいですわ」

「どうしたの？ 改まって。私とアイツはただの幼馴染よ。そこまで年数経ってないけどね」

「いえ、そういうことではなく。信頼し合っていると云いますでしょうか？ あまり言葉を交わさなくても伝わるというのは、ロマンチックですわね。わたくしも一夏さんとそんな風になりたいですわ」

いつものセシリアなら自分の世界にトリップしているところなのに、今日はちゃんと云ってるわね。

「…そんな素晴らしいものじゃ無いわよ。少し波長があうだけ。たま〜に同族嫌悪的なものもあるわ」

「差し支えなければお聞きしても？」

「私と一夏はね、自分の問題は内に秘めるタイプなのよ。助けて欲しくても言わな

いから気づかないし勘違いで喧嘩になったこともあったわ。最近も…それに近いことがあったし」

まさか私があんな堂々と一夏に物申せるとは思ってたけど、やらかしたっていうのは間違いないわ。…思い出しても顔から火が出そう。

「確かに、最近の一夏さんは少し無理をなさっている風に思えます。ですが…「だからね」…?」

つい、食い気味に言ってしまったわ。

「私たちで一夏を守ってあげないとね」

そう、セシリアに言うと、

「…そうですわね。わたくし達で支えてあげませんと。一夏さんに、わたくし達の思いをぶつける良いチャンスでもありますし」

「セシリアも『達』でいいの？ライバルでしょ私たち」

「何を仰いますの鈴さん。ライバルである前に、『お友達』ではありませんか」
「セシリア…」

今のはすごい…こう、心に響くわね。たまにはいいこと言うじゃない。

コンコン。

「篠ノ之だが、入っていいだろうか？見舞いに来たのだが」

「いいわよ。ちょうどいいところに来たわね箒！あなたも混ざりなさい！」

「そうですわね、この話は箒さんいなくては始まりませんわ！」

私達は結構長い時間話してそれぞれの思いを胸に寝たわ。うーん、この言い方な

んか変ね…あ、声を大きくして話しすぎて織斑先生に怒られたのは内緒よ？

嵐のような一日

p r r …… p r r ……

『…もしもし?』

「もしもし、簪さん。今いいか?」

保健室から出た俺は、自分の部屋に戻る途中だ。この時間だったらそろそろシャルルも部屋に戻ってるだろう。今は簪さんにペアのお誘いだ。

『いいけど…どうしたの?』

「ああ、いやな。この前ISが完成したって言ってたろ? だからさ、今度の学年別トーナメントのペアになってほしいんだ」

『学年別トーナメントって、今回タグ戦なの?』

おや、知らなかったのか。…授業後はすぐに部屋に戻ったみたいだな。アニメを見てたのか、ISの整備してたのか、分からないけど。

「ああ、そうらしい。どうだ？」

『一夏はいいの？オルコットさんとか鳳さんとか、もっと適任がいるんじゃない？』

「…あの2人は怪我をして試合に間に合わないんだ。でも、最初から簪さんをお願いしようかって思ってたんだよ」

まあ、実力の再確認と、所属企業の宣伝って言う意味合いも強いけどな。……あと、魔改造されて無いかもチェックしないと。

『ふーん、倉持の宣伝ってことかな』

「あはは、まあそれもあるんだがな。できればお願いしたいんだが…」

『…いいよ。私もタッグ戦のこと知らなかったからペアいなかったし、探す手間が省けるから』

さすが簪さん!! いやゝマジでありがたい。

「マジか、ありがとな!細かいことはまた連絡するから。申請も出しとくけど…いいか?」

『申請は私が出すよ?そこまでしてもらうのは悪いし』

「気にすんなくて。…その、正直に言うと、俺と組みたい女子が書類偽造するって言う事案があるから……」

その相手はしっかり姉さんに粛清されたけどな。

『そ、そうなんだ…分かった。じゃあお願いするね。練習日とかはまた都合がいい日を連絡するから』

「ああ、頼む。…急いでいる感じがするけどなんかあるのか？」

『ん？ 貯め録りしてたアニメ見てるだけだから大丈夫だよ？』

「なるほど、邪魔して悪い。じゃあ切るな。また、アニメ関連で話そうな」

『うん。じゃあね』

そうして通話が終わる。まあ、ここに名前を書いてある申請書があるからあとは提出するだけなんだけどな。……さてと。

「隠れてないで出てきたらどうです？ ていうか隠れる気ないでしょう。気配ダダ漏れ…いや出してるのか」

「……………」

無視かよ。

「良いんですね？ 倉持に行く時もあった通りまた布仏先輩にサボってるって送りつ

けますからね？」

「ちよっと!? あれやったの君だったの!? あの後大変だったのよ!! …あ」

チヨロい。チヨロインさんびっくりなレベルでチヨロい。……フツ。

「生徒会長先輩？」

「生徒会長先輩って初めて呼ばれたわ…。そんなことより、初めましてかしらね。貴女はもう知ってるみたいだけど私がこのIS学園生徒会長の更識楯無よ。以後よろしく♪」

開かれた扇子に『挨拶』と書かれた文字。…いや、挨拶だけどさ、そのチヨイスは何さ。

「よろしくお願いします」

「あら？ 初対面だとこの扇子で引かれるんだけど…何も思わないの？」

「引かれるんならやめたら良いじゃないですか…。別に個が強いんだなあとか。あと、初対面じゃ無いですよ」

「あ、やっぱり分かってた？」

当たり前だろ。突貫工事で自室に人を閉じ込めたのなんか生まれて初めてだったよ。

「ええ、あの時閉じ込めて織斑先生にチクったの俺ですから」

「あの時もなの!? 何してくれるの!? いや、本当に!! 最近教師間で私の印象不味いんだけど!」

自業自得に決まってるんだろ？

「……………」

「何その自業自得に決まってるだろ？ みたいな顔…いやその通りなんだけどね」

扇子には『図星』の文字。自分で図星って言ったら意味ないだろ：

「まあそんなことよりも…」

「私の事情はそんなことで片付けられちゃうのね。お姉さん悲しいわ」

「……フッ、で用事はなんですか？」

文字だけ見ると背伸びしてるだけに見えるな。

「今笑ったでしょ？…まあ良いわ。本題なんだけど、簪ちゃんと最近何してるの？」

「シスコンも極めすぎると良く無いですよ？（人の事言えないけど）簪さんとは普通に友達ですよ。趣味があったんで、同じ企業所属ですし」

「シスコンてほどじゃ無いわよ。本当にそれだけ？いつときの迷いで簪ちゃんとムフフなことになったりしてないわよね？」

「（自覚ないの!? あれで!?）するわけじゃないじゃないですか。後、ムフフって表現古いですよ?」

「:一夏君て結構バツサリ言うのね。私の心にグサグサ来るんだけど」

自分の行い見直したほうがいいですよ? とは口が裂けても言えない。

「まあ、そういう性格なんで。そこは勘弁してくださいよ」

「性格なら仕方ないわね。:まあホントに簪ちゃんとは何もないようだし今回はこれくらいにしようかしら」

「ええ、そうしてください。貴女にはまだお仕事が残っているのですから」

刹那、その場の温度が下がった。

「う、虚ちゃん:?:どうしてここに?」

「またメールを頂きまして。あ、貴方が織斑君ですね。生徒会会計を務めさせてい

ただいてます。布仏虚と申します。おそらくですが、以前もメールを送ってくださいました？」

「はい、お役に立てたなら嬉しいです」

震えてる楯無を無視して俺と虚さんは会話する。

「ええ、情報提供ありがとうございます。あ、良かったら普通に連絡先交換しても良いでしょうか？また同じようなことがあれば連絡下さい」

「良いですよ、これもこの学園のためです。上に立つものがしっかりしなければ、集団はただの有象無象ですからね」

「あら、よく分かってますね。どうです？お嬢様の代わりに会長になってみては？」

「な!?ダメに決まってるじゃない!!何言ってるの!？」

「冗談ですよ、いつも苦勞させられてる分の意趣返しです。さあ、執務に戻りますよ」

「ちょ、ちょっと！私はまだ…」

そう言って、楯無は連れていかれた。…こっそりメール打ったの俺だけど、なんか哀れだな。すいません会長、今度生徒会室行くときは手土産持っていきます。あ、縫い物なんて良さそうですね
WW

「なんか、嵐が来た後みたいだな…帰るか…」

「……………教……………なぜ……………!!」

……今日はいろんなことが起きるな。まあ、アレだろうし？出て行かずにこっそり聞か。チクってたら止めないといけないし。

「シュヴァルツェ・ハーゼ隊に戻ってきてください教官!!我が隊には…私には貴女が必要なのです!!」

「先生と呼べと言っているだろうラウラ。一体何がお前をそこまで焦らせる？」

だいたい聞こえる距離まできたしここら辺でいいだろう。

「私は…強くあらねばならないのです。この力を制御し、誰にも負けない最強の力を…教官さえいれば…それが実現できる!!」

眼帯をしている左目を抑え、真剣に姉さんに言う。あゝ、そっち方面に考えたか… 1回目とほとんど変わんねえな。

「今でもお前は学年でトップレベルにいるだろう？ なんの不満がある？ 一夏とお前の模擬戦で何があった？」

む…これ以上はダメだな。

「それh：「ん？織斑先生とボーデヴィツヒ？どうしたんですかこんなところで」：お、織斑」

「織斑か、ボーデヴィツヒから人生相談を受けていな。：ラウラ話はまた今度だ。今日はもう部屋に戻れ」

おっ、思ったより反応が良いな。

「ですが…」

「すまないな。わたしも仕事が立て込んでいてな」

そう言って姉さんは去って行った。

「さてと」

「ッ……」

ピクッ…とボーデヴィッヒの方が動く。なんか最近余計に小動物感が出てきたな。

「…そう怯えるなよ、若干悲しい」

「貴様の事情なんぞ知るものか」

プイッとそっぽを向くボーデヴィッヒ。呼び方が戻った…

「邪魔したのは悪いと思ってるけどさ、お前も良くない」

「何がだ？」

「俺の眼、言おうとしただろ？」

「……ッ!! そうだ、そのことだ。何故貴様が持っている!!」

感情豊かだねえ…今の俺では持てない物だな。

「…それを知る権利はお前にはない。知りたければ…」

「なんだ？」

「そうだなあ…学年末トーナメントで俺たちに勝て。そうすれば、教えてやらんこともない」

教えるとは一言も言っていないけどな。

「……フツ、そうか。顔を洗って待っている。私は勝つ。勝たなければいけない!!」

そう言い残してボーデヴィツヒも去って行った。

「……首を洗うの間違いだぞ…ボーデヴィツヒ」

とても締まらない別れだった…

初めての…

今日の経緯

友人「誕生日おめでとう！」

作者「ありがとうございます」

友人「良し、じゃあ今日出そうか!!」

作者「…え？」

友人「まだ1文字も書いてないんすか？」

作者「え、うん…」

友人「今日までに投稿してね」

作者「いや、あの…俺今日学校…」

友人「いや俺もだから」

作者「アッハイ…」

誕生日おめでとう自分。今日は学校で腐れ縁の奴と部活の先生にしかおめでとう

うって言うてもらえなかったね！

39 話

簪さんと話したり生徒会長と話したりボーデヴィツヒと話したりした昨日。今日は授業後にひたすら簪さんと連携訓練。…いや俺昨日話しかけてないのかよ。もうちょっと楽しい青春時代過ごそうぜ？…無理です。分かってますって。

「…一夏どうしたの？」

「ん？ああ、なんでもない。ちょっと自分の高校生活に不安を抱き始めたただけだ」
「…こんなことになってる時点でもう失敗だと思うよ？」

「……………だよな」

簪さんからの会心の一撃が俺の心にクリティカルヒット。まあ、ここに来なかつ

たらあいつらとも出会ってないし、トントンかなあ…

「さて、始めようか。貸切にしたから遠慮なく訓練できるからな」

2人ともISを展開。

「…ん？一夏の左腕のやつ、データ上では見たことないけど？」

「ああ、これか。『雪羅』って言ってな。最近発現したんだ。最新版には出てるから規定上は問題ないぞ？」

「一応、データでもらえる？参考にするから」

「了解。じゃあ打鉄の情報も貰えるか？」

お互いに送り合う。

「一夏の機体って、エネルギーを多く消費する割にエネルギー効率悪いよね」

「うっ…言わないでくれ。結構辛いんだ。簪さんの機体は…へえ、打鉄で機動力重視か。面白いコンセプトだな。武装もなかなかの数値が出…て…ん？…なあ簪さん、やけに火力の高いこの『流星』って武装なんなんだ？エリナケウスとか書いてあるけど、パッケージかなんかか？」

「流星？あ、それミーティアって読むよ。まだ運用試験してないから使っちゃダメらしいけどね。…ていうか一夏、種見てないんだ…」

「ふーん、じゃあいいか。ありがとう。最後なんか言ったか？」

このミーティア？ってやつ以外は変わってなかった。使えないならまだ気にしなくていいしな。よかったよかった。…魔改造してあったらまたファンネル出さないといけなかったからな。

「なんでもないよ。一夏、模擬戦からよろしく。お互いの実力を測るには戦うのが手っ取り早いから」

結論から言おう。…この後めっちゃくちゃ訓練した。

「同日、夜」

『…時間だ』

静寂と闇に包まれるIS学園の深夜。その闇に紛れて動き出す複数の影があった。

『aから司令部、現時刻より織斑一夏捕獲作戦を始める』

『司令部からaへ、健闘を祈る』

日本語ではない言語で喋る隊長格の男は同じ部隊のメンバーに合図を取る。手で

GOサインを作る。

そして動き出す部隊。彼らは地形を完全に把握しているのか迷いなく動く。どうやら暗視スコープもつけているらしい。

部隊がIS学園の外壁に到着しようとしたその時…

ヒュン…と何かが空を切った音がした。

『ッ!! 総員周辺警戒、各員状況報告』

『ダニエル無事です』

『エディ異常ありません』

『ミッシェル周辺特に何も見えません』

「ちくわ大明神」

『ミヒヤエル問題ありません』

『「」……誰だ今の!?!?!?』

『え? あ、どうも。いつもニコニコ皆様の後ろに這いよる混沌…じゃなくて皆様

の目標です』

はいはい。ナレーション復帰しましたどうも一夏です。あ、今は状況的にSでしたね。さっきの厨二病っぽいナレーションはって？あ、作者のことか。……世の中知らない方が幸せなことってあるんだぜ？

『織斑一夏だと!? 何故こんなところに?』

『いやいや、俺の…俺たちの大事な学園に悲しいことに侵入者があるなんてちよつと耐えられなくてね…まあ早い話…』

貴様らを処理しに来ただけだ』

殺気全開で俺は奴らを威圧する。

『…ハッ、何を言うかと思えば。本職舐めてんじゃねえぞ』

隊長格の男がそう言う。

『へえ……じゃあコイツ本職じゃなかったんだな。あまりにも注意がおろそかだったからつい殺っちゃったよ』

俺は一瞬で他の男の背後に回り

『ミ、ミヒヤエル!? 織斑一夏、貴様タダでは済まさんぞ!!』

『え、いいの? 俺に何かあったらロシアがどうなっても知らないぜ?』

国家が動いたんだ。覚悟くらい付いてるはずだ。

『何故祖国の名を!?!』

『……俺ら今何話してると思ってたんだよ』

『あ……』

コイツは…なんかボロボロ全部喋りそうだから残すか。後は…隊長っぽい奴だな。残りは全部処理で良いな。――

『えーと、お取り込み中のところ申し訳ないがそろそろ続きをするぞ？こちとら無断外出だからな。お前らもロシア代表に見つかりたくはないだろう？』

『くっ、舐めおって…各員行くぞ!!仲間の仇だ!!』

うっわ。これじゃ俺が悪役みたいじゃん。俺、主人公だよ？

『やってみる。俺は襲われた側で、お前らはただのテロリストなんだからなァ!!』

まず前に姉さんにとられた拳銃で1人の足を撃ち抜く。次にナイフを振り下ろしてきた奴は俺のナイフを当て逸らす。体制が崩れたところに蹴りを入れ吹っ飛ばす。今のは思いつきり鳩尾に入ったな。

一瞬で2人やられたのが見えたその他の奴らは後退した。

『このガキ、なかなか出来る!』

『おいおい、後退なんかしなくなたっていいんだぜ? 俺の対人戦デビューなんだ』
『平和ボケした国のただのガキだと思ってたが…』

1 回目の時ならそうだったんだがなあ…まあ、お前らの場合運が悪かったただけだ。某、アインズ様の言葉を借りるなら。無抵抗で死ね。

ああ、なんか、体が熱くなってきた。

『クフフ、第2ラウンドだ。さあ、やろうじゃないか。命のやり取りなんだ。この時間を大切に過ごそうぜ』

『なんだコイツ…なんなんだ!!』

俺の剣幕に押されたのか少し後ずさる侵入者たち。おいおいあんまり足元をおろそかにすると…

グチュン…

『あああああああ………!!俺の…足があ……!!!!』

『ッ!?ミッシェル!!くそッあの野郎!!』

俺が仕掛けたのは最近でいうと…ボーデヴィツヒのIS『シュヴァルツェア・レーゲン』の武装、ワイヤーブレードに使われてる強度のワイヤーを細くしたものだ。しっかり切れたようで安心安心。

『仲間の心配してる場合かァ?』

『なにッ!?』

無傷の奴の気が逸れてるうちに俺は近づき右腕を飛ばす。

『全滅…だと…!?』

『なあ隊長さん、これが本職の実力か？』

別にまだ1人しか殺していない。他は、損傷こそあるものの致命傷ではないし。蹴っ飛ばしたやつなんて打撲で済んでいる。あ、いや骨折はしたか？

『貴様…その力…一体どこで？』

『ん？ああ違う違う。俺の方が本職として格が高かったってだけさ』

『まさか…亡国か…』

お、自力でたどり着くのはポイント高いな。だからこそ、よくないな。

『さあ？どうでもいいじゃないかそんな事。今から消える人間にはな。…あ、利き手どっち？』

『…っ、なぜ貴様に言わねばならん』

時間かかるのは良くないんだがなァ：

『飯食うのに利き手じゃないと不便だろ？』

『もうすでに勝った気でいるのか…？』

『いや、正直な話戦いにもなっていないからな？俺の正当防衛だよ』

ウンウン、犯罪良くない。

『それが貴様の甘さだ!!やれ!!』

隊長がそう言うのと同時に痛みから復帰したのだろう、蹴っ飛ばした男と足を撃ち抜いた男と右腕飛ばしたやつが襲いかかってきた。足を切られた男…ミッシェルだっけ？…まあそいつはサイレンサー付きの銃をこちらに向けている。

『甘いのはお前らだよ』

俺は背後から来た片腕の男の額を右手に持った拳銃でノールックで打ち抜いた。その後残りの2人は挟み込むように来たため、ジャンプして木の幹に。そして左手のナイフを逆で持ち、幹を足場にして1人にめがけて勢いよく首を切る。着地後は右手の拳銃で額を打ち抜きチェックメイトだ。

『……………後は、アンタとそこのお前だけだ』

『ああ……………仲間が……………』

『……………』

一瞬で殆どが殺された呆然としている隊長に、仲間の死を悼むミッシェル君。うん、完全に俺がラスボスだ。

『……………大人しく投降しろ。…とは言わない。お前らにも面子があるだろう。勇敢な死を遂げさせてやるからかってこい』

『…………悪魔め』

悪魔？初めて言われたな。…でも、

『クフフ…良いねえ。そうだなあ、悪魔か。…間違っていないかなア…願いを叶えるために未来からやってきて、自分勝手に行動していく。俺は己のために悪魔となろう!!』

途中から日本語で喋ってたのも気づかないほど俺は夢中で喋っていた。

『何を言っている!!クソッ、こうなったら俺だけでも!!』

『おっと、それは頂けない』

俺は俊足で近づき隊長の首元にナイフを当てる。

『お前が動いたら思わずあっちの奴に向かって引き金が』
『この外道めが!!』

なんとでも言ってくれ。俺はもうそう言う世界の人間だ。

『あ、動いたな？じゃあお仕置きのゝバン!』

麻醉銃をミッシェル君に撃つ。

『貴様!? ミッシェルまで…俺ももう終わりか…』

こうして俺の対人戦デビューと初の直接的な人殺しが終わったのだった…

デュノア

40 話

「うっ… おえええ…」

やあみんな絶賛嘔吐中の一夏だぜ。お見苦しものを見せている自覚はあるが許して欲しい。

数時間前に学園の侵入者を2人以外殺した俺だが、生き残りの2人は前もって呼んでおいたスコールの姉貴に任せた。その際…

「一夏、今日は辛いと思うけど、なんとかして寝なさい」

って言ったのはこういう事か…もう何度も、ユニコーンのビームマグナムで研究所ごと人間を焼き払っていたりしていたが、今回は生の…直接の殺し。意識し

ていないつもりでもキツイものがあつたんだろうな。自分の体くらい分かつてるつもりだったんだが、まだまだ甘いって事か。

「気持ち悪りい……うがいもしとくか」

「一夏？ どうしたの、大丈夫？」

「ああ？ ああ、シャルルか。大丈夫、ちょっと良くない夢を見ただけだ」

そう、あれは夢のような出来事だったな。

「そう？ 無理しちゃダメだよ？ 私何か手伝えることある？」

「いや大丈夫だよ……おやすみ、シャルル」

寝ぼけてたせいか演技が崩れてる。こいつマジでスパイ向いてないなって今更ながら思う。

…俺も寝よう。

翌日、放課後のアリーナにて

「簪さん…遅くなって悪いな…」

「あつ、一夏？全然大丈夫…ちょっと、なにその顔!？」

いつもの練習時間より遅れてきてしまった俺は簪さんに叫ばれてしまった。

「ん？ああ…大丈夫大丈夫。昨日ちょっと良く無い夢を見ただけだから」

嘘です。夢どころか全く寝れませんでした。俺も鏡見てビビったよ。隈が凄いから、いやマジで。朝、箒と鈴に会った時もめっちゃ心配された。…良い友人を持っ
たよ。

「ホントに大丈夫？…いやでも」

簪さんが突然ブツブツ言い出した。え、なに？

「一夏」

「は、はい！」

すごい低い声で喋り出した簪さん…いや簪様。何故だろう…逆らってはいけない気がする。

「練習は無しにするから、今日は部屋でしっかり休んで」

「えっ？ いやでも、もうタッグマッチ戦まで時間が…」

「休むの！ ペアとしてじゃなくて私個人として、一夏を心配してるの!!」

グッと顔を寄せて言ってきた簪さん。そんなに心配させたのか……

「……分かった。今日はしっかり休むよ。……だからさ、その……ちょっと離れようか？」

「え？」

自分がどんな行動をしたか、やっと理解したらしい簪さんはボツ！と顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「あううう……///」

可愛いだよ。……ハッ!? 俺は何を…

「でも、ありがとうな。心配してくれて…」

俺は俯いている簪さんの頭を撫でる。そうすると簪さんがプルプル震えだし…

「ううう……一夏のばかああ……」

といった具合に走って行ってしまった。……また俺無意識にやってしまったか……？ 治ったと思ったんだけどなあ……ごめん簪さん。羞恥心をパンクさせてしまった……

「……帰るか。気配もないし、あの駄姉会長もないし問題なく帰れるかな」

く一夏、シャルルの部屋く

「……………過去の過ちをどう正すべきか」

今、シャルルがシャワーを浴びている。そして今朝俺は昨日の気分を消すためシャワーを浴びた。その時シャンプーが切れたのだが……すっかり忘れてたな。

「今持って行ったら一回目と同じ結果に……いやしかし流石に女子にシャンプー無しは……」

「一夏〜？」

「は、はい!？」

やばい、聞こえてた……？

「シャンプー切れてるんだけど、新品ある〜？」

「あ、ああ、ちよつと探すな〜」

俺に決断の時間を与えてはくれないか……どうする……

「見つかったら扉の前において貰えるかな？」

「わかった」

そ、その手があったか……これで俺が直接女子だと知ることは難しくなったな……仕方ない。

「開けたらすぐのところに置いとくな？ ちょっと飲み物買ってくる。なんかいるか？」

「んー、じゃあ紅茶を頼もうかな。後でお金払うね」

「気にすんなくて」

白式をP.C.があるデスクに置き、部屋を出て一番近い自販機まで歩く。体に良くないからあんまり飲まないんだけど、久しぶりに炭酸でも買うか。

（ユニコーン、白式に少し我慢してくれって伝えてくれるか？）

『今、お話してたからお姉ちゃん聞いてたよ。分かった、って』

（そうか、ありがとな。白式になんかされたら迷わずに白騎士に言うんだぞ？）
『…はい』

なんか、白式や白騎士と話すようになってから明るくなったか？俺もたまに白騎士から強制的に参加させられるけど、言葉に明るさが出てるな。

自販機のそばに、休憩用の椅子があるためそこに座り、スマホを出して部屋のカメラのリアルタイム映像を確認する。

「なんかしてるかなあ？」

自分の部屋の様子をカメラで見るのはあまり気分のいいものじゃないけど仕方ない。
い。

『あれ、一夏戻ってないなあ……売り切れてたのかな？』

シャルル……もうめんどくさいからのデュノアでいいか。どっちで呼んでも紛らわしいし。デュノアがシャワーを終え、いつもの寝巻きで戻ってきた。

『うーん、それにしてもこれきついなあ……胸を潰すためだから仕方ないけど気分のいいものじゃないし、シャワーの時だけは外せるけど、時間が短い。それよりお風呂にも入りたい……』

はい証拠頂きました。良かったあ……俺の行動のせいで、歴史に何か異常でもあるかと思ってたけどまだ大丈夫そうだな。

『それにしても一夏遅いなあ。そろそろ戻ってきてもいいんじゃないかな……ッ!? これは……一夏の専用機? 置いて行ってたの?』

おっ、食いついた。白式には悪いなあ……

『今なら……白式のデータを……』

「……行くか。紅茶だったな、俺は……ラムネでいいか。……なんで自販機にラムネ売ってんの？」

ちよつとよくわからないけどまあいいや。それよりも……

「ただいまシャルル。近くに自販機あったに忘れててな。結構遠くまで……何してんだ？」

「い、一夏!? い、いや……一夏の白式の待機形態がどんなのか見てただけ……だよ？」

ふーん、そっかー。……無理ありますねえ。

「そうか、あつ、これ紅茶な」

「え？う、うん。ありがとう」

「それとシャルル？」

「どうしたの？」

「両手を上げろ。心優しいシャルル君、俺に、ルームメイトを撃たせないでくれよ

？」

「ッ!？」

俺はいつもの拳銃を取り出し、デュノアに向ける。

「どういう……事？」

「お前に答える必要はない。ああ、別にお前の内ポケットのソレはくれてやるよ。要求を飲んでくれるならねえ」

「……………」

「へえ……この状況でそんな顔するのか。じゃあ仕方がない。……お前の身ぐるみ剥いで写真撮って先生に通報するだけで今回の件も終わるし、それでいいか」

「……ッ!! バレてる……」

「バレてる? 今更すぎんだろ。お前隠す気あるのか? まだ男装が趣味のボーイッシュな女子って言った方が皆信じるぞ?」

「……要求って何?」

デュノアの低い言葉。よほど焦ってんなあ……

「デュノア社長に電話をかけろ。かけた後は携帯をこっちに渡してベッドにでも座ってろ」

「分かった」

デュノアが電話をかけ、携帯をこっちに渡してきた。俺は背を向け携帯を耳に当てる。

「……ッ!!」

「ああそうそう、言い忘れてたけど……」

カシュン……

「ヒッ!？」

俺がデュノアの方を見ずに撃った弾が、デュノアの目のすぐ横を通る。弾は枕に当たったため壁が壊れることもない。

「こんなことも出来るから、あんまり動かない方が身の為だぞ？」

「……………」

俺に対してどうにかしようと立ち上がろうとしたデュノアを牽制。

「おっと、ちょっと黙ってるよ？ 繋がった」

俺はボイスチェンジャー付きのマスクをし、デュノア社長に呼びかける。

『どうしたシャルル？何か問題があったか？』

電話から聞こえてきたのはデュノアの父親、アルベール・デュノアの声。俺はフランス語で話す。

『アルベール・デュノアだな？』

『ッ……貴様は誰だ？』

『誰？そうだなあ……まあ名前などどうでもいいだろう？それよりも……貴様の娘、シャルロット・デュノアは預かった』

『ッ!?なんだと……』

「……ッ!?」

なんとわかりやすい反応だろうか。デュノア自身も、本名まで知られてるとは思ってなかったのか、名前を言うときすごい形相でこちらを見る。俺は、携帯をハズフリーにした。

『預かった、という言い方は正しくないな。生殺与奪が私に握られている、という言い方が正しい』

『どっちも変わらないだろう！……貴様、何が目的だ？』

『それもまあ、貴様の言動と行動次第だなあ……』

『……要求はなんだ？』

やっこの話か。

『シャルロット・デュノアを手放してもらおう。代わりに私が入手した織斑一夏のISのすべてのデータをくれてやろう』

『なっ……!?!』

「えっ……」

何を言ってるの？みたいな目でこっちを見てくるデュノア。まあ、こっちが絶対有利なはずなのにちゃんと相手にも見返りがあるからな。

『どうした、破格の条件だろう？もともとその為にシャルロット・デュノアをIS学園に送ったのだ。どこに問題がある？』

「……」

『……私が要求を飲んだ場合、シャルロットはどうなる？』

『どのような国でも、優秀なIS操縦者は必要だからな。どうした、足りないかならば仕方ない。他国の代表候補生のデータもやろう』

『ふざけるな。第一、そのデータが本物だとは限らないだろう』

……一回目の時、俺はデュノア社長と殴り合って本音を吐かせた。今回はもっと醜い方法だが……俺はあのデュノア社長がもう一度見たい。

『こちら側が絶対有利な条件でこれだけ破格の物を用意したのだぞ？別に断るのは自由だ。貴様の娘がちょっと良くないことになるだけだしな。何が貴様の決断を鈍らせている？』

『……あの子は私の愛人との子だ』

「……ッ」

『私はたとえ愛人でも、1番に愛していた。そして生まれたのがシャルロットだ』
『貴様の愛を聞かされて私の心が変わるとでも思うのか？』

ちよつと意地悪い言い方だがこれも必要な手順。

『つまりは……データなぞ要らん!!それよりも私の娘を返してくれ!!』

「…………お父さん」

『本当にか？聞いたところによると貴様の本妻はシャルロット・デュノアを平手打ちしたらしいではないか。今、シャルロット・デュノアを返したところで何が変

わるのだ?』

『ロゼンダはあの後、後悔をしていた。子供が産めない体で愛人が子供を作っていたから少し思うところがあつたのだろう。出来れば謝りたいともな』

「……………あの人が」

『ではデータは諦めるのか? デュノア社が第三世代機を開発出来ていないこの状況で』

もう本音は聞けたし会話を続ける必要もないんだけどな。

『ああ、愛する娘を犠牲に得たデータなんて、たとえこの身が滅びようとも使つてたまるか』

「お父さん……………お父さん……………!」

デュノア社長の言葉を聞いて泣き出したデュノア。……………いや、なんか……………ごめんな。

『……合格だ、アルベール・デュノア。後は貴様らで話せ』
『なに？ どういう意味だ？』

俺は携帯をデュノアに返す。勿論ハンズフリーは切った。

「正体バラしたらお前をバラす。物理的に」

「……ぐすっ、ありがとう……一夏。僕は……」

「いいから出てやれ。俺はもう一回自販機に行ってくる」

「……うん。それと一夏」

「なんだ？」

「さっきのバラすっていうの、あんまり面白くなかったよ？」

「………そうか」

俺はまた部屋を出る。面白くなかったかあ……

「自販機付近」

「久しぶりにラムネ飲んだけど美味しいな。蓋開けるときに瓶ごと破壊しそうだったのはマジで危なかったけど」

いや〜人助けって良いなやっぱり。清々しいね！昨日大虐殺した後だけど。

「この自販機さっきと品物変わってるんだけど？なんでここにユグドラ汁あんの？」

俺が自販機に対してツツコミを入れてると……

「あれ、一夏じゃない？どうしたの？」

「ん？ああ、鈴か。いや、自販機でなんか買おうとしたんだけど……」

「あゝ、種類変わってるのね」

「知ってるのか？」

「もう、寮ではお馴染みよ。自分の欲しい飲み物は置いてあるから、誰も気にしてないわ」

「そ、そうか」

だとしてもユグドラ汁はダメだろ。怪物化しても知らんぞ？ていうかまず缶切り持っていないと開かねえじゃねえか。

「そういえば一夏、今日も簪って子と訓練してたの？」

「いや、俺の顔色を見るなり今日は中止だって。別に大丈夫なんだけどな」

「いや、その顔でいけるって言われても無理よ。よくある秘密結社のボスみたいな
のよりエグい顔色してるわ。その子も絶対心配してたわよ」

いや、うちのボスの悪いこと考えてる顔には負けます。

「そうか？まあ正直、昨日ほとんど寝れてないし今スッゲェ眠い」

「あら、私の膝貸してあげようか？ちょうどそこに椅子あるし」

「んゝ、じゃあ頼む。……そろそろ限界だったんだゝ」

「へっ？ちょっ、一夏……///」

俺は倒れこむように鈴の膝に頭を置く。あつ、柔らかい……意識が……

「すう……すう……」

「よほど疲れたのね……ふふっ、お疲れ様一夏」

起きてから2人が気まづかったのはいうまでもない。

VS
ボーデヴィッヒ

41話

6月ももう終わりが見えてきた。学校は学年別トーナメントの雰囲気になって
いる。

「簪さん、準備はいいか？」

「うん、大丈夫」

学年別トーナメント当日、俺たちはトーナメント表の前にいた。

「それにしても今日の第1試合とは運が良かったよ」

「……最初に手の内を明かすことになるから良くないんじゃない？」

「普通はそうだけど、手の内を晒してそれで優勝したらカッコイイだろ？」

「ふふっ、確かに！」

俺個人としてはさっさとコトを起こせるから良いんだけどな。

「まあ、初戦の相手がこの2人だとなかなか骨が折れるけどな」

トーナメント表の第1試合には、

第1試合『織斑一夏、更識簪 VS ラウラ・ボーデヴィツヒ、シャルル・デュノア』

「……シャルルが公平にするために抽選でペアを組んだって言ってたけど、よりによってボーデヴィツヒとか」

「……多分この学年最強のペアだと思う」

「いやそこは多分大丈夫だと思うぞ」

「なんで？」

「ボーデヴィツヒは連携を取ろうとしないはずだからな。実質2対1対1みたい

なもんだ」

「……なるほど。まあ、訓練通りにやれば大丈夫だよ。倉持の凄さ見せないかね」

「そうだな。頑張って勝とうぜ」

「うん！」

俺たちの機体はどちらとも倉持技研が製作した事になっているから、他の企業から目をつけられることはないと思いたい。俺は無理だけど。

ていうかやばいな。現時点、俺以外で1年最強の2人が相手となると、簪さんと連携を取りながら力を抑えるのが難しいな。面倒だし、VTシステムはさっさと終わらせよう。よく分かんなかったんでぶった斬りましたって。

＼side シャルル・デュノア＼

……早めに一夏と組んでおけばよかった。よりによってボーデヴィッヒさんとペ

アになるなんて……

「おい、デュノア、私は織斑一夏をやる。お前はペアの方の相手をしろ。手は出さな」

「別に良いけど、危なくなったら加勢させてもらうよ？ 僕も企業のメンツがあるから負けられないんだ」

すごく不機嫌そうなボーデヴィツヒさん。黙っていれば可愛いんだけどなあ……

「ふん、貴様の助けなどいらん。……と言いたところだが、この前の戦闘で織斑一夏の実力はそこそこある事がわかった。万が一にも私が危険なんて言う状況はあり得ないが……」

「分かったよ。よろしくね」

「……ああ」

思ってたイメージと違うなあ。なんか自分一人で倒せる!!みたいな感じかと思っ
てたけど、結構素直?

「……私以外が、アレを持っているなんて……誰が認めるか……!!」

前言撤回、やっぱり難しい!!

＼side一夏＼

「まさか一戦目の相手がお前らだとはな」

「僕の正直驚いてるよ。運がいいのか悪いのか」

「良いんだろうぜ? 少なくともソイツにはな」

「ッ!! 織斑一夏……貴様だけは……私が私であるために……絶対にここで潰す……」

!!

なんか昔のマドカみたいなこと言ってら。

「出来るものならやってみろ、相手してやるよ。簪さん、デュノアを頼んだ」
「うん、私も初めての实战だから頑張る」

俺たちはISを展開し、試合開始の合図を待つ。

5、

（白式、今回も無茶するぞ）

4、

『……もう慣れたよ。せめて負担がかかりすぎないようにしてよね』

3、

（努力はするさ。よろしくな）

2、

『はい』

1……試合開始。

「叩きのめす!!」

開始直後、ボーデヴィツヒがプラズマ手刀を展開させ突っ込んできた。簪さんとシャルルは空中に移動、お互い牽制を始める。俺はと言うと……棒立ちだ。

「ッ！、貴様、舐めているのか!!」

「いや、至極真面目だぜ。必要がないだけでな」

「貴様!!」

俺は雪片を出し鏢迫り合いになる。

「1対1でいいのか？せっかく強い奴が仲間だと言うのに」

「ふん、貴様なんぞ、私一人で充分だ!」

「じゃあ、俺は頼らせてもらおうかな!」

俺がそう言った瞬間後ろから6発のミサイルが飛んでくる。

「なにッ!?!」

ボーデヴィッヒが俺から距離を取る。ミサイルは俺の目の前に落ちるが俺は後ろ

に引いて回避。

「大丈夫一夏？」

「ああ、ナイスタイミングだ」

「僕のこと忘れてないかい！」

「もちろん、簪さん」

「うん」

同じところにいた俺と簪さんを狙ってデュノアが剣で追撃。

「あなたの相手は私だよ」

「ッ」

簪さんは超振動薙刀の『夢現』で切り返す。ごめんな簪さん、任せる。

「こちらから行くぞボーデヴィツヒ」

俺は瞬時加速で正面から突撃。

「甘い!!」

ボーデヴィツヒが右手を突き出し『A I C』の予備動作に入っただのを見て俺はさらに動く。

「お前がな!!」

とてつもないGがかかるのを無視して俺は急停止、からの右に抜け、雪片で装甲部分に一撃入れる。『A I C』に集中していたボーデヴィツヒは避けきれない。

「ッ!!このッ!!」

「おっと危ないッ」

お返しとばかりにプラズマ手刀で切り込まれるが難なく回避。

「もう一撃だ……ッ!?」

「やらせないよ!」

上からアサルトライフルの雨。簪さんと戦いながらこっちも見てんのか……

「ふッ!!」

「うおっと!?!」

隙を見てボーデヴィッヒも攻撃してくる。今度はワイヤーブレードも混ぜた多段攻撃。

コイツら地味に連携が取れてる!?

「ああもう!! 『雪羅』!!」

これ以上ギアを上げるとかえって怪しまれるから仕方ない。俺は『雪羅』を展開してエネルギーシールドで身を守る。

「あんまり無駄なエネルギー使わせんな!」

「知るか」

今度はレールガンで正確に俺を狙ってくる。

「私も……忘れないで!」

簪さんの荷電粒子砲『春雷』がレールガンの弾にあたり爆発。普通なら視界困難だが……ハイパーセンサー状況下だとそんなものないに等しい。

「逃すか！」

ボーデヴィッヒがまた『A I C』を発動する。……が、避けやすい。

「当たらねえよ！」

1 回目の時、鈴が『A I C』は空間作用兵器だと言った。つまり爆発の煙の歪みを見れば一目瞭然。

「くッ！なぜ当たらん！」

「発動までが遅すぎるんだよ。眼を使ったらどうだ？あ、制御できないんだっけ？ゴメンゴメン」

俺は一瞬だけ瞳を発動させ目を金色に光らせる。……一瞬でも少し来るな。

「ッ!? 貴様ァァ!!」

「分かりやすい攻撃だ、これでも食らえ」

俺は雪片を投擲、勢いがついていたボーデヴィッヒは避けきれず逆に吹っ飛ぶ。

「ぐうッ!？」

さてと、簪さんは……ッ!!

簪さんの方を見ると、今まさにデュノアのパイルバンカー『シールド・ピアーズ』が炸裂しようとしていた。

「させるか!!」

俺は投げた雪片を拾うことなく瞬時加速でデュノアに迫り蹴り飛ばす。

「え、うわッ!?」

「一夏!？」

「大丈夫か？」

「う、うん」

俺がISを蹴り飛ばしたことに驚いてるのか、啞然とした顔で受け答える簪さん。

「変なことしないでよ一夏。びっくりしたよ？」

「あれくらい予測しようぜシャルル、これはタッグマッチなんだからな」

「そうだね。そろそろ本気でいかせてもらおうよ」

「簪さん、アレ、かましてやれ」

「いいの？」

「おう、ドーンとな」

「うん！」

俺は簪さんに一言告げボーデヴィツヒを倒すために戻る。そろそろ復帰してるだろ。

（白式、荷電粒子砲を使う。出力を15%まで落としてくれ）

『いいの？ まともにダメージ入らないよ？』

（地面にしか打たないからいい）

『分かった』

流石相棒、いい仕事してくれるぜ。

「うわああああ!!」

叫び声の方を向くと。大量のミサイルが変幻自在な動きでデュノアを追い詰めて

いた。……よく考えたら恐ろしいな。怖さが違う。

簀さんの第三世代兵装『山嵐』。厳密には第三世代なのはそのシステムのマルチロックオンシステムだが、山嵐は6×8、48発のミサイルを手動で操作している。つまりは、回避行動を取れるミサイルが48発、自身に迫ってきている状況。現に今もデュノアが必死な形相でミサイルを撃墜している。アレを撃墜できるデュノアの技術もスゲーけどな。

ていうか何気に瞬時加速使って逃げてるな……いつの間に覚えたのか。高速切替も使って、必死すぎるだろ。

「私を無視するな!!」

「ッ……おっと」

復帰したボーデヴィッヒがレールガンで俺を撃つ。体をそらして交わしたが、レールガンの弾はデュノアを追いかけているミサイルの一部にあたり爆発した。

「あっ……」

「ボーデヴィツヒさんナイス！ふッ！」

すまん簪さん、マジで。

「危ないじゃないか」

俺は『雪羅』の荷電粒子砲で射撃。ボーデヴィツヒの手前にあたる。

「ッ!! 遠距離兵装……」

少し警戒の色を濃くしながら、下がっていくボーデヴィツヒ。俺はその間に雪片を拾い立て直す。

……そろそろ決めるか。これ以上の戦闘はエネルギーがキツイ。先にデュノアからか……。

俺は瞬時加速を使い戦闘中のデュノアの背後を取る。

「悪いが先に落ちてもらうぜ？ 『零落白夜』」

「え!? しまった!!」

一瞬だけ、最大出力で『零落白夜』を装甲が無い部分に当て一気にシールドエネルギーを減らす。

「これで……!!」

そこへ待ってましたと言わんばかりに簪さんが『春雷』でトドメを刺す。

『ラファール・リヴァイヴカスタム、シールドエネルギーエンプティ』

「簪さん、タイミング完璧！このままボーデヴィッヒも」

「うん、任せて！」

「舐めるなァ!!」

そこへボーデヴィツヒがプラズマ手刀で迫って来る。俺はまた鏢迫り合いの形を取りボーデヴィツヒを抑える。

「もうお前を守るナイト様はいないぜ？」

「そんなもの、私には必要ない！」

「その意地が命取りだったな！」

直後俺はボーデヴィツヒを弾き、離れる。

「逃すものか……ッ!？」

俺が離れた理由、簪さんがまたミサイルを48発撃ったからだ。最初は俺をロック

オンしていたが途中から簪さんの操縦でボーデヴィッヒにターゲットが移ったんだろ。直前まで、警告文が映らなかったのか避ける動作をすることなく、全弾しっかりボーデヴィッヒに命中する。

「ぐッ!? うう……!!」

必死に耐えているが、おそらくもう無理だろう。……後は仕上げだ。

く side ラウラ・ボーデヴィッヒく

（負けるのか……私が本物だと……証明出来ないまま……）

なぜただの一般人だった奴が『越界の瞳』を持っているのか……いや、どうでも良い。

(なぜ、私は奴を倒す力がないのだろう……)

私は軍で育ち、教官の指導のもとに最強に至ったはずだ。

(……欲しい。奴を……いや全てを……薙ぎ倒し……蹂躪する力が!!)

『汝……力を欲するか？己の身を捧げ、全てを喰らい尽くす力が……』

それは悪魔からの甘い言葉。

(……力を、寄越せ!!)

Damage level……D.

Mind condition……Uplift.

Certification……Clear.

《Valkyrie Trace System》……boot.

Extraphase……standby

）???
（

「何も感じないな……もうすこし何か思うところがあると思ったが……」

「私も……準備は出来たし、もういいのでは？」

「まだだ、万が一、喰わないという可能性もある」

「……もう少し待ちましょう」

「ああ、全ては我らが望むラグナロクの為に」

縛られし狼と解き放たれし一角獣

42話

来た。

「あああああああああ！！！！」

突如としてボーデヴィツヒの機体から電流が迸る。

「何が……起こってるの？」

「簪さん、シャルルを連れて下がってろ」

「え？でも……」

「いいから、早く」

アリーナ観客席も防護壁が展開されていき、ボーデヴィツヒの機体も装甲がドロドロに溶けて全身を包み込んでいく。

「VTシステム……」

「え……嘘……あれが？」

「ああ、おそらく元となったデータは……」

そして形作られたソレは

「姉さん、織斑千冬だろうな」

暮桜を纏った姉さんを模した真っ黒なモノ。

「多分全盛期の頃のデータだな。アレが本当にヴァルキリーを冠するものなら」

やっぱ何回見ても気分のいいもんじゃない。ドイツの違法研究所を潰した時に一緒に破壊すればよかった。

「じゃ、じゃあ一夏も逃げないと。教員部隊がなんとかしてくれると思う……」

「ダメだ。本体がボーデヴィツヒだとしても、アレは俺の姉のデータだ。家族の不始末は俺が片付ける。お前は早くシャルルを連れて回避しろ」

「……勝てるの？」

本人にはまだ分からんけど、コピー程度なら勝てるだろう。

「多分勝てる。今アイツが攻撃してこないのもこちらが攻撃意思を示してないからだろ。プロگرام程度に負ける俺ではねえよ」

「エネルギー残量は？」

「零落白夜を一瞬しか使っていないから余裕で残ってる」

なんなら一撃ももらってないからまだ90%以上は残ってるな。

『IS使いは荒いくせに』

(ソレは諦めろ)

「……勝ってね一夏」

「ああ、もちろん」

少し迷って簪さんはデュノアを連れて出て行く。同時に教員部隊も来たようだが、攻撃していないところを見る限り姉さんが何か言ったのだろう。

「さてと……来いよ模造品。お前の信じる織斑千冬になれたんだぜ？自分のものじゃない借り物の力で、その気持ち晴れるんなら……胸を貸してやる」

俺は片手で雪片を構える。ソレを見てVTシステムは動き出す。一閃、ヤツの雪片が俺に向かうが、タイミングを合わせて俺の雪片を打ち付ける。

すると……

『ッ!?!』

ヤツの黒い雪片は砕け散りその手には折れた雪片の柄しか残らない。

「本物は……俺の尊敬する姉の剣は、こんなもんじゃねえんだよ!!」

俺はヤツの腹を袈裟斬り。中からボーデヴィッヒが出て来る。俺はまだ完全に出てないボーデヴィッヒの腕をつかもうとする。

刹那、もう一度機体がボーデヴィッヒを取り込み再起動する。

「なに!?!まだ動くのか……」

またもや機体が溶け、グニユグニユと蠢く。

「1回目の時こんなことはなかった……一体何が……ッ!？」

目?のような場所が一瞬金色に光ったと思うと、俺は力が抜け落ちたように感じた。

「今のは……? まあいい。それよりも……コイツを完成させるのはマズイ気がする……先にユニコーンで消滅……チッ」

中にまだボーデヴィツヒが居るんだった……それに周りにもまだ教員部隊がいる。

「まともにやり合うしかねえってのか……!!」

すると少しずつ形作られていく。まず見えたのは尻尾。機械的なものではなく本当の動物のような物。続いて足、通常の人型のものではない、膝で折れ曲り瞬発力の高い構造なのが見て取れる。次に胴、少し角ばったデザインで胸のところにISコアが見える。……が、変色し見ているだけでも引き込まれそうな純黒の色をしている。腕は意外と細身で、特徴は指と爪の部分が人間のソレより長いことくらいか。頭部は狼のような耳と牙が見える。そして最も特徴的なのは各部位に巻きついている鎖だ。

「狼の見た目で鎖とか、まるで神話のフェンリルだな……」

『ご明察』

「ッ!? 誰だ!!」

周りには誰も見えない、ISの索敵から逃れられるほどの距離にいるのか、それともISにも作用するステルスか……

『探しても君には見つけれない。それよりも、敵に目を向けなくていいのか？』

声を聞き、機体の方に目を向けると、背中から二つの黒い球体が飛び出し本体と似たような形をとる。唯一違うのは、胸のISコアがないという点。

「あれは……」

『スコルとハティ。まあ、フェンリルの子機と思えばいい』

「大層、有名な名前をつけるんだな。それにしても……何者だ？」

『それは自分たちで見つけ出せ。まだ、我々を知るには早い』

第三勢力……俺を殺した奴らか？

『グルルル………』

フェンリル、声がそういった機体は低く唸り声をあげる。

「チッ……ヴォーダン・オージェも使わないとキツそうだな……」

俺は瞳を発動させようとする。……が、

「発動しない!?……さっきの力が抜けた感覚……まさかヤツが、機能を停止させたのか」

『神話ではフェンリルはオーディンを飲み込む。たかが瞳程度、造作もない』

「……ボーデヴィツヒのもか?」

『あの個体の物なら完全にフェンリルが奪った。もし個体が無事でも、その体ではもう力は行使出来ないだろう』

やってくれる……まったくもって面倒な……

『『グルッ!』』

「行かせねえよ……ッ!？」

スコルとハティ?の動きを止めようとした俺だが、本体であるフェンリルに止められてしまう。

なんだ今の……見えなかったぞ……早すぎる……あんな速度で、いや、あんな高出力だとボーデヴィツヒの体が持つかどうかッ!

「ぐっ……!!重い!!なんだコイツ……規格外すぎるだろ!？」

フェンリルの爪は俺の雪片を正確に捉えていて離さない。

『安心しろ、あくまでフェンリルが動くのは素体となるラウラ・ボーデヴィツヒとそのISコア。手荒なことにはなっていない』

「やけに良心的じゃないか……さしずめ、もうデータは取れたってところか!」

『流石だな。その通り、今回は起動実験に過ぎない。性能なんぞ、元から期待して

いなかったが……思ったよりフェンリルの性能も良く、君というこの世界の基準値から逸脱した存在も確認することができた。十分どころか、お釣りが来る成果だ』

コイツツ……俺の事気付いてやがる!? 一体なぜ……

「やけに口調がフランクだな……そんなに嬉しかったか?」

『まあそんなところだ。さあ、どう対処する? 白式では勝てない。ソレを使った方が良くはないか?』

ユニコーンの事も知ってんのか……一応、切り札だったんだが……

「余計な……お世話だ!!」

「キャアアアアア!!!」

ツ、なんだ!?

『ガウッ!!』

悲鳴の主の方を向くと今まさに教員部隊がスコルとハティの両子機に襲われていた。

「ッ!? アイッら……クソッ! 早く離しやがれ!!」

俺は力ずくで振りほどこうとしているが、ならばと言わんばかりにさらに強く押さえつけられる。

「力強すぎんだろ!!」

「ヒッ!? やめてえええ!!」

「ッ!?!」

悲鳴が聞こえまたそちらを向くと、なんと子機2体が教員ごとISを捕食していた。

「なんのつもりだ!!」

『これもまた、目的の一つだ』

「…ッ!力が弱まった?これならッ!!」

雪片を力の限り振り、フェンリルから離れる。いや、離れると言うより、離してもらえた、と言う方が正しい。

「一体なぜ……?」

『貴様がソレを使わないのではなく、使えないのであれば、少し手伝ってやろう』
「なに……?」

すると、教員ごと捕食したスコルとハティの上半身部分が、少し変形した。

『『ペッ………』』

「なに!？」

2体はなんと教員とISコアのみを吐き出した。

てことは……装甲だけを捕食して、新たなパーツを作ったのか。

『『………※◆○@-:-:-:-:-!』』

「さっきから一体なんだ!？」

今度は咆哮。しかも人狼っぽい見た目のくせに音としては最悪な音を出している。……耳がいてえ。

すると、管制室のシャッターが降り、カメラと思われる辺りの機械がことごとく破壊されていった。しかも周りには謎の電波まで出ている。

『これでアリーナの様子が分かる者は誰もいない。教員部隊も全て無力化している。存分に力を発揮してくれ』

「余計な気を回しやがって……チッ、仕方ないか。白式、お疲れ様。交代だ」

『疲れたら……私が腕の制御アシストしてたの気づいてた？あれなかったら一夏の腕ポッキリ逝ってたんだからね！』

「もちろん分かってたよ、ありがとな。ゆっくり休んでろ」

………すいません白式さん。全然知りませんでした。マジで感謝。

「実際はお前が操ってんじゃないかねえかって疑うぞコイツ。なんで攻撃して来ねえんだよ……」

『正義のヒーローの変身シーンを邪魔する怪人はいないだろう？そう言うことだ』
「無駄に強い以外ただのアホじゃねえかよ……誰だこのシステム作ったやつ。絶対バカだろ……」

『本人に今度伝えておこう』

独り言だっつーの……

「……ッたく。ユニコーン、出番だ。流石に、今回は真面目にやるぞ」

『……分かった。ユニコーン、頑張る！』

ユニコーンの言葉とともに機体を纏う。マニピレーター……めんどくさい、手を握ったり開いたりして調子を確認する。

「こんな生ぬるい状況の戦場なんてあって良いのだろうか……」

『仮に本当の戦場にいても貴様なら問題ないだろう？それくらいの覚悟は付いているはずだ』

コイツやけに俺のことに対して詳しいな……もしかしてストーカー!?

『……今すぐ新しいプログラムを送って貴様を殺してやろうか？ 貴様は顔で分かりやすい』

「なんで姿も見えない敵に説教されてるんですかね俺は……って、切り替えないと。……ふう……よし。やるか」

俺は盾とビームマグナムを取り出す。……展開速度は0.4秒か。まあ及第点かな。

『クククッ、力を見せてみる、織斑一夏!!』

「言われなくてもな！」

声の言葉を皮切りに、フェンリルが突撃してくる。俺はビームマグナムで狙い撃つが最小限の動きで躲かれた。

腕を振り上げて迫ってきたフェンリルに対し盾でガード。思ったより、軽く感じる。やはりユニコーンの出力なら容易に受け止めれるようだ。

盾で弾き、右腕にも盾を展開し、ビームガトリングガンを両腕の盾から放つ。すると今度はフェンリルが右腕に巻かれた鎖で全ての球を辺り一面に弾き飛ばした。

「大人しく鎖で縛られてろよ……そんなのありか」

『殺し合いでありもなしも無い』

「分かってるよ、そんなことはな！」

盾とビームマグナムを収納し、背中のビームサーベル2本を手取る。次は俺の番。瞬時加速を使い一気に斬りかかる。二刀流剣術なんでものはまともに知らないでので袈裟斬りや突きなど、フェイントを含めて攻撃する。

……が、

「コイツ……早いな!!」

先ほどと同じく、全て最小限の動きで避けられる。そこへ反撃の爪が来るがビー

ムサーベルでガード。ついでに残った左腕で胴を断とうとビームサーベルを当てるが、固すぎるのか、熱に対する耐性が異常なのかビクともしない。

仕方ないので、爪を弾き距離を取る。

「固いな……まあ出力も落としてたし仕方ないって言えば終わりだが……これならどうだ」

俺はファンネルを4分の1の39機展開、同時に操作しフェンリルを囲う。

「ファンネル！」

一斉にビームが放たれるが変わらず避け続ける。

「それでもダメなのか……ていうか絶対当たるはずなんだけど……あの図体じゃ避ける幅がない程度には詰めたはずなんだがなあ……増やすか」

次は全体の半分、78機にしてさらに攻撃を指示する。今回はファンネルの動きもつけてだ。

「ふーむ、ちょこちょこ当たってるけど、有効打にならねえな。効いてる風でもない……数じゃダメそうか？」

最後はファンネルを全て出し、俺自身もビームガトリングガン2つで加わる。

流石にキツくなってきたのか、PICで浮かび四肢の鎖を全て使って迎撃している。

「埒があかないな。仕方ない、あんまり爆発物は使いたくないんだけど……全兵装使用許可……蹴散らせ」

オールウェポンアンロック

実弾も爆発物もビームもファンネルも、全ての武装を発射。その時の音や光、煙は尋常じゃない量だ。フルアーマーパッケージの武装を全て打ち終えたので、パッケージを収納。そういや、全弾打ち切るだけで億は超えるとか言ってたけど、作ってたやつが悪いので後で請求しよう。

煙でフェンリルの姿が見えない。こういう時にお約束の「やったか!？」って言うわないのも俺クオリティだ。

そして煙が晴れる。

「……嘘だろ。今のでもダメなのか。一応火力だけなら最大限使ったぞ……」

鎖で全身を守っている風だが、それだけではあの火力を防ぎきることは不可能、両腕や両足は焦げ、腕の鎖は吹っ飛んでいる。どうやら実弾の方が効くらしいな。まあこの成果の割にアリーナの被害がヤベェんだけど……

あたりを見ると地面はえぐれ、観客席は見るも無残な姿だ。

「正直これで終わってくれたら楽なだけだな……ていうか、今の火力で倒れないやつとか、今の表に出てるISではないんだけど？ ビームマグナムでも過剰だつてのに……」

そう愚痴を垂れながら俺はファンネルを収納する。

『グルル……』

「まだやる気があんのか。変に高性能なAIまで乗っけやがって……マジで生きるみたいだな。……本気で行くか」

流石に、これ以上はアリーナへの負担が多すぎる。……原因のほとんどが俺のフルファイアなんだけど。

「『NT・D』 発動」

物の数秒でデストロイモードへ移行し、制御に集中する。

「……ッ」

ちよつと精神的にキツイ。学園生活でだいぶ鈍ってるらしい。近々本部で鍛え直さないとな……

「行くぞ……」

刹那、俺の姿が消える。正確には消えたように見えるほどのスピードで俺は動き、フェンリルがこちらを捉えた時にはもう遅い。俺は右腕でフェンリルの左腕を捉え、左腕のビームトンファーで切り裂く。今回は出力も限界まで上げているため、フェンリルの流石の硬さも意味をなさず、腕を切り落とされる。

『……ッ!!』

負けじとフェンリルも蹴りを叩き込んでくる。

「クッ……いてえじゃねえか!!」

先ほどより重く、鋭い一撃だった。

『ガアアアアアアアアアア!!!!!!』

「ッ!?うるせえな……」

フェンリルが叫ぶと同時に、目が紅く光り、オーラのようなものが機体から溢れ出てきた。

「本気ってわけか……さっきまでとは違うな」

お互い、見合う。俺はビームトンファアを、フェンリルは爪を、構えて向かい合う。

「『……………』」

何秒経っただろうか、もしかしたら何十分もこのままだったかもしれないと思えるほどの集中。

そして……

「いざ……………!!」

『!……!』

お互い同時に突撃。ただにAIにもこういう精神があった。よかった。

フェンリルより先に繰り出した俺の攻撃は見事奴の頭を捉え貫いた!!……分けがなく、避けられる。そこへ飛んでくる奴の爪は俺の右脇腹を絶対防御ごと貫通し直にダメージを与える。

「ガッ……!?……ゴフッ!!……捉えたぜえ……」

久々の痛み、肉が抉り取られるような感覚。おそらくは装甲と肉ごと持っていたのだろう。

「それでも避けられねえよなあ……消えろ!!」

ビームトンファーで首を跳ねる。フェンリルの頭部は地に落ち胴体は残ったままだが動く気配もない。

「……勝ったか」

『おめでとう。……いやこの程度は簡単に倒してもらわなければなあ?』

『今更どういう用件だ? 次はスコルとハティをぶっ壊せばいいのか?』

『いいや、本体がもうすでに機能停止しているのな。あと少しでシャッターなどへのハッキングやジャミングが解除されるだけだ』

『十分問題じゃねえか! ユニコーン、お疲れ様。バレるとまずいから解除するな』

『……ユニコーン頑張った?』

『ああ……素晴らしい活躍だったぞ』

『……えへへ』

劳いの言葉をかけると、本当に喜んでるのが伝わってくる。

「後で直さないとな。腹が持ってかれるとは思ってなかった」

結構痛い……内臓までは通っていないけど、ダメージを負ったのが久しぶりで忘れてたな……まあ、回復力には自信があるし亡国で強化した分で明日には治ってるだ

ろ。

そしてユニコーンを解除する。

「…………ッ!! 頭がいてえ!! あ…………がつ…………」

『先ほどのシステムの使いすぎだろう。見たところ、かなり負担がかかるシステムだな。操縦者のイメージインターフェイスを用いてまで機体性能を上げているだろう? 体へのフィードバックは大きい』

「…………見ただけで…………分かるのかよ…………クッ…………意識が…………」

マズイ、今気絶するのは勘弁してほしい。まだフェンリルの中からボーデヴィッヒを引きずり出してないんだ。

『ふむ…………そうだ。フェンリルを圧倒した君に褒美をやろう』

「褒美…………だと?」

『ククッ、起きてからのお楽しみだ。なに、悪いようにはしない。今は休め、愚か

な変革者よ』

「なに?.....どう.....い.....う.....」

い.....しき.....が.....

（? ? ?
）

「及第点か.....」

「十分でしょう。元々はシステムの完成をテストしたものです。それを測るために耐久性を上げていたようなもの、成功と称して良いでしょう」

「いや、織斑一夏の方だ。思っていたよりは強かったが、あの程度では我らには到底及ばない」

「そこは.....これから期待しましょう」

「そうだな。……忘れていた。^{***}に伝えておいてくれ。あのシステムは無駄に強い以外ただのアホだった、とな」

「……私に死ねと？」

「冗談だ、自分で伝えるさ。……帰るぞ、褒美はくれてやった」

「全く……お戯れが過ぎます」

「何か言ったか？」

「いえ、なんでもありません。帰りましょう」

頼ることの大切さ

視点の切り替わりが多いです。

43 話

くラウラ・ボーデヴィツヒく

(……私は……どうなったのだろうか)

織斑一夏と戦っていたところは覚えている。そのあと、黒い何かに包まれたことも。

(ここは……どこなのだろうか……)

見えるのに見えない、聞こえるのに聞こえない。形容しがたい感覚だ。

（それにしても……織斑一夏は……強かった。私の思っていた以上に）

今の状況を考えても仕方ないと思い、思考を切り替える。

（なぜあのレベルの強さを……いや……強さとは……なんなのだろう）

『そんなもん人に聞くな。自分で見つけろ』

（……ッ……分からないんだ。私が求めていた強さは、幻想だった）

『それはお前が姉さんしか知らなかったからな』

（それでもあの人は、私の憧れだった）

『憧れることは悪いことじゃない。でもなボーデヴィッヒ、お前は人間なんだ。……

自由なんだよ』

（自由だから……なんなんだ……）

『お前はこれから世界を、国を、街を、人を見ていくんだ。この広い世界でたった1人の事しか見ないなんてもったいない。まずは、周りの人に頼ってみろ』

(……誰に……頼ればいいんだ)

『じゃあ、まずは俺を頼れ。まあ……血縁関係はないけど兄貴みたいなもんだからな』

(……それは)

『なに、俺は手伝うだけだ。どうするかはお前が決める。それが……お前の、ラウラ・ボーデヴィツヒとしての、最初の一步だ』

お前は……なぜ……

(なぜ……そんなに強いんだ……)

『……強くねえよ』

(え……?)

『もし、俺が強いんだとしたら……』

(……………)

『大切なものを……守る前に、自分が壊れてしまったから。自分が強くならないうと、守れないから』

(……………いつ?)

『……………いつ、か。難しいな、アレは……………誰も知らないいつかの日だよ』

それ以来、声は聞こえなくなった。

(なるほど……………私は……………ラウラ・ボーデヴィツヒとして、やり直せるのか)

『幸せになれば、ラウラ・ボーデヴィツヒ。私は……………お前は……………もう自由なのだから』
(ツ!? その声は……………フフツ、そういう事か。ああ、頑張ってみるさ。私は……………私の名前は……………ラウラ・ボーデヴィツヒなのだからな)

私に、新しい憧れができた。

（一夏）

「……ッ、ここは？……保健室か」

何度か見た天井だ。

「今は……何時だ？」

『16時30分だよ一夏』

「白式か、サンキュ。もう夕方か、結構寝てたのな」

『まあ、出血すごかったし。唐突にオペみたいなの始まってたよ』

恐ろしい……てか此処にそんな器具やら人員やら揃ってんのかい。

「まあ、どうせ治って……るな。たくつ、こういう時だけ俺を作ったやつに感謝だな。治りが早いのは助かる」

『じゃあ認める？』

「なわけあるか。見つけ次第ぶっ壊してやる。これ以上俺たちみたいなのが増えてたまるかよ。ボーデヴィッヒみたいなのもだ」

ボスだって言ってた。『人間は完成していないからこそ、面白い』ってな。……いや、まあ俺は完成されているっていうか超えてるんだけどな。

「どうしよう、1回目の時はだいたい都合のいいタイミングで誰か来てたからどう動けばいいのかわからない……起きたことを報告すべきか、まだ寝とくべきか、……黙って部屋に戻ろうかな」

『それ多分、織斑千冬に大目玉食らうんじゃない……』

「だよなあ……それにしても、あの声、褒美とか言ってたな。何のことだ？」

『ああ、そのこと？それなら多分……』

「失礼……しまゝす」

誰か来たようだ。

『やっぱ後でね一夏』

(ああ)

「えっと……一夏が寝てるベッドは……」

「ここだよ簪さん」

保健室のベッドのところにあるカーテンから顔を出し、自分の位置を知らせる。
喋り方と声ですぐに誰かわかった。

「一夏！もう大丈夫なの？」

「まあ、まだ痛むところがあるけど、とりあえずは大丈夫かな」

嘘です、もう全力戦闘できます。

「そう……良かったあ……血だらけで運ばれる一夏を見たとき、死んじょうのかと思っただけ……」

「それは……ごめん。でも、ちゃんと勝ったし、こうやって生きて帰ってきたから結果オーライだな」

「そんなわけないでしょ!! 一夏は、ちゃんと自分の事を見たほうがいいと思う!!」
「…………え?」

簪さんがこんなに怒ってるところ、初めて見た……

「私との訓練の時だって、メニューを考えたり、機体性能の引き出し方を考えてくれたのは一夏。作戦だって私はちょっとしか考えてない。いつも無理してるでしょ!」

えと……いや、睡眠はそこまでいらないう体だから、その時間をそういうのに当ててるだけなんだけど……

「今日だって、無理して戦って怪我して、ちゃんと自分の事を考えなさい!!」

「えっと……あの……すいません」

「そんなに私は頼りない？」

「そんなことはない」

簪さんは本当に頼りになる。それは1回目の時も、今も変わらない。

「だったら……」

「だっ……たら？」

「もっと私を頼ってよ……私だけじゃなくて、一夏の周りには頼れる人はたくさんいるんだから。そんなに……抱え込まないで。一夏が死んじやったら、私……悲し

いよ」

「……ッ!!」

簪さんは、涙を流しながら俺にそう言った。……俺だって、好きでこんな事してるんじゃない。『これは必要な事だ、起こるべくして起こる悲劇を生まないために。そのために、人工の命である俺程度ならいくらでも捧げてやる』……そう思ってたけど……

「本当にごめん。そこまで、考えてくれてたんだな。……そうだな。ちょっと使命感に駆られてたかもしれない。俺個人でどうにかなる問題じゃないのにな」

これじゃ、ボーデヴィツヒに笑われるな。『私には頼れと言っておいて、お前が頼らないのは道理が違う』って。

「……今までも頼りにしてたけど、これからもっと頼ってもいいか？今更だけど

な」

「うん！」

1 回目の時シャルが、『一夏って憎たらしいほど自分に鈍感だね』とか言っていたけど、なるほど今やっとわかった。思ってたより迷惑かけてたんだなあ……

「さてと、ひと段落ついたところで、姉さんのところに行こうかな。起きたこととか伝えないといけないし」

「え!?! まだ寝てたほうがいいよ一夏。傷痛いでしょ?」

「いや、痛み止めが打ってあるのかわからないけどほとんど痛くないんだよ。さつき歩いて確認してたし。ついてきてもらっていいか?」

「……うん。わかった。危なそうだったら、ISで抱えてベッドに戻すからね」

ワァーオ、ダイナミックな運搬方法だなあ……

それから、普通に姉さんのところに行き、痛みがないのをいいことにひたすら事情聴取されました。まあ、ほとんど無我夢中だったんだとか、ほとんど意識がなかったから覚えてない。で通したけどな。流石に、めっちゃ強かった。とかは言っただぞ？……そのせいで余計時間食ったけど。

結局、部屋に戻れたのは深夜だった。……治ったとはいえ、怪我人になんて無茶させるんだよ……

くラウラ・ボーデヴィツヒく

少し遡り、一夏が目覚める数分前のこと。

「教官も、言っていた。ラウラ・ボーデヴィツヒになれと……全く、あの姉弟は言いたいことだけ言って何処かに行ってしまう」

数時間前に織斑先生と話をして、それからもう一度眠る気にもなれなかったボーデヴィツヒはずっと起きていた。

「頼る……か。黒兎隊の隊長である私が、人に頼ることなど確かに今までなかった。結果、隊員達にも無理を強いていたのかもしれない。ハハッ、まともに動けるようになったら、すべき事だらけではないか」

最近では滅多になかった、自然と出る笑い声。今のように落ち着いているのも、織斑姉弟のおかげである。しかし、ボーデヴィツヒは日本に来る前、とある副隊長に日本のことについて教えてもらっていたが、これを頼るなどとは思っていない（実際にまともな事は教わっていない）

「私のISも原型を留めていなかったし、予備パーツは確か……レールガン以外はあったから動けるようにはなるか。全く、祖国も面倒な事をしてくれる。今更、恨む気にもなれないが」

大体は更識簪が多数のミサイルで破壊しまくったことから始まったが、ボーデヴィッツには知る由もない。

「自分のことながら、今日はよく喋るな。……いや、喋ってないと落ち着かない」
「……ッ、ここは？……保健室か」

（ッ!? 織斑一夏、隣のベッドだったのか!?」

「今は……何時だ？」

（……答えるべきだろうか。いや、そうしたほうがいいには違いがないのだが……あの会話をした後では話しかけにくい）

「白式か、サンキュ。………」

（白式? 確か、織斑のISの名前……会話をしたような物言い……まさかな）

そして、織斑一夏の会話のような独り言を聞き続けるボーデヴィッツ。その内容には、思わず声が出そうになる。

（『俺を作ったやつ』……だと？まさか、織斑があの時言っていた『姉弟みたいなもの』というのは……いや、それでは実の姉である教官もそうなるのか……？）

ボーデヴィツヒの思考は続く。入ってきた更識簪に気づくこともなく、その会話を聞くような余裕もなく。

（いやしかし、教官の遺伝子からという線も……分からん、一体どういうことだ？織斑の言っていることが正しいのならば、織斑がISに乗れる理由にも納得がいく。教官とほぼ同じ遺伝子だからだろう。それが男でも、というわけか）

ガラガラ……

（ッ!!……今のは、部屋を出たようだな）

隣のカーテンを開け、誰もいないのを確認する。

「……織斑姉弟は私と同じ、遺伝子強化個体。しかし、教官の身体能力の高さ、織斑のいう回復力。もしかしたら、私のような遺伝子強化個体よりもっと上位の……しかも教官の、存在が公になった時期を考えると……ッ、一体いつから、この研究は続いていたんだ」

織斑、という存在がどれだけ異質な運命を背負っているのか。今のボーデヴィッヒには計り知れないが、ただひとつだけは確実に言える。

「この世界の人工物でない、天然の最強は篠ノ之束ただ一人。今や世界中の女共が夢見る存在は……ヒトとして作られたモノだったという事か。……この世界は……!! この世界はどれだけ……」

ラウラ・ボーデヴィッヒという存在が生まれて何年経っただろうか。いや、しみ

じみと数えるほど生きてはいない。この短い年数で、世界の闇の中心ともいふべき事実にとどろき着いてしまったボーデヴィツヒ。その精神状態は安定してはいない。

「でも……裏を返せば私は、教官や織斑とは存在としては近い者同士。もしや、同じ遺伝子から作られている可能性も……おお、それは……それは……素晴らしい!!」

VT システムで過度な精神的ストレスを負ったからだろうか、考えすぎで参ってしまったのか、いや両方だろう。少なくとも、今のボーデヴィツヒはまともな思考ができていないのは確かだ。

「つまりは、教官とは家族同然。という事は……織斑は……先輩? いや、本人も言ってたから……兄か!!」

もう一度言おう。ボーデヴィツヒは、まともな思考ができていないのである。

久方ぶりに平和な1日

44話

ボーデヴィツヒのVTシステム事件があった次の日の朝、なぜか部屋にいなかったシャルルはさておき俺は亡国に報告をしていた。

「だからさ姉御、ユニコーンの修復を頼みたい。武装もビームサーベルとビームマグナム以外弾切れだし腹部もがつつりもってかれてるんだよ」

『それは全然良いのだけれど……今レイさん忙しいみたいで……あつ、変なもの作ってるんじゃないのよ？真面目な方でね』

「マジか……今回出てきた奴は試作システムであの性能だ。俺のユニコーンの過剰な火力で倒せないようなやつだから……現行ISでは歯が立たない。正直、束さんに本気の最新鋭機を依頼するか、俺が意地でも二次移行するかってところだ」

『奴らもそろそろ本腰を入れ始めたのかしら。全く情報が入ってこないと思った

ら、そんなものをつくっていたなんて……タバネがイラついてたわよ？【認めたくないけど……性能が良すぎる!!】って』

「おいおい……どうせそれで熱が入ってなんかしてんだろ？ハァ……束さんのところの嬢ちゃんはどうだ？不自由してないか？」

クロエ・クロニクルの事だ。束さんの入社後も引き続き補佐をしてもらってる。もちろん、生活とかは完璧にしているらしい。

『ええ、最近はタバネのために料理の勉強してるらしいわ。オータムが暇な時……まあほとんどだけど、クロエちゃんとマドカに教えてるわよ』

「へえ……オータムがねえ……」

何秒か空けて……

「オータム料理できんの!? え、うつそマジ？ いやいや、冗談だろう？ しかも人に

教えられるレベル!? ありえねえ……」

『本当よ? マドカなんかは結構上達してるし……』

そっちの方が信じられない。俺が教えても無理だったのに……

「嬢ちゃんが問題ないなら良いけど……まあ誰か空いてる人間送ってくれよ。ユニコーンをマジで頼みたい」

『分かったわ。代わりにうちで開発中の第2世代試作量産型を貸すわ。データ取りのついでにね。どうせ白式もぶっ壊れてんでしょう?』

「いや、早めに交代したんでメンテナンス程度で済むから良いよ。それよりも、サラ・ウェルキン用のISを頼む。コアは強奪してきた分が結構余ってるだろ?」

違法研究所にコアがあったからね。仕方ないよね。

『世界に500もないコアを余ってるって貴方ね……もう良いわ。もう製作中よ。』

今回の事件で、また案の練り直しらしいけど』

研究者達はきつと今頃デスマーチが進行してるんだろうな（他人事）

「作り始めてるんなら良好。最初の任務も考えといてくれな。……俺はどうせボスから勅命が来るはずだからな」

『でしょうね。まあ諦めなさいな。じゃあ切るわね』

『ああ、またな姉御』

通話終了。

「ユニコーン。修理はもうちょっと待ってくれな？」

『……仕方ないもんね』

「ああ、ごめんな」

「そういや束さんが何してるのか聞いてないな……まあいいか。ボスに矯正させられたんなら多少はまともになってるだろうし。」

「さてと、教室行くか。……ボーデヴィツヒの奴、何もしてこねえよな？」

一抹の不安を覚えながらもまあ大丈夫だろうと思う。そういえば1回目の記憶通りなら昨日は大浴場が男子に解放されているはず……デュノア凄えな、貸切だ。……今度温泉行こう。

~~~~~

「おはよう」

「一夏!?!」「一夏さん!?!」

「大丈夫だったのか／ですか？」

「ああ、現にこうして来てるだろ？」

嘘です。腹の肉を装甲ごとえぐり取られましたよ？

箒とセシリアに心配されるが、まあ大丈夫としかいえないもんなら。

「あっ、一夏」

「ん、鈴か？」

そこへ廊下から顔を出して来た鈴。

「……………おかえり」

「ッ……………ああ、ただいま。鈴」

聖母のような優しい笑みでそう言ってくる鈴。……………やっぱりかなわないな。

「箒さん、これわたくし達の出る幕ありませんこと無くて？」

「ああ……悔しいが、完敗だろう。まだまだ精進せねば……」

「凰さんと織斑くん。なんか熟年の夫婦みたいじゃない？」

「あっ、確かに！」

ヒソヒソとなんか聞こえるけど内容までは聞き取れない。こういう時だけなぜ俺の耳は機能しないのだろうか。

「また後で話しましょ？もうすぐHR始まるし」

「了解、また後でな」

そして、鈴が教室に戻っていった。

「そういえばシャルル見てないか？朝、部屋に居なかったんだけど……」

「いや、私たちも見えていない。なあセシリア？」

「ええ、朝食の時も食堂でお見かけしていませんわ」

マジでどこに行っただ？

「皆さん…おはようございます……今日も転校生が来ます。……転校生？ いやでもみなさん知ってるし……？ どういえば良いんだろう？」

あつ、もしかしてデュノア君がデュノアさんになるの今日だったか？……まさか、1回目とは違う俺の動きがバタフライエフェクトとして作用したのか？ そういえば、1回目の時もフェンリルなんてものは無かった。まあ、覚悟はしていたけど、まさかデュノアの再入学の日にちまで影響を及ぼすとは……

「どういう意味だ？」

「山田先生がとても疲れているように見えますわ」

そりゃそうだろう。男だと思っていた人が女子として再入学。俺と同室だったわけだから新しい部屋割りを考えないといけない。さらにいえば昨日の事件の後処理や各国への対応、VTシステムを搭載したであろうドイツへの追及。……お疲れ様です。6割くらい俺のせいでもあるけど。

「じゃあ、入って来てください。……また部屋割りを組み直さない」と

そして廊下から見知った顔が女子制服を着て現れた。

「「「デュノア!?／デュノアさん!?／デュノア君!」」」

三者三様の反応、いやクラス全員だから三者じゃないな。二十九者だ。……ボーデヴィッツヒもないな。

「というわけで、デュノア君はデュノアさんでした。はあ……今日も徹夜かなあ……」

山田先生から負のオーラが出ている。今日も、って事は昨日もか。

「シャルル・デュノア改め、シャルロット・デュノアです。皆さん、よろしくね！」

「……一夏？」

「ん？……うわっ」

呼ばれた方を向くと、箒とセシリアの顔が陰っている。……あゝまあ来るよね。

「確か、デュノアと同室だったはずだ。知らなかったという事はあるまい？」

「そして昨日は、男子が大浴場を使った日でしたわ。つまり……一夏さん？」

2人の口から確かな事実が漏れる。察しが良くなったな。

「待て。俺は昨日、夜中まで織斑先生の取り調べを受けていた。だから風呂には入っていない。朝、部屋でシャワーを浴びただけだ!!」

「……なるほど。確かにその通りのようだな」

「そうだろう。だから俺に不備はなかった」

「ですが、少しの間とはいえ同じ部屋で過ごしたのですもの。性別くらい知っていましたよね。否定もしませんか?」

セシリアが追撃をかけてくる。ああ……なんか部分展開の粒子が見える。

「いやまあ……最初から知ってたけどさ、ちゃんと女子を相手にする時の紳士的な対応をずっとしてたぞ? なんなら本人に聞いてくれたっていい。なっ!?! デュノア!!」

「えっ、忘れちゃったの一夏? あの日僕にあんな情熱的に迫って来たのに(拳銃を突きつけられた時)」

「一夏？／一夏さん？」

「デュノアさん何言っちゃってくれてんの!? ていうかいつの事だよ!？」

「あの時は、運命を感じちゃったよ。一夏ったらすごく真剣な顔だったし♪」

「これは……ちよつと……」

「ギルティ……ですわね」

待て、いつの事だ……俺がデュノアに迫っただと? そんなこと……あつ

俺が、デュノアに拳銃を突きつけた時か!? ヤベェ……下手に弁解できねえ。バ

レる……

「ほう……なにやら、身に覚えがありそうな顔をしているな？」

「一夏さん、わたくしは悲しいですわ。こんなところで級友を失うことになるなんて……」

そう言いながら箒は愛刀を取り出し、セシリアは愛銃を展開した。

「ハハッ……話せばわかる。だからもうちょっと、落ち着こうな、な！」

「問答無用!!」

「狙いは完璧ですわ!!」

あ、俺終わったかな。流石にボーデヴィツヒも来ないだろうしな。いや避けるんだけど、避けたら壁に穴が空くし……

と、考えながら冷静な自分がいたのを確認したところで、

「「なッ!?!」」

2人の攻撃を受け止めたものがいた。おお!! やっぱり来てくれたか!!

俺に向けての攻撃が全て止められた。まあそんな芸当が出来るのはほとんどないからな。つまり……

「助かったぜボーデヴィッヒ。危うく召されるところだった」

おそらくISの受領で遅くなったのだろう。

「礼には及ばない。何せ私たちは……」

ISを纏った状態のボーデヴィッヒがゆっくりとこちらに近づいてくる。おいおい、まさか……

「兄妹だからな！ 兄様！」

「兄様!?」

「落ち着けボーデヴィッヒ……兄さんてなに!?」

「おちちちちちつけいいいいちkkkkk」

「箒の方が落ち着いて!?」

俺にはすでにマドカというばーふえくと、な妹がいるんですが!?

「む、日本では尊敬する者を兄や姉と呼ぶと聞いたのだが……」

誰がそんなこと教えた!?……クラリッサ・ハルフォーフだな……フッフ、どうせいつか敵として会うんだ。私怨を入れて相手をしてやろう。

『ヒッ!?……何故か悪寒が……?』

どこか遠くで誰かに何かあったっぽいけどまあ気のせいだろう。

「ボーデヴィッヒその知識間違ってる……はぁ……直してくれ」

「断る。お前は私に尊敬もさせてくれないのか?それと、ラウラと呼んでくれ。他人行儀すぎるぞ、兄様」

「ぐっ……それを言われると……」

尊敬されてるのはいいでしょう。しかし呼び方がなあ……

「はあ……仕方ない。まあいいや。うん、きっと大丈夫だろう。姉さんは黙らす。よし！ヨロシクナ、ラウラ」

「一夏さん!? 帰って来てくださいまし!! 織斑先生を黙らすって、自殺行為ですわ!?」

いや、そこじゃねえだろ。後、出来る。酒を制限させれば余裕だ。

「はあ……皆さん座ってください。HRを始めます」

疲れすぎでなにも考えていなかったのか、何事もなかったように話を進める山田先生。不憫！

「昼休み」

「ラウラ、少し話がある。ちょっと屋上に来てくれ」

「む、逢い引きか兄様。兄妹間でそれは良くないぞ」

「ちげえよ!?まず、実の兄妹じゃない。……………だとしても良くない!!」

なんか最近、人にペースを崩されることが多い……

「真面目な話だ。お前の瞳の事だ」

「ッ!?……………分かった」

しばし移動タイム。

「それで、なんだ兄様？」

「もう兄様呼びは固定なのね……まあいいや。お前、眼帯の下どうなった」  
「それが……右と同じ赤色に戻ってしまったんだ」

やっぱりか、あの時の声の奴が『越界の瞳』を奪った。みたいなこと言ってたからまさかとは思ったが……

「何故だかわかるか？」

「いや全く検討がつかない。しかも違和感がある。安定もしないし目も金色にならない」

……ん？何かおかしい。確かあの時の声は、もうラウラには瞳は戻らないとか言ってたが……今の発言を聞くに制御がうまく出来ていないだけのような感じだな……

「お前、どうやって瞳を発動させてる？」

「そんなこと聞いてどうするのだ？」

「いいからいいから」

「……自分で制御できていなかったから、眼帯を外すことで使ってた。普段は眼帯で無駄に負担がかからないようにな。

マジか、そういうやまともに適合してなかったんだっけ？

ふーむ……まさかな。いや、でもワンチャンあるよな……ないと思うんだけどなあ。まあ試すか。

「試しに、両目を意識して瞳を使ってみてくれないか？ 瞳の事を考えるだけでいい」

「両目？ 私は左目しか手術を受けていないのだが……ッ!? 発動した……しかも、これは！」

目を瞑り、意識を集中させたラウラが目を開いた時、その目は両目とも金色に輝

いていた。

「マジかよ。絶対ないと思ったのが当たるとは……」

どういうことか、皆は分かっただろうか。詳しく説明すると、ラウラが瞳を発動出来なかったのは、片目しか発動させようとしてなかったから、バランスが取れていない、安定もせず発動していなかったただけだ。しかも自分で制御出来てないらしいしな。

しかし、片目しか手術を受けていないラウラが何故、両目で完全に『ヴォーダン・オージェ』を自分で制御しながら発動出来たのか。おそらく、あの声だろう。奴はあの時、『褒美をやる』みたいなことを言っていた。ボーデヴィツヒを返すことが褒美なのかと思っていたが、実際は違っただけだ。両目で、完全に適合するようにナノマシンに何かしたらしい。

「まあなんだ。よかったじゃん。これでお前は、不良品とか言われることもない、

両目に適合した。これからさらに強くなれるぞ」

「あ、ああ……何故だろうか、すごく嬉しいはずなのに実感がわかない。どうすればいいんだ兄様？」

「もうちょっと落ち着いてから、素直に喜んだらいいさ」

今もちょっと引きつった顔をしているラウラ。

「一夏と一緒にお昼食べましょー箸とセシリアとデュノアも連れて来たわ」

屋上入り口から鈴達が姿をあらわす。

「お、良いねえ。ラウラも一緒に食おうぜ。仲直りも兼ねてな」

「……ああ！」

この後めっちゃくちゃ飯を食った。みんなの弁当少しもらったけど、1 回目の時

よりもうまかった気がする。……セシリアのは1回目の時よりマシになっている。食った俺が言うのだから間違いない。ソウダネ？

ラウラも無事、鈴とセシリアと仲直りしてすぐに仲良くなった。鈴が何故かめっちゃ頭を撫でてたけどなにも見なかったことにした。目線がラウラの胸に行ってたからな。同族だと思ったんだろう？

「ああん!？」

いえ、なんでもないです。

IS学園は、今日は平和でした。

## 亡霊は踊る

## 45話

6月も終わり7月になった。今月は臨海学校があり正直憂鬱でしかない。かの『銀の福音』が暴走した時のことを思い出すからだ。

そういえば、なんとなく『レゾナンス』じゃないショッピングモールを回っていた時に見つけた、そこら辺を歩いていた束さんをひっ捕らえお話をした。その時の様子がこれだ。

「や、やあいっくん、こんなところで会うなんて奇遇だね。束さん運命感じちゃったよ。……ところで束さんはなんで縄で縛られてこんな薄暗い地下で椅子に座らされてるのかな？」

「いやあ、ちよっとお聞きしたいことがあっただけです？もちろんそれが終わったらすぐに開放しましょうとも」

「なにが聞きたいの？束さんは縛りプレイはあまり好きじゃないよ？あ、ゲームではよく縛りプレイするけどね」

「知ったこっちゃないですよ……で、箒の誕生日はなにを渡すんです？」

「へ？な、なになって何かな？」

パァン！

「ひいい!？」

「真面目に答えてください。大事な顔に穴が開きますよ？」

「いっくん目のハイライト戻して!？そんなことするような子じゃなかったよね!？」  
「友人を見習ってみたんですよ。すごい怖かったんで。あと、どうせ培養技術かなんかで体くらいすぐに修復できるでしょうっていう信頼と期待と偏見です」

「今偏見って言った!？うう……これでも天災って言われるくらいは優秀な人間のつもりなのに……」

「だったら、あと少しで完治する人見知りを治してください。今度やるパーティー

で音頭取らせますよ？」

「今日はいっくん脅迫が多いよ!？」

パン!!

「答えます答えます、答えさせていただきます!! 篝ちゃんには、その……第四世代型のISをプレゼントしよっかな〜って」

パン!!

「東さんちゃんと答えたよね!？」

「ああ、すいません。ちょっと予想通りすぎて……大天災の東さんなら、ま、さ、か、妹の晴れ舞台を用意するためにどっかの軍用ISを暴走させたりしないですよねえ?」

「なにそれ怖い!! 流石の東さんでもそんなことはしないよ? 入社する前ならした

かも知けど……流石に更生したもん！」

その言葉を姉さんと箒に聞かせてやりたいぜ……

「……まあ、信じましょうかその言葉。ちなみに箒のISの性能は？」

「え、どんな局面でも対応出来るようにいっくんの雪片のデータから完成させた展開装甲を使ったマルチロール機だけど？」

「燃費は？」

「中国の第三世代の……甲龍だっけ？それと同じくらいには良くしたよ。後は……箒ちゃんの練度によって新しい武装を作ったり出来るし」

「めっちゃ万能じゃないですか。単一能力とかはつけてないですよね？」

「……絢爛舞踏っていう、発動したらエネルギーが回復したり、別の機体と接触するだけでその機体のエネルギーも回復するワンオフをつけました」

「おおくまさに妹思いな束さんの素晴らしいプレゼントじゃないですか」

「でしょー!! やーさすがいっくん。わかってくれると思って……」

パァン!!

「なんで撃ったの!？」

「いや、すいません。なんとなく、ちょっと全世界のIS開発国に申し訳なくて」

「ひどい!？」

「レイさんと似たような雰囲気感じたんで」

「ああ……レーちゃんいつもいっくんに追いかけて回されてるもんね。ISで」

「束さんもやります? 細胞レベルで天災なその体でも引きこもってたら鈍るでしょう?」

「全力で遠慮させていただきます!!」

「……えー、まあいいか。すいません、ありがとうございます。じゃあそういうことで」

「え……解いてくれないの? 束さんは放置プレイも得意じゃないよ?」

「だから知ったこっちゃねえよ!?! たくッ、ボスに束さんを捕まえとけって言われ

てるんですよ。だからまあこうやってついでに縛ったんです」

「なるほどね、いっくん頭いい!!……でも、ここに放置していくのはなんでかな  
ゝなんて聞いてみたり?」

「ああ、意趣返し兼私怨です。IS学園の試験会場まで誘導されたのはまだ覚えて  
ますからね?」

「バレてた!?! いっくんあの頃からそれに気づくだけのスペック持ってたの? てい  
うか私怨って言ったよね今!?!」

「さよならゝ」

「あつ! 待ってゝせめて解いてってよゝ!!」

はい回想終わり。だいたいこんな感じだ。ちなみに当日にボスから『お前のところ  
に篠ノ之博士いない?』みたいな感じの連絡がきて、ちょうどよく出会ったの  
で敢行しただけだ。もちろん、マドカに報告したからすぐに回収されるだろう。そ  
の時に、『ああ、またクロエが嘆くな……』って言ってたけど、やはり面倒をかけ  
られてるんだな。指の一本くらい持って行っても良かったかもしれない。

それにしても束さんがまさかちゃんと更生しているとは思ってなかった。しかも福音を暴走させる気もなく、赤椿の燃費も良くするとは。俺の白式の双壁を成す……みたいなのも言っただけでなかったし、一般常識もセットで社交性も身につけてきている。……アレ？　そういや束さんの服もいつものアリス服じゃなくて一般女性に着るようなものだったし……天災だった頃よりある意味で色物作り出してしまった気がするけど……まあ良いや（思考放棄）姉さんが見たら別人だ、とか言うて切りかかるかな？……まあ良いや（二度目）

そして今日は水着を買いに1人で『レゾナンス』に来ている。水着なんて機能が良ければなんでも良いし。……1人で、なんて言っているがしっかりと視線を感じる。4人分ほど。

「えっと……これで良いか。ん？　よく見たら1回目の時に買ったやつと同じだな」

よくよく考えれば一回しか使っていないし、そのために水着を買いうってのもなんかなあ……

会計を済ませて次の目的地へと向かう。ちなみに本屋だ。

その途中……

「おっと……すいません。大丈夫ですか？」

俺としたことが……人にぶつかった。しかも相手は倒れてしまった。

「いえ、問題ありません。こちらこそ申し訳ありません」

「……ならよかった。どこか喫茶店に行きませんか？ぶつかったお詫びがしたい」

「……そうですね。ではお言葉に甘えさせていただきます」

俺は目を閉じている銀髪の少女の手を取り立ち上がらせた。

「……？手を離しても構いません。それでも、見えているので」

「……へえ。これは申し訳ない」

俺たちは少し離れたところにあった喫茶店に入る。なぜすぐ近くの店に入らないかという『㊦クルーズ』だからとしか言えない。……察してくれ。

「……さてと、少し使ってもらって良いか？」

「分かりました。『黒鍵』起動。……『ワールド・ページ』」

これで他の人間から、俺たちは普通に会話をしているだけに見えるだろう。

「助かる。後でエネルギーパックをやるよ」

「お気遣い感謝します。……改めて、束様のお世話をしています、クロエ・クロニクルと申します。以後、お見知り置きを」

「ああ、俺は織斑一夏だ。亡国では『S』っていう。よろしくな嬢ちゃん」

正直俺も、さっきぶつかるまで分からなかったが嬢ちゃんがユニコーンを受け取ってくれるらしい。

「……『嬢ちゃん』はやめてください。私には『クロエ・クロニクル』という名前があります」

ほう……生活環境によって意識も変わってきたのか？……何にしてもいい傾向だな。

「それはすまん。じゃあクロニクルと呼ぼうかな。なあクロニクル、甘いものは好きか？」

「……は？」

「いいから」

「……あまりそういうものを食べていません。最近は自分で作ったものの処理をしていますし」

そういやスコールの姉御も言ってたな。完全に忘れてたよ。

「じゃあ、ちょうどいいか。すいません、注文良いですか？」

シュンッ！

「はい、何にいたしましょう？」

うおっ!? 店員さん来るの早!!……接客魂が凄いな。

「ショートケーキとブレンドコーヒーのホット。……クロニクルはどうする？」

「では、紅茶を」

「ショートケーキ、ブレンドコーヒーのホット、紅茶、でよろしいでしょうか？」

「はい、お願いします」

「かしこまりました、少々お待ちください」

シュンッ！

……消えたよあの人。忍者かなんかか？ていうか効果音が聞こえたような…？

「ありがとうございます」

「良いっての。わざわざこんなところまで来てもらったんだからさ。……まあちよつと視線が気になるだろうが、無視してくれ」

さっき若干殺気も混じってたから箒とセシリアはいるだろうな。後は……まあ鈴とデュノ……シャルロットだろう（呼び方を変えさせられた、目が怖かったです）ラウラはどうせクラスメイト達に餌付けされてるさ。朝もそうだったし。

「いえ、この程度は問題にもなりません。『ワールド・ページ』も使っていますの

で」

「『ワールド・ページ』ねえ……全く、便利な能力だよ」

現実世界では大気成分を変質させ対象に幻覚を見せる。電腦世界では対象の精神に干渉する……相手にしたらかななか厄介だ。ISを用いれば大気の状態は分かるが、生身では防ぎようもないな。一応、俺らみたいな『越界の瞳』持ちは擬似ハイパーセンサーで対処はできるけどな。

「確か、生体同期型ISだっけ？束さんもまた業の深い事してくれる」

「しかし、束様が『黒鍵』を与えてくださらなければ私がこうしてここでいっくん様と話していないのもまた事実です」

「そうだからこうして黙認するしかないんだよなあ……いっくん様？」

おかしい、何か今変な名前で呼ばれなかっただろうか？

「束様がいつも貴方の事を『いっくん』と呼んでおられましたので。やめた方がよろしいでしょうか？」

首を傾げながら聞いてくる。小動物みたいだなこの子……

「ああ、それでか……まあ良いよ。別に害はないし」

「お待ちせいたしましたお客様、こちらブレンドコーヒーのホット、紅茶、ショートケーキでございます。ごゆっくりどうぞ」

……俺が気づかなかった？この店員恐ろしいな。

俺はいま持ってきてもらったコーヒーを飲む。……美味しいな。クロニクルも紅茶を飲んでいる。しかし……

「どうしたクロニクル、ケーキ食べないのか？」

「……いただいてよろしいので？」

「子供が遠慮するもんじゃないぞ」

「子供扱いしないでください。年齢は私の方が上です」

まあラウラより早く作られたなら確かにそうだな。でも……

「まだ5年も生きてない子供が何言ってんだよ。ここはおとなしく食べとけて」

「……いただきます」

「おう」

素直でよろしい。若干不服そうだが、気にすることでもない。

「美味しい……」

「そうか」

気に入ったのか、黙々とケーキを食べ進めるクロニクル。それにしても美味そう

に食う。

クロニクルがケーキを食べ終わるころには俺もコーヒーを飲み終わっていた。

「……私としたことが」

少し恥ずかしそうに言う。

「気にすんなくて。せっかく手に入れた幸せだ。今のうちに噛み締めとけよ。……それよりも本題なんだけど」

「はい。それでは、ユニコーンを預からせていただきます」

「土手っ腹に良いのを貰っちゃったからな。レイ博士にもよろしく言っといてくれ」

（ユニコーン、少しの間だ。我慢してくれな？）

『うん』

あのフェンリルってやつは攻撃がユニコーンの装甲を貫通しても、絶対防御が発動しなかった。ビームマグナムの攻撃は普通に受けていたことを加味すると……絶対防御のみを無効化するシステムも密かに組まれてたのか……

俺はクロニクルにユニコーンを渡し、席を立つ。

「支払い済ませておくから、好きに楽しんでいてくれ。スコールの姉御やマドカ達によろしくな」

「……もう行かれるの？」

「ああ、俺たちは一応たまたま知り合った他人という設定だしな」

「なるほど、ごちそうさまでした。……そうでした。これもお願いします」

「ん？……なるほど。じゃあな、マドカと仲良くしてやってくれな」

俺は店から出るときに店員に2000円を渡す。ちょっと数が多いのはチップみたいなものだ。それにしても、もう、出来たのか。やっぱあの人らすごいな。

「おい、一夏が出てきたぞ」

「そんなに追っかける必要はないと思うんだけど……」

「いえ！もしさっきの子とナニかあってからでは遅いですわ！あんな幼い子に手を出す前に矯正して差し上げなくては……」

「アハハ……一夏はそんな人じゃないと思う……よ？」

聞こえてるぞお前ら……そしてセシリア。俺はそんなに信用ないのか……

俺が歩いている少し後ろを歩きながら、4人ほど付いてくる。鈴とシャルロットは少し面倒そうだな。一回驚かしとくか。

「ん……一夏はどこに行った？」

「え？そこにい……ないわね。トイレでも行ったんじゃないの？」

「いつの間に……シャルロットさんは見てまして？」

「ううん、ちょうど目を離してたから見てないな」

気配を消して隠れたからな。しかも全員がちょうど俺から目を離れた隙を狙ったし。……これが身体能力の無駄遣いか。

『ISもだよ……わざわざ後ろを見るのにハイパーセンサーまで使っちゃってさあ』（戦闘で異常が出てないか調べたのもあるんだからいいだろ？ 『瞳』と同時に使用した時の負荷がかかりすぎていないかも見ないといけないんだし）『調子いいんだから……』

白式はそう言って戻っていった。

「見失ったんだから帰るわよ。私、部屋に戻って一夏に借りた漫画読みたいんだけど」

「なっ……ダメですわ！ そうですわよね箒さん！」

「ふむ……しかし見失ってしまったのは事実だな」

「どうせなら色々回ってみない？ 僕まだ水着買ってないんだよね」

喋りながら俺が隠れたところを通過して行く4人。すると、鈴だけが足を止めた。

「……アンタ、趣味悪いわよ」

「覗き見してたお前らに言われたくはねえよ。てか、気づいてたのか。見てない時に隠れたと思ったんだけどな」

「ここら辺にすぐ行ける場所はないわよ。よく来るから覚えてるの」

鈴が立ち止まっていることに気づいた箒たちがやっと気づく。

「「一夏(さん)!!」」

「よう、お前ら。ここまでついてくるとか、逆に感心するわ」

鈴もやれやれといった感じだ。

「い、いた、私たちは買い物に來ただけで……」

「別に、一夏さんを觀察していたわけではないですわ！」

「アハハ……セシリア、言っちゃダメだよ」

なんだこいつら、仲良しか？……仲良しか（納得）

「別にいいけどよ。面白いものはなかっただろ？」

「ラウラ似の子って知り合い？」

鈴がそう聞いてくる。勿論誤魔化す。

「ラウラ似？ ああ、さっきの子か。言われてみればラウラに似てるなあ。さっき知り合ったぞ？ そういや、今日ラウラはきてないのか？」

「ラウラならクラスの子達に親睦を深めようという名目で餌付けされてるよ」

「ええ……?」

ラウラさん……いや、この前の素っ頓狂なセリフのせいか。まあ、何にせよクラスに馴染めたのは良かったな。

「あつ、そうだ。一夏も一緒にお店見ない?」

「ん? ああ、いいZ『ビー、ビー、ビー』……すまん、ちょっと電話だ」

俺は4人から離れて通信に出る。ちなみに亡国の通信端末だ。

「もしもし」

『一夏? ちょっと仕事を頼みたいんだけど』

どうやら姉御からのようだ。

「いいけど、ユニコーンはさっきクロニクルに預けたぞ」

『ISは使わないわ。また処理をお願い。最近多いのよね……』

「またか……言い方悪いけど、もう慣れたぞ」

『ツ……そう。ごめんなさい』

今のは良くなかったな。

「そういうこと言わない。アンタは上司らしく任務を命令すればいいんだよ。そういうのはまた今度みんなだな」

『ふふ、そうしましょう。……さてと、今回もまたIS学園への侵入よ。国はドイツ、なんでもこの前のVTシステムのデータを抹消したいらしいわ』

「はあ……相変わらず情報が早いな。政府か？」

『いいえ、独自に行動をさせてる者からよ。VTシステムの研究所がまだ残ってるみたい。そっちはタバネが向かったわ』

「へえ？あの束さんが……」

あの人にも実働の任務来るのか。開発ばかりかと思った。

『個人的に許せないところがあるって言って、ボスに直談判に行ったわ。それでね』  
「コミュニケーション完治したなあ……まあ、了解。場所は？」

『IS学園よ。ドイツ代表候補生ラウラ・ボーディツヒのISを秘密裏に破壊するそうよ。精鋭部隊が揃ってるわ』

「……は？」

ラウラのISを……破壊？

『一夏……どうしたの？』

「姉御、仮面使うぞ？ 任務に私怨を持ち込むのはよく無いが今回は流石にキレイそうだな……」

『……楽しむような事だけはやめなさい。貴方はまだ表の世界で生きていける人間

なんだから』

「……S、任務を受諾しました。行動に移ります」

『行っってらっしゃい。気をつけて』

通信終了……

「すまん、中学時のバイトの先輩が入院したらしいから見舞いに行ってくる」

「大丈夫なのか？」

「盲腸って聞いたけど、手術すれば大丈夫らしい」

「手術はしないといけないのね……行っってらっしゃい一夏」

「ああ、悪いな。せっかく合流したのに」

我ながらよくもまあスラスラとこんな嘘が言える。しかもその相手はこいつらなの……

「じゃあな！」

ああ、なんて腹立たしいのだろう……ラウラに危害を加える人間には……バツヲ  
アタエナイトナァ……

## 妹を想うバケモノ

## 46話

結論から言おう。やはり雑魚だ。

『バケモノ……』

「ハッ、間違っちゃいねえよ。だとしても、お前らは俺を怒らせた」

ショッピングモールで箒達と別れてから、俺は折りたたみ式仮面（レイ作）をつけ、学園に戻った俺は隠密行動をしていた部隊を真正面から待っていた。さて、回想シーンにでも移りましょうかね。

……

……

.....

『あーあー、よし、変声機も問題ないな。誰にもバレずに部屋に戻れたのも幸いだったな』金尾哲夫 VC

一度学園の寮に戻ってきた俺は、部屋のシャルロットの知らない隠し場所から亡国用のバトルスーツを持ってきた。

現在はIS学園の裏手の方、生徒なんか来やしない場所だ。どうにも海から上がってくるらしい。綺麗な海が薄汚い血で汚れる事になるが致し方無い。条約破って襲いにくる方が悪いのだ。

『一夏、生体反応多数確認。そろそろ来るよ』

「白式、お前……出てこない方がいい。お前の見たくないものしか見えないぞ。嫌っというんだったら白騎士に変われ」

『嫌だ。ちゃんと見るって決めたから……一夏の罪を』

「そうか……お前だけが、あの頃の俺を知っているもんな。じゃあ見届けてくれ、織斑一夏の罪を」

仮面をつけ直し、頭を切り替える。今の俺は、亡国企業のSだ。

『任務内容を確認する。目標はドイツ精鋭部隊、生死は問わない。フツ……イー  
ジーマードだな。全員ブチコロシテヤル。さあ、始めようか』

ザバアアン

『なっ!?! 貴様、何者だ……』

ターゲット、一名処理を完了。生体反応は……残り15だな。

俺は拳銃を取り出し上陸してきたやつを1人ずつ、丁寧に残留めていく。ダイビング用の装備は、帰りの分も補給してあるのか重たそうで下敷きになる奴もいた。

ターゲット、4名処理。残りは11。

『ウェルカムトゥーIS学園。さア……見学はここまでするのであとは地獄でお楽しみください。……なんてなア』

聞こえていたかどうかなんて関係ない。一瞬でもラウラを狙いやがったんだ。イキテカエレルトハオモウナヨ？

拳銃では物足りなくなってきたので、ナイフを持つ。ヤツらは海に逃げようとしているが、俺は全員を引きづりあげる。

『ヒッ……命は……命だけは……』

最後尾だったやつがそう喚く。

『貴様はそう言って命乞いしてきた奴を何人殺した？ 国のためならなんだって出るのか？……俺は出来る』

ドイツ語で俺は喋る。セシリア達が日本語を使うからそれに頼っていたが、俺は逆行してから外国語を練習しアイツらの祖国の言葉は喋れるようになった。……こんなことのために覚えてきたわけじゃない。

喚いていた奴の首をナイフ（レイ作）で切る。防具や装備の上からだったので切れるか不安だったが、問題なかった。

残り10……

『隊員が……殺せ!!』

今のやりとりのうちに態勢を立て直していたらしいほかの奴らは俺に銃を向ける。……そんなものが今更きくか。

『ふん……』

『……ウソだろ』

まだまだ技術が甘かったな。2人しか殺れなかった……  
残り8

『弾き返したというのか……アサルトライフルだぞ!』

俺に向けてしか撃たれなかった弾だ。対処もしやすい。やったことは単純、ナイフでこう……カーンとはお返ししたただけだ。

『一夏……それふつうに出来ない』

え……マジかよ。いやだって、ボスは素手でやってたんだぞ？機関砲の弾に對して……

『あの人がおかしいだけだから』

………殺るか。

『平和ボケした学園にこんなのがいるなんて聞いてねえぞ!!』

『織斑千冬以外に……こんな野郎が……』

当たり前だ。……今の俺はIS学園の織斑一夏じゃないんだよ。

『戦場でふんわり考え事とは図が高い』

『ッ!?!?!?』

俺から見て左側にいた2人が何やら話しているうちに背後に回り込む。他の奴らも俺の方を見ているが、コイツらと一直線上にいたため撃てないのだろう。

そして1人を切り裂き、1人は首を掴んで持ち上げる。

残り7

『グッ……ガッ……あ、ああ』

『どうした？私を仕留めなければ任務を果たせないぞ？さあ、撃てよ』

『くっ……誰が撃つか！この悪魔め……』

『ほほう……仲間の命を優先して祖国の障害になれるのか。なんともお優しいことだ』

『なっ……それは……』

俺の安い挑発にすぐに引っかかる奴が一名。

『油断大敵！返してやろうッ』

『うわッ!?!』

『なにィ!?!』

一瞬奴が怯んだうちに、掴んでいたのを思い切り奴に向かって投げる。2人が衝突し倒れこむが他のメンバーがすぐにかばに入った。

『……ふん。腐っても精鋭部隊、立て直すのが早い。だがッ……』

『なッ……総員退避イイイ!!』

ズドゥウン!!

『全員は仕留められなかったか……だが、4人はもらった』

俺が掴んでいたやつを投げる前に、ピンを抜いた手榴弾を腰のベルトにつけておいたんだが、どうやら感のいい奴が逃げたらしい。

残り3……ん？

『2人しかない？何処に行った!!』

気づかないうちに殺していたか？ いや……そんなはずはない。ッ!? まさかッ!!

『ここは通さないぜえ……』

『いつのまにッ……』

考え事をしていたからか、背後から残り2人のうちの1人が接近していることに気づかなかった。そしてタックルされ倒れこむ俺とコイツ。

『ルドルフ！俺ごと撃て、早くしろ！』

ルドルフと呼ばれた、この場にいる最後に1人は一瞬戸惑う様子を見せたがすぐに銃口をこちらに向ける。

『チッ……邪魔だァ!!』

俺はすぐにコイツを蹴り上げ腹にリロードしておいた拳銃を撃ち込む。ルドルフが撃った時にはもう遅い。俺が蹴り上げた奴がちょうど2人の真ん中に立ち……ルドルフの玉が、コイツの体を蹂躪した。

『なッ!? おいケイン!!』

『よくも……時間を取らせてくれたなァ!! タダデハスマサン!!』

この時の俺は何をしたのかよく覚えていない……残った1人に早く追いつかないかと思っていたのか……コイツらを殺すことに夢中になっていたのか……ただ分かることは、俺の意識がはつきりした時にはルドルフって奴がぐちゃぐちゃになっていたことだ。

『残り1……ラウラノモトニハイカセン……ゼツタイニブチコロシテヤル』

.....

.....

.....

...

まあこんなもんだな。ただ、コイツを見つけるのには苦労させられた。なんか植林地してある木の陰で隠れてたからな。

『全員殺したのか？』

『当たり前だ。それが私の任務だからな。ただ、私怨も兼ねているが』

『私怨……だと……？』

『どうでもいい、どうせ、貴様らの任務は果たせないのだからな』

コイツ1人だけ練度が段違いとか、そういうふうでもないし仕留めるのは簡単だ。それでも俺がすぐに殺さない理由……それは……

「ISからの生体反応も検知されない……一体何処に行ったの？ 全く、お姉さんを手こずらせるなんてどんなテロリストかしらね」

『おい……なんで奴がいる？』

『……気づいたら後ろにいたんだ』

こっわ!? チッ……ここで更識楯無はまずいだろ。コイツ、めんどくさいことをしてくれるッ!!

ちなみに今は俺の持つてるIS用のステルス（レイ作）を俺とコイツに使ってる。コイツがバレたら俺もバレるから仕方ねえんだよ。

「ミステリアス・レイディの索敵能力は悪くないはずんだけど……どうしてかしら？」

独り言を言いながらも、決して油断せずあたりを搜索する楯無。……まだ、あつ

ちの死体処理も終わっていないんだが。

カサッ……

『あっ……』

「何か動いたッ、そこね！」

『馬鹿かお前は……仕方ない。死ね』

コイツが様子を見ようとへんな風に動きやがった。コイツらの情報がバレても面倒なので即座に殺す。もちろんナイフで、だ。

「出てきなさい。ISからは逃げられないわよ」

『………』

どうする？ ワンチャン振り切れるけど……仮面が破損するのもまずい。今はユ

ニコーンが手元にないってのもまずい。くそっ、やっぱ代わりのISを借りておけばよかった……

「警告はしたわよ？ 安心しなさい、殺しはしないわ。喋ってもらうまでは、だげどねッ」

楯無はその手に槍を呼び出して、機能としてついてるガトリングガンを俺が隠れている木に撃ち始めた。

『仕方ないか』

『ッ、ロシア語!? 所属を言いなさい! 私は、ロシア代表の更識楯無です』

間一髪隣の木に移動できた俺は、一か八かロシア語で喋る。ビンゴだ。ロシアの部隊だと思わせれたな。楯無もロシア語で喋り始めたし。

『それはできない、貴女にはその権限がない』

『なぜ？ロシア代表としての権限でも足りないというの？』

『そう言っている。任務中だ、邪魔はしないでほしい』

『いいえ、そういうわけにはいきません。どんな任務であれ、私の仕事はIS学園を守ることよ』

『……そうか、腐ってもたかが日本人。やはり我が祖国の代表としてはふさわしくなかったか』

『……何ですって？』

それっぽいことを言えば行けるかと思ったんだが……予想以上に引かかる。

『いや、気にしないでくれ。では私は帰らせてもらおう。安心しろ、学園の人間には何の手出しもししていない』

『……一応確認させてもらおうよ』

『ああ、好きにしてくれて構わない。もう二度と会うことはないと願いたいよ』

『なっ……まちなさ……いない』

よし！何とか抜け出せた！楯無ちよろくて助かった!!

俺は死体を持って、海辺に急ぐ。到着すると、先ほどとは変わってない凄惨な現場。

「……海に流すか」

しっかりと処理をし、痕跡がわからないようにする。それが終わり、楯無が追ってきていないのを確認し俺は通信端末を使う。

「もしもし姉御？」

『はいはい、終わったの？』

「ああ、だけど更識が出張ってきた。……脱出手段が正直ない」

『それなら、回収班を向かわせてるわ。そろそろつくと思うのだけれど……』

回収班……？そんなのどこにも……いや……

「あれか……」

海の方こうから近づいてくる生体反応が1……『越界の瞳』かISでないと見えない空間の歪みの中にいるのは……

「いっくん様、お迎えにありがとうございました」

「クロエ・クロニクル、ありがとう。だが、まだ任務中だ。俺はSというコードネームがある。そっちで呼んでくれ」

『黒鍵』を展開させ、俺の前に現れたクロエ・クロニクル。『ワールドページ』を解除したようだ。

「……S様、分かりました。まだ、ユニコーンを届けていませんので手持ちにありません。……修復できていないのですが」

「いや、十分だ。飛行さえできればいい、『ワールドページ』を使ってくれるのだろうか？」

「はい」

俺はクロニクルからユニコーンを受け取り展開する。

『……さっきぶり、マスター』

「ああ、ごめんな。無理させる」

『ううん、でも長くは持たないよ。……持たせて見せるけど』

「頼んだぜ、じゃあ行くか」

「はい……『ワールドページ』」

クロニクルを中心に大気成分が変質していく。無事に起動させたようだ。

「……ラウラ、今何してっかな。なあクロニクル、お前の妹に会って行かなくていいのか？ 多少なら俺も手伝ってやる」

「……必要ありません。彼女は私の事を知らないでしょうし、私は彼女のように完成出来なかった。今更あったところで……」

「……そうか。会いたくなって、決心したらいつでも言え。俺が掛け合おう」

「……そのようなことはないかと思いますが、ありがとうございます」

「ああ（……会いたいなら素直にそう言えばいいのに、まあ……コイツにも思うところがあるんだろうな）」

クロニクルは学園の方を振り返ることなく進んでいく。コイツ顔に出てるんだけどな……

「ッ!?!?……何を……」

「大人しく撫でられとけ。よく頑張った」

「……………はい」

血に塗れた俺の1日はこうして終わった。別に俺が殺した奴らについてはどうも思わない。奴らだっていっぱいしの精鋭部隊だ、死ぬ覚悟くらいあるだろう。それだけならば、俺も敬意を持って相対したんだが……俺の……大事なイモウトを狙ったんだ。そこに敬意もクソもねえ。

「アイツもコイツも、他人に人生を踏みにじられちゃいけない……バケモノの俺とは違ってな」

「……何かおっしゃいました？」

「……なんでもない。帰還したらまたユニコーンを預ける」  
「了解しました」

クロニクルは真顔で答える。もっと表情豊かには……いや、これもクロニクルの個性だな。

「それと、帰ったらメディカルチェックは受けておけ。機体の展開は負荷が大きいはずだ」

「この程度問題ありません。何より、私の体は通常の人間よりも頑丈に作られて……」

「それでもだ」……何故でしょう？」

「いつか分かるさ」

「……了解」

ラウラが俺の事を兄と呼ぶなら、クロニクルも勿論俺の妹だ。妹の体調を心配して何が悪い。……いや、流石に図々しいかな。



望んだ未来は虚構となりて

天災、世界最強、化け物、そして少女の序章

47話

「海、見えたッ!!」

1人の女子生徒の声によって目が覚めた。現在林間学校に向かうバスの中にいる俺たち1組は学生らしい雰囲気醸しながら目的地へと向かっていた。

「相・変・わ・ら・ず、綺麗・な・海・だ・な……」

「一・夏……? 何か言ったか?」

「なんでもねえよ箒。そういや、お前にしては珍しく浮かれてるな?」

「そ、そんな事はない!!(別に、一夏と席が隣だからなわけでも……決してない!!)」  
「そうかあ?(姉さんが、特別だ、って言ってこの席にしたけど……別に、箒に俺からしてやれることなんて無いんだがなあ……せいぜい、東さんが来る時まで悟らせないようにするくらいで)」

慌てふためく箒を横目に見ながら、俺は考える。

「はあ……(憂鬱だ……)」

「一夏こそ、何を辛気臭そうにしている?せっかくの行事だと言うのに」

「今まで行事の度に……な?今回も不安なんだよなあ……(まあ……そっちじゃないんだけど)」

俺の憂鬱の始まりはあの日、クロニクルと共に亡国に帰還したときのことだ。

……

……

.....

あれから数刻たち、クロニクルとともに亡国へ帰還し姉御に任務の完了を告げた。

「お疲れ様、一夏。追加の報酬はまた口座に振り込んでおくわ」

「姉御……いつも言ってるだろ？ いらないうて。今でさえ、通帳の額がえげつないことになってるってのに」

「ちゃんと受け取りなさい。いい仕事には正当な対価を、これは社会の常識よ。うちは一応ブラック企業じゃないつもりだしね」

「……了解。はあ……こんなに溜まってても使い時がなあ……」

なんとも贅沢な悩みだ。昔から少しずつ貰っていたんだが……姉さんに金の出所を疑われるから生活費には出来なかったんだよなあ……

「たまには無駄なことにお金を使うのもいいわよ。……オータムなんかは、ちょっと使いすぎだけど」

「アイツって結局何に金を使ってるの？いつも、金がねえ!!としか言わないから使い方が分かん」

「さあ、私もそこまでは。案外、ゴスロリ服とかでも買ってたね」

「……姉御、それはちょっと」

想像しただけでもなんともいえない気持ち悪さが……いや、実際に着てたら抱腹絶倒だろうがな。

「うふふ、冗談よ。それよりも、ユニコーンは大丈夫なの？」

「ああ、さっきクロニクルから連絡が来て『任務完了しました』だってよ。全く、真面目だよなあ」

この意味するところは、ユニコーンはレイさんにしっかり届けられたってこと

だ。ちなみにクロニクルは今束さんによる精密検査中。別れる直前にもう一回念押ししたからな。

「あらあら、いつのまに連絡先を？一夏も隅に置けないわねえ。学園で大量に女の子焦らせてるくせに」

「バカ言え。焦らせるような相手はちゃんと選ぶさ」

鈴とちゃんと約束したからな。

「そうね……後ろから刺された男を見たことあるし」

「……えッ!？」

「フフッ、冗談よ」

「心臓にわりい……」

全く、いつもの調子で言うからガチかと思った……

「いっつつつくううんッ!!」

「へ?ふッ!?!」

「なにごとッ!?!」

俺の腹に向けてしつかりとタツクルをかましてきたナニカ。いや正体はわかってるんだが……

「束さん……何やってるんですか?」

「イタタタタ!! いたい!! 痛いよ! くん!! なんでアイアンクローまで習得しちゃってんの!?! ちーちゃんになんかにてきたn……いったぁ!?!」

「ああ……タバネだったのね……びっくりしたわ」

姉御がほっと一息ついているが、その間にも俺から束さんのへの頭へのアイアンクローは続いている。

「あの……いっくん？ 束さんなんか痛みを感じなくなってきたんだけど……」

「まあ、天災ならそこらへんも気合でなんとかなるでしょ」

「いや束さんこれでも理系だからさ、気合とかいう曖昧な概念は……」

ふむ。ちょっと力を込めすぎたか。まあ本人もなんとなさそうだし大丈夫だろう。

「へえ。……で、何の用です？」

「あっ……このまま続けるんだ……えっとね、IS学園で今度海に行くでしょ？」

束さんが俺にアイアンクロウをされながらも要件を話す。一方で姉御は無音のカメラでこの様子を写真に収めている。何に使うんだ……

「ええ。あっ、箒に紅椿渡すために来るんですね」

「いつも思うけどなんでわかるのかな……まあそうなんだけどね。束さん……箒ちゃんとちゃんと仲直りがしたいな……ってイタッ!?……いっくん?」

思わず束さんを落としてしまった。そうか束さんにもついにまともな家族愛が目覚めたか。なんだろう、感動しすぎて涙が……

「いっくん泣いてる!? えっ、束さん何かしちゃった!? スーちゃんたすけて!!」

「タバネ、一夏をよく見てみなさい。大丈夫よ」

「え?」

「束さん……ちゃんと話し合えば箒と分かり合えます。束さんだったら強制的にその場を作ることできるはずですよ。俺も手伝いますから、絶対に仲直りしますよ!!」

「い、いっくん?」

「返事は?」

「はい!!」

ピッ

「えっ、あのいっくん今の音……」

よし言質は取った。じゃあ次は姉さんに送って……協力を取り付けて……

ピコリン♪

「いっくん今誰に何を送信したのk……『ブーブーブー!!』……あ、はいもしもし……」

『束が普通に挨拶しただとッ!? いやいい。おい束、私も協力してやるから死んでも箒と話し合え。いいな?』

「ヒィ!? ち、ちーちゃん……突然すぎじゃ……」

『返事は?』

「はい!!」

ブチッ

「……」

「タバネ……今のは？」

「俺の姉さんですよ姉御。まさかこんな一瞬で電話してくるとは……」

ていうか俺と姉さんの言い方似てたな。返事は？のくだりとか。

「いっくん……」

「どうしました？」

「……でづだっでぐだざい!!」

「うおッ!? ちょ、束さん抱きつくくな!! てか泣いてる!? 分かりました、分かりましたから!! とりあえず離れて!!」

束さんを引き剥がしながら俺は叫ぶ。この人、マジで変わったな。……って、

「おいコラッ!!俺の服で涙を拭くな!!そして鼻をかむな!!」

「いっぐん……ありがどーぢーちゃんもー、うわーん!!」

「……全く、束さんも結局は人なんだな。写真撮っとこ」

カシャッと一枚。今度箒にあげよう。

「クロニクル」

「はい。束様を回収しに来ました」 シュタツ

「うおッ!?!」

適当に言ってみただけなんだけど……マジで来るとはおもわなかった……

「束様、お部屋に戻りましょう。いっくん様も学園に帰らねばなりませんし」

「グーちゃん……」

「はい、貴女の娘のクロエですよ。ほら、行きましょう」

「うん……」

そうして束さんとクロニクルは行った。

「……あの、姉御」

「思うだけにしなさい……それとその写真のデータこっちにも頂戴。忘年会のネタにするわ」

「えっ、お、おう……」

データを姉御に渡しながら俺は思った。

あれ……どっちが母親だっけ？

.....

.....

.....

こんな感じのことがあったのだ。いや、まさかあの束さんが遂に……ねえ……まあ確かに、俺たちと良く訓練しているから一般生徒よりもISの操縦技術は高いし、なんなら1回目よりも1、5倍は強い。これなら……とは思うが、多分調子に乗るだろう。

「ふむ……クラス代表決定戦、クラス別トーナメント、タッグマッチ……確かに行事のたびに事件が起こっている。でも大丈夫だろう。流石にこんな所まで出張してくるような輩がいるわけがない」

ほらっ、こんな風にな。確かに、今回は束さんはナターシャ・ファイルスの『銀の福音』を暴走させていないし、亡国企業も関わってない。だが……もう一つある。

この間襲ってきやがったフェンリルに謎の声。あの時は、ラウラの目を治して貰ったし俺の負傷だけで済んだからまだ良いが、ウチのボスも珍しくとても警戒していたしな。おそらく……来るんだろう。またフェンリルが相手となると、白式だけでは厳しい筈だ。第1形態では……

（白式……今回は、もしかしたら無理して一気に形態移行させるかもしれない。もしそうになったら、耐えてくれよ）

『まっかせてよ!! ユニ子ちゃんには休んでもらわないとね!! 王理は無理だけど……ユニコーン以上には仕上げて見せるよ!!』

やっぱ頼もしいな。俺の相棒は……

「そういえば兄様、兄様のISは大丈夫なのか？」

俺の後ろの席からひょこつと顔を出してきたラウラ。

「この前、倉持技研の人に簡単なメンテナンスの仕方を教えて貰ったからな。試しに自分でやったら意外と出来たから大丈夫だ。今回も試験装備のついでに診てくれるらしいし」

「ほう……倉持は参加しないと思っていたが……もしや兄様、倉持の専属？」

「よく分かったなラウラ。あの頃の姉さんの機体を作ったところだし、何より白式を作ってくれた恩がある。信用はできるさ」

どちらかといえば、俺が信用されてる方なんだがな。実質俺、倉持のトップみたいなもんだし。

今回はレイさんが作ったという装備を俺が試す予定だ。いつものゲテモノ類じゃなくて、量産型に積む武装らしい。あと、ウェルキン先輩の機体の武装もだな。

「倉持技研……打鉄を作ったところか。あれはいい機体だ」

「箒も愛用してるもんな。打鉄を」

さすがは武士といったところ。まあ、浮遊してる盾があるのは扱いやすいよな。  
最悪投げれるし。

「こーら、ウチのラファールだっていい機体だよ？ 取り回しの良さや、装備の自由度の高さは世界一だって言えるし」

「ああ、シャルロットが乗ってるからといっても量産型であのレベルの動きができるのは素晴らしいな。自由度が高いというのは部隊でもしっかりと役割を持たせることができる」

「ラウラ……」

ラウラの隣の席に座っていたシャルロットは、打鉄の話ばかりしている俺たちに不満そうに話しかけてきた。相変わらずラウラは少しズレてるな。

「それを言うなら、わたくしの祖国、イギリスのメイルシュトロームだって……い

え、なんでもないですわ」

「セシリア、無理するな……」

「うん、BT兵器なんでものが作れる時点ですごいよイギリスは」

「皆さん……実は少しバカにしてませんことなくて？」

ラウラとシャルロットの慰めるような言葉に一瞬感動するセシリアだが、よく考えるとあまり慰められてないことに気づいてしまった。気づかなかったら幸せだったのに……

「もうすぐ到着する。全員しっかり座れ」

姉さんのその言葉に全員が神速の動きで着席する。流石は1組、洗練された動きだ。程なくして、目的地に到着した俺たちは、バスから降りて整列した。4組の生徒たちが乗っているバスを見れば、1回目の時参加していなかった簪さんの姿も見える。あの時彼女が参加していなかった理由は、打鉄式式が完成していなかった

から。今回は倉持がしっかりと完成させたから簪さんも参加できたと言うわけだ。

「「「「よろしくおねがいします!!」」」」

4クラス分の挨拶ともなれば本当に大きな声が出る。そして何より声が高い。俺1人だけ声変わった男子の声だから余計に目立ってしまう……まあ、気にしないけど。

「はい。やはり若い子は元気ですね」

今回宿泊するこの旅館の女将さんはとても丁寧なお辞儀をして答えた。ふむ……こう、改めて見るとやはり美人だな。あっ、目があった。

「あら……貴方が噂の……?」

「織斑一夏と申します。この度は私がいるせいで浴場の調節にご迷惑をおかけしま

した。これ……足りないかもしれません。が従業員の方に配ってあげてください」

「これはこれは大層なものを……ありがたく頂きましょう。清洲景子です。男の子1人ということもあって不自由があるかもしれませんが、何かありましたら遠慮せず従業員にお尋ねください」

俺は普段しないような言葉遣いで挨拶した。ちなみに女将さんに渡したものはちよつとしたクッキーだ。50枚近くあるから足りると思うけど……もうちょい作ってくればよかったか？

「全く……いつの間にそんなものを持ってきていたのか。不出来な弟ですが、よろしく願います」

「うふふ、織斑先生は弟さんに随分と厳しいんですね」

「いつも手を焼かされていますから」

いや、最近俺が手を焼かされてるよ。酒を減らさせただけであんなに叫びや

がって……まあ、減った分は俺がこっそり拝借したけどな。

その後、女子達は部屋に荷物を置きに行った。なんでも着替えて海に行くらしい。  
グイッグイッ

「ん……？ああ、のほほんさん。どうした？」

「んーちょっとねー。おりむーの部屋ってどこなのかなあーって」

「ああ……それなら……織斑先生の部屋だぞ」

「ええ!?遊びに行こうと思ったのになー」

両手をガバツとあげて驚いているのほほんさん。いつも通りゆっくり動いてるのに動きが大きいから何事かと思う。

「ハハッ、多分俺が個人部屋になると女子達がくるからだろうな。妥当な判断だよ」

「むー、おりむーなんか嫌そうじゃないねー」

「ああ、この機会に姉さんの矯正を、と思ってな」

「えっ？」

遠くで懐疑の声が聞こえているが気にしない。

「おゝ!! 織斑先生を矯正するのか……おりむー生きて帰ってきてね〜？」

「いや……そこじゃねえだろ……」

少し、のほほんさんと話してから別れた。彼女も水着に着替えに行くらしい。女子って海とか好きだよな。

「織斑、部屋に行くぞ。あとさっきの話を詳しく聞かせてもらおうか？」

「了解です。逆に聞きますけど俺が部屋に行かなくなってから自分でゴミ出しをしてないのと明らかに缶の数が増えているの気づいてないとも思いました？」

「ぐうっ!?……行くぞ」

あつ、話を終わらせやがった。このマダオ……マジでどうしてやろうか……

「ここだ。部屋の設備は自分でチェックしておけ」

「はい」

「さてと……今日は終日自由行動だ。好きにしろ」

姉さんは荷物をどかっと置いて俺に言う。

「織斑先生は？」

「ふむ……山田先生に誘われて買いに行った水着も持ってきたしな。あとで海に行くでしょう」

あつ、この人結局自分で選んだのね。1回目は俺が選んだけど、今回はレゾナンスで会わなかったからな。買っていないのかと思った。

「んじゃあ、俺はちょっと準備に……」

「織斑……いや、一夏」

「なに、姉さん？」

「箒と束のこと、頼んだ。あとで私も向かう」

「……ああ」

名前で呼んできた姉さんに対し、俺も敬語をやめて答えた。なんだかんだ言ってる姉さんも気になっていたらしい。ていうか、姉さんが“箒”って呼ぶのを聞いたのいつぶりだろうか。

く少し経ってく

「あつ、一夏か。……これ、なんだと思う？」

「おう。どうしゅ……ああ」

更衣室に行く途中でばったりと箒に出会った。箒の訝しむ視線の先には、最近どっかの天災が着けなくなっただうさ耳が砂に刺さっている。

「だいたい誰かは分かっているんだが……どうする？」

「好きにしろ。私には関係ないッ!!」

箒は不機嫌そうにどこかに行ってしまった。おそらく更衣室だろう。……こりやあ骨が折れるな。

「あの人、どうやってくるんだろうか……まさかまた人参ロケットじゃないだろうし……埋めるか」

俺は一足先に来てチキっているであろう人のためにこのうさ耳を埋めることを決

意した。こんな方法で来られても箒は嬉しくないだろうしな!!

「ちよちよちよ、いっくん、いっくんてば!!」

「……わざと気配を垂れ流しにしてビクビク震えて隠れていたウサギが何の用です?」

「いっくん辛辣ウ!?……私だってタイミング逃しちゃったただけだって!!」

箒が歩いて行った道の角からひょこっと出てきた束さん。少し体が震えている。おそらく箒の前に出て行こうとしたのだろうが、怖かったんだろう。ちなみに服は懐かしのアリス服だ。姉さんに会うことも考慮したのか?

「はあ……かの天災があわやヘタレだったなんて……まあそれが分かったからこうやって手伝ってあげているわけなんですけども」

「それについてはすごく感謝してるよ。お礼に今度白式の拡張領域を増やしてあげる!!」

「えっ……マジ？それはありがたい」

「まあ、開いたその分『零落白夜』の機能拡張に持っていかれるだろうから意味ないと思うけどね!!アハハっくんぎゃ!!?」

「このクソウサギ……脳みそひきづり出すぞ?」

「んにゃ!!いっくん頭痛い!!流石の束さんでもこれは流石に……おっふ」

カラカラと笑い出した束さん……もといクソウサギをアイアンクロード沈める。

「白式、今の話はマジか?」

『ん、頑張れば出来るだろうけど……そうすると62%の確率で零落白夜に異常が発生するかも。エネルギーが逆流するとか?』

確率めっちゃたけえ……ていうか代償が恐ろしすぎるな。

「そういえばいっくんて……なんでコア人格と会話出来るの?」

「愛ですね」

「何故そこで愛ッ!？」

「冗談ですよ。俺が化け物だからじゃないんですか？」

『えゝ冗談なの？』

俺が冗談を交えながら和やかに言っても、束さんは発言に気づき体を硬直させた。

「……ちーちゃんにも言ってるの？」

「いいえ？言っても意味がないですし、別に気にしてないですし」

「いつから……」

「ん？」

「いつから知ってたの!!」

束さんが珍しく狼狽し、焦った声で喋る。

「うーん……秘密です。解き明かしてみてくださいよ、天災でしょう？」

「……分かった。ちーちゃんには言わない」

珍しく束さんがしおらしい。

「よろしい。あつ、ボスは知ってるんで悪しからず」

「いっくんはもう少し事の重大さを自覚したほうがいいと思うけど……まあいいか、いっくんだし。じゃあ……今日からよろしくお願いします。いっくん」

すごく失礼なことを言われた気がするが気のせいだろう。

「はい。殺してでも仲直りさせてやるから任せてください。化け物と世界最強がついてるんです。大船に乗ったつもりでいてください」

「いっくんがこの上なく頼もしい……」

束さんの目がキラキラしてる。……やっぱ、ちゃんとした人だなあ。俺とは違って。

## 少女達は海と共に輝いて

## 48話

「んじゃ、いっくん任せたよ!! 東さんも詳しいことは知らないからできれば教えて欲しいけどね♪」

「知らないほうが身のためですよ?」

「東さん本当に何されちゃうのかなあ!?!」

「ハハッ……これもちゃんと考えての行動なんでまあ許してくださいな」

さっきから俺に発言に驚いてはビクンビクンしてるの面白いな。

「むう……ホントに頼りにしてるからね」

シュバッと東さんが去っていった。……わざわざそんなことしなくてもいいと思

うんだが……

「一夏さん？何をしていらっしゃるのですか？」

「セシリアか。いや、こういう縁側って旅館にしかないから珍しいな」と思ってな」

前言撤回。さすがは束さん、気配遮断も完璧だ。

「なるほど……わたくしには、日本の『旅館』というものが初めてですので、全てが珍しく感じますわ」

「確かに……まっ、せっかくの自由時間だ。好きに楽しめばいいさ」

「そうですね!!……差し当たっては一夏さん、お願いがございました」

逆に日本が特徴的すぎる部分もあると思うけど、まあ文化だからな。

「どうしたんだ、そんなに改まって？」

「いえ……そのお……後ほど、サンオイルを塗っていただきたくて……よろしいですか？」

恥ずかしそうに言うセシリア。だが……1回目の記憶が邪魔をする。

「うッ……それは……」

そういえばそんなことあったな……今回は流石に断ろう。このアプローチは流石にキツイぞ？

「遠慮しとくよ。ただでさえ、男一人だからな。視線がキツイ……」

「そ、そうですわよね……申し訳ありません」

「いや、こちらこそすまん。あつ、でも水着は楽しみにしてるぜ」

「えッ……ふふ、はい!!では一夏さん、失礼しますわ!!」

そうしてセシリアは機嫌良さそうに更衣室へ向かった。……やっぱ俺、女性の扱

い方を学んだほうがいいかもしれない。姉御の部下に女性関係で強い人いないかな……

「さて……俺も着替えて準備しに行くかな。明日のために場所とかシチュとか考えとかないと……俺は俺で武装のテストがあるから忙しいしな」

まあ、もしも『銀の福音』が来ても束さんはマークしてあるし、今回はモノクローム・アバターも護衛に来ている。戦力的には問題ないだろう。正直、今の俺ならば白式でも勝てるが……無闇に力を晒すわけにもいかない。ほんとにやばい時は、箒には悪いけど束さんも連れてこよう。

く海く

やはり目の毒だと思う。真夏の海で100人以上いる生徒の中でただ一人の男で

ある俺。そして、以前から思っていたがレベルの高い女子たちがほぼ生徒全員……やはりIS学園は魔境だったのか(今更)

そして忘れてはいけない本来の俺の任務。IS学園に潜入(入学)し情報を亡国に流す事。ならば……亡国(にいる男性諸君)のために、学園の生徒の様子も写真に収めておくべきではなからうか……？

ドシュ……

「いでッ!?!……銃弾？」

右胸に当たったのは実銃の弾。大きさに拳銃だろう。辺りを見回すと、ライフセイバーみたいな格好をしたマドカが海から顔を出している。え……お前そこにいるの？てかなんで撃ってきたの？

『邪念を感じたよお兄ちゃん』

「コイツ……脳内に直接ッ!?!……ああ、秘匿回線か。白式だな？」

『うん。ユニ子ちゃんが居ないからね』

『今回はしっかり護衛するから任せてねお兄ちゃん!!』

「おう、頼もしいよ。オータムと姉御にもよろしく言っておいてくれ」

『了解。それじゃ。あつ、ダメだからね?』

ズブズと潜行していくマドカを見送り、俺は歩き出す。何もないことが一番だけだな。……それにしてもマジか、言い値で取引するつもりだったんだけどなあ……

「にしても、俺の体はちゃんと隠れてるのか?」

『私から見た感じだと大丈夫そうだけど……一夏も『瞳』で見ればいいじゃない?』

「どこで誰が監視してるか分からないからな。むやみに『越界の瞳』は使えんよ」

俺の体は、投薬とかナノマシンを入れたりするのに施術で体の縫い跡が痛々しいからラッシュガードで隠している。この前のフェンリルに挟られた横腹も、傷はないが傷跡はまだあるからな。年頃の女子陣には目の毒だろう。ISスーツを着れば

いいと思ってたんだが……

『塩水で濡れたISスーツごと体を包むの嫌だからね!？』

という白式の意見を汲んでちゃんと水着に着替えた。なんですよ……必要だったら機体ごと海に入るのにな。

「一夏」

「ん……？おう、鈴か」

「アンタ遅いわよ。もうみんな集合してんの。早く行きましょ？」

「わざわざ待ってくれてんの？そりゃ、早くいかねえとな。……そういえば、箒はどうしてる？」

「箒？あの子は……着替えるまでは不機嫌そうな顔だったけど、私が『一夏にその水着着てそんな顔で会う気?』って聞いたら真っ赤になって、タオルケット被ってどっかいっちゃったわよ？」

「……元気そうで何よりだ」

コイツ、悪魔か？ていうか、それを俺に言っちゃいけねえだろ……

「あら、一夏はもうみんなの気持ちに気付いてるでしょ？だからいいの。知ってようが知ってまいが、どうするかは結局一夏次第なんだし」

「……そうだな。ありがとな」

「ふふ、襲っちゃダメよ？」

「なッ……バカ言うな」

最近は鈴にペースを崩されてばかりだ。

「それにしても一夏、ISスーツ越しでも見えてたけど、筋肉すごいわね……」

「そうか？……まあ鍛えたからな」

死ぬ思いを何回もしてな。なんでISなしでISからの銃撃を避け続けなきゃいけないんだよ(遠い目)

「あつ、見えてきたわよ」

「おおー、確かに全員揃ってる。これは待たせて申し訳ないな」

「そう思うんだったらさっさと遊びましょ。明日はどうせ個別でやる事違うんだから」

「だな。……あのバスタオルの妖怪みたいなのはなんだ？」

「妖怪……ああ、あの子まだあの格好だったのね」

俺の視線の先には、その全容がタオルで隠れて見えない謎の物体がいた。時よりもぞもぞと動いている。息苦しいのだろうか……？(すつとぼけ)

「あつ、一夏うちよつと来てー!!」

「ほら、行って来なさい。あたしは準備運動しとくから」

「あ、ああ……」

シャルロットに呼び出された俺は少し小走りでそこに向かう。

「ほらラウラ。一夏来たよ？」

「くっ……どうせ笑われるのは分かっている……だったら……だったら!!」

「もう……大丈夫だって。ほら、この前も言ってたじゃない？どうなりたいの？」

「ッ!?……そうだな。感謝するシャルロット」

ボソボソと何か聞こえるが聞こえない聞こえない。決して耳がよすぎて内容が丸聞こえな訳がないだろう？

「私はッ!! 兄様が誇れるラウラ・ボーデヴィッヒでありたいッ!!」

バサッ!! とバスタオルを脱ぎ捨て、露わになったのは、髪をツインテールの

ように括り、黒の水着を来たラウラの姿。

発言の内容からも分かる通り……ていうか、聞いてる身としては少し小っ恥ずかしいが……

ドシュッ……

「ぐふッ……おお、ラウラ、水着似合ってるじゃないか。可愛いと思うぞ？」

「可愛ッ!? わ、わわわ……私が……可愛いッ!? ……うわあああああ! ……!!」

「逃げたッ!？」

マドカに銃撃されながらもラウラの水着を褒めたところ……顔を真っ赤にして逃げられた。……ま、まあ、こういうことを言われ慣れてないし、耐性もないしな。仕方ないね。そしてマドカよ……あまり人を撃つでない……

『ニイサマ……? お兄ちゃん、後で説明ね』

……うっす。

「……………」ムスッ

「……ど、どうしたシャルロット？」

「僕は？」

「……ラファールのオレンジに合わせた感じか？めっちゃ似合ってる。すっげえ可愛い」

「……改めて言われるとすごく恥ずかしいね。ラウラの気持ちも少し分かるかも」  
「お、おう……」

「気まずいッ!! 鈴さん早く助け……いないだとう!?!どこに行きやがったアイツ……  
あ、もう遊びに行つてやがる。アレは……ティナ・ハミルトンか。」

「飲み物を買ってこようと思うけどなんかいるか？」

「えっ!?……ああ、うん。それじゃあ……紅茶で」

「……今は午前だぜ?」

「……?」

「いや、なんでもない。んじゃちょっと行ってくる」

……ネタが通じなかった。アレじゃない紅茶って自販機に売ってたかな?

そんなことを考えながら少し歩き、自販機に到着すると見知った水色の髪の少女がいた。

「あれ、簪さん?」

「ふえ……い、一夏!? な、何してるのこんなところで!!」

「いや、飲み物を買いにきただけなんだけど……ん、簪さん、水着すごい似合ってるぜ」

「ファ!?」

俺が話しかけると、目に見えて驚きの声を上げる簪さん。……ああ、もともと内気な少女だったなそういえば。恥ずかしいのか。

「うう……すごく恥ずかしい。見せるつもりなかったのに」

「まあまあ減るもんじゃないしな？……そういえば、何買うつもりだったんだ？」

「うん？えーと、ドクペ」

「ここに売ってのか……マジか、あるじゃん。俺も買おうっと」

小銭を多めに入れて、ドクペ2本と紅茶を1本買った。

「はいよ」

「え……あ、ありがとう一夏。あ、お金……」

「いいってこれくらい。この前のトーナメントで世話になったしな」

「そう言うことなら……」

「んじゃ、簪さんも海樂しめよ」

「あ……うん。また後で」

「おう」

こういうのは勢いで押し切ったら勝ちなんだ。感謝してるのは本当だしな。さて、戻るか。

来た道に戻ることに数分。

「ほい」

「ひゃ!?……一夏?」

座ってたシャルロットの首筋にペットボトルを当ててる。『つめた〜い』だからな。効くだろう?

「ははっ……紅茶、買ってきたぞ」

「ありがとう……お金は……今の悪戯分奢りってことで」

「かまわんよ」

むすっとした顔だが、それではただ可愛いだけだ。

「んじゃ、俺は行くよ。ちょっと用事があるからな」

「僕もついて行っていい？」

「いんや、織斑先生からの頼み事だからな。最悪俺にとばっちりが来る」

「ああ……頑張ってね一夏」

「おう。昼飯までには戻るさ」

シャルロットと少し話して俺はまた歩き出す。箒と束さんが話し合うにベストマッチな場所を探さないといけないな。そんなもって明日にゃ話させる。

「あ、織斑くーん。ビーチバレーしない？」

遠くから話しかけてきたのは、かの7月のサマーデビルさん。相変わらず名前  
の意味がわからん。

「すまん。織斑先生からちょっと頼まれててな。午後も自由時間だしそこでやろう  
ぜ！」

「やった！約束だよー!!」

周りの女子もキラキラしてるな。……海を舐めてた、すまんな海。

『モテる男共は許さん』

ッ!?……気のせいか……?とんでもない憎しみの波動が……

ま、まあそんなことは置いておいて、入江の方まで歩いた俺は、あまりいい場所  
がなかったことに落胆して来た道を戻ろうかと方向を変えようとした。

『一夏、なんかあっちの方に空間があるよ?』

「あっち……? いや特にそんな場所は……うわ、なんだここ」

白式の言葉で少し奥まで来た俺は、洞窟みたいになっているが、暗いわけでもなく海水が中に入ってきて反射で当たりを照らしているとても綺麗な場所を見つけた。

「……綺麗だな。……ここにしよう」

即決だった。こういう雰囲気のところなら多少は箒も束さんの話を聞かかもしれない。アイツ、結構ムードとか気にするタイプだし。

「あとは……なんとかして箒をここに幽閉……誘き出さないといけないんだけど……ああ、姉さんに頼めばいいか」

困ったときの世界最強。流石の箒でも姉さんの言葉を無視したりしないだろう。

「よし！プランも固まったし、戻るか。白式、今何時だ？」

『11字53分分。集合時間5分前まであと2分てところかな？』

「なにッ!?……ヤッベ!!」

その瞬間、俺は風になった。1秒でも遅れたら姉さんに殺される!!

## 乙女の会合と亡霊達の密会

## 49 話

昼飯をとった俺たちはさらに遊んだ。東さんと箒の会合場所を姉さんに伝えもしたし、抜かりはない。

そんなこんなで現在は夜。旅館の大きな風呂を一人で占領してひたすら楽しんだ俺はルンルン気分で部屋に戻ろうとしていた。ひたすら携帯を弄るのである。ねえさん？ふっふっふ……酒禁止するぞ（はーと♪）って言ったら瞬殺だったぜ。まあ……ラウラが風呂に侵入しかけてたときは焦ったが、待ち伏せしていた姉さんによってアイアンクローされながら強制退室していった。良いやつ……ではないが、良いやつだったよ。

そんな姉さんを見送った後に部屋に戻った俺は、取り敢えず携帯でマドカ達へ異常なしの報告をした。

「全く、ラウラめ……目を離すとすぐにおかしな行動をとる……」

「あ、おかえり姉さん。ラウラは？」

「デュノアのところに放り込んできた。お前の妹を自称しているんだから兄のお前がなんとかしろ」

「その場合姉さんの妹でもあるんだからちょうど良いじゃん？」

会話をしながら、姉さんは備え付けの冷蔵庫から缶ビールを取り出した。俺が妹、と言った瞬間にピクツと眉が動いた。ついさっき俺がマドカとメールしてたとか夢にも思わないだろうな……

カシュッ……と良い音を鳴らしながら姉さんはビールを喉に流し込んでいく。

「俺にもちよつとくれよ」

「バカ言え、お前にはまだ早い」

「ですよねえ……そうだ姉さん、最近俺の周りの奴ら関連で疲れてるだろ？折角だからマッサージしてやるよ」

「む？　そうか、なら頼もう。いつのまにか店を出せるレベルだからなお前は」

缶ビールを右手に持ちながら布団に寝転がる姉さん。どうやら少し酔い始めているらしい。俺は姉さんの近くに寄り背中に手をかけた。

色々まずいので割愛するが、俺が力を入れるたびに艶やかな声を上げるのは本当にやめてほしい。1回目の俺のタイプの女性は姉さんみたいな人なんだから少し意識してしまう。今は、そんなことはないけどな。と……そんな時、ドアの外で気が配がした。

「……はあ、お客さんだぞ」

「んんっ……ああ、そのようだな」

『ッ……やば』

微かに鈴の声が聞こえた。どうやら姉さんが近寄るのに気づいたらしい。

「へぶッ!？」

女性があげちゃいけないような声を上げたのはおそらく2人。セシリアと箒だ。ドアの奥を見れば退避していたであろう鈴が「やっぱりか……」と呟いて顔を青ざめさせていた。中学時代に鈴にもマッサージしてやったことがあるから覚えていたのだろう。

「盗み聞きとは感心しないなあ？ 良いだろう、少し入っていけ」

ニヤケながら言う姉さんの迫力に、3人は抵抗することなくドアをくぐって部屋に入ってきた。その様子はまるで首元を掴まれた猫のようだ。ウケる。

「そうだ、デュノアとラウラ……ああ、更識も呼んでこい」

「了解しました!!」

シュッとセシリアと箒が敬礼して走り去って行った。鈴は頬をひくつかせがら呆れている。

「鈴……やっとか？」

「別に良いわ。あたしはあの2人について来ただけなもの」

数十秒後、やや小走りで部屋にやってきた鈴以外の5人は恐る恐る部屋に入ってきた。簪さんは、急に姉さんに呼ばれたことで怒られるんじゃないかと死にそうな顔をしている。

「姉さん、俺は少し外に出てるよ」

「ん？なんだ、お前も分かるようになってきたじゃないか」

「おかげさまでね……んじゃ」

「ああ」

何故姉さんにまで俺の女癖の悪さを指摘されなきゃいけないのだろうか。中学から一応気をつけてたつもりだぞ？告白される回数は減らなかったけど。

「はあ……どこ行こう？」

（一夏が出て行った後の部屋内 三人称視点）

「そう緊張するな……っといっても無理か。飲み物を奢ってやろう。好きなものを取れ」

千冬が冷蔵庫から紅茶やらコーヒーやら炭酸やらを取り出して箒達に手渡した。いただきます、と全員が言って口につける。冷えた飲み物に全員が一息つく、千冬はさらに笑いながら言った。

「飲んだな？」

含みのある言い方に全員がビビる。何かが入っていたのではないのか……そんな恐怖が彼女を襲うが……鈴がやれやれといった表情で言った。

「はぁ……千冬さん、なんか作りましようか？」

「いやいい、客に作らせはせんよ」

そう言いながら千冬は２本目のビールを取り出してぐびぐびと飲み始めた。

「織斑先生……まだ仕事中じゃ……」

簪がビクビクしながら千冬に言うが、さらにビールを喉に流し込む。

「やめなさい簪……あたし達はもう口止め料払わされてんのよ」

「え?……あ」

全員が気づいた。飲み物を奢ること、この事は見逃さなければいけないと言う  
事実に。

「さて、前座はこのくらいで良いだろうか? 肝心な話をしようか。ぶっちゃけた話、  
お前らアイツのどこがいいんだ?」

どかっと座った千冬は興味深そうに尋ねる。意味が分かったのか、箒達は少し恥  
ずかしそうにしている。

「わ、私は……別に……」

逃げるためかラムネを飲む箒。

「わたくしは、クラス代表としてしっかりしてほしいだけで……」

セシリアは、顔を赤らめながら……そしてどこか不安そうな顔で言う。

「ふむふむ、ではそう伝えておこう」

「「なんでもないです、忘れてください（ませ）!!」」

息の合った2人、仲はいいのである。

「あの……僕は別に彼に恋愛感情を持っているわけでは……」

「む……？ そうなのか、てっきり……」

「どちらかと言うと好奇心かなあ？ 一夏は……何も知らなさそうでなんでも知ってる感じがするんです」

真面目に語るシャルロットに千冬は少し考えてから言葉を発する。

「確かに、アイツは中学くらいから急に大人びたな……」

「ああ、そのくらいでしたっけ。悟りきったようで、どこか決意に満ちた目をしてた一夏って」

「私より長く時間を共にしたお前の方が知っているだろう鈴?」

「家族のアンタがそれ言っちゃダメでしょうよ……まあ、無理して大人ぶってる節はあったわね。それなのに無駄に博識だし」

うんうんと頷きながら語る鈴に、一夏の中学時代を知らない他の5人は興味深そうに話を聞いている。

「ラウラは?」

「私は……現に兄様と呼んでいますし、恋愛感情はありません」

「そうでしたわ、ラウラさんは何故一夏さんの事を兄と呼びになるのです? しかも急にでしたし……」

「まあ……なんと言うのだろうな。ああ！ビビッと来たんだ。この人が私の兄様だとな。あとは祖国の黒兎隊の副隊長が、日本では慕う男性のことを兄と呼ぶと聞いたんだ」

「クラリッサか……ラウラ、間違っているからな？直せとは言わんが覚えておけ」  
「はっ!!」

ラウラは特に変な反応をする事なく素直に答えた。セシリアに問われたときは少し眉を寄せて千冬を見たが、おそらく誰も気づいていないだろう。

「更識はどうだ？」

ピクツと肩を跳ねさせ反応した簪はあうう……顔を真っ赤にしながら答えた。

「私を……私として見てくれたところですよ」

「ふむ……それは？」

「私の姉は更識楯無、この学園の生徒最強……そして、織斑先生も知ってる通りです」

「ああ」

日本の対暗部用暗部、『更識』のことだ。公には知られていないので簪は濁して伝えた。

「だから……お姉ちゃんの妹としてしか見てもらえなかった私を……更識簪として見てくれた一夏には……すごく……うう……もういいですか？」

「十分だ、なあお前ら？」

のぼせあがりそうなほど顔を真っ赤にしてこれ以上は言えないと示す簪に、千冬は満足そうに簪達に問う。

「[[[[[……]]]]」

「え!?……せめて何か言って欲しいなあ」

無言になって少し俯く5人。どうやら簪の話が想像以上に響いていたようだ。

「思わぬ伏兵がいたようだな? ハッハッハ!! 鈴、お前の天下かと思っていたがなかなか分からないものだな?」

「千冬さん……乙女の恋話を酒のつまみにするのは趣味が悪いです……」

高笑いしている千冬に、すでに鈴はジト目だ。しかし、すぐに調子を取り戻すと語り始めた。

「私は前に告白紛いのことをしました」

「「「「「ッ!!」」」」」

「もちろん、抜け駆けだってことはわかってるけどね。でも……保留にされちゃった♪」

「保留……一夏が、勘違い以外の答えを出したのか？」

小学生時代の一夏を知っている筈が、その鈍感さを発揮しなかったのか聞いた。

「ええ、言っとくけど中学に入ってからとはっつきり告白を断り続けてたのよ？ そんな一夏が、保留だってさ」

「何故なのだ？」

「1年間待って欲しい、それまでには全てを終わらせる。って言ってたわ。なんのこともかさっぱりだけどね」

「……(一夏さんには、やはり何かとてもつもない秘密が……あの時見たのは決して幻覚じゃなかったと言うことでしょうか?)」

「ほう……一夏がそんなことを……それで鈴はなんと言ったんだ？」

千冬が迫撃とばかりに鈴に聞いた。

「そんなに短くなくても、何年でも待ってやる!! って言いました」

「『『『『『おお!!』』』』』」

「だからあたしは待ちますよ。もちろんアピールは続けますし、誰にも負けるつもりはありませんから!!」

鈴の力強い宣言に、箒達、それにシャルロットとラウラまでつられて気合を入れ直した。

「ふっ……アイツも好かれたものだ。知っての通り一夏は、家事も料理も完璧、マッサージも上手ければ何より強い。アイツと付き合える女はお得だな」

「強い以外千冬さんできないから言ってるだけじゃ……にぎゃあ!？」

「この頭だな? 愚かなことを考えて言っているのは……?」

「『『『『……(うわぁ……命知らずだ……)』』』』」

鈴がアイアンクロード締められている。一見凄惨な現場だが完全に鈴の自業自得

なので誰も助けようとしな。いや、助けようとするれば同じ目に合うのが目に見えるのだ。

「このくらいにしといてやろう……それよりも、一夏が欲しいか？」

「……くれるんですか？」

「誰がやるか。女なら自分で勝ち取れ。すでに鈴は王手をかけているぞ？」

「「ッ!!」」

「自分を磨けよ、ガキども。ああ、鈴は体型もだな」

「いつか絶対にぶっ飛ばしてやるわこのマダオ（まるでダメなお義姉さん）……」

千冬が3本目のビールを開けながら、女性だけの話は続いて行った……

（一夏）

「で、姉さんに部屋を追い出されて私達のところまで来たの？」

「ああ……行くところがなくてな」

現在、昼に見つけた場所でモノクローム・アバターのメンツと密会をしていた。

「だからってわざわざ私らと会うか普通？」

「いいじゃないの。たまにはね」

オータムとスコールの姉御が言う。さすがっす姉御、ついて行きます。

「そういや、姉御のISは出来てるのか？」

「ええもちろんよ、ゴールデン・ドーン……黄金の夜明けって言う名前。炎での攻撃を得意とするわ」

「へえ、今度スペックデータ見せてくれよ。なんなら模擬戦でも……」

「却下よ、貴方とやるのは疲れるから嫌だわ」

「ええ……」

何故だ……何故なんだ……

「ああ、そういえば一つ言っておくことがあったわ」

「なんだ？」

「亡国で使う量産型ISのことよ」

「ッ!! ついに完成したのか？」

素晴らしい……無駄に技術は高い亡国が作る量産機だ。きっと打鉄やラファール・リヴァイブよりも性能が高いのだろう。

「試作第3世代量産型IS『ウィル・オ・ウィスプ』……亡国の使う量産型にふさわしい名前よ」

「ウィル・オ・ウィスプ……鬼火か。ははっ、いいじゃねえか。ていうか、第3世代ってことはイメージ・インタフェースシステムを搭載しているのか……一体どんな？」

「そう焦らないの。ほら、これを見なさい」

姉御が手渡してくれたスペックデータを見る。

紫の武士鎧のような装甲に大きな翼型の浮遊ユニットがある。どこからどう見てもアンバランスだ。和風と洋風をごちゃ混ぜにしたみたいで違和感を感じる。標準武装は両刃のロングブレード『カゲロウ』、3連装アサルトライフル『炎天』だ。……何故カタカナと漢字なんだ？

そしてお待ちかね、第3世代武装『紫苑』。浮遊ユニットのエネルギー・ウイングが青紫に輝いて機体を包みその性能を上げるらしい。夜間実験で使った時、その飛行している様子がゆらゆらと空間を漂う鬼火のようなことから、機体名称が『ウィル・オ・ウィスプ』になったそうだ。ちなみに、エナジー・ウイングから発するエネルギーは部分的に付与することが可能……ふむ。

「おい、これ白式の『零落白夜』を流用しただろ？てことは束さんが囁んでるな？」  
「あら、よく分かったじゃない。完成間近でタバネが加わってくれたから、問題点をポンポンと解決してくれて完成が早まったそうよ」

「うわあ……レイさんがんばったなあ（白目）」

変態技術者が増えるとうなるって分かってたはずなんだがなあ……

「で、何機用意してるんだ？」

「なんと63機よ。今までのISのコア強奪任務で集めた分の殆どがこの機体を装備させるの。それ以外は全て私達モノクローム・アバターと新設される実行部隊のISに回されているわ」

「いつのまにか結構コアあんじゃん……新設される実行部隊？」

テロリスト組織が所有しているコアの数じゃないんだよなあ……多分EU連合も完

封出来るだろうな。えっと……白式とユニコーン。マドカの機体に、ゴールデン・ドーン、あとオータムのアラクネもあるな。あとは……ウエルキン先輩に渡したISに、レインのハウンド。ああ、買収した倉持のコアも含めるからまだ8、9個はあるな。簪さんの打鉄式は除外しても多い。

「ええ、【フォールン・ワールド】……世界を変える私達にはお似合いの部隊名よ。隊長は私、隊員はオータム、レイン、そしてタバネ」

「え……モノクローム・アバターは？」

その理論だと俺とマドカとウエルキン先輩が置き去りなのですが……もしや……

「隊長は一夏に任せるわ」

「ガッデム!! やっぱりかこんちきしょう!!……はあ、で？ 隊員は？」

「マドカ、サラ・ウエルキン、クロエ・クロニクル、そしてレイさんよ」

「なるほどねえ……おい、ちょっと待てや姉御。どうしてクロエが部隊に配属され

てるんだ。あの子に戦闘は……」

「あの子が自分から言ってきたのよ。一夏のサポートがしたいってね」

「はあ？」

アイツ、そんなに積極的だったか？ 束さんの助手を務めるのかと思ってたんだが……

ピピピピ……

「あら、もう時間ね……戻りなさい一夏。ユニコーンはまだかかりそうだけど、詳細な情報を纏めたものをユニコーンに入れておくってあげるから」

「ちっ……今日はここまでか。分かったよ姉御……じゃあみな」

「じゃあまた、兄さん」

「一夏、今度料理のレシピを教えろよな」

「ああ、いいぜ」

モノクローム・アバターのみんなに別れを告げてから旅館に戻った。

「急な部隊数の増加、人員分け、量産型の完成……亡国はこれまでもなく活発に動いている……そろそろ本格的に動き出すのか……俺の……いや、俺達の目的のために。ボス、頼みますよ」

## 予想内の最悪

## 50話

合宿はついに2日目に突入した。今日はついに箒と束さんが話をする日だ。束さんが馬鹿なことをしないのは分かっているので『銀の福音』の暴走も起こらない。つまり邪魔される要因はないはずなのだ。

「ようやく全員集まったか……ふん、おい遅刻者」  
「はいい!!」

なんとも珍しい。ラウラが寝坊して姉さんに絞られている。環境が変わると寝られ無かったのだろうか？

ISの機能の一つを遅刻の罰としてラウラが説明している。ちなみに今日の俺は倉持……亡国から送られてくる装備の試験だ。どうやら『ウィル・オ・ウィスプ』

の新装備だ。もちろんあちらでも行っているが、俺の意見も欲しいらしい。隊員によって使う武装が違うから仕方ない。

「よし、では各自指示されたことに従事するように」

姉さんの一言で生徒達が解散し、それぞれの行動を始めた。専用機持ちの俺達も動こうとしたその時……

「ああ、篠ノ之。お前はこちらにこい」

「……………」

姉さんが箒と呼んだ。箒はちゃんと束さんの話を聞いてくれるだろうか。束さんはいつもの馬鹿らしさを發揮せずに箒と話すだろうか……2人の仲はちゃんと戻るのだろうか……不安でいっぱいだ。でも、俺達が出来ることはここまでだ。なあ、姉さん？

『大丈夫です。今の母上ならば』

『うん、亡国に入ってからお母様はすごく変わったもん』

(……そうだよな。ああ、俺が信じなくてどうするんだって話だもんな)

白騎士と白式の2人から発破をかけてもらってしまった。そして姉さんが会合場所を伝えたのか、不思議そうな顔をしながら箒は入江に向かって行った。

「なあ……姉さん……」

「今は信じるしかないだろう……篠ノ之はどうかかわからんが、東は確固たる意志を持ってお前に頼んだはずだろ？」

「ああ」

「なら大丈夫だ、アイツらは姉妹だからな。結局はどこかで互いを求めている」

今までで一番姉さんがカッコよく見える。そうだな……姉妹なんだよなああの2

人。頑固で、不器用なところが特にそっくりだ。

「それとな織斑」

「え？」

「織村先生と呼べ！」

「ぐへあ!？」

いつてえ!?!……そういや、姉さんって呼んでたな俺……甘んじて受けよう。う  
う……姉さんからの愛の鞭……いや愛の拳か。

『いっくん。準備出来たよ』

急に白式を通して流れてきた通信。束さんからだ。

『箒もそちらに向かっています……本当に半径10キロ圏内に変な反応は無いんで

すね?』

『うん。ボスの方でも確認してるけど特に問題は無さそうだよ。だからいっくんも安心して装備のテストをお願い。何かあったら束さんもそっちに向かうから』

『来んなアホ。アンタは箒と仲直りするまで帰ってくんね』

『急に雑だねいっくん!?……うん、ありがと。じゃあ切るね』

『はい、俺と姉さんから激励です。当たって砕けろ』

『砕けちゃダメじゃないかなあ!?……はあ、じゃあね』

適度に緊張をほぐす事は出来ただろう。さて……俺は俺の事をこなすか。

「やあやあ! 久しぶりだね一夏君!!」

「ヒカルノさんじゃないですか……ああ、そういや倉持の所長でしたね」

「君さ、ウチの技術者に対して辛辣じゃないかい?」

「だったらもう少し自重してくれませんかねえ?」

「無理」

「即答すんな変態」

水着に白衣着てる変態こと篝火ヒカルノ、亡国で買収した倉持技研の所長だ。話をしていた俺たちの元へ、同じ倉持所属の簪さんもやってきた。

「どうもです」

「やあ簪君。打鉄の調子はどうだい？」

「良い感じです。メンテナンスも私が出来ますし……」

「それは良かった」

今回、簪さんは追加パッケージがない。その代わりに搭載されている『流星』という装備を試すそうだ。俺が聞いたときは変にはぐらかされたからな。

「んじゃ、一夏君はこのコンテナに積んである武装のテストをお願いね」

「あの……このって言われても3つコンテナがあるんですが？」

結構大きめの白いコンテナがトラックに積まれている。3つもだ。

「んん？あ、全部よろしくね。少し具合を試すだけで良いからさ」

「全部!? 1日で!?あの……分かってます? 武装を変えるたびに白式の設定を変えないといけないんですけど……」

「自分で頼めば良いじゃない?」

「このアマ……他人事だと思って好き勝手言いやがって……」

仕方ない……白式、武装のアンロックを頼む。

『……ホントに全部やるの? 結構面倒なんだけど』

マジですまん、頼むわ。

『ええ……分かったよ。白騎士く手伝って』

『仕方ありませんね』

2人がアンロックしてくれた武装から、順々に手に取っていく。アサルトライフルにロングブレードにショートブレード、ランチャー、レーザーライフル、ジャッククリ、ショットガン、ガトリング……うん？多くね？

「量産型なんだから武装は多い方がいいのさ」

そうですか……その分俺達の負担が増えるんですけどね。

「あの……手伝おうか、一夏？」

「大丈夫、なんとかかなりそうだしな。簪さんは打鉄のパッケージの調整を頑張ってくれ」

「うん、分かった」

とことこと海辺に走り去っていく簪さんを見送りながら俺は白式を展開した。

「そうだ、白式のメンテナンスもしておこうか」

「自分でやってるから大丈夫です」

そしてその後は黙々と武装を握り振るう。そしてそのデータを入力しヒカルノさんに渡して行った。

「このランチャー、手で持たないといけないんですか？絶対無駄ですよ？」

「むむむ？……………外観的に、取り付けは似合わないかな〜って思ってたんだけど」

「そこ気にします？ラファール以上の取り回しの良さが売りなんですからあらゆるものに対応してくださいよ」

「ふむふむ、現場の意見として留めとくよ。それ以上は本社に戻ってからだね」

そんなこんなで 1 時間と少し経った頃……恐れていた事が起きてしまった。

『一夏!! 太平洋上に一機の IS の反応があったわ!! 一直線にそっちに向かっている』

スコールの姉御から連絡が入った。

「なに?……ヒカルノさん!!」

「ボスから私の方にも連絡があった。一夏君は行って!!」

「はい!!」

俺は少し離れた位置まで走った。どうやら姉さん達にはまだ情報がきてないらしいので先に亡国メンバーとの情報共有をするためだ。

『姉御、俺だ。状況説明を頼む』

『ええ、昨日に引き続き海域で警戒中にISの反応があったわ。亡国に確認したらアメリカとイスラエルで共同製作された『銀の福音』という軍用ISが暴走を始めたそうよ。操縦者のナターシャ・ファイルスを載せたままね』

やはり福音か……くそつ、どうしても……というかやはりアイツらしいない。フェンリルを作り出したあの声の男の組織だろう。

『機体の性能に変化は？』

『操縦者の安全が守られる程度での最高速度を維持し続けているあたり……おそらく変わっていないんじゃないかしら？ 目視したわけじゃないから不確定よ』

『了解。モノクローム・アバターは海域から離脱。最初は俺達IS学園の生徒で交戦する。万が一に備えて学園側のセンサーギリギリ程度でボスの命令を待って待機してくれ』

『分かったわ。2人とも聞こえたわね？ それと、一応サラ・ウェルキンとレインにも連絡を入れておくわ』

『頼んだ』

手短に通信を済ませるとちょうどいいタイミングで姉さんからの緊急収集がかけられた。旅館の一室に戻るらしい。

「……東さんは……状況報告だけしとくか」

旅館への道を取りながら、俺はメールを打った。

（束side）

「だからね箒ちゃん、私は……」

（む？ いったんからメール……今は無理なんだけど……）

「なんと言おうが私は姉さんと話す事などありません」

「それでも……私は、箒ちゃんに聞いてほしいんだ」

「……分かりました。でも聞くだけです」

「ありがとう」

（ごめんいっくん。後で必ず見るから）

（一夏side）

束さんからの返信が来ない、だがこれでいい。今は2人の話を優先させてやりたいしな。

今は、とある一室で大型ディスプレイを眺めながら、専用機持ちと教師陣が話があった。さっき姉御に説明された事を姉さんが皆に説明している。

「アプローチのチャンスは一回きりだ。つまり、一回で暴走ISを落とさなければならぬ」

「俺がいくしかないな」

さっさと話をまとめよう。特にこれについてみんなとの話は必要ない。ただ行つて俺が落としてくればいい……しかしそれは、1回目と同じことしか起きない場合だ。今この場には箒と『紅椿』がない。俺を運ぶ手段がない。

「あの……」

「どうした？」

そんな時、簪さんが手を上げた。

「私のISの後付武装の一つに『流星』というものがあります。スペックデータを開示するので見てほしい……です」

「[[[[「ッ！？！？」]]]]」

俺も含めた全員が驚いた。空中に表示された『流星』のデータに哑然としている。通常のISの何十倍はあろうかという大きさの装備だ。特殊な推進剤を利用したそのスピードは圧倒的であるらしい。

「倉持はこんな武装を……」

姉さんは目を見開かせながら呟いている。……まあ、対組織用の殲滅兵器の試作品だろうけどな。こんな恐ろしいもん競技用で使えねえよ。

「なるほど……更識、音速下での戦闘訓練時間は？」

「48時間です」

「十分だな。では、織斑と更識の両名による目標の追跡並びに撃墜だ。更識、装備の量子変換は？」

「すでに……完成しています」

「では15分後に開始する。各自準備を怠らないように!!」

「「「「了解!!」」」」

場は解散。俺と簪さんはすぐに倉持の元へ行きISのチェックを始めた。

「簪さん、移動は任せた」

「うん……『流星』の武装で援護もするから、一夏は安心して突撃して」

「ははっ、頼もしいな」

お互い緊張をほぐすためか軽口を言い合う。

「2人とも、機体はバッチリだよ」

ヒカルノさんが簡易的にISのチェックをしてくれた。

『白式、二次移行の準備は?』

『完璧♪後は一夏と私のイメージ次第だね』

こっちも準備は出来ているらしい。そして、出撃前に一番聴きたかった声も聞けた。

『応答しろS』

『ッ……ボス、なんでしょうか？』

『今回は貴様個人に秘密裏に任務を与える』

ボスからの秘匿通信だ。ISからではないが、白式に直接連絡してきている。

『ハッ……その内容は？』

『ナターシャ・ファイルスの勧誘だ』

『……ボスは、私が失敗する事を考慮されていないのですか？』

『ふむ、その時はまた稽古をつけてやろうか？』

『任務、受諾しました。是が非でも成功させますんでボスとの稽古だけはどうか勘弁を』

『ふっ……その意気だ。成果を期待している』

『了解!!』

ボスに直々に言い渡された……なるほど、これは失敗出来ないな……さて、時間だ。修理中のユニコーンの分まで頑張らないとな白式。

『うん!!』

あれ……そういえば何か忘れてるような……いや、忘れるような些細なことだろう。それより今は作戦に集中しないとな。

（???）

「第二の試練を始めよう」

「はぁ……今回も趣味の悪い物を用意しましたね」

「失礼な。※※※と話し合ったが、結構好評だったぞ？」

「それはお2人の感性がどうかしているだけです」

「……まあいいだろう。今回の織斑一夏はユニコーンを所持していない。恐らく余裕だろう」

「どうでしょうか……どうだったのですか？」

「さてね……おっと、あの2人から通信だ。少し外す」

「む……まあいいでしょう。はぁ……私に覗きの趣味は無いのですが……っと、今更でしたね」

撃滅、並びに……

51話

（日本海）

「なあ簪さん。このスピードだと何分で着くんだっけ？」

「うーんとね……3分……だったかな？」

「そっかー……じゃあさ、目の前に見えるものは？」

「銀の福音だね」

「ここまで来るのに何分だっけ？」

「……1分」

はいどうも皆様、織斑一夏と申しますう。え、物騒な会話が聞こえたって？嫌だなあ……そんなわけ……あるんだよなあ……

「簪さん、一時離脱!! 後方支援を頼んだ。俺はアイツを足止めしとく。ついでに本部への通信も」

「分かった!!」

簪さんのISから飛び出した俺は、作戦目標の『銀の福音』に近づいた。

作戦が始まって俺と簪さんが空に飛んでからわずか1分……ああ、違うな。簪さんのISが最高速度を出してから1分だ。その短時間で俺達は『銀の福音』……長いので福音と呼称するが、ソイツと接敵してしまった。

正直かなりまずい。まだ地上からはそんなに離れていないので、レーザー兵器を主兵装とする福音の流れ弾が旅館に届く可能性があるからだ。つまり出なくていい被害者が出るかもしれない。

『敵機確認、迎撃モードへ移行します』

「チッ……やはりか。こっちだッ!!」

福音の発する電子音声聞いて、俺はすぐに真横を駆け抜けた。出来るだけ旅館との距離を離してから戦闘を行いたいからな。流石はAIというべきか、敵を確認したらすぐさま追いかけてきた。もちろん広域殲滅兵器の『銀の鐘』を稼働させ、圧倒的な加速を生み出しながらだ。もちろん白式では追い付かれてしまう。

「白式い!!二次移行の準備だ!!」

『了解!!』

『La……♪』

福音が甲高い音を出しながら迫ってきた。俺はスラスターを止めて自由落下し回避。しかしそれも予想内だったのか福音はその場で翼を広げた。否……砲口をこちらに向けた。

「クソッ……2回目でも殺意高いなおい!？」

大量の砲口から放たれる夥しい量の銀の弾丸。それら全てが俺に向かって飛んできくる。限界までエネルギー効率を見直した『零落白夜』もたまに使いながら一撃も喰らわないようにしているが時間の問題だ。軍用機だけあってスペックがおかしい攻撃を耐え続けることはできない。

「一夏、お待たせ!!」

そして突如俺の後方より現れた大量のミサイル群が福音に向けて飛んできた。福音はもちろん回避しているが、追尾式のミサイルに手間取っている様子だ。

「ナイスだ簪さん……その装備エグいな」

戻ってきた簪さんはやはりアホみたいにかい『流星』を装備している。

「私が隙を作るから、一夏は『零落白夜』を」

「ああ。少しは距離を離れたから、セシリア達が救援にくるのも遅れそうだけだな」

そして簪さんが加速した。巨大な2つのスラスラーから噴射される青い光はまさに『流星』の名を冠するにふさわしい。その巨体は福音を無視して旋回を始めた。まあ、sonだけでかけりゃISとしての優位性が消えても仕方ないか。

「雪羅展開。一気に行く!!」

旋回を終え、福音に向き直した簪さんはもう一度ミサイルを発射。先ほどと同じように福音を追尾して追い詰めていく。

「まだまだ!!」

さらに放たれたレーザー……いや、ビームの嵐。長く伸びた一番大きい銃身2

門、さらにその横についた2門、打鉄の肩部ら辺にある2門、そして打鉄自身が装備する荷電粒子砲が2門。圧倒的な火力が福音に襲いかかっていく。……俺いる？

『銀の鐘』を使った迎撃でミサイルを撃ち落とした福音は、AIではありえないような機動で全てのビームも避け切った。しかし無理な機動だったのか、それとも攻撃が掠っていたのか、一瞬だけ動きを止めた。

「今ッ!!」

瞬時加速を使って福音の懷へ近づいた俺は『零落白夜』を発動させて袈裟斬りを仕掛けようとして……辞めた。いや、辞めざる負えなかった。

「民間人ッ!?!……忘れてた!!」

そう、1回目でもこれが原因で俺は墜ちたというのに……ハイパーセンサーで視界の広がった俺が見たのは、『銀の鐘』で被弾したのか、爆炎と煙を上げている一隻の船。

『La……………』

「くうっ!？」

無機質な声が聞こえ、間近で『銀の鐘』を喰らってしまった。すぐさま距離を離れたが、SEの減りが大きい。

「……………うそ、どうして。この海域は学園側で封鎖されてるのに」

「情報ミスでもあったんだろうな……………簪さん。救助を頼む」

「え……………でも、火力支援が……………」

「セシリア達が来るまで持たせてみせるさ。大丈夫、いざとなったらお前らをちゃんと頼るから」

不安げな表情の簪さんに、俺は微笑む。以前の行動で泣かれてしまった時の事を思い出したのか、簪さんは迷っているようだ。出来るだけ刺激しないように……優しく微笑む。

「……絶対だからね？」

「ああ」

「破ったらみんなに⑨クルーズのパフェおごってね」

「地味にひどい嫌がらせだ!?あの店のパフェ結構高いのに全員だとう……はは、これは守らないとな」

俺の言葉で満足したのか、簪さんは加速して船の方に向かって行った。

『La……♪』

「お前の相手は俺だよ木偶人形……俺だけを見てろ」

逃がさない、とでも言いたげな福音に、雪羅で銃撃しこちらに注意を引かせた。

『一夏、いつでもいけるよ』

『ナイスだ。でも無理だろうな……二次移行させてくれるタイミングも無いだろう』  
『そうみたいだね』

福音からの攻撃を回避しながら白式と会話する。しかしこのままではエネルギーが尽きる一方だ。チラッとハイパーセンサーで簪さんの方を見るが、まだ救助できていないようだ。

「一か八か……白式、『零落白夜』のエネルギー伝導効率を『銀の鐘』を消せる程度まで落とせ」

『一夏……危なくない?』

「やらないと無理そうだからな」

『オツケー……出来た！』

さっすが相棒仕事が早くて何よりだ。

「織斑一夏、突貫するッ!!」

今の白式では福音には勝てない。だからといって二次移行するタイミングもない。ユニコーンも手元がない。亡国の連中を呼ぶわけにもいかない。だから……真っ直ぐ突っ込む。雪羅のエネルギーシールドを展開し、嵐のように迫ってくる『銀の鐘』を『零落白夜』で消し続けてさらに真っ直ぐ……しかしあと少しという時に、危険を察知したのか福音が離脱しようとした。

「逃げてんじゃねえッ!!」

個別連続瞬時加速を使い、そ俺はさらにスピードを上げて追いつき……

「単一能力……零落白夜アア!!」

福音の肩から斜めに袈裟斬り。絶対防御すら貫通するその一撃は確実に機能を停止させ、福音を海中へと沈ませた。

「……作戦終了。機体を回収し本部に帰還します。民間人の要救助者多数。担架を用意してください」

手短に姉さん達へと連絡を入れ、福音が落ちた海中を見つめる。

『白式、福音のコアはどうすると思う?』

『お母様曰く、あの子は操縦者に随分と愛されてるらしいよ。だからきつと……』

そうだな……きつと上がってくるだろう。物語の主人公のように、更なる力を

つけて大切な人を守る為に。だから……

「ならば俺は、それを阻む魔王となろう。白式、二次移行開始」

『ふふっ……了解!!』

そして、俺の体……いや、白式が光り輝き始めた。俺はそれに身を任せるように目を閉じた。白式と一つになるような暖かい感覚の後……俺の意識はなくなった。

く???  
く

「思えばさ、ここだったよね。私達が初めて一夏とお話した場所」

「ええ、あの時の彼は『守る』ことに固執しすぎていました。思わず首を締めようかと思っただけには」

「ふふ……私が後ろからさっと言葉を遮って止めたんだよね。でも、今の一夏はもう違う」

「はい。あの時よりも決意が固く、何より強く、そして私達を認めてくれます。もちろんユニコーンの事も」

「良い御主人様だよね」

「そうですね。一度しか使われることのなかった私もそう思います」

「絶対……守り抜こうね」

「はい」

「おいおい……当事者抜いて話すなよ……」

さっきから黙って聞いていればこっぴどかしい事を聞かせてくれるもんだよね全  
く……

「あ、一夏やっときたんだ」

「彼ならずといいましたよ白式。貴女が気付いていなかっただけです」

「うえ!? 言ってよもー……」

「ははっ……仲が良くて何よりだ」

白い騎士甲冑を着た背の高い女性、白騎士。白いワンピースを着た背の低い少女、白式。白式は無邪気に白騎士に笑いかけている。相変わらずの目元のガードで表情がわかりづらいが、どうやら彼女も笑っているようだ。

「なあ……俺がここに来る手順は必要だったのか?」

「うん、大事な事だからね。特に一夏は」

「ナンバー001……いえ、それ以上に白騎士のコアが使われているだけでも貴重なのです」

「そんなもんか」

彼女達の理論はよく分からんが、まあ大事な事らしい。

「まあ今はそんな事いいじゃん。本題に入ろっか」

「ん、ああ……」

スツと、白式の声から感情が抜け落ちた。なるほど、随分と真面目な話らしい。

「一夏、今から私がする二次移行……亡国寄りになっちゃった」

「ッ!?……どういう事だ……」

言葉通りなら、見た目や武装がって事になるのだが……

「雪片はショートブレードに、雪羅は両手直接装備されてる。あと拳銃も追加されたかな。特殊兵装はエネルギー・ウイング。詳細データは後で見せるけど……」

「……ナイフと拳銃か、人を殺しすぎたんだな。翼は……昨日見た『ウィル・オ・ウィスプ』の印象が強かったか?」

「多分ね」

思っていたより俺はもう表側の人間じゃなかったらしい。

「一夏が望むなら……今すぐにでも二次移行をやめるけど……？」

「……いや、このまま続けてくれ。例えばどんな進化をしてもそれは俺と白式だ。アイツらだって受け入れてくれるはず」

「わかった。そこでね一夏、貴方に武装の名前を決めて欲しいの」

「んあ？それくらいなら全然いいぞ」

その時、武装のデータが直接頭に浮かんできた。

「……ショートブレードは『懺悔』、拳銃は『贖罪』、多機能腕は『断罪』だ」

「っ……ダメだよ一夏。それじゃ……バラすような物だから……」

「いい、どうせアイツらも俺に対して何かしらの変化は感じているはずだ。姉さんは知らん、例え俺が亡国にしようと止める手段はない。最大の手札も残しているし

な」

「……一夏」

俺がマドカに撃たれる前、姉さんは俺の知りたいたことを全て知っていると言った。だが今の俺はもうそれすら知っている。何も問題はない。

「白騎士」

「どうしました？」

「お前、自分の体は欲しいか？」

「……くれるのですか？」

「お前には散々世話になった。姉さんの事も……白式の事も……何より俺の事も……そしてそれを叶える手段が……これだ」

俺はこちらを向いている白式に向けて懐からある物を取り出した。まあ、白式が作り出した空間だから俺たちに関係することは何も問題は無いのだ。

「それは…… IS コア…… どうして貴方が…… ツ、なるほどそれには誰も居ないようですね」

「へえ…… 一夏、あの時のをまだ持ってたんだ」

「ああ、お察しの通りこれはあの無人機だった物のコアだ。無人機故にコア人格も存在していない……らしい。束さんに聞いた限りではな」

手の中でコアを転がしながら白騎士と白式に答える。

「で、どうだ白騎士。亡国なら…… お前に体を与えてやれる。もちろん、フォームとかはお前の意見に従うつもりだ。それが俺の…… 束さんの何よりの願い、そして贖罪だ」

「あの方の……？」

「宇宙に存在するデブリ除去用の装備しか積んでいなかったにも関わらず、軍事兵器としての力を誇示してしまった『白騎士事件』…… 束さんはな、最近ともに

なってからやっと後悔したんだ」

「……………」

ついに完全に黙ってしまった。しかし俺はそのまま言葉を続ける。

「束さんは、お前のためになんでもすると言っていた。さあ、どうする？」

「……………」

「白騎士……私は、いいと思う!!そろそろ自分を許してあげても……必要ありません」……白騎士？」

白式の言葉をかき消すように、白騎士は言った。

「敢えて呼び捨てにしましょうか一夏」

「へ……あ、はい!!」

やべえ……なんか白騎士が怒っている気がする!! なんかドス黒いオーラが出てるもんなあ!?

「私がこのコアを得たら、私だけを相棒として扱ってくれますか?」

「ッ!?!?!」

「おまッ……そういう事かよ……」

予想外の言葉に俺と白式は驚いた……はぁ……なるほどねえ……

「私は羨ましい。たった1人の主人を持ち、ずっと……時を超えてでもその人の為に戦える白式が。」

私は羨ましい。強大な力を持ち、その筈なのに決して驕ることなく自らを律することが出来る一夏が。

私は羨ましい。お互いを相棒として常に闘い、時を超え互いを認識しなくとも信じ合える2人の関係が……

私にはその全てが無かった。だから……欲しい」

表情はない。だがその声は悲痛そうだ……これは白騎士の願い。一度しか主人を得ず、一度しか戦えず、一度しか存在が公にされていないのにもかかわらず、世界にその名は悪名として知られている。当たり前だ。存在意義さえ否定されながら、すべてを抹消されたのだから……そのような願いを持つのは仕方がない。

独白を終えた白騎士はしかし、微笑んでいる。そして言った。

「でも、それはもう必要ありません。私が表舞台に立つことは必要とされていませんし、何より望んでいません。しかしそのコアは使わせていただきます」

「え……それはどういう……って白騎士？」

白騎士は俺の手からコアを奪うと自らの胸に押し当てた。するとコアはそのまま白騎士の中に入っていった。

「……出来ました。これでこのコアは白騎士の物です。そしてこれを……こうします」

「へっ!？」

白騎士は次に白式の方を向き直ると、もう一度コアを取り出して白式に向かって思いつきり投げつけた。

「へぶうっ!?!……ちよつと白騎士さん何してんの!?!めっちゃ痛いんだけど!!」

右頬を強打された白式は地面に倒れ伏しながら白騎士に抗議している。……俺は一体何を見せられている？

「ええ……って、白式。お前、今のコアは？」

「え?……ッ!!私の中だ!!」

「はあ!？」

なんとびっくり、白騎士のデータが入ったコアはもうすでに白式の中に入ってしまったのだ。

「これで、実質白式のエネルギーは2倍……いえ、本質が同じものを掛け合わせているので2乗でしょうか？」

「白騎士……お前、それがどういうことかわかって……？」

「もちろんです。これで、一つのコアに1人の人格という当たり前にして絶対の事になりました。不安定だったナンバー001のコアは存在しません。そして白式の強化にもなりました。全て完璧です」

ええ……それでいいんすか。いやマジで？

「私はもう誰か特定の個人を主人に持つことはしません。しかし、妹とそれに寄り添う主人を支えたい。出来ない姉のお節介という奴ですよ」

「白騎士……」

どうやら、彼女には彼女なりの願いがあったようだ。東さんもまだまだ娘を理解し切れていなかったらしいな。

「だから2人ともさっさと行ってください。サポートはしてあげますから」

しっしと手を振っている白騎士は口元しか見えずともとても嬉しそうだ。

「うん。分かったよ白騎士……一夏」

「ああ、行くか白式」

白騎士に背を向けて、俺は白式の手を取った。

『目覚めよ、白式・新月……その力で世界を照らせッ!!』

新たな白式が、今日……産声を上げた。

## 努力

## 52話

「この辺で待っていてください」

時は少し遡る。一夏が福音を撃墜する少し前の出来事だ。民間人の救助を頼まれていた簪は『流星』を量子変換し素の打鉄式式に戻した状態で、近くの孤島に人を下ろした。

「よし……早く一夏の元に向かわないと……」

「簪っ!!」

「……鈴?」

簪の名前を呼ぶ声の方を向けば、準備が完了してやってきたであろう鈴、セシリ

ア、シャルロット、ラウラがいた。もちろん全員ISを纏っている。

「一夏はどうしたの？」

「まさか……福音に？」

「いや、兄様に限ってそんなことは……」

「一人で……福音を抑えてる」

「何ですって？早く応援に!!」

各々が急がねば、という態度を示す中で簪は少し怯えながら言葉を続けた。

「あっちの方……『流星』を出すから、しがみついて」

「「「え？」」」

簪は少し離れてから『流星』を展開し、ブースターを吹かし始めた。

「早く捕まって」

「あのスピードで……しがみついていられますでしょうか？」

「でもその方が早いよセシリア……うん、仕方ないんだ」

「……私、吐かないわよね？」

「わ、私はすでに覚悟はできている……ぞ？」

4人は嫌々簪にしがみついた。振り落とされぬように……自分の安全を祈りながら。

「じゃあ、行くよ」

刹那、空気が震えた。特殊な推進剤のおかげでブースターの音は抑えられているが、そのスピードに空を飛んでいた鳥は驚いたのか急に方向転換している。

「」「」「……」「」

圧倒的なスピードに、4人はすでに無言だ。いや、無言にならねば自分を保てないのだろう。現にラウラに関しては白目を剥きかけている。シャルロットは目に光が宿っておらず、セシリアは空を眺め、鈴は顔を青くしていた。

「……………一夏は大丈夫だったんだけどなあ」

『流星』の完熟訓練を終えている簪だけは無事だったが、一夏は体が人外レベルなので比べる対象が間違っていたのだった。

（簪、束side）

「……………はい……………はい……………了解しました」

PI  
……

一夏が見つけた入江で話していた篠ノ之姉妹。しかし、束は急にかかってきた電話に対応をしていたのだった。

「ごめんね箒ちゃん、大事な話の途中に……んん？箒ちゃん？」

「姉さんが……姉さんが敬語を……？世界の終わりなのか？」

「ちょっと!! 姉が相手でも失礼じゃないかな箒ちゃん!? 束さんだって敬語くらい使うよ!!」

敬語で話していた束を前に、不機嫌を貫いていた箒でさえ遠い目をして現実を否定し続けている。いつもネタにされている通りなのだが、束に原因があるのであまり強く言えていない。ツツコミは鋭いようだが。

「全く……ちーちゃんといい、いっくんといい、箒ちゃんといい、どうして私の身内は失礼なのかな!!」

「それは姉さんの普段の言動のせいです」

「おっふう……箒ちゃんもなかなか鋭くなってきたねえ……」

これだけ見れば姉妹としての会話がすっかり成り立っているように見える。束が一方的にダメージを負っているように見えるのは気のせいだろう。

「さてと……箒ちゃん、誕生日おめでとう」

「え、ああ……ありがとうございます姉さん」

急な束からの言葉に少しどもる箒だが、素直に受け入れた。

「かーらーの……誕生日プレゼント!!」

「ッ!!」

束がが元気よく言ったと同時に、何も無かったはずの空間に大きなボックスが現れた。

「……これは？」

「ISだよ」

「ッ……私の……専用機ということですね」

「うん。私が心血を注いで作り上げた現時点で世界最強を誇るスペックの、『紅椿』さ」

「紅……椿……」

プシューという音と同時にボックスが開いた。そして中から現れた赤い機体。その美しさに箒は放心しているようだ。そのまま何分か眺めていた箒は、目線を下に向けた後しっかりと束の目を見て言った。

「受け取れません」

「……………どうしてかな？」

キツパリと拒否した箒に、少し悲しげな表情になった束が問う。

「私は一夏やセシリア達に並ぶ実力もありませんし、ISの適性もC…………この学園の入学条件の一つでさえ満たせていません。それに……………過ぎた力は人を人あらざるものに堕としてしまいます」

「……………そうだね」

「ツ……………分かっているのなら、なぜ!？」

「束さんはさ、こんな浮浪者だからIS学園を覗き見ることしかしなかったんだ……………何を見てたと思う？」

入江から覗く空を見上げながら、束は言った。箒は少し考えるが、答えが出せないのか何も言わない。

「箒ちゃんがいっくん達と訓練してる光景だよ。第二世代の打鉄で必死に専用機持ちに喰らい付いて、負けて、落ち込んで、それでも刀を握ってまた挑んで……箒ちゃんの努力は見てきたつもりなんだけどな」

「……………」

「束さんが言っても説得力がないよね。天災なんて呼ばれてさ、なんでも出来るみたいに言われてるけど……私だってISを作るまでにたくさん勉強して、努力してきたんだ。その結果が今のこの世界だよ。私の努力は実ったって、ISが世に帰った時思った。

それでも……その努力は今否定され続けている。『ISは兵器』なんて現実がある限り、『宇宙に行くための夢』を開発した私の努力は全て無駄であるって言われている。

ふざけんな!! って思っちゃった」

「姉さん……」

「最近気づかされたんだけどね……凡人には凡人にしか見えない世界があるってこ

とも知った。私が異常であることは自他共に認めてるから何も言及しないけど、私は人と関わろうとしなかったから私の世界しか見てなかった。

私、最近いろんな人とお話ししてるんだ……って、箒ちゃん驚き過ぎ」

「いや……その……イメージが出来なくて……」

黙って束の話聞いていた箒も、彼女の記憶とは違いすぎる束の態度や言葉に表情を崩している。

「あはは……ねえ箒ちゃん。箒ちゃんはどう？」

「私……ですか？」

「自分の努力を、認めてる？」

「ッ……」

箒の核心を突くような束の言葉で、箒が目を逸らした。

「私は私の努力を認めてるよ。どんな結果であれ、私の努力が世界規模で認められてる。とっても嬉しい……だからさ、箒ちゃんも、自分の世界に引き籠もってないで、他の人の世界……客観的に箒ちゃん自身を認めてあげて？」

「わ……たしは……」

「専用機持ちが強いのは当たり前。いっくんは例外だけど、それ以外の人は全員努力して専用機を勝ち取ってきた。

……ダメそうだね。よし!!お姉ちゃんがズバツと言ってあげる。

箒ちゃん、君の努力は本物だ!!よく頑張ってる!!」

「あっ……」

立ち上がって片手を腰に当て、ビシッと指を指しながら言った。

「……………」

言葉が出てこない。しかし、その感情はすでに束にバレている。箒の目から涙が

溢れているからだ。

「資格なんてどうでもいい。箒ちゃんのお姉ちゃんとして、ちゃんと初めての誕生日プレゼント……受け取ってくれないかな？」

箒に近寄った束は、正面から箒を抱きしめた。

「ッ……姉さん。服が汚れてしまいます。離れてください」

「ヤダッ、服なんてどうでも良い。当分離さないよ」

「……我儘な姉だ」

「今更じゃない？」

「……今更でしたね」

「箒ちゃんはどうされるの嫌い？」

「いえ……すごく、心地いいです」

「ふふっ……やっと笑ってくれた」

箒も束を抱きしめ返す。今この場に居るのは、世界を騒がせた天災も、IS学園に通う生徒もいない。ただの仲のいい姉妹が居るだけだ。

少し経って、束は箒を離れた。その目からは涙が溢れている。

「箒ちゃん。答えを聞かせて？」

「姉さん……ありがとうございます。紅椿、姉さんの初めての誕生日プレゼント。しっかり受け取りました」

「うん!! 大事に使ってね!!」

お互いに涙を流しながら笑い合う。いつかの日はこうしていつも笑っていたはずなのに、それすら思い出せない。そんな思いが束の中で溢れかえるが、今この瞬間を一番大事にしているのもまた束だ。

「箒ちゃん、私、今度お父さんやお母さんに会いに行こうと思う」

「ッ!! 姉さん……」

「ちゃんと謝って、ちゃんと怒られて、ちゃんと家族になってくる」

「姉さん、その時は私も連れてってください。家族だから」

「もっちゃん!! 家族だからね!!」

「ふふ!!」

今までの険悪な仲はどうした?……千冬や一夏が居れば確実にそう思うような光景であるが、おそらく2人は祝福するだろう。

「よし……じゃあ箒ちゃん。早速紅椿で出撃しようか」

「……………へっ?」

気の抜けた声が入江に響き渡る。

「ね、姉さん? それはどういう……」

「いやゝ実は今さ、いっくん達が暴走したISと戦ってるんだよね。雰囲気は雰囲気だから言えなかったけど」

「そんな!?じゃあ早く行かないと!!」

「うん。だから箒ちゃん、私が調整するから紅椿に乗って。箒ちゃんの努力の成果、見せてもらうよ!!」

束に催促され、箒は紅椿に乗り込んだ。

「……………」

「不安かい箒ちゃん」

「……はい、私が上手く戦えるのでしょうか？」

「もう！言っとくけどね、専用機を持ってない一年生の中だったら箒ちゃんがナンバーワンだよ？この私が太鼓判を押すんだから自信を持って!!はい終わった、いつでも出れるよ!!」

「早ッ!?……姉さん、分かりました」

「機体や武装のデータは全部移動中に確認してね。ちーちゃんには私から言っとくからさ。箒ちゃんは安心していっくんを助けに行って」

束は今、敢えて一夏だけを呼んだ。それに気づいたのか気づいていないのかは不明だが、箒は少し不機嫌そうな顔をして言った。

「一夏達、ですよ姉さん。姉さんと違って私には背中を預けられる友達も居ますから」

「……ふふっ、そっか。じゃあ行ってらっしゃい!!」

「行ってきます、姉さん。すう……篠ノ之箒、紅椿、推して参るッ!!」

空気が爆ぜ、紅椿が展開装甲を使って急激に加速し空へと消えていった。途中、私にだって友達くらいいるもん……という呟きが箒の耳に聞こえた気がした。箒は少し苦笑しながら、束を背に真紅の閃光を放ちながらさらに速度を上げたのだった。

「……赤月はあるべき主人の元に戻った。彼女は箒ちゃんの願いを叶える為にその機械の体を最大限動かす。でも、今の箒ちゃんなら『コード』は要らないかもね。任せたよ赤月、箒ちゃんを守って」

箒を見送った束は、ステルスを使いながら自らのIS、『群紫』を展開した。

「ねえ群紫、この世界は楽しい？……うん、そっか。私は楽しいよ……じゃあ、もっと楽しむ為に動こうか。さて！ボスの指示通りにヒカルノちゃんと合流しよう!! あ、ちーちゃんにも会わないと!!

じゃあ、いっくよー!!」

## 空を駆ける戦姫達

### 53話

「なに……これ？」

一夏と福音が戦闘を行っていたであろう海域まで猛スピードで到着した簪達だが、思わぬ光景に絶句していた。

「……………」

彼女達の目の前には、機体ごと光り輝きながら膝を抱え蹲っている一夏と、同じように光っている海の中で一部分が見える。

「一夏!!」

試しにシャルロットが一夏に声をかけるが何も反応を示さない。

「どうしてしまったのだ兄様」

「……………ッ!? みんな構えて、何か来る!!」

「「「ッ!!」」」

鈴が突然叫び、全員がその言葉通り戦闘態勢に入った。一夏を中心として円状に展開した5人はとある方向から向かってくるISの反応に警戒を強めていた。

「速すぎるッ!!」

「初めて見る機体コード……搭乗者は……『篠ノ之箒』……ってことは」

簪が呟いたと同時に他の4人もそれを見た。ISからのシグナルを読み取ったのだ。一同はISが来るであろう方を向き思い出した。

「そういえばこの方向……旅館がある方向ですわね」

代表してセシリアが言った。

「みんな、待たせてすまない!!」

「[[[[[箒(さん)!!]]]]」

そして現れたのは、『紅椿』を纏い、両手に刀を持った箒だ。

「箒、アンタどうしてISを……」

「姉さんからの誕生日プレゼントらしい」

「お姉さん……あっ、篠ノ之博士!!」

シャルロットの眩きで全員が驚愕した。ISの生みの親が直々に開発したISとい

う事実気づいたからだろう。

「箒は、それを持つ意味を理解しているのか？」

「もちろんだ。新しいISコアに、国籍問題。何より姉さんと接触したということもな」

人一倍ISの危険性に気付いているラウラが箒に問うがどうやらしっかり理解しているらしい。

「私の実力が足りないことは重々承知している。専用機を持つ資格も無いことだ。だが……今はお前達と共に戦いたい……その頼む!!」

箒は頭を下げて5人の代表候補生に頼み込んだ。

少しの沈黙の後。鈴が代表して言葉を述べた。

「バカなの箒？」

「なっ……人が頭を下げているのにバカだと……」

「いえ……流石に今のはおバカさんとしか言いようがありませんわね」

「うん、僕もそう思う」

「ああ、私もだ。箒、お前はバカだ」

「……………私も」

「全員なのかッ!？」

5人全員にバカ認定され、多少は性格が丸くなったはずの箒がキレかけている。

「私のどこがバカだというのだ!!」

「全部でしょ、まず一つ目。アンタ、私達の訓練について来てるじゃない。それで実力が無い？他の生徒達に謝ったら？」

「あれくらい余裕でこなせねば強くはなれないだろう？」

「いや、あれハードメニューだから。あんなのに搭乗時間も少ない箒が付いて来て

るのはどっちかっていうとヤバいから」

キョトンとしている箒に追撃をかけるように鈴は言っている。箒はそれを聞いて驚く。

「二つ目、セシリア」

「はい、資格なら十分にありますわよ箒さん。貴女の努力は一夏さんを含めた皆さんが存じていますわ。何も問題はありません。IS 適性のことを申し上げるならそれを凌駕する実力をこれから身につけていけば良いだけですから」

「努力……(姉さんの言っていた通りだ。私が思っていたよりも私は認められているということか)」

先ほど束からも言われた努力という言葉をセシリアからも言われ少し考え始めた箒。しかし鈴はそれすら許さぬように続けた。

「3つ目、シャルロット」

「はい、あのさ。箒は僕達のことをどう思ってるの？」

「……その、友達だと思っている」

「うん。僕もそう思う。じゃあ遠慮なんて要らないよ。ね、みんな？」

「「「もちろん!!」」」

シャルロットはニコニコしながら箒に問う。しかしその笑顔は少し暗い……いや少しでは無い。

「4つ目、ラウラ」

「む、私もか。ふむ……お前の實力は我らがドイツのIS部隊隊長であるこのラウラ・ボーディッツヒが保証しよう。運が良かったとはいえ、私のA I Cに一時的に打ち勝ったのだ。誇れ」

ドヤ顔で語るラウラに、箒の表情も少し和む。

「5つ目、簪」

「ふえ!?……えっと、私が言うと言説力がないけど……お姉さんに認められるように頑張らなくちゃ……ね?」

「姉さんに……ああ、この紅椿でみつともない所は見せられないな」

姉との確執という意味では簪も経験がある為、姉に対する思いという意味では簪の良き理解者となるだろう。簪は簪の言葉でさらに決心したようだ。

「ありがとう……みんな……ッ!?後ろだ!!」

「[[[[ッ!!]]]]」

紅椿の高性能なハイパーセンサーが異常を感知した。すぐに全員に知らせ振りかえると……先ほどまで姿が見えなかったはずの福音が白く輝きながら海面より浮上して来たのだ。

「姿が違う……さっきはこんなじゃなかった……」

「ッ……まさか、二次移行か!!」

ラウラが叫ぶと同時に、そうだとも言いたげな福音が進化した『銀の鐘』を展開した。

「全員退避ッ!!」

「一夏ッ……」

すぐさまシャルロットが大型の盾を呼び出して未だ動かない一夏を守る。それ以外  
の5人はすぐに回避行動をとった。

「くうっ……一夏、どうして目覚めないの?」

必死に福音からの攻撃を耐えているシャルロットが思わず悪態をついてしまう。白式にはこれといった損傷もない。しかし全く反応を示さない一夏はまるでもう起きないのではないかという不安を起こさせている。

「シャルロット、ここは私が!!」

すぐさま箒がシャルロットの前に出て、展開装甲を用いてエネルギーシールドを展開。二次移行し威力も桁違いになっているはずの『銀の鐘』を完璧に防ぎ切った。

「すごい……これが篠ノ之博士が作ったIS!!」

「一夏を頼んだ。はぁ!!」

攻撃が止んだと同時に、箒は一気に攻勢に出た。『空裂』と『雨月』の二本の刀で福音を牽制し始めた。『雨月』を福音に向けて突き出すことでその先端からレーザーを撃ち出したが福音は難なく回避。続いて箒が振るった『空裂』からはエネ

ギーも刃が飛び福音を捕らえた……が、これも回避されてしまう。

『La……………』

無機質な音が響き、福音が箒見据えた。どうやら箒と紅椿を脅威と認識したらしいが、そこへすかさずレーザーや実弾が着弾し福音は思わぬダメージを受けることになる。

『La……………?』

福音が辺りを見渡せば、遠距離よりセシリアとラウラがそれぞれの銃身の長い武器で狙撃をしていた。さらにそこへ鈴の『衝撃砲』、シャルロットの手に持つ2丁のアサルトライフルによる連射で完全に動きを止められた。

「箒、箒!!」

「はぁっ!!」

動きの止まった福音の懷にいつのまにか入っていた簪は薙刀を、箒は2振りの刀を共に振り上げていて上段からの斬撃がしっかりヒットした。

『La……………』

すぐに体勢を立て直した福音は加速して距離を取った。

「意外とやれてるわね……第二形態ってこんなもんなの?」

「油断出来ないよ……」

『La……………!!』

福音が吠えた。否、甲高い機械音を盛大に鳴らしたのだ。

「雰囲気が変わった……ここからが本気と言うわけか」

ラウラが呟いた瞬間、福音の姿が消えた。

「なにっ……一体何処に……」

「ラウラ、上ッ!!」

「えっ? があッ!?!」

距離があったはずなのに、瞬時にラウラの頭上まで迫っていた福音はラウラにかかと落としを仕掛けた。その一撃はラウラが操るシュヴァルツェア・レーゲンの大型レールカノンを粉碎しながらラウラを海へと叩き落としたのだ」

「ラウラさんッ!!……なッ!?!」

セシリアが海に落ちるラウラの名を叫んだ瞬間には何故か彼女の目の前にいた福

音が、『銀の鐘』を最大稼働させてブルー・ティアーズを穴だらけにしようとしていた。

「セシリアア!!」

そこへすかさず飛び込んだのがシャルロットだ。出撃前に装備していたパッケージ『ガーデン・カーテン』の2枚の実体シールドと2枚のエネルギーシールドでセシリアへの攻撃を遮断するが、最大稼働した『銀の鐘』はその防御をたやすく貫いて2人に襲い掛かった。

「きゃあああああ……!」

「セシリア、シャルロット!!」

鈴が名前を呼ぶが、すぐ近くの小島に墜落したらしく反応はなかった。

「簀、『流星』のスピードで攪乱しながら遠距離火力支援。簀は一夏を連れてセシリアとシャルロットが落ちた島まで退避」

「鈴はどうするのだ!!」

「なんとかして福音を私に釘付けにしておくわ……いいからさっさと行く!!」

鈴の決死の叫びが2人に届き、簀は『流星』を展開して超加速で距離を取った。すぐに遠くからビームやらミサイルやらが福音を襲っている。簀はエネルギー・シールドを展開したまま一夏の壁となって後退していった。

「仕方ないわね……燃費が取り柄の甲龍でこんなことしたく無かったんだけど。行くわよっ!!」

鈴はパッケージによって追加された衝撃砲の2門を背部に構え、スラスターを吹かすと同時に撃ちだした。その衝撃でさらなる加速を生んだ鈴は高速で福音に迫りながら青龍刀で攻撃を仕掛けていく。

『La……』

「はあっ!! 逃げてんじゃないわよ!!」

鈴から離れればビームとミサイルが、避ければ鈴による高速の斬撃が襲い掛かる福音だが、その全てを躲し、いなし、火力で押し切ることでダメージを最小限に抑えている。お互いに一步も譲らない攻防が続いて少しすると、鈴の秘匿回線に簪から通信が来た。

『ごめんなさい……ミサイルもビームも残ってないから……ちょっと離れてて』

「?……分かったわ」

何か考えがあるのだろうかと思った鈴は素直に簪の言う通りにする。福音は今が好機と鈴を墜とそうとさらに追撃を仕掛けようとして、今までにない衝撃を受けることになった。

「はあああああああああ……!!」

「簪ッ!? それは無茶よ!!」

残り少ないエネルギーを使って、『流星』ごとその巨体をぶつけたのだ。直線運動により爆発的な加速をした打鉄式式は、そのまま福音をひきづりながら箒達がいる島とは別の小島へと突っ込んだ。

「簪!!」

あまりにも無茶苦茶な行為。一步間違えれば自分の身も危なくなるような、ある意味特攻と言えるその攻撃に簪の身を案じて鈴は近づいて行く。そして鈴が見たのは……

『……………La』

身体からスパークを放ちながらも違和感なく立ち上がる福音と、半壊した『流星』の真ん中で打鉄を纏ったまま気絶している簪の姿だった。

「簪ッ!! 簪は……まだみたいね。軍用機が二次移行したにしては強すぎない!」

悪態を突きながら距離を取った鈴。簪を脅威と認識しなくなった福音は、鈴目掛けて飛んだ。

「うげっ!」

鈴は全ての衝撃砲を福音に向けて不可視の弾丸を連射する。その全てを躲しながら鈴に詰め寄る福音が遂に鈴に触れようかというときに、横からレーザーが飛んできた。福音は急ブレーキをかけて方向転換し加速してそれを避けた。

「無事かッ!!」

「ナイスタイミングよ箒……」

箒が間一髪で福音にレーザーを放ち鈴を助けたのだった。

「初めて乗るにしては上手くできてるじゃない」

「ああ……私自身そう思う。姉さんの調整が良かったのだろうか」

話をしていても2人の目はしっかりと福音を捕らえている。

「……どうする？」

「あれだけ皆の前で啖呵を切っていてなんだが、勝てないだろうな」

「やっぱりそうよね。で、問題はどうかやってみんなを回収しながら撤退するかなんだけど……」

「難しい……だろう」

全員で攻撃を仕掛けても倒しきれない相手に、負傷者を回収しながらの撤退戦。難しいどころか絶望的な状況だ。そして負傷者の1人には海に落ちたラウラがいて、搜索すら困難な状況だ。

「生憎……衝撃砲を撃ちすぎてエネルギーが怪しいのよね……」

「私は……問題なさそうだ。鈴は一旦ラウラを探すべきだろう？」

「第1人でアレを抑えられるの？」

「まあ……無理だろうな。初陣が確定で敗北とは情けない話だが……」

「仕方ないわよ。相手が悪い。ッ……来るわよ!! 話は後!!」

「そのようだッ!!」

福音が『銀の鐘』を連射しながら迫ってくる。二次移行してさらに理不尽な挙動ができるようになったらしい。2人は回避し、盾で防ぐなどしてどうにかダメージを食らっていないが、ジリ貧であることに変わりはなくエネルギーを減らしなが

ら追い詰められている。そして遂にその時は来た……

「はぁ……はぁ……ねえ箒」

「どう……した？」

息も絶え絶えな2人だが、ふと鈴が箒に話しかけた。

「エネルギーが底をついたわ。先に休んで……わ……」

「鈴ッ!!」

過度な集中で脳が強制的に気絶させたのだろうか、ギリギリISを纏った状態で意識を失った鈴が海へと身を投げ出していた。箒はそれに気付いてすぐに手を取りお姫様抱っこの要領で抱きとめた。

「私はどちらかと云えばされたいのだが……我儘を言っている場合じゃないな……」

くっ!!」

両手が塞がったことで攻撃を防ぐ手段がなかった箒だが、束が搭載していた操縦支援システムにより、箒のイメージを受け取って背部の展開装甲が紅椿から分離。シールドビットとして自立稼働し箒の正面でエネルギーシールドを張った。

『La……………』

無尽蔵かと思うほどの『銀の鐘』を連射しながら蜂起に詰め寄る福音。他のISでも一線を超える性能を持つ紅椿でも防戦一方となれば話は違う。エネルギーをどんどん消費させられ、シールドを維持できなくなったビットが廃部へと戻ったのだ。そして無防備となった箒の首を、福音が右腕で掴んで持ち上げた。もちろん箒は鈴を抱き抱えたままだ。

「うぐっ……………かはっ……………(い……………ちか……………私は……………)」

そのまま福音は力を緩めず背部のエネルギーの翼を大きく広げた。この近距離で『銀の鐘』を叩き込むつもりらしい。

（今鈴を離せば海に落ちてしまう……しかし離さなければ攻撃を……私は……わたしはア!!）

箒が心の中で叫んだ瞬間、紅椿が黄金に輝いた。そして箒の視界の端では、シルドエネルギーが急激に回復していくのが見えた。なにが起こったのか分からないが、今しかないと思い再度ビットを射出して福音を引き剥がした。

「げほっげほっ……なんだこれは……?」

すぐに反転して加速し福音との距離を取った箒は、紅椿のデータを確認した。

「絢爛舞踏……？エネルギーが回復しているのか……これならッ、と言いたいのころだがいくらエネルギーがあっても実力で負けているからな……」

単一能力を発現させた箒はすぐに能力を分析した。その判断ができるだけ十分すぎるだろう。

「ひとまず鈴を逃すのが先か……」

抱き抱えている鈴を見ながら、箒は行動を決めた。そして福音の方を向き直そうとして……後ろから誰かに肩を掴まれた。

「誰だ……ッ!!……一夏……」

「待たせたな箒」

「一夏……遅すぎるぞッ!!」

叱責しながらも、箒の表情は晴れやかだ。理由は敢えて言及する必要はないだろう。

「……鈴。セシリア、シャルロット、ラウラ、簪さん」

一夏は順々に周りを見渡すと、その顔を歪ませた。

「箒、後は俺がやる。絢爛舞踏でエネルギーをくれ」

「あ、ああ……」

差し出された一夏の手を握ると、黄金の輝きが一夏へと移りエネルギーが回復していった。

「お前はラウラと簪さんを回収してからセシリア達のところに戻って見てろ」

「ッ……私では足手纏いか？」

「ああ」

「……分かった。負けるなよ一夏?」

「当たり前だ」

突き放すような一夏の言葉に箒はその表情に影を落とすが、理解したのか素直に箒は鈴を抱えて下がっていった。

「ごめんな箒……後でとっておきの誕生日プレゼントをやるから許してくれ。ふう……白式、全ての人間がドン引きするような蹂躞劇を始めよう」

そう言って一夏は背中に4対のエネルギー・ウイングを展開し、右腕にショットブレードを、左手に拳銃を取り出した。

勝利の余韻に現を抜かし……

## 54話

「ごめんな筈……後でとっておきの誕生日プレゼントをやるから許してくれ。ふう……白式、全ての人間がドン引きするような蹂躞劇を始めよう」

俺は筈の後ろ姿を見送り、改めて福音に向き直った。

今の俺の姿を説明すると、元の白式の装甲を極限まで薄くし余った装甲を全て8枚あるエネルギー・ウイングを維持するために使っている。そのため絶対防御が発動する箇所……被弾面積が圧倒的に大きい。しかし、全ての翼を自由自在に扱える俺にとっては攻撃を避けることは容易い。二次移行したことで機体性能も大きく向上したし、何よりも大きかったのが……

『ふふ……私のおかげでしょうね』

そう……白騎士だ。束さんのゴレムのコアのコア人格として再誕を果たした白騎士は白式のコアと融合することで白式の出力を大幅……いや、最高に引き上げてくれた。彼女自身ももう一度ISとして誰かを主人に持つことを捨ててな。

「そうだな。本当に感謝しているよ白騎士。お札に姉さんでもぶん殴ったところか？」

「

『いえ…彼女は悪くないので別にいいです』

『あつはは……なんか、私達の在り方は変わっちゃったのにいつも通りだね』

「ユニコーンも早く直ればいつも通りだな」

まあ、いないのは仕方がない。俺が無茶な使い方したのが悪いんだしな。……さてと、

「随分とアイツらを痛めつけてくれたじゃねえか」

瞬きして『越界の瞳』を発動させながら俺は福音に問いかけた。しかし福音は先程撃墜させられたことを福音自身が覚えているのか警戒して動かない。

「お前には色々と聞くことがあるから少しは手加減してやるが……無事でいられるとは思うなよ？」

刹那、福音の前から俺が消えた。いや、新たに発現した単一能力を使っているだけだ。

『La…!?!』

すぐに福音がハイパーセンサーを用いて白式を搜索するが360度、全く見つか  
らない。

「お前程度に見つかるわけがないだろう？」

福音がその声を聞き、振り向いたときにはもう俺の姿はない。

「お前に一撃も与えない理由が分かるか？ ISだって人格があるんだ。ちゃんと自分で考えろ」

福音の周りをひたすらに飛び回り彼女の警戒心を煽る。

『La……ッ!!』

「なるほど、そう来るか。妥当だな」

己の周囲にいる事を理解したのか全方位に『銀の鐘』で範囲攻撃をしてきた。もちろんそんなものは意味を為さない。

「まずは左足だ」

俺は左手に持っている拳銃で福音の左足の一部を射撃。

その一撃は運良くパーツの継ぎ目をえぐり取り、装甲が剥がれ海へと落ちた。

『La !?』

それに驚いたのか攻撃の手を止めてしまった福音は、脅威レベルを最大限に上げたのか離脱を図ろうとした。

「ははっ、逃げるなよ。悲しいじゃないか」

最大限のブーストを付加して爆発的な加速を生んだ福音だが、俺も4対合計8枚のエネルギー・ウイングにエネルギーを集中させ福音よりも早いスピードで正面に回り込んだ。

「次は右足を……っと」

また拳銃を構えた俺に詰め寄り、福音は俺の両腕を押さえつけた。これでは『懺悔』も『贖罪』も使えないな……

『La!!』

そして絶対に離さないとでも言いたげな福音はまたもや『銀の鐘』を稼働させ……

「残念だったな」

俺は翼を通して全身に『零落白夜』纏わせた。それによって俺に触れている福音の手からバチバチと音が鳴ってエネルギーを削り始めた。

『La……』

仕方無しとばかりに福音は距離を取ってから連射を始めた。

「効かん」

俺は人差し指を福音に向けて、『断罪』も機能の一つである荷電粒子砲を発射させた。ばらまかれた銀の弾丸を貫きながら福音の左のウイング・スラスターを破壊した。

「どうした福音。お前が守りたい物は次々と露わになってるぞ」

零落白夜を使わないブレードや拳銃による一方的な攻撃は全て福音の装甲を削り取っていく。時折格闘戦を交えてくる福音だがそれらの全てを確実に躲しながら俺は攻め続けた。

「福音、お前にだって叶えたい願いがあるだろう。だが、今の俺はお前の全てを否定する。私怨混じりなのは申し訳ないが、後で直してやるよ」

ボロボロになっている福音を見据えながら俺は零落白夜まで用いて大きく4対の翼を広げた。

「単一能力『月華乱舞』……恐らく今日は良い月が出るだろう。まだ昼だがなッ!!」

俺が宣言すると同時に、エネルギーの奔流が辺りに吹き荒れる。一つのISコアが内包するには過剰な量のエネルギーを敢えて零落白夜として撒き散らしているからだ。実弾兵装がない福音の抵抗手段を確実に潰すためだ。

「ひとまずさよならだ。主人を守る為に奔放する幼子よ」

俺は『懺悔』の装甲を展開させ零落白夜をさらに過剰に纏わせる事でその刀身を肥大化させ……振り下ろした。

『La  
ッ  
ッ  
ッ  
ッ  
ッ  
!?!?!?!?!?!?』

体を丸め残った翼で全体を覆って操縦者を守る福音は、自らを犠牲にしても主人を守りたいという意味で溢れていて……そのまま白いエネルギーに吞まれて行った。

く篠ノ之箒く

圧巻、私が見た光景を一言で表すならその一言だった。鈴を小島に下ろした後、ISのダメージだけで済んでいたセシリアとシャルロットと合流した私は、海に落ちたラウラを回収して戻ってきた。気絶していた簪はいつのまにか目が覚めていて無

事だった本体の打鉄を操作してこちらにきていた。

「い……ちか……？」

「鈴、目が覚めたみたいだね」

どうやら鈴の目も覚めたらしい。一応全員の無事が確認された事で安堵した私達は、今まさに福音を打ち倒した一夏を眺めていた。

「天使のようですね……」

セシリアが呟く。的を得ていると思った。白く光るエネルギーの中心で4対の翼を大きく広げる一夏は、確かにテレビやアニメでイメージされる天使みたいだ。

「ははっ……確かに私が足手纏いと言われるわけだ。桁違いではないか」

あの時の一夏の表情が浮かんでくる。

私を見ているようで見ていない、どこを見ているのかわからないその瞳。

触る物全てを切り刻んでしまいそうなほどの鋭利な殺気。

あれは本当に私達が知る一夏だったのだろうか。たったほんの少し見ないだけであれほどの変化が起きるだろうか。

そんな疑問が私の中で渦巻くが、他のみんなは一夏の勝利に笑みを浮かべている。……そうだな、ひとまずミッションは終了したんだ。何はともあれ、一夏の勝利を祝おう。

「よう、無事かお前ら？」

零落白夜を解除したであろう一夏が、その両腕に福音のパイロットらしき女性をお姫様抱っこで抱えている。む……やはり一夏は年上の方が好みなのだろうか？コンプレックスでしかない私のこれも最近は女性の魅力として自信を持っていたのだが……

「ああ……私は少し海水を飲んだくらいだ。死ぬほど不味い」

「あはは、後でちゃんと口を濯がないとね。ラウラ」

「わたくしとシャルロットさんは機体の損傷が激しいくらいで済みましたわ」

「私も大丈夫よ。過度の集中で気絶しちゃっただけだし」

「私も問題ない。それほどダメージも喰らっていないのでな」

「私は……少し体が痛いかも」

私達は降りてきた一夏の元へと駆け寄った。私は簪に肩を貸しながらだ。どうやら一夏の雰囲気はいつも通りに戻ったらしい。本当に良かった。

「簪さん、少し見せてくれるか………少し痣になってるが重症じゃないな。どういう状況だったのか見てないからわからんけど、『流星』が半壊してた辺りだいぶ無茶しただろ？」

「うぐっ……それは……」

「たくっ……仕方ない状況だったとしても、もっと自分の体を大切にしなさい」

そう言っで一夏は簪の頭をポンポンし始めた。な、なんとふしだらな……羨まし……くなんてないぞ!? 本当だからな!?

んん……すまない、取り乱してしまったようだ。他の全員も鋭い視線を送っている。珍しく鈴もだ。

「ん?……ああ、もちろんお前らもだぞ」

「2番目だといいで感が凄いわよ一夏。頑張った私達をもっと褒めなさいよ」

「そう言われると褒めたくなくなるな……うん、みんなよく頑張ったな。ありがとう、お前らのおかげで福音を倒せた」

一夏が笑顔で礼を言ってきた。好きな人の笑顔とはどうしてこう眩しいのだろうか……

「……あ、それともう一つ。ちょっとこの人を預かっててくれ。セシリア、シャルロット、ラウラ、頼む」

「え、ああうん」

3人が福音のパイロットを受け取ると、私の方を向いてきた。どうしたのだろうか？

「これ、お前への誕生日プレゼントだ。戦闘の衝撃でちょっと傷がついたんだけどな……」

「これは……ミサンガ？」

一夏が私に手渡してきたのは、赤と白の糸が使われたミサンガだ。可愛い……

「お前に似合うと思ってな。誕生日プレゼントにしてはちゃっちなかんうって思ったんだけど……どうだ？」

少し照れ臭そうに笑う一夏……そんなわけないだろう。

「ありがとう一夏。ずっと大切にする」

「ん……気に入ってくれたようで何よりだ……ってうわ!？」

「どうしたのだ一夏……って、あっ」

「「「「あっ……」」」」

私を手首で結んだ瞬間、ミサンガは切れてしまった……せっかく一夏から貰ったばかりだというのに!？」

「ねえ箒、何か願い事でもあった？しかも最近叶った事で」

「シャルロット？……ふむ、ああ、あったな」

姉さんとちゃんと話せたし、今の姉さんとならちゃんと家族に……ッ!!

「ふふ、ちゃんと叶って良かったね箒」

「付けた瞬間に切れるミサンガって……一夏アンタ……」

「俺かよ!? 箒……後日また新しいのを……」

「いや、これで良い……これが良いんだ」

私と姉さんを引き合わせてくれたのは、案外一夏かもしれないな。考えすぎか？  
ううん、そんなことはないだろう……

「んんッ!! 誰か、作戦本部に連絡しているのか?」

ラウラがわざとらしく咳払いをした……今いい雰囲気だったのに……ラウラめ……  
しかし、今の優先順位はそれが上だから仕方ない。

「あ、私がしとくわ」

「んじゃあ、帰るか……って言いたいところだが、先に帰っておいてくれ。俺は『流星』の残骸を回収できるだけ回収しとくから」

「私も手伝うよ一夏……私の装備だし……」

「簪さんは民間人の方に行ってくれ。きつと不安だろうからな。ラウラ、ISは？」

テキパキと一夏がみんなに指示を出している。こんなに遅しかったか？だが……カッコいいな一夏……はっ!?今はそんな状況ではないというのに……わ、私はなんという……

「じゃあ簪は……って、簪？」

「ひあい!？」

「ははっ、なにビックリしてんだよ。簪はこの人を頼む」

「……ああ、分かった」

一夏の前で変な声を出してしまった……

「よし、じゃあ各自行動を開始してく……ッ!!クソッ!？」

「……一夏？」

一夏が急に何かに焦り始めた。なんだろうか……と思っていた私達だが、次の瞬間視界が赤い閃光で染まった。

「やらせるかァァァァァァァ!?!?!」

「「「「「一夏(さん)!!」」」」」

思わず目を瞑ってしまったが目を開ければそこには、白式を展開して全力でシルドを張っている一夏の姿があった。

「お前ら今すぐ逃げろッ!!あれは……あれだけはどうにもならねえ!!」

「え……でも……」

「いいから早く!! 死にてえのか!! とつとつと旅館に戻って現場を報告してこい。どうおらあ!!」

「[[[[「ッ……了解!!」]]]]」

一夏の必死な叫びで、私達はすぐに離脱した。ISが展開できないセシリアとシャルロット、それ福音のパイロットを抱えながら……

なにが……なにが起きているというのだ……もう福音は倒したではないか!! 私達には……逃げることしかできないのか……?

「うーむ……足りないな」

「織班一夏の実力が……ということでしょうか? 我々によって機体性能を強化し

た福音をたやすく撃破したのなら及第点では？」

「そこは問題では無い……いや、問題といえれば問題だが……ううむ……」

「珍しいですね。貴方がそこまで頭を抱えるのも」

「茶化すな……仕方ない。私が少し揉んでやるとしよう。もしかしたら死ぬがな」  
「お戯れも程々になさってください……事後処理は誰がやると思っているのですか？」

「君だが？」

「……あの2人に、貴方に虐められてるって言付けますよ」

「ククッ、それは勘弁して欲しいな。どの道私が酷い目に遭うのが分かっているのに追撃する気か？ 戦闘後よりも帰還後の方がダメージが多そうだ」

「はぁ……行くなら早く行ってくださいな。あの子達、帰ってしまいますよ」

「おっと……それは急がねば。さて……久々の戦闘だ。滾るなあ我が相棒？」

## ユグドラシル

## 55話

「クソがッ……もうちょっと空気が読めねえのかッ!!」

どこからの砲撃を防ぎ切った俺は、なんとか女子陣を逃すことに成功した。実は、皆と話しているときにスコールの姉貴から連絡があったのだ。

『謎のエネルギー反応を感知した』……と。それで急いでシールドを張ってみれば案の定。姉貴からの通信がなかったらお陀仏だったぜ……そして、福音でなければ確実に奴らだろう。またイベントがある時にちょっかいをかけてきやがって……

『クククッ……戦場で油断をする方が悪いではないか?』

「その声……この間の野郎だな。テメエ……どうやってウチの精鋭を突破した?まさか……」

『安心してくれたまえ。誰にも気づかれてはおらんよ』

「何かしやがったな……」

束さんやレイさんお手製のレーダーを気づかれずに突破するとかどんな技術を使ってたよ……

「何か仕掛けてくると思っていたが、福音にはなにもしていないようだな？」

『機体性能の向上程度はしたさ。最も、貴様には温かったらしいが』

「俺達を舐めすぎていたな。あの程度で俺をどうにかできると思っていたのか？」  
『ふっ……もちろん想定内だ。が、想定外の出来事があったので急遽私が直接出向いてやったのだ。ありがたく思ってくれ』

「おかえりくださりやがれ……って言いたいところだが、駄目そうだな。なにが目的だ？」

なんだ、俺の行動についての想定外とはなんだ？ 考えろ俺……って言っても、ま

ず奴らのことがなにも分らないんだ。考える権利すら手に入れていない。

『クククッ……簡単だ、私と戦ってもらうぞ』

「ああ？なにを言って……ッ!？」

そしていつのまにか俺の目の前にソレはいた。俺の『越界の瞳』を用いても捕らえられないヤツ……おいおい……これはやべえな……勝てるビジョンが浮かばねえ。

全身装甲の黄金の騎士甲冑、何も持っていないが頭部に王冠のようなパーツが見える。しかも赤いマントを肩にかけているあたり、おそらく『王』がモチーフなのだろうそのISは、カメラだろうその目を俺に向けている。

「ふむ、こうして直接会うのは初めてだな。織斑一夏」

「お前……男のはずだろう？」

「その例はお互い、目の前にいるではないか？2人いるくらいどうって事はない」

どうやら、コイツは2人目の男性操縦者らしい。俺以外にいないとは思ってなかったけどな。いつも通りな上から目線の言葉遣いが少しウザい。

『一夏、戦ったらダメ……いや、戦闘にならないよ!!』

『白式の言う通りです。即時撤退をお勧めします。まあ……出来ないでしょうが』  
「その2人の言う通りだろうな。私は強い」

『ッ!!』

「白式と白騎士の声が聞こえてやがる……?」

俺の周りには誰もいないはずなのに、ヤツはその2人と言った。コイツ……異常だ。

「人間は本来ISのコア人格の声を聞くことができる。だがそうしないのは人間側に問題があるからだ。それに関しては貴様も知っているはずだが?」

「ッ……お前は聞こうとしているって事かよ」

どう考えても最近ISに乗り始めたようなヤツの台詞じゃない。明らかに経験が段違いだ……

「ああ、ちなみにこのISにコア人格は居ない。『番外』だからな」

「番外……？（いや、気にしている場合じゃない）」

「ほう……私を前にして考え事とは余裕だな？」

「なっ……いつのまにッ!？」

目を瞑って、開けてみれば目の前に黄金の騎士甲冑。今の一瞬でどうやって目の前に……

「ふーむ……目覚めてもおかしくはなかったのだから……」

「ああ？何を言って……くうっ!？」

ブツブツと独り言を呟いたヤツは突然俺に蹴りを入れてきた。予想外すぎて流石に反応できず躲しきれなかった。

「何しやがる!!」

「言っただろう? 戦ってもらおうと」

「チッ……流石にやべえ……白式!! 競技用リミッター解除ッ!!」

『もうやってる!!……完了!!』

仕事が早い。恐らく白騎士の補助だろう。すぐに機体を制御しヤツから離れた。

「緊急コール!! モノクローム・アバターに救援要請……任務レベルはSSSランクだ。生存と撤退を第一に考えろ!! IS学園にバレてもいい!!」

『了解!!』

すぐにマドカ達が了承し彼女達とのコアのリンクが開始され現在位置が表示された。不味いな……ここでもゼフィルス達をお披露目するつもりは毛頭なかったんだが……しかも俺が『S』じゃなくて『織斑一夏』の時にだ。

「クハハッ!! 良い判断だよ織斑一夏。だが、これで貴様はもう学園にはいられない?」

「テメエ……まさか、世界を混沌に落とす事が狙いか!!」

IS 学園という表向きの身分を完全に消去させて表舞台から抹消する気か? しかもその場合、亡国がアメリカやイギリスのISを盗んだ事実も明るみになる。当然、大国がコア盗まれた事もだ。それによる責任問題でドイツやフランスに付け入る隙ができ……さらなる混沌が世界で始まるかもしれない。

「……どうでもいい。それは付加価値でしか無いのだから」

「付加価値……」

「行くぞ織斑一夏。貴様の力、私に見せてみる。『アーサー・フェイク』出る」

「ッ!!」

ヤツがそう言うと同時に腰部のスラスターを吹かして突撃してきた。俺はすぐに拳銃で牽制。確実にヒットするはずのその攻撃は、何故かヤツの機体をすり抜けた。

「残像……後ろかッ!!」

「これくらいもっと早く気づけ」

『越界の瞳』の知覚向上能力により一瞬反応があつた俺の後方に向けてショートブレードを振り抜く。しかしまたもや感触がない。

「展開!!」

一点狙いでは当たらないと察した俺は、すぐにエナジー・ウイングを全て広げて

エネルギーを撒き散らした。

「不正解とは言わんがまだ足りん。出直してこい」

突如、白式のモニターに反応がありエネルギーが掻き消された。

「おいおいマジかよ……流石にそこまでは聞いてねえ……」

その方向を見れば、先ほどヤツがアーサー・フェイクと名乗ったISが右手に見ただけで業物と分かるような大剣を持っていた。

『『カリバーン』』と言う。さあ、続けるぞ」

「めんどくせえ……」

今度は正面から突撃してきた。その一撃は重く、ブレードでは逸らすだけで精一

杯だ。お互い剣での攻防を少し続けたあと、俺から仕掛ける。

「食らえッ!!」

「わざわざ叫んでから撃つ人間がどこに……む？」

俺は大声をあげながら拳銃を撃つ。その弾は確実にISの装甲を貫く威力だったはずだが、ヤツは剣を一振りすると銃弾を斬り裂いた。

もちろんそこまでは予想内。しかし、何も考えていないわけではない。

「ククッ……面白い。そうではなくてはな」

ヤツの手の甲の装甲が少し凹んだ。何故かって？俺は2発撃ったからだ。一発目の銃弾の真後ろに向けて2発目を撃つ。もちろん風向き、一発目の弾道計算など色々計算してから発射が必要だが、マスターすればかなりの脅威だ。相手からすれば一発にしか見えていない銃弾は防いでもすぐ後ろから2発目が来るからだ。一

発しか銃声が聞こえていないのにだ。無論、参考にしたのは『暗殺〇室』だ。思っていた以上に色々載って面白かったぞ。実益もあるしな。

「凹むだけかよ……」

『うへえ……出力は上がってるのになあ……』

どうやら白式も予想外らしい。そりゃまあ……二次移行してすぐに負けそうになるんだからまあ……仕方がない。俺だって悔しいさ。

「当たり前だろう？……ふっ、もう来たか」

ヤツがそう呟いたと同時に、閃光がヤツを襲った。しかし、またもや剣で掻き消した。何あの剣？

『兄さんッ!!』

「ああ」

すぐに加速してヤツから距離を取る。向かう先はもちろんマドカ達の元だ。

「……織斑マドカ、スコール・ミューゼル、オータム。亡国企業の精鋭IS乗り。ふっ……私の前に立つか」

アラクネを纏ったオータム、サイレント・ゼフィルスを纏ったマドカ、ゴールデン・ドーンを纏ったスコールの姉貴。そして俺。モノクローム・アバターが勢揃いしてISを纏っているのも珍しいだろう。俺は白式だから厳密には違うが。

「兄さん……一応任務中だ」

「おっとすまん……今は織斑一夏だからな。油断していたよM」

「おいコラス。口調も変えろ」

「まあまあ、いいじゃないオータム。どうせISのログはタバネが消すんだし」

全員がヤツを見ながら会話する。誰も油断はしていない。

「……………興が削がれた。今日は帰るとしよう」

「逃すわけ無いだろうが。テメエらの組織についてペラペラと吐いてもらう」

「フツ……全員で私に挑んで勝てると思うのか？」

「少なくともISの機能停止までは持ち込めると思うが？ 兄さんもいる事だしな」

ヤツはどこまでも余裕そうな口調で言うが、マドカが挑発的な事を言った。

「やめておけ。ここで貴様らを殺すつもりはない。我々のことか……一つだけ教えてやろう」

「ああ？……その情報が真実である保証がどこにもないだろうが!!」

オータムが少しキレながら言った。アイツの口調がウザくてももうちょい我慢し

ろよ……そんなだからアホなんだ。

「信じるか信じないかは貴様ら次第だ。ふむ……どの情報ならいいと思う？」

「ここで私頼りですか……全く、仕方の無い人ですね」

「『ッ!!』」

ヤツが問いかけると、どこからともなく女性の声が響き空間が歪んだ。そして現れたのは白銀に少し黒いラインが入った全身装甲のIS。反応はなかったのだが……ステルスは当たり前か。

「折角ですし、構成人数でも教えてあげたらどうでしょう？我々の組織の」  
「おお、良いじゃないか。ククッ……貴様らの驚く顔が目に見えよう」

会話から察するに2人の中は良い。ただの部隊員というような間柄でも無さそう  
うだ。

「構成人数……？それほど人数が多いと、亡国が見つけられない訳が無いのだけ  
れど……」

幹部級の地位を亡国内で持っている姉貴が言った。当たり前だ。まず亡国の人数  
がバグってるからな。

「我々は『ユグドラシル』の構成員は合計で5名だ」

「「「はっ？」」」

5人……そんな訳が無い。確かに、1回目で俺を殺した時のISは無人機だった。  
しかし、10機ものISを用意するのにたった5人ではどれ程の時間がかかるという  
のだろう。恐らく束さんでもあり得ない。なぜならあの時は、あの人はマドカ達の  
元で色々していたはずだからだ。

「おやおや……信じられないという顔ですね。ええ、その顔が見たかったですから良い表情をしています」

「公共の場でくらい自重してくれ。そういうのは夜、ベッドの上でしっかり聞こうとも」

あ、やっぱコイツら殺すわ。こんなシリアスな場面で下ネタ打ち込んできやがった。俺が最近一番気にしてることを言いやがってテメェらッ!!

「クククッ……まあそう怒るな織斑一夏。例え、初めての相手が部隊長の姪だとしても、そして酔った勢いの無理矢理だったとしてもだ……フッ」

「なんでそんな事知ってんのッ!？」

「兄さん……その話詳しく」

「アッヒヤヒヤヒヤ!! Sお前、レインに手を出したのか? 今度帰ってきたらあのレズを全力で笑ってやるか!!」

「あらあら……ご愁傷様ね S」

「その感じからするにスコールも知っていたな？もちろんお前も同席だ」

「……………」

「ほらこうなった!!」

滅茶苦茶だぞマジでツ!!どうしてくれるってんだよお…………チクシヨウ…………

「今のうちに帰るか。また会おう」

「我が主人が大変失礼しました。それでは」

「な、待て!!」

爆弾発言で面倒なことになったウチを横目にヤツらが帰ろうとした。俺はすぐに調子を取り戻して止めにかかる。しかし…………

「ふふっ、遅いですよ」

「なっ…………消えた、だと?」

もう1人が腕を上げたと同時に奴らの姿が消えた。ISの反応も消えている。どうやらもう居ないらしい。空間移動の能力か？

「……状況終了。俺は織斑一夏として旅館に戻る。お前らもとりあえずバレないように帰ってくれ。じゃあな、白式、フルスロットル!!」

『ラジャー!!』

「あ、待て兄さん!!さっきの話を詳しく……って速ッ!？」

それはもう全力で逃げた。旅館で待ってた専用機持ち連中に流星かって間違えられる程度のスピードで。マドカ……男にはな、絶対に折れることができない事があるんだ……そんなでもってレイン超逃げて？

こんな調子だが、決して表に出ることのない福音事件は幕を閉じた。面倒な事実を持って。……と、思っていたんだが

その時不思議な事が起こった。

旅館に戻った俺だが、所属不明ISとの接触についての件で拘束される事がなかったのだ。あの場にいた専用機持ちの誰もがヤツとの接触を覚えていないかのよう  
に何も聞いてこない。それどころか、国際的テロリストとの接触容疑もかけられなかった。姉さんからも労いの言葉と報告書の提出しか求められる事はなかったのだ。

まるで、ヤツらがいた間の時間そのものが切り取られているかのよう。

どうやら、思っていた以上に俺達の敵は規格外らしい。しかもそいつらはたったの5人という。なんともふざけた冗談だ。

でもまあ……とりあえず全員無事だったし何よりも、

「白式、ありがとな」

『むっふふ。もっと褒めてくれても良いんだよ？』

『あら、私への労いは無いのですか？』

「もちろん白騎士にも感謝してるさ。出力調整のサポートは大助かりだったぜ」  
『それで良いのですよ』

腹減ったな。

↓福音編【完】↓

---

↓???↓

『『現実改変』完了しました。私達が接触した事実はある亡国企業を除いて全て消去しました』

「ご苦勞様。やはりいつ見ても反則だな」

「いえ、今は最低出力しか出させませんので『デリート』しか行えません」

「十分なのだがなあ……まあいい。今日は戻るぞ。あの2人が夕食を用意してくれたいらしい」

「それは……楽しみです」

「毎日毎日、最後の晚餐かと思うながら食う飯に味気も何も無いのだが……」

「不味いのですか？」

「まさか、最高の食事だよ。あの2人が作っていてくれるという事実だけでもね。もちろん味も美味だしな」

「ふふっ……早く帰りましょう。私が怒られてしまいます」

「え、いや何故？」

「なんでもありませんよ」

## 戦いの果てに……

## 56話

（福音事件当日、消灯時間近く）

やあ諸君、一夏だ（せむし）

現在、今日の事件に関する報告書を姉さんに提出し終えたところだ。いや、面倒な作業でしたね。だってあれやで？ 何でか知らないけど誰もユグドラシルの2人のこと覚えてないんだ。多少色つけて書かないといけなかったからな。しかもモノクローム・アバターの連中から逃げるように帰ってきたから夏休みに本部に帰還する時は土産がないとしばかれるだろう。

「ほんとに……ほんとに何も知らないんだ!!」

「シなわけねえだろ。俺も暇じゃねえんだ、とつと吐け」

変な声が聞こえる？ハッハッハ!!何のことかわからないなあ諸君。全く、作戦行動中に海上にいた民間船の乗務員を拷問してるとかそんな話あるわけじゃないじゃないか。

「だから本当なんだよ!!船の計器が突然狂ったと思ったら変な海流で流されただけなんだ!!それで気づいたら……」

「気づいたらあの海域に？生憎と、テメエらの船は轟沈したからな、証拠が取れねえ。お前らがさっさと暴露してくれたら俺も相応の処置で済ませる事ができるんだが？」

旅館のとある一室にいる俺達だが、外に声が漏れることはない。学園が毎年利用する旅館だからかは知らないが懲罰房みたいや部屋があるからな。そこに拘留されているコイツらとお話をしているだけだよ。懇切丁寧に。

『男の人のほったにナイフをペチペチする事をお話していうんだったら辞書引いてくれば?』

(まあまあそう言うなって。コイツらは一般人、しかも可能性の一つとしてアレを見られたかもしれないんだ。ちゃんと話は聞かないとな?)

『はあ……理解はしてるけどさ……』

全く……どうしてこう人間ってのは強情なのかね? コイツらも早く言ってくれれば楽になれるのに。

「……ふあ……眠い。おい、今日は疲れてんだ。早く喋れ」

「だから知らねえって言ってるだろ!!」

「……もしも姉御?」

『あら、どうしたの一夏。さっきの今で急に通信だなんて』

面倒臭くなった俺は姉御に通信をした。ノータイムで出てくれるところ愛してま

すよ。親愛的に。

「報告した民間人なんだけどさ？何も情報を持ってないっぽいんだよ。……どうする？」

『ちゃんと調べたの？』

「ああ、民間人ならここまでだろうって思って爪4枚で止めてんだけどさあ……」

『仕方ないわね。撤収して構わないわ。後処理はお願いね』

「お、マジ？やっと終われるわ。了解くんじゃ」

『お疲れ様一夏』

通信を切って再びコイツらに向き直った。

「今の通信、聞こえてた？」

「あ、ああ……それが何だってんだよ……」

「後処理って、何だと思う？」

「はぁ……まさかっ!？」

「さよなら、哀れな被害者諸君。恨むなら不運な己と俺を恨め」

そして6人分、咲き誇る紅い花が部屋を彩った。

「たくっ……無用な手間取らせやがって。こちとら神経張り詰めすぎて疲れとんじゃ」

ただの肉塊となってしまったモノを眺めながら俺は呟く。あーあ……ナターシャ・ファイルスはまだ目覚めないし、明日に持ち越しだな。早く戻らないと姉さんにもバレそうだし。

「悲しいことに君達が発見されるのは明日だな。死体処理も出来ないがな」

そして俺は無慈悲に扉を閉めた。

「んじゃ、バイバイ」

一度部屋に戻った俺だが、何とまあ部屋に姉さんはいなかった。バレてもゲンコツくらいで済むかと思ったので風に当たるために外に出ることにした。砂浜を歩くこと数分。強化された五感、聴覚に2人分の女性の声が聞こえてきた。束さんと姉さんだ。

「ねえちーちゃん。この世界は楽しい？」

「……そこそこな。お前はどんなんだ？」

「結構楽しいよ。刺激があってね♪」

「お前でも楽しめるような刺激がまだあったのか。驚きだ」

いや、多分ウチの事ですねはい。そりゃあ刺激だろう。俺の3桁にも及ぶファ

ンネルを避け切って遊ぶくらいなら。ちなみに今は気配を全力で押し殺して隠れている。おそらく束さんは気づいているだろうがな。

「まあね。あ、そういえばね。いつくんの機体なんだけど……」

「ああ、あの過剰なエネルギー反応を示した事か。お前の仕業ではないかと思っていたんだが……」

「いいや、私じゃないよ。アレはいつくんと白式、そしてもう1人が望んだ結果だよ。武器の名前もね」

束さんにはすでにバレていたか。考えてみれば当たり前だろう。アイツらだってISコア同士のネットワークがある。生みの親である束さんからすれば覗くのも簡単だろうからな。

「……『懺悔』、『贖罪』、『断罪』。何が一夏をそこまで言わせている？」

「さあ？ いつくんのみぞ知る、ってやつだね。ちーちゃん的には寂しいかな？ いっ

くんが雪片を捨てちゃった事」

「……少し……な」

……悲しそうな姉さんの表情はあまり見たくなかったんだが。それすら俺のせいらしい。でもな姉さん。俺はアンタが選ばなかったものを選んだ。『いもうと』だ。アンタが『おとうと』を選んだなら、俺は『いもうと』を選ぶ。俺はアンタじゃない。だからもう雪片はいらないんだ……織斑一夏が織斑一夏であるためにな。

「(いっくん悲しそう。じゃあちょっとサービスしちやおっかな)

ねえちーちゃん。今度とある研究所を潰そうかなって思うんだけどいい？」

「また変な事をする気か……一応聞いておこう。何の研究だ？」

束さん……？何の話をしているんだ。

「密かに続く『プロジェクト・モザイカ』の研究」

「ッ!？」

……マジかよ。まだあったのか。もうないって聞いていたんだけど。

「馬鹿な……すでにあの研究は……」

「そう、終わったはずだった。この私、篠ノ之束が現れた事でね。そしてその成功  
駆体3人を持って」

「だったら……だったら何故!!」

「満足しなかったんだよ彼らは。私以上を目指してね」

「無理に決まっているだろう……」

姉さんに同意見だ。どんなに頑張っても人工が天然に勝てるわけがない。無論、  
俺もだ。それなのに束さん以上？馬鹿にしているのか？

「私もそう思うよ。だって私でさえ無理なんだから。だからさ、壊しちゃうていい

よ・ね・？・」

「……………ああ」

掠れるように絞り出した声で姉さんは言った。そして一瞬、束さんは俺が隠れている場所を見た。

『だってさ、いっくん』

『ボスからの命令としてなら受諾しましょう』

『ふふっ……………うん、じゃあ頼んでみるよ』

秘匿回線で束さんが言ってきた。なるほど、俺がやるのか。いいだろう……………負の連鎖はここで止めるしかない。他ならぬその研究の成功……………いや、ある意味では失敗作の俺が直々に手を下す。

「ちーちゃんからの了承も得たし、そろそろ帰るとするよ。箒ちゃんとも和解でき

たし」

「……それは良かったな」

「うん!! いっくんとちーちゃんには本当に感謝してるよ。だからちーちゃん……」

「……なんだ?」

「ちーちゃんも、いっくんと仲直り出来たらいいね?」

「ッ……待て、一体それはどういう……」

「じゃあね」

そして束さんが岩から飛び降りた。一瞬だがISを展開したのも見えたし、おそらく俺の知らない機体だろう。そしてステルスにより反応もなくなった束さんは、海を駆けて行った。

全く……人をかき回すことではまだまだ天災だなあの人は。俺と姉さんが仲直り出来ることなんぞ一生来ないというのに。

さて、俺も帰ろう。今の状態の姉さんに近づいたら何されるかわからないしな。

『……一夏』

（いいんだよ白騎士。俺は亡国、姉さんは学園。それぞれ居場所があるんだから）

『いえ、そのことではなく……』

（あ？）

『もうすでに消灯時間を過ぎてしまったのですが？』

先に言えよ!?

そして俺は全力で旅館に戻った。もちろん山田先生にバレて少し説教を食らった。チクショウ……東さんが笑ってたのはそういう意味もあったのか……

〽翌日〽

「……美味しい」

なんとか姉さんが部屋に戻ってくる前に説教から解放された俺は部屋に戻ってぐっすり寝た。それはもう死んだように寝たさ。人殺しの日に来る夢も今日は見なかったし。万々歳。

そして何より朝飯が美味いッ!!

「朝から刺身が食えるなんて最高だ……そしてこの味。魚の鮮度を全くとっていいほど落とさない包丁の入れ方……一体どんな人が厨房に……ああ、教えてもらいたい……」

「朝からアンタ面倒くさいわね……」

「おはよう鈴。いいからお前も食えって」

どうやら鈴も起きてきたらしい。それに続くように箒達も食堂に入ってきたので、折角だから専用機持ち全員で座ることにした。

「ねえねえ、昨日結局何があったの？」

女生徒が代表して聞いてきた。他の奴らも同じことを思っていたのか俺達の方を向いている。

「悪いな。機密事項ってことで言えないんだ」

「えー、ちょっとだけね？」

「ダメですわ。言った方も聞いた方も、卒業後に最低2年の監視が着きますわよ？」

「そうそう、分かったら辞めときなさい。あ、箸、醤油取って」

「ああ、ほら」

「ありがとう」

しれっとした顔で忠告をしている。シャルロットやラウラ、簪さんも同じような感じで別の生徒に喋っているのです。そろそろ絡まれる事もなくなるだろう。

「そういや簪さん。痣は大丈夫か？」

「うん、湿布を貼っただけだから……すぐ良くなると思う」

「そうか（おそらく帰ったら楯無がヤバそうだな）」

そして俺に絡んでくるのだろう。男ならちゃんと簪ちゃんを云々……と言うように。

「いつまで遊んでいる。さっさと食べろ!!」

そこへきたのは姉さん。その一言で全員が席に戻り急いで朝食を取り始めた。あーあ……せっかくの刺身が……

ちなみに俺は元々結構食べていたのでペースを変えることなく食事を終えた。さて……あとは帰るだけ……まあ、やる事はあるが。

そして、各自部屋に戻って荷物を纏め終え順々にバスに乗り込み始めた時、1人の女性が俺の元へとやってきた。

「貴方が私を助けてくれた天使君？」

「ナターシャ・ファイルスさん。もうお体は良いんですか？」

福音の操縦者、ナターシャ・ファイルスだ。昨日は目を覚さなかったらしいからおそらくさっき目が覚めたのだろう。

「ええ、お陰様でね」

「それは僥倖。……天使ってなんですか？」

「ああ、助けてくれた時の貴方のIS。まるで天使様みたいだったから。8枚の翼を広げて白いオーラを出している姿がね。福音も教えてくれたわ」

「なるほど……ん？福音が？」

まあ確かに白式・新月は装甲に使うはずの金属をほとんどエネルギー・ウイングに回しているから無駄に仰々しく作っている。そりゃあぼやけた視界でみればまる

で天使に見えるだろう。しかし福音が……というのはもしや。

「旅館で寝ている時、幼い女の子の声が聞こえてね。『もう大丈夫。天使様が来てくれたから』って」

「ははっ……そうですか。じゃあ1つアドバイスをあげましょう。ちゃんとその子の声を聞いてあげてください。それが貴女にとっても、福音にとっても良い結果になるでしょうから」

「へえ……ISを知ったばかりただの男の子かと思ってたけど、そうでもなさそうですね。でも無理よ。暴走したこの子は、おそらく凍結処理がなされるでしょうから」

その通りだ。しかもこの事件は表向きには無かったことにされる。つまり軍用として開発された福音もアメリカとイスラエルが協力したことすらなかったことにされるというわけだ。そこで役に立つのが『名もなき兵達』、通称『アンネイムド』と呼ばれるアメリカの組織だ。そこに所属する兵士は全員の情報が消されているためアメリカ軍所属という事以外は何も情報がない。しかも拠点は海のどこかにある空

母と来た。おそらく福音はそこに収容され密かに凍結処理がなされるだろう。

1 回目の通りなら、だ。

「そうでしょうね。アメリカのアンネイムドは優秀と聞きますし」

「ッ!!……何故アンネイムドのことを。まさか貴女、亡国企業」

「察しが良いですね」

ナターシャ・ファイルスはすぐに身構えた。目の前に国際的なテロリストの一員がいるから当たり前だ。

「ですが何も証拠がありませんし、貴女を害する気もありません。今日のところはやめておきましょう。出なくて良い犠牲が出るかもしれませんしねえ」

チラッとバスを見る。もちろん未だに生徒達が乗り込んでいる。

「貴方……卑怯なのね」

「ククッ……テロリストに卑怯は褒め言葉ですよ。さて、取引といきましょう」  
「取引？」

取引と聞いて彼女の顔に警戒の表情があらわれた。

「まだ、福音と飛びたいですか？」

「ッ……出来ることならね」

「それは良かった。ではもう一つ、世界を変える気はないか？ ナターシャ・ファ  
イルス」

「世界を……変える……？」

「我々、亡国企業は今の世の中を良く思っていない。女尊男卑などという風潮が世界中で起こり、IS絶対主義のような連中が存在するこの世界。そんな世界を我々は変える。ISを全て奪うことによってね」

「無理に決まっているわ!! 世界各国にはそれぞれ国家代表や候補生達がいるのよ。」

たかがテロリストの兵力じゃとても……ッ!! 面白いえばこの前、アラクネが盗まれて……」

彼女は気づいたようだ。オータムが操縦する第二世代機アラクネは俺が学園に入学する前にはもう強奪済みだ。というか亡国の影響を一番受けているのはアメリカだ。姉貴もレインもアメリカ出身だからな。

「亡国は……一体どれほどのISを持っているの?」

「企業秘密ですよ。でも、確実に一機増えます。福音を強奪することだね」

「なっ……そういう事ね」

「ああ、本当に察しのいい人だ。我々はいつでも優秀なIS乗りを欲しています。それはたとえ軍属だった人間でも例外ではありません」

「私に、祖国を裏切れと?」

「対して情もないでしょう? 福音を軍用機として開発したアメリカには」

「それは……」

どうやら少し彼女の中で迷いが生まれたらしい。いいぞ、この調子で攻めればきつといける。間に合わなくとも、夏休みに帰国するであろうレインにも説得して貰えばいい。

「そういえば、福音が暴走した原因である組織と敵対しているんですよ。亡国企業は」

「何ですって？」

食いついた。

「ユグドラシル、という組織です。構成員はたったの5人。そんな少人数の組織に、完璧な隠蔽工作を働かされながら福音は暴走させられたのです。借りを返したくありませんか？ 福音と一緒に空を駆け、元凶を墜とすことによって」

「……………でも……………私は……………」

大きく揺れている。後一步だろう。しかし、時間が来てしまった。

「織斑、何をしている？」

「ッ……織斑千冬」

「ああ、織斑先生。昨日の件でお礼を言われていました。すぐに乗ります」

「なるほど。分かった。すぐに済ませろよ？」

「はい」

簡単な挨拶をして、姉さんは旅館に戻っていった。最後のチェックだろう。

「どうやらタイムアップのようです。まあ考えておいてくださいよ。ちなみに……これが俺の連絡先、こっちがISのことなら右に出るもの無しな兎さんの連絡先です」

「……ええ、今すぐというわけにはいかないから受け取っておくわ。今日のこと

も秘密にしておいてあげる」

「それはありがたいです。また会いましょう。福音のパートナー、ナターシャ・ファイルスさん」

メモを渡して俺はバスに向かう。彼女も少しだけ俺を眺めた後、自らの目的地へ行ったようだ。

「……………もしもしボス、少しよろしいでしょうか？」

『ああ一夏か、少し待て。……………その書類はフランス支部へ回せ。なに、コアの強奪に失敗？どこの部隊だ。……………そうか、処理はスコールとタバネにやらせろ。研究所の予算向上……………却下だ。……………すまない一夏。いいぞ』

めっちゃ忙しそうですねボス。あと、レイさんドンマイ。いつも変なの作ってるからだぞ。

「現時点でのナターシャ・ファイルスの勧誘に失敗しました。あと一押しというところで織斑千冬からの邪魔が入りまして」

『ほう？残りの決定打は？』

「愛国心かと思われます」

『なるほど、後でアメリカ支部に上層部の汚職等のデータを探らせ彼女の元へ届けよう』

ああ……今回の被害者はアメリカ政府ですか。かわいそうに……自業自得だがね。

「ありがとうございます。夏季休暇には帰還します」

『分かった……そうだ、現在、量産型ISの操縦者の完熟訓練に難航していてな？暇があるときに教官役を頼む』

「了解しました。では、失礼します」

『ああ、任務ご苦労だった』

「勿体なきお言葉」

通話を切った俺は少しにやけてしまった。ボスからの賛辞ほど嬉しいものは少ないからな。

すぐに表情を引き締めた俺は、何事もなかったかのようにバスに乗った。

「兄様、是非とも隣に座らせて欲しいのだが」

「んあ？ あー……」

自分の席に座ると、後ろの席からひょこっと顔を出したラウラが尋ねてきた。横目で周りを見渡せば、何故か手にお菓子を持った女子達がチラチラとこちらを見ている。

「俺とばかりじゃなくて、ほかの女子達ともコミュニケーションを取ったらどうだ？」

「む、兄様は私の隣が嫌なのか……」

「へっ、いや、そういうわけじゃっ……」

シュン……と効果音がつきそうなほど落ち込み出したラウラ。そんな様子を見兼ねたのか女子達がいそいそとお菓子を仕舞い始めた。お前ら分かりやすすぎるわ。

「……分かった。隣に来てくれ」

「そうか!!それは良かった!!」

一気に花が咲いたかのようなテンションの上がり方をして、ラウラは席を移動してきた。シャルロットも苦笑いでラウラを見ている。セシリアと箒が複雑そうな目をしているが、許して欲しい。こうなったラウラを俺は止められん……妹には甘いのだよ。

そういえば先生達遅いなく。なんかほとんどの教員が慌ただしい雰囲気生徒を

引き剥がしてたけどなんかあったのか？……ああ、俺がそういえばやったんだっ  
たな。ふっ……足跡も指紋も何も残ってないから調べる事は不可能だ。無駄な作業  
をせずにとっとと死体処理でもしときゃいいのに。あ、あと遺族への配慮とか？  
それから数分経ってやってきた姉さんと山田先生は、なるべく生徒達の不安を煽  
らないような声音で連絡事項を伝え、学園に向けてバスが発車したのだった。

「……すう……すう……にいさまあ……」

「こいつ……隣がいいって言ってきた割にはすぐに寝たな」

バスが走り出して10分も経った頃には、ラウラは夢の中だ。しかも体を大きく  
倒して俺の膝で眠っている。

「きやあゝ……めっちゃ可愛い!!」(小声)

「織斑君、写真撮っていい!？」(小声)

近くの子女子達が俺たちの様子を見て携帯のカメラを構え出した。しかも御丁寧に小声で叫ぶという高等テクニクを添えてだ。こいつら……て慣れてやがる。あ、写真はどうぞどうぞ。

「いい感じにポーズ決めて〜」

「うん？うーん……こうか？」

「「「「「きゃあ〜!!」」」」」(小声)

ラウラの頭に手を乗せ、優しい表情でラウラを見る。どうやら好評らしい。

『お兄ちゃん……帰ってきたら……ね？』

おとう……何やら死神の足音が聞こえる。いや、気のせい……気のせいだ。ウ  
ン……白式、通知オフで。

『後でどうなっても知らないからね……はいオフ』

今の俺はIS学園の織斑一夏なのだよ。

「ふにゅう……」

「……俺も写真撮ったところ」

カシャッと一枚。そしてすぐさま送信。程なくしてメールで返信が返ってきた。

『どういふつもりですかいっくん様？』

字面から分かる。少し機嫌が悪い。

『偶には妹の顔も見えておけ。ハイパーセンサーで見えているだろう？』

『だから彼女は完成品だと何度も申し上げたはずです。断じて妹などではありません』

ん』

『いいや、お前はクロエ・クロニクルだ。そしてラウラ・ボーデヴィッツはお前の妹だ。唯一の家族なんだからちゃんと向き合う覚悟を持て。余談だが、俺はお前の目は好きだぞ?』

クロニクルの目は、白目の部分が【黒】、黒目の部分が【金】だが、それが逆に彼女を『個』として際立たせていると言っても過言じゃないと思っている。そして何故だか返信が来なくなった。照れたかな?

数分待っても返信が来なかったので俺は一眠りすることにした。ラウラは……ほっというていいか。

〈クロエ・クロニクル〉

「……………好き？私のこの目が？」

私が右手に持っている携帯電話に表示されている画面に書かれているあり得ない内容。あり得ない。失敗作の象徴でしかないこの歪な瞳を見て嫌悪感を抱かない人間なんていない。

「面白い人……そうですね。この写真は貰っておきましょうか。私がクロエ・クロニクルであるために。ふふっ……私が誰かに会いたいと思うなんて……次に会うのが楽しみですよ、いっくん様」

「クロエ、オータムの所に凸らない？また料理教えてもらおう」

「ん……分かりましたマドカ。少し待ってください」

私はまだ、胸に宿った想いに気づけていなかった。

## 麗しき夏 血に染めて

サラ・ウエルキン、亡国にて

### 57話

「くっ……ッ!!」

私の名前はサラ・ウエルキン。元イギリスの代表候補生よ。何で元、かですって？この前辞任したの。

やっと訪れた夏休み。クラスメイトは家に帰るとか何とか言ってたけど、私は違うわ。今私がいる場所はかの国際的なテロリスト『亡国企業』の本部よ。少し前に正式に亡国企業の一員になった私は、念願の専用機を受け取って今までずっと完熟訓練をしているの。でも、ちょっと今はまずいのよねえ……

「どうした!! その程度の機動でこれから世界とやりあおうってのかテメエら!!  
戦闘領域に入った瞬間コアごと撃墜されたいのか!!」

「「「「申し訳ありません教官!!」」」」

「謝罪などいらん!! 罰としてさらに数を増やす。次は3ダースだ!!」

また増えたッ!? ああもう!! さっきから精一杯だったのに!!

ああごめんなさい。今さっき言った訓練の途中なの。他にも複数人いるのだけれどその中に混じって一緒にやってるのよ。今私達を指導してくれてる教官様曰く、「何人居てもそんなに変わらないからいい」との事。それでも一応IS乗りとしては優秀だという自負があったから少しイラッときたわ…でも、

「きゃあ!!」

「1機落ちたぞ、すぐに陣形を立て直せ!! できなければ敵の集中砲火を浴びて死ぬだけだ!!」

「「「はい!!」」」

12 対 1 で一撃も被弾する事なく残り 5 機まで減らすほど実力が高いのよね。  
はあ……少し自信無くしちゃうわ。

「3 番、11 番、は後方支援。弾幕で近づけさせないようにしなさい!! 5 番と 8 番は私と一緒に肉薄よ!!」

「「「了解しました隊長!!」」」

ちなみに私はこの中で唯一の専用機持ちという事で隊長役を今回やってるわ。イギリスの軍でもここまで本格的な訓練はしたことがない……いえ、IS の所有数の関係で出来ないからいい経験になる。

「良い戦術だ。私じゃなければな」

「なっ……そんなのあり?」

「戦場になしは無い」

うへえ……詰んだあ……

いつのまにか私の目の前には教官様の銃口が。他の4人もBT兵器に囲まれて動けないでいるようね。

「そこまで。勝者はSだ」

審判として、広大な訓練場で拡声器を使って声を掛けてきたのは私のライバル、織斑マドカ。おっと……ここではMだったわね。そして、彼女の宣言したSという名前。私達の教官役を務めてるのがかの有名な織斑一夏。世界でたった1人の男性操縦者だ。

「総評を伝える」

ツ

隊長役の私を端にして一列に並んだ私達は、未だ『ユニコーン』という純白のISを纏ったままのSの厳かな雰囲気という言葉を待つ。表情が見えないのがいつにもまして怖いわね……

「……及第点だ。オールレンジ攻撃を可能とするファンネルの対応はまだまだだが、即席とはいえ連携をもしっかり出来ていただろう。ふむ……12番機」

「はっ」

「何故隊を離れた？」

「後方支援をメインに動く4機にファンネルの攻撃が集中していました。あえて1人だけ突出する事で敵機を引き剥がすことが最優先と判断しました」

無断の現場判断とはいえ、正直私も良い案だと思ったわ。イギリスでセシリアの相手にした時、自分の機体を不規則で動かす事である子の気を逸らしたものの。ファンネルだって集中力が必要だから判断としては間違っていないと思う。

「なるほど、一理ある。現時点、表向きBT兵器適性が最も高いのはセシリア・オルコット代表候補生だ。彼女は6機のBT兵器を停止しなければ操作できない。それを鑑みれば良い判断だ」

「ありがとうございます!!」

「だが、独断というのが不味かったな。隊長の練度不足もあるが、貴様のせいで指揮系統が乱れたことも事実だ。励めよ」

「はっ!!」

今地味に私の練度不足とか言われたわね……まあ隊長なんてやった事がないから当たり前なのだけれど。

「よし、では次11番だが……」

そう……彼は毎日、1人ずつの評価を公開して伝える。戦闘行動中に1人1人

の行動を見て審査しているのも十分アレだけど、こういうところはIS学園で聞いていた彼の評判とは違う。マメすぎるといえるかなんというか……いや、褒めてるのよ？

順番的に私の総評が最後になった。ただ、いつも内容が似通ってるのよねえ……

「では、最後に隊長」

「はっ」

「12機を擁する部隊の指揮にしてはよく出来ている。空間把握能力もなかなか高い事も幸いしているな。まだまだ時間はあるが、指揮と戦闘を完璧に両立できるようこれから精進しろ」

「了解しました!!」

そう、空間把握能力が高い。本当は、適性が低くともBT兵器を扱えるようになるために努力していたのだけれど、まさか部隊の指揮で役に立つとは思ってなかったわ。Sはそれを毎度の事に言うけど、正直に少し皮肉に聞こえる。だって、S

が操縦するユニコーンにはBT兵器と原理が似通ったファンネルって言う武装が156機搭載されていて、彼は当たり前のように全てを使うもの。

「これで今日の訓練を終了する。ISを用いて訓練場の整備を終えた後、各々で自身支度を整え次第解散だ」

「「「「「ありがとうございます!!」」」」」

「そうだ、自主練を行うのは自由だが休憩はしっかり取るように。それと隊長は後で私の部屋に来てくれ」

「了解です教官」

そう言ってSは、Mと一緒に去って行った。だけど腕を組んで歩くのはどうかと思う。話だと実の兄妹って聞いているから悪くはないのだけどね。

「はい、じゃあ自主練する人々?」

私が聞くと、人ほど手を上げた。熱心ね……

「了解。でも教官の言う通りちゃんと休憩しなさいよ？」

「分かってますよ」

「じゃあ私達はお先に」

「うーん……見るだけにしようかな？」

確か日本のことわざに女3人よれば……ってあるけど、本当に姦しいわね。私も女だけど。

そういえば言っていなかったわね。ここにいる11人は全て未成年で構成されている。なんでも、ずっと前から孤児として亡国企業に引き取られて過ごしていた子供が恩を返したいと言って参加しているそうよ。もちろん表向きはPhantom corporationのバイトとしての身分があるそうだから裏が潰れた時のバックアップは完璧らしい。……ホワイト企業すぎてびっくりよ。テロリストなのにね。

「んじゃ、私は行くわね。彼に呼ばれてるから」

「はい。お疲れ様です隊長。と、こ、ろ、で、教官と逢引ですか？」

「いや、正直彼は無いわね」

「「えゝ面白く無いなゝ」」

「面白がらないの」

操縦者同士の仲も良いというもイギリスにいた頃と違うわね……Sは情が湧くから仲良くしないほうがいいと言ってたけど。

そしてシャワーを浴びて身支度を整えた私は、私服でSの部屋に向かったわ。

「サラ・ウェルキン、到着しました」

ノックをして返事を待つ。少し物音がした後、扉が開いた。

「ようこそ先輩。どうぞ」

「ええ、失礼するわね」

プライベートな時は彼……一夏君が敬語で私が普通に喋っている。日本人らしいのよね。IS学園には通ったままだから立場的には正しいのだけね。

「おーい、一夏。煎餅はもう無いのか？」

「食い過ぎなんだよレイン。太るぞ？」

「ん な っ……私は栄養が胸にいくからいいんだよ!! セクハラで訴えんぞ」

「サファイア先輩が聞いたらぶん殴りそうだな……いくとこまで行ったんだから今更だろうが、誰のせいだか知らんけど」

「んにゃ!?……それはずるいだろてめえ」

部屋に入った瞬間に、学年とかそういうものを超えた会話が聞こえた気がしたけどまあ気のせいよね。ええ、きつとそう。

「マドカ、レイン、席を開けてくれ。ウェルキン先輩が座る」

「分かった」

「お、来たのかウェルキン」

「ええ、ありがとう」

何故か元々一夏君の部屋にいたマドカとダリル先輩改め、レイン先輩はベッドの上で私の分の椅子を譲ってくれた。ちなみにマドカは二段ベッドの上に登ってレイン先輩は下だ。

「そういえば一夏君、何のようかしら？」

「ああそうだった。えっとですね……異動命令書をスクールの姉貴から配ってくれて頼まれました。どうせならと思つて今空いている面子を呼びました。あ、お茶をどうぞ」

「あら、ありがとう」

一夏君が淹れる紅茶はすごく美味しいわ。前にセシリアのメイドさんの紅茶も飲んだけどそれに匹敵するくらい。

「ええ、では読みます。

【モノクローム・アバター】

隊長：S

副隊長：M

隊員：C（サラ・ウェルキン）、K（クロエ・クロニクル）、レイ

【フォールン・ワールド】

隊長：スコール・ミューゼル

副隊長：オータム

隊員、レイン・ミューゼル、R（篠ノ之・束）

だそうです」

「質問いいかしら」

「どうぞ」

内容は分かったけど、ちょっと流石に無視できない部分があったわね。

「私、イニシャルはSなのだけれど……」

「ああ、俺がSなんで」

「軽いわね!？」

「ふっ……その程度でいちいち怒っているとそこが知れるぞ？」

「何か言ったマドカ？」

この子……いちいち突っかかってくるわね。それでも気が合うから憎めないのよね。

「へえ、俺はスコール叔母さんのところか。でもオータムが副隊長っていうのが

なあゝ」

「東さんいるから十分だろレイン」

「そこを言われたらそうだけどさ……まいつか」

レイン先輩が亡国企業なのは意外だったわ。でも、フォルテは違うって面倒くさいわね。2人揃って『イージス』とか言われてるのに。

「これからよろしくね、隊長さん？」

「よろしく兄さん」

「ああ、よろしく頼む」

「うへえ……私場違いじゃねえかよ」

1人だけ部隊違うもんね。それにしても……

「ねえ隊長。クロエって子はいないの？」

「ん？ああ、クロニクルなら……」

「ここに居ますよ」

「「えっ!?!」」

私達以外の声が突然聞こえたと思ったら、座ってる一夏君の膝の上に銀髪の子が現れた……もしかしてこの子がクロエ・クロニクル。

「クロエ・クロニクルと申します。これからよろしくお願いします、サラ・ウェルキン様」

「え、ええ……よろしくね？」

「びびったあ……」

「クロエ、そこを退け。私が座る」

「嫌です。そしていっくん様も嫌がってません」

「ああ……うん、まあいいか」

「兄さん!?!」

なんか不思議な子ね……突然現れたり一夏君に懐いたり……様付だったり……

「……………」

「ク、クロニクル？」

「クロエとお呼びください、いっくん様。せっかく同じ部隊になったのですから、よそよそしいですよ？」

「……分かったよクロエ。うん、ちゃんと自分が出せるようになって何よりだ」

そう言って一夏君はお母さんのような顔でクロエの頭を撫で始めた。そういえば、さっきの、どういう原理なのかしら？

「ああそうだった。補足しておきますけど、今のはクロエのIS『黒鍵』の能力で大気を操作して幻影を見せることができます。今回したのはクロエを透過させた光景を作っていたという事です」

「へえ、便利な能力ね。もしかしてISを使っても分からない？」

「はい、私の『黒鍵』は対IS用と言っても過言ではありません。一部例外はありますが……」

クロエはそう言って少し不機嫌そうに一夏君の方を見た。そういえば、一夏君は気付いてたっぽいわね。

「ああ……俺って結構人体改造をしてまして……そのうちの一つがこの『越界の瞳』です。ISを展開しなくても使える擬似ハイパーセンサーと言ったところですかね。これでファンネル操作の補助もしてます」

……あらあら、確かに一夏君って歳不相応な体付きをしてると思ったけどそんな事実が。セシリアが知ったら卒倒するでしょうね。

「この部隊、結構色物多いわね」

「人のことは言えないぞサウ。お前もなかなかだ」

「どこらへんがよ……適当言わないでちょうだい!？」

「いや、わりと涼しい顔して兄さんの訓練に順応していつてるのはヤバイ。私達のようにどこかしら肉体を強化してるわけじゃ無いのにそれはヤバイ。ちょっと今から模擬戦しない?」

「しないわよ……さっき訓練してきたばかりなんだから」

まあ……一夏君の訓練メニューなら丁度いいくらいかしらね。私の初めての専用機も、恐ろしいくらい私にフィットしてるし。

「はは、頼もしいですよ……ああ、訓練内容によっては今日のメンツから何人かウチの部隊に来るかもなんでその時は仲を取り持つの任せますよ先輩」

「あら……意外と貧乏くじかしらね……」

「ちなみに給料はこれくらいです」

「……………いや……え? ホントに?」

桁が……桁がおかしいわ……ウソでしょ？ まともに出動もしてないのにこんなに入るの……？ イギリスなんて【自主規制】じゃない。

「大人しく受け取っとけサラ。私も初めての時は思わず叔母さんのところに聞きに行ったくらいだ……」

「俺も……こつそり新しい口座を作りましたよ……流石にこの大金は普通の口座に入れるのは無理でした。姉さんに絶対バレるし……」

「……？ 現金で持っておけばいいのに。2人とも何を悩んでるんだ？」

「それはマドカが可笑しいだけです。ちなみに私は束様に差し上げました。使う事ありませんので……何故だか、同情するような目で見られた後何かをなさってましたが」

それ絶対偽造口座作ってるわよクロエ。だってあの篠ノ之博士ですもの……いや、博士にそんな顔させたクロエもなかなかの大物ね。

「東さん苦勞してんなあ……まあいいや、あの人のことだし。あ……ウエルキン先輩、面白いものあるんですけど見ます？」

「んー？ なになに……プフッ……なにこれ……ふふっ……」

こ、これはダメでしょ一夏君。面白すぎるわ……

一夏君が携帯の画面を見せてきたと同時に、私は吹き出してしまった。紅茶を口に含んでなかったのが幸いだったわ……だって、【真っ白に燃え尽きた篠ノ之博士がウサミミ型カチューシャを遂にかじり出した】写真とかどんな状況よ!!

「あっははははは!!これは卑怯よ……一夏君……」

「あれか……あの時の博士は……うん、兄さんがど外道だった」マヌケ

「いやこれどんな状況だよ……チラッと映ってるけどレイさんも相当な顔してるぞ」

「……私にも責任の一部があるので何も言えません」

「詳しくは言えないけど、まあ……いろいろあったんだよ。ハハッ、あれは酷かつ

たな。やらせたの俺だけどさ」

私がツボり、織斑兄妹が遠くを見つめ、クロエの目（閉じてるけど）からハイライトが消え（てるような雰囲気）、レイン先輩はドン引きしている。明らかに誰が見てもカオスだった。

「勝手に入るぞお前ら。準備が出来たから呼びに……ってなんだこれ？……もうちょい後にするか。スクールに言っとかないと」

突然部屋に入ってきた……えっと、オータムさん？も何やら引き気味だったけど、ツボに入って笑いっぱなしの私には関係の無いことね。……誰か私を止めて。

（30分後）

「「「「サラさん、亡国企業へようこそー!!」」」」」

「……そういうことだったのね」

あれから、なんとかして落ち着いた私達は部屋の片付けをしてオータムさんの案内の元、少し大きめの部屋に向かったわ。そこで私と一夏君だけ待たされて、少し経って中に入ったらクラッカーの音が鳴り響いた。直前まで何か分からなかったから言葉とは裏腹にすごい驚いてるわ。歓迎会ってされたことないから新鮮ね。

「はい、というわけでサラ・ウェルキンさんの登場です!!」

「「「「イエーイ!!」」」」」

一夏君の音頭で、さらにテンションを上げている何人か。えっと、マドカ、レイン先輩、オータムさん、IS研究所のレイ所長、篠ノ之博士、後はいつも一緒に訓練してる子達。結構多いわね。その他にも、スコールさんやクロエ、なんとまさか

のボスまで参加してるわ。後私の専用機開発に関わってくれた人達も。ちょっとしたパーティーね。ネタなのは分らないけど、ボスが首から『今日は無礼講』って書いてあるカードを下げてるのは笑っていいのかしら……

「じゃあ主演のウェルキン先輩から一言頂きましょう!! はいどうぞ先輩!!」

「え!? ちよっと一夏君!! 私何も考えて無いんだけど……」

「なんでもいいんですよ。ノリで」

ふえ……みんな私を見てるわ……恥ずかしい……うーん……そうねえ……

「ご、ご紹介に預かりましたサラ・ウェルキンです!! えっと……きゅ、給料以上の働きをしてみせるわー!!」

「「「「「うおー……!」」」」」

「「「「「ひゅーひゅー!!」」」」」

お、思ってた以上にウケたわ……ホントにノリでいいのね……

「オッケーイ!!じゃあテメエら!!今日は呑むぞー!!」

「「「「「イエエエエエエー!!!!!!」」」」」

「ボスウ!!景気付けに一杯オナシヤアス!!」

「「「「「ボスウウウウ!!」」」」」

「ふっ……そこで私に降るか一夏。いいだろう!!私の飲みっぷりを見るがいい!!」

あ、ボス結構ノリがいいわね……普段の威厳を保ちつつこんなにノリがいいなんて……イギリスの【自主規制】で【自主規制】……【自しゅ……eror】とは大違いだわ。

そしてボスは明らかにお値段のしそうなワインをボトルごとゴクゴクと……え、アレ死なない?大丈夫なの?

「……………ふっ」

「「「「うおおおおお！……いい飲みっぷりだボスウウウウ……」」」」

親指グツ、しながら飲み切ったボスは、結論から言えばそのまま倒れたわ。……倒れたわよ一夏君!!

「大丈夫っすよ先輩。あの人あんまり酒は強くないから」

「じゃあなんで飲ませたのかしら!? あれ重症よ!？」

「いや、あの人気絶するだけで30分くらい寝てればいつのまにか復活しますから。前の歓迎会の時もいつのまにか料理食ってましたし……慣れた方がいいですよ」

「そ、そう……凄い人なのね……」

「はい、ボスは凄い人ですよ!」

どうしよう……ここまで目の輝いた一夏君を前にして凄い（褒めてない）なんて言えないわ……うん、こういう時は……

「ねえ一夏君。私もお酒、頂こうかしら。少しよ?」

「了解です。あ、レイン!! テメエは飲むなよ!!」

「分かってるよ!! アレ以来一回も飲んでないわ!! いちいち言うなあ!!」

ねえセシリア……多分、早めに亡国企業についての方がいいと思うの。ホワイト企業なのはもちろん上司も優しいしセクハラしてこないしパワハラもないし戦力的にも申し分ないし……何より篠ノ之博士もいるし!!

イギリスの【自主規制「もう限界です」】よりかはずつつつつつといいと思うのよね!!

「サラ!! お前それだけしか飲まないのか? もっと飲めよぉ」

「ちよっマドカ待って私お酒は……あはははっマドカっあらひろいわ」

「この人……笑い上戸か……ああもうマドカは絡まない!! 酒癖の悪さはホントに姉さんに似てるんだから!! 家事も料理もできるのにさあ!! クソっ……姉さんいいところねえじゃねえかよ!!」

それからの記憶はあんまり無いわ……気づけば朝だったし、いつのまにか私に与えられた部屋のベッドで寝てた。ん……？書き置き？

『東さんが良い感じに外泊届けを偽造してくれているので安心して休んでください。後、マドカが変な絡み方をしてマジですいませんでした。運んだのは俺ですけど不埒なこととは何一つしてないんでご心配なく。朝起きてこの書き置きを見ると仮定して、今日と明日の訓練は休みにしたので楽しんでください。』

ps 昨日のアレでだいぶ打ち解けたっぽいんでこれからは変に緊張しなくて良いですよ。

モノクローム・アバター隊長・織斑一夏』

あら……あらあらあら？いつのまにか色々と気を使われてたみたいね……  
うん……今日と明日が休みなんだったら遠慮なく……

「寝ましよう……頭が痛いわ……」

二日酔いを治すことに専念しましょうか。

「マドカ……飲み過ぎだ、寝ろ。はあ……ウエルキン先輩、マジですいません……つて聞いてないなこりゃ。ファンネル」

「レイさん脱ぐな!!アンタ面倒臭いな!？」

「束さん……は、大丈夫そう。流石は究極の人類……」

「レイン……あ、寝てやがる。酒の匂いにやられたか?コイツも運ぶか。ファンネル」

「ボス……あ、復活早いっすね。はい、コイツら運んできます」

「クロエ……よし、飲んで無いな。流石にクロエにはまだ飲ませられん……慣れてなくて疲れたか?ファンネル」

「オータム……アイツまだ飯作ってんの?おいオータム!!もう作らなくていい

ぞ？え、自分の分？……料理を任せっきりですまん。今度なんか奢るわ」

「姉御は……あの、色気を振りまかないでもらえます？確信犯な酔い方でそういうのは……あー……ほっといいいか。一番タチが悪いわ……」

「コイツらそういや未成年だったわ……明日の訓練は中止でいいか。はあ……寝てる奴ははい、ファンネル。えっとお前とお前は……はい、エチケツト袋。少し離れてから吐いてな？感染る奴いるから。そっちは……あ、元々酒強いのか。飲み過ぎんなよ」

「研究所の人らは……ああ、酔ったテンションで武装の設計図書いてやがる……ん？月光蝶は却下だよ。ファンネル、焼け。ハイパームテキゲーマーとかどうする気だよ……これもファンネル。目覚まし機能（織斑千冬ボイス）………きや………つかだよファンネル」

「ふう……ひと段落ついた。よし、俺も飲む………もう酒がない………だと？」

「ユニコーン………変なもん運ばせたり焼かせたり………ゴメンな？」

『復歸後の初セリフ……これなのマスター？暗殺○室の○林くらい遅いよ？』  
「…………マジですいません」

## 裏と面の狭間で

## 58話

はいどうも。現在、自宅からお送りしている一夏だ。え、ウェルキン先輩の歓迎会？ハハッ……感の良いガキは嫌いだよ。いや、まあ普通に片付け手伝って普通に寝て普通に朝起きて家に帰ってきたただだぞ？俺は体内のナノマシンをいい感じに動かしてアルコールも速攻で分解出来るから全く酔わなかったし。ていうかほぼ酒飲めなかったし。

「行ってくる」

「ああ、行つてらっしゃい姉さん。はいこれ弁当。夕飯は？」

「ありがとう一夏。山田君と飲みながら食べるからいい。そして遅くなる」

「了解。山田先生にあんまり迷惑かけんなよ」

「……もちろんだ」

「あ、ちょ……逃げたな」

早足で姉さんは家を出て学園に向かって行った。全く……山田先生、お疲れ様です。今度ちゃんと締めときますんで。

そして一通りの家事を終えた俺は冷蔵庫から取り出した炭酸を飲んで一息入れた。

「ふう………さてと、じゃあ顔合わせにでも行くか」

IS 学園の制服に着替えた俺は、家を出た。忘れた教科書類を取ってこないといけないし、今日はなんといってももう一つ大事な案件がある。

モノレールに少し揺られて到着した IS 学園。俺はユニコーンとある電波をキャッチしたことを確認するとタイミングが合うように校門へと向かった。

「ん?……セシリアじゃん」

「い、一夏さん!? 奇遇ですわね」

「そうだな」

そこには、イギリス貴族らしい上品で、尚且つ嫌味つたらしくない、彼女によく似合う私服を着たセシリアがいた。その少し後ろにはセシリアのものが入っているであろうスーツケースを運ぶ1人の女性の姿もある。

「ッ!？」

「……………」

「……一夏さん？」

「ああ、なんでもないさセシリア」

セシリアの専属メイドであるチェルシー・ブランケット。彼女にしか見えない角度で携帯を見せてやると一瞬驚いたような顔をした後、憎悪に満ちた視線を向けて

きた。はは……お可愛い殺氣だな。宇宙にある剣の形のモノを見せてやっただけなの  
に。

「一夏さんはどうして学園に？」

「いやー……教科書を忘れちゃってな。家がないから焦ったよ。セシリアは？」

「わたくしは、イギリスの実家で貴族としての仕事や代表候補生としての仕事があり  
と段落ついたので戻ってきましたの……その、ウェルキン先輩のこともありました  
し」

少し暗い表情をしたセシリア。俺は劳いの言葉をかけつつ、世間話に移行した。  
ウェルキン先輩はイギリス代表候補生を辞任した。理由はまあサイレント・ゼ  
フィルスの防衛任務の失敗の件だ。彼女自身はもう吹っ切れているどころかイギリ  
スの上層部に酷い暴言を吐く始末だったが、あちらからすれば大損だろう。国家代  
表に並ぶ実力を持つ彼女を辞めさせてしまったのだから。たかが試作第3世代兵  
装が使えないくらいで優秀なIS乗りを捨てるとはバカな国だよ全く。まあ、その

おかげで堂々と先輩も行動出来るんだけどな。イギリス内部に潜んでいる亡国のスパイによれば、後から後悔しているとか。フーカインゲンナ。

「お疲れ様。俺は今日家でやらないといけないことがあるからすぐ帰るけど、セシリアもしっかり休めよ？」

「はい！久々に皆さんともお会いしたいですし！！学園寮に残っている方がいれば良いのですが……」

「箒とシャルロットは学園に残るって聞いたから行ってみたらどうだ？」

「あら、そうでしたのね。ではそうさせていただきますわ」

「んじゃ、またなセシリア！」

「ええ、一夏さんも御元気で！」

軽く挨拶をして俺はセシリアの横を通り過ぎた。その時にチェルシー・ブランケットに声を掛けることも忘れない。

「————、私のアドレスだ。1人になったら連絡しろ」

「ッ……………分かりました」

俺はそのまま寮の自室から教科書類を取り出してカバンに詰めた。ついでだから置きっぱなしの漫画やらラノベやらも持って帰り、そのまま学園を出た。姉さんに会わなかったけど職員室か？

「……………待たせたな」

「いえ……………それほど待っていません」

私不機嫌です、みたいなオーラをこれでも放っているチェルシー・ブランケット。まあどうでも良いので無視してとっとと本題を進めるとしよう。

「何か言いたいことがあるなら言っても良いぞ？」

「いえ……………まさかあの織斑一夏が亡国に所属しているとは夢にも思わなかったの

で……」

「ククッ……だろうな。ああ、今月の分は私が回収する」

「……どうぞ」

彼女からUSBメモリをもらいしつかりとケースの中に収める。オルコット家の情報だ。宇宙にあるオルコット家の最後の力、エクシア・カリバーン。衛星軌道上に存在するそれは、亡国の指示でいつでも砲撃を放つことができる本当の意味での『力』だ。その正体はチエルシー・ブランケットの実の妹であるエクシアが操縦するIS『エクスカリバー』なのだが……セシリアの両親によってエクスカリバーの生体ユニットのような状態にされている。なんとかして妹を助けたいと願うチエルシーに、我々亡国企業は協力を申し出る対価としてオルコット家の情報を渡しているのだ。

まあ、今の彼女が勘違いしていることと言えば、エクシアは生体ユニットとされたのではなくならざる負えなかったと言うことだ。心臓病を患っているエクシアは生体同期型ISを使うことでしか延命出来なかったからな。何より、その生体同期

型ISのコアは亡国が所有していた物を使用している。我々の管理下にあるのは当然と言うことだ。

「用件は済みました。私はこれで失礼させていただきます」

「待て、もう一つある」

「……なんでしょうか？」

「BT二号機サイレント・ゼフィルスが強奪された件に関しては知っているだろう？」

「ええ、亡国の仕業だと聞いていますがそれが何か？」

「では極秘裏に開発中のBT3号機の事は？」

「ッ……いえ、初耳です」

BT3号機。1回目にて彼女が強奪したIS『ダイヴ・トゥ・ブルー』。その単一能力は『空間潜行』と言って、ISのハイパーセンサーでは影も形も捉えられない、本当の意味で別の空間に潜ることができる能力を持つ。もちろんそれを発現さ

せたチェルシーは相当の実力者でもある。そして何より、BT兵器適性がセシリアよりも高い。

「知っているぞ。BT兵器適性がセシリアよりも高い事はな」

「……知られていて当然でしょう。世界の情報など亡国にとっては全て筒抜けでしょうし」

「その通りだ。さて、そこで提案……というか命令なのだが、BT3号機の完成次第、強奪してこい。そのためのISも貸し出すし援助も惜しまない」

「それは構いませんが……」

へえ……不可能とか言うかと思ったら、構いません、ねえ。どうやら随分と自信があるらしい。

「成功の暁には、エクシア・ブランケットの救助を行うことを約束しよう。丁度、我々もISで宇宙に飛び立つ計画を進めているからそこまで先延ばしにすること

はなくなったのだよ」

「ッ!!………本当ですね?」

「ああ、その代わりと言ってはなんだが……」

「妹を救ってくれたら………私も亡国企業に所属しましょう。私は、妹のために生きていると言っても過言ではありませんので」

話が早くて助かる。無駄な血も流さなくて済みそうだ。

「ほう………では交渉成立だ。BT3号機の情報はいギリスに潜入中のスパイから定期的に送るから心配しなくて良い。貴女は安心していつもの仕事をしてくれ」

「了解しました……」

もう帰っても良いという合図を出したが、少し悩んだ様子で彼女は立ち去ろうとしない。………ああ、なるほど。

「セシリアの気持ちなら理解している……もちろん、受け入れる事はできないから申し訳ないがな」

「ッ……でしたら何故ッ!!」

「……俺にだって、情くらいあるんです。俺と話すたびに笑顔になる彼女のことを……冷徹に拒絶する事なんて出来るわけ無いでしょう?」

「……申し訳ありません。出過ぎたことを……これからもお嬢様の事、よろしくお願いいたします」

『織斑一夏』としての本音を少し言うと、彼女は同情したような声音でメイドらしい所作で礼をして来た。俺が敬語を使ったのは、彼女が18歳で俺より年上だからだ。目上の人には……敬語……レインとオータムは例外、いいね?

「……敢えて返事はしない。必要とあればいつか殺すだけだからな。ああそうだ。言い忘れていたよ」

「……なんででしょうか?」

「ウチに1人、貴女の妹と同じ生体同期型ISを使用している者がいる。上手くいけば、宇宙にいることなく生活が出来るだろう」

「そうですか……それは良かったです」

「今更だが聞いておく。貴女がやろうとしている行為は主人であるセシリア・オルコットと祖国イギリスに対しての明確な裏切りだ。貴女に、家族の為にそれ以外は一切合切を捨てる覚悟はあるか？」

1回目で彼女は結局、中途半端な選び方をしてエクスカリバーもダイヴ・トゥ・ブルーも持ったままセシリアに帰属した。詰まるところイギリスが所有……いや、セシリア・オルコット個人が所有するISが3つに増えたと言うことになる。今回もそんなことになるのはいただけない。

「それは……………」

どうやら彼女の中でかなり揺れているらしい。以前、ウェルキン先輩にも言った

が裏切ってすぐに、はい分かりましたって身内殺すような狂人は要らないんだが。

「はあ……分かった。答えはまたいつか聞こう。だが、どのような結果であれBT3号機だけは渡してもらおう。いいな？」

「……はい。それで構いません。いえ、私に選択肢を頂けるだけ感謝しています」

それだけ言い残して彼女は去った。メイド服で出歩いて目立たないのだろうか？

「あーあぁ……無駄に悪者演じるのも疲れるな。でもBT3号機だけは俺でも捉えられないから厄介なんだよ。」

……さて次だ。もしもしレイン。今いいか？」

『あぁ？一夏か。今オレの部屋なんだけどまあ良いぞ』

………そういやコイツ学園では『オレ』って言ってたな。

「そうか……覚悟を決めろレイン」

『……何の話だ?』

「フォルテ・サファイアの勧誘だ」

『なっ……アイツまで巻き込む気か!!』

何を言ってるんだレイン。

「……は? お前、今世界中で情報と戦力を握ってる組織を考えろよ。ギリシャとウチがやり合ったら一瞬で滅ぼせるぞ?」

『ツ……でも、オレの部隊長はスクール叔母さんだ。お前にはオレに対する命令権はねえ!!』

「そういえば言っただけだったな。緊急事態に対応する為、両部隊長は互いの部隊員に対する命令権が与えられてるんだよ。だからやろうと思えば姉御がマドカやウェルキン先輩に命令できる。つまりだ、レイン・ミューゼル」

『ッ!!』

「フォルテ・サファイアを亡国に勧誘しろ。期限はIS学園の修学旅行終了日までだ。これはモノクローム・アバター隊長Sによる命令である。現在の私はフォルン・ワールド隊長スコール・ミューゼルと同等の権限を持っている」

『……………任務、了解しました』

「成果を期待する」

そして通話を切った。

『優しいね一夏』

『ええ、甘すぎるくらいには』

「……………何のことだよ」

携帯をしまった直後に白式と白騎士が話しかけて来た。恐らくユニコーンも居るだろう。今罪悪感でいっぱいだから後にして欲しいんだけどなあ。

『勧誘させるだけで、強制的に加入させるわけじゃないもんね』

『断られた場合の口封じを命令してませんし、入ってくれたら良いなレベルでしか考えていませんね？成功か失敗かは聞いてません』

『マスター……優しい』

「いや、当たり前だろ。結局はレインがどう受け取るかだし。俺が言った通りギリシャからの招集命令で亡国殲滅とか言われてもフォルテ・サファイアくらいなら瞬殺出来るしな。フォルテ・サファイアの生存はレインにかかっていると云っても良い」

まあ……俺に殺されなくなったら意地でも勧誘するだろうさ。まずボスの命令でもないから別に遵守する必要もないし。

「そして知ってる中だと次は、イタリアか……行きたくないな。今回はやめとこつかな。あの人キヤラ濃いし。あの人、某ゼノン並みに腕ない方が強いし。ああでもシャイニィには会いたいよな」

迷うけど辞めよう。ま、とりあえず今日やる事は終わったし家に帰ってゲームで  
もしますかな。いや……昼飯は弾のところでも……うーん……

「あれ、一夏。アンタなんでここにいのよ」

「鈴か。部屋に教科書忘れてな……今し方暇になったところだ」

「あつそ。じゃあさちよつと付き合ってよ」

「おう、暇だから良いぞ」

ふと、近くのショッピングモールであるレゾナンス方面から歩いてきた鈴と出会った。今日は色んな人に出会うな……今のニュアンスは買物に付き合っ  
てよ、とかの奴だ。俺だって成長してるからな？

「どこに行くんだ？」

「五反田食堂よ。数馬も呼んだから久しぶりに皆で集まりましょ」

「良いじゃん。弾には連絡したのか？」

「してないわよ。アイツのアホヅラ拝むのも楽しみだわ」

「良い趣味してるなお前。俺も見たい」

弾は呆けた顔が面白いからな。俺と鈴で散々弄り回した記憶がある。

「蘭も元気してるかしらね……」

「弾と連絡取ってるけど元気らしいぞ？なんでもあのお嬢様学校の生徒会長らしい」

「え……あの子が生徒会長？人って変わるのね……」

「いや、猫被ってるかもしれないけどな？とりあえずさっさと行こうぜ。おっさんの料理考えてたら腹減って来たわ」

「ん……そうしましょうか」

やっぱりコイツとは波長が合うのか、遠慮しなくて良い仲だから楽で良い。とつとと全部終わらせて返事を返さねえとな。

「……どうかした、一夏？」

「いや、なんでもねえよ。そういうや、ラウラから連絡が来たんだけどな。この写真見てくれよ」

「あら……良い表情してるわねあの子」

鈴とするたわいもない会話は、それだけで俺を織斑一夏に引きとどめてくれる。もうすこし……このままでいたい。どうせ今度はドイツで殺戮ショーだからな。今くらいは楽な時間があっても良いだろう。

このあと五反田食堂に行った俺達は久しぶりに会った弾や数馬と一緒に大騒ぎしながら飯を食って、店主の厳さんにお玉を投げつけられた。それすらも懐かしいと思えるから時が立つのは本当に早い。そういえば蘭ちゃんにもあったな。やっぱりまだ俺のこと好きみたいだし、いつかは断らないとなあ……いや、断ったら断ったで厳さんと弾に殺される気がするけど。

弾に可愛い子はいるかって聞かれたから虚さんの写真を見せてやったよ。めっ

ちゃ気に入ってたなアイツ。やっぱ今年の学園祭もチケットはアイツに渡そう。弾が一番乗りで彼女作るのはちょっと腹が立つけどな。

あーあ……数少ない休みも終わっちまったなあ……さて、任務の時間だ。

「S、次の命令を与える。モノクローム・アバターを率いてイギリス、中国、フランス、ドイツにある女性権利団体支部を破壊しろ。所属する人間の生死は問わない」

「任務を受諾します。ISが出て来た場合は如何いたしましょう?」

「周辺の街に被害が出ない程度の戦闘行為なら許す。モノクローム・アバターよ、ISを過信する雌豚共と世界に示せ。我々の力をな」

「はっ!!」

取り繕うのは止めようか。楽しい楽しい大虐殺の始まりだ。

## 新生モノクローム・アバター初陣

## 59 話

「クロエ、黒鍵の新パッケージの様子はどうか？」

「問題ありませんいっくん様。レイ様の技術は素晴らしいですね」

「うん……まあ、いいか」

やあ、一夏だ。こう……最初の入りってどうすればいいか分からなくなって来たぜ。

そんな事は置いておいて現在、俺は亡国本部でクロエのISの調整をしているところだ。しかもなあ……よりによってレイさんに呼ばれたんだよ。絶対あの人変なもの作ってるって思ったんだがな。研究所に向かうと、機体のハンガーにいつぞやに見たものが掛けてあったんだ。

「クロエ君。どうだい、私と束博士が作った君専用パッケージ『バンシイ』は」  
「レイ様、黒鍵によく馴染んでいますし、感度良好……という感じです。感謝します」

そう……いつかの日に研究所で見た脚部のみだったユニコーンとほぼ同じ脚部のパーツ。明らかにユニコーンガンダム2号機『バンシイ』のものだった。どうせ皮だけ作って倉庫行きだと思ってたんだが……束さんの提案によって、直接的な戦闘能力を持たないクロエの黒鍵の強化パッケージとして採用されることになった。武装は原作と全く同じだが、元々のISは黒鍵なので『ワールド・パージ』も使えるという意味のわからない機体に仕上がってしまった。これってあれだよな、ミラージュ・コロイド（実質上位互換）が使えるバンシイって事だよな？……敵からすればクソゲーでは？

「私的にはこのアームド・アーマーVNが好みです」

この子……とてつもなく恐ろしい事を言ったな。左腕部に搭載されたその武装は展開する事で超振動をするクローとなる。相手を掴んでその驚異の振動で敵ISをシェイクしながらシールドエネルギーを刈り取り続けるヤバイ武器だ。まあ……唯一の弱点として、クロエはISを用いての戦闘があまり得意ではない事だな。遺伝子強化個体の失敗作であるがゆえに身体能力が低いのも悔やまれる。

「レイさん、束さんの姿が見えないけどどこに行っただんですか？」

「ああ、彼女なら寝てるよ。このパッケージを仕上げるのに軽く5徹はしていたからね。文字通り精魂尽き果てたという感じだったさ」

あの大天災でもああなるんだねえ……としみじみ呟くレイさんに、俺はついア  
ンタは何徹したのか聞きたくなったが堪えた。

「束様……私のためにそこまで……」

あ、そっちなね。いや……うん、家族思いでいいと思うよ俺は。

「よし……じゃあ完全訓練でもするかクロエ」

「……あのいっくん様、私まだ死にたくはないのですが」

「俺をなんだと思ってるんだお前は……同じユニコーンタイプを使うんだ。特殊武装は自分で慣れてもらうしかないけど、全身装甲タイプの扱い方は俺とウェルキン先輩で教えてやれるから」

「なるほど……それではお願いしますいっくん様」

この後無茶苦茶訓練した。あの子ホントに目が見えないんすかね？アームド・アーマーBSの射撃の精度が神がかっているんですけど……本気じゃないにしてもまさか俺が被弾すると思ってなかったわ。NT-Dは2分が限界だったな。しかも使用後はクロエも息切らしてたし。あれは本当にまずい時以外使用禁止だろう。俺も長時間使うと頭痛で死にたくなるしな。

途中からウェルキン先輩も専用機で参加してめちゃくちゃな事になったよ。先

輩って本気になるマジで強い。今の彼女なら楯無にも喰らいつけるレベルだろう。今度から1対1模擬戦形式でしっかりしばき回すでしょう。

うん、別に本気で顔面殴り飛ばされた事を根に持っているわけじゃねえからな？ちくしょう……チェーンマインがユニコーンに巻き付いたときは本気で死ぬかと思っただぜ……あ、ウェルキン先輩の機体はまだ秘密な？いやまあ内容的にみんなわかると思うけどさ。

「一夏君、どうしてクロエ君にガチな指導をしなかったんだい？」

「レイさん……それ聞いちゃいます？」

クロエとの訓練を終えた俺は、休憩スペースですこし休んでいた。隣接している自販機でスポドリを買って飲んでいると、レイさんがやってきた。

「いつもの君なら、罵詈雑言なんでも浴びせて死に物狂いでやらせようとするからね。そんな君がわざわざ手を抜いたんだ。きっと何か理由があるのだろうと思って

ね」

この人、これでも一応天才の部類だ。いつも変な事してるから忘れやすいけど、相当頭も回る。

「レイさん、いつもそうしてりゃいいのに。まあ……ちょっとした同情心ですよ。明日は新生モノクローム・アバターとしての初任務です。マドカは良いとして、ウェルキン先輩とクロエは実戦に出るのは初めて。任務内容的に確実に人を殺すことになる。先輩はちゃんと任務内容を理解して覚悟を決めてるっぽいから良いんですけど、クロエは俺のサポートをしたいから入隊しました。決して自分から戦うような子じゃ無いんですよ」

「……なるほどね、中途半端な状態で戦場に出てトラウマでも感じたら戦闘から遠ざけることが出来る、というわけかい」

察しが早くて助かる。そう……俺はアイツに出来るだけ人殺しはさせたくない。

アイツはまだクロエ・クロニクルになる途中なのだから。

「随分と過保護だね。しかも、他人に向けるような感情じゃあない」

「それは考えすぎですよレイさん。アイツやラウラ・ボーデヴィツヒが作られた原因は『織斑』にあるんですから俺が責任を取らないといけないんです」

「ふうん……君もまだまだ若いねえ」

「いや、レイさんだってまだ20代でしょうに。婆婆くさいですよ今の」

「……うん、いつもの君で安心したよ。私だってモノクローム・アバターの一員だ。明日の作戦のオペレーターは任せてよ」

「ふっ……頼もしいっす」

「じゃあ私は行くよ。また明日」

「ええ、おやすみなさい」

意味深な事を言って去っていったレイさんを見届けてから、俺も席を立った。もちろん行き先は自宅だ。おやすみと言ってもまだ8時、今から急いで戻れば姉さ

んが帰ってくる前に家には帰れるからな。今日の夕飯は……あ、賞味期限が近い食材が結構あったな。雑に鍋にするか……夏だけど。

（翌日）

「さて……準備はいいか？」

「いつでも行けるぞ兄さん」

「私もよ。この子の調整もバッチリ」

「問題ありません」

「頼もしいねえ……まだ子供なのに。あ、私も大丈夫さ」

号令で部隊の全員が返事をした。俺も昨日はぐっすり寝れたしな。

「よし、では作戦概要を説明する。我々モノクローム・アバターは、イギリス、中国、フランス、ドイツにある女性権利団体の支部を破壊する事を目標とする。もちろんISを使ってだ」

「今から日本を出て間に合うのか兄さん？」

「レイさん、束さん、ヒカルノさん主導で製作された音速飛行が可能となるブースターを使って、2チームに分かれて行動するから余裕で行けるそうだ。そして、いつのまにやら束さんが打ち上げていた衛星を経由して世界のどこにいても通信が行えるよう各ISの回線も調整してあるそうなのでオペレーターのレイさんの指示の元、動いてもらう。そして肝心のチームわけだが……俺とウェルキン先輩、マドカとクロエで別れる事とする。ちなみに単純に戦力バランスを均等にした結果だ。まだ戦闘に慣れていないクロエの事、頼むぞマドカ」

「任せてくれ、この私がいるんだ。大船に乗ったつもりでいろクロエ」

「はい、よろしく願いますマドカ」

仲も良好なので心配する必要もないだろう……自分で言ってると思うが、どうして

ウチの技術班は知らぬ間に高性能すぎるものを作ってるんだよ。いや、今まさに役に立ってるからいいけどさ？

「えーマドカとクロエには中国とイギリスを担当してもらう。大分距離があるがイギリス支部を破壊後に日本に戻り補給を受けてから再出撃しても良いので問題はないそうだ」

「なるほど……施設内の人間はどうする？」

「生死は問わないと聞いている。思いっきりやってくれて構わない。民間人は……出来るだけ殺さないようにな。ISが出てきた場合のみ、市街地以外での戦闘行動が許されている。まあクロエがいるから万が一の時も安全に逃げる事が出来るだろう」

「援護は任せてください。アームド・アーマーBSもありますので火力支援もできます」

ワールド・ページはチート、はつきりわかんだね。『黒鍵 バンシイ・パッケー

ジ』ってもしかして一番酷いのでは？バンシィには鍵が積まれてなかったのにコイツは黒鍵のガワなのか、面白い冗談だ。

「次に俺達のチームだが、フランスとドイツだ。隣の国だし近いからまあ楽だ。フランスから攻めるが、上手くいけばフランスから来た所属不明ISがドイツで暴れているという嫌がらせも出来るから一石二鳥だ」

「いや、しないわよ？」

「……しないのか？」

「残念そうな顔してもダメよ」

そっか……

「まさか、サラが兄さんのストッパーになるとはな」

「今までのデータを閲覧しましたが、いっくん様は多少……いえ、かなり豪快な戦闘をしています。このチーム分けは妥当かと」

おいその2人、地味に貶してくれるな。違法研究所だったし別にいいだろ。

「サラ・ウェルキン、この任務のもう一つの意味は分かっているな？」

「もちろんよ。私に対する最終試験でしょう？ 私は良い収入があつて、強い相手と戦えて、何よりセクハラして来るような上司がいなければ良いの。代表候補生は軍属でもあるし、セシリアは知らないけど私はテロリストを殺害したこともあるわ」

「なるほど、それは僥倖。ちなみに今回狙う女権団の奴らはもちろん悪どい事をしているから抹殺しても構わない。そして……いや、これは終わってからで良いか」

「あら、随分と勿体ぶるじゃない。まあなんとなく言いたいことは分かるから言わなくていいわよ。レイン先輩も体験してるんでしょ？」

「ああ。余談だが俺も経験がある……あれは辛いぞ」

「覚悟の上よ。怖くないわけじゃないけど」

「?」

マドカとクロエは分かっているようだが、俺達が襲撃する女権団に所属する女達の子供にはIS学園の生徒がいる。その子はきつと明日になれば親の死亡を伝えられ泣くのだろう。どれだけ殺される理由があらうと、その人にも家族はいるのだから。

「では行こうか。新生モノクローム・アバターの出陣だ。気張れよ、M、C、K」  
「了解!!」

「ブースターの取り付けは完了したよ。一夏君はフルアーマーパッケージのブースターに規格を合わせたから換装してくれたまえ」

レイさんからの説明を受け、俺達はハンガーに吊られたISに乗り込む。

「モノクローム・アバター、これより任務を開始する」

「みんな、頑張って」

「くーちやあああん!! 無事に帰って来てねええ!!」

見送りをしてくれるレイさんの後ろから大号泣の兎が出てきた。

「束様……マドカが付いているので大丈夫です。行ってきます」

「うん……行ってらっしゃい!!」

フルフェイスのクロエだがその声音は穏やかで、俺はは中学校に入学するとき姉さんが見送りをしてくれた事を思い出した。

ふ……母親みたく心配してたな。忘れ物はないかゝって。

「S、ユニコーン、出撃する!!」

「M、サイレント・ゼフィルス、出る!!」

「K、黒鍵、出撃します」

「C、ブラスト・ガルス、行くわよ!!」

ステルスモードを起動した俺達は、ブースターの加速を味わいながら空へと駆け出したのだった。

くクロエ、マドカ side (三人称)

「くっ……結構キツイな……」

「そうですか？特に問題はありませんが……」

猛スピードで空を駆ける2つの機影。サイレント・ゼフィルスと黒鍵だ。彼女達は現在、イギリスに向かって雲の上を飛行している。

「Sの機体と同性能にまでなっているんだろう？だったらこの加速に耐え切れるのも納得だな」

「バンシィ・パッケージのスペックデータは正直目を見張るものでした。本当にパッケージなのか疑うほどに」

「はは、違いない。それにしても、ISのエネルギーを使わない独立した回路を持つブースターを作れるとは驚いた」

「どうやら、レイ様が開発なされたEパックに束様が目をつけたらしいのです」

Eパックとはエネルギー・パックの略で、主に一夏のユニコーンの武装の一つである『ビーム・マグナム』のマガジンとして使っていたものだ。幾度の改良を経てISに直接エネルギーを渡すことが出来る。IS用の携帯式のガソリンのような物だ。

「なるほど。どうりで使い捨てていいとか言ってたわけだ。まあ……その代わりに帰り用のブースターを積むために強制的に武装を外されたわけだがな」

「Mはスターブレイカーしか使っていませんし大丈夫でしょう。BT兵器も外付けなのですから尚更です。私は『ワールド・ページ』で拡張領域がほぼ埋まっているので使い捨てできませんしマシでは？」

「そうだったのか。お前の帰り用のEパックは私が積んでるしそういう事なんだろう。つまりだ、今回はKに任せる。私は周囲の警戒をしておく」

「分かりました。そういえば、どのようにすれば良いのでしょうか？外から建物を撃ちぬけば良いのでしょうか？」

コテンと首を傾げたクロエはマドカに問う。初めての任務なので仕方がないと言わんばかりなマドカはレイから受け取っていた建物の見取り図をクロエに送った。

「いや、中にあるデータや物を完璧に破壊しないといけない。保管庫と制御室を確実に破壊した後外からKの射撃で沈める」

「市街地にあるのでしたね。では最後以外は近接装備のみで行きましょう」  
「妥当だな」

2人がどう動くか作戦会議をしている時、オペレーターのレイから通信が来た。

『やあやあ、お話中悪いね。隊長から2人に追加の命令が来てるよ』

「Sから?……内容は?」

『漏れなく全員殺せ、だつてさ』

「それだけか?ならば問題はない」

「分かりました。命令ならばそうしましょう」

涼しい顔で答える2人に、レイは少し驚きながら言った。

『なんでか聞かないのかい?』

「命令だからな」

「下に同じく、です」

『堕ちてるねえ……私としては可憐な女の子達が返り血で染まるのは好まないんだけどね』

全く思ってたさそうな声音のレイ。声だけが笑っている。

「元々ロクな生まれ方も生き方もしてない」

「ええ、今更ですよ」

『なるほど道理だ。隊長の思惑も無駄になりそうだね』

「何か仰いました？」

『いや、なにも』

レイが小さい声で戯けるが2人には聞こえなかったようだ。そして……

『さて2人とも、そろそろイギリスだよ。準備はいいかい？』

「ああ」

「問題ありません」

『じゃあMはブースターを切り離して。KはそのブースターをVNのクロード破壊』

「了解」

サイレント・ゼフィルスに取り付けられたブースターがMによって切り離され、落下を始める前にクロエが左腕のアームド・アーマーVNのクローを開き掴んだ。

「破壊します」

クロエの一言でクローが超振動を始め空のブースターが木っ端微塵に破壊された。

『オッケー、それは捨てていいよ。じゃあISに地図と順路を表示するね』

「道案内は任せたぞ、レイナビ」

『まさかのナビ扱い!?!いや、大体あってるけどさ……ちなみに隊長達はもうフランスでやり始めたよ。今はISと戦闘中』

「ISを保有していたのですか……私達も油断は出来ませんねM」

「そうだな。まあたかが女権団のIS程度では敵ではないが……」

2人はレイの案内通りにISを動かし、近くの森で着地。そのままISを解除した。

「結構胃にくる……当分は国外任務はゴメンだ」

「ひ弱ですね」

「強化人間じゃければ今頃気絶だからな？私はまだマシな方だ。Cは……大丈夫だろうな。亡国お手製のISなんだから」

マドカのサイレント・ゼフィルスだけは強奪してきたままのイギリス製。しかも実験機の2号機とあって機体スペックはブルー・ティアーズにこそ勝るがあまり高くはない。

「お待ちしておりました。モノクローム・アバターの方ですね」

「むっ……貴様は？」

「オルコット家メイド長のチェルシー・ブランケットと申します。縁あって亡国の密偵をしております」

「ああ、貴様がSの言っていた……1号機パイロットのメイドか。で、何の用だ。我々はなにも聞いていないぞ？」

2人の元へチェルシーが現れた。マドカはそれに疑問に思い問いかける。クロエは興味なさそうに風で揺れる木の音を楽しんでいる。目が見えないからこそその楽しみ方だ。

「おや、それはそれは……私はただ服を渡せと言われているだけなので。これをどうぞ」

「服……？そういうことか。感謝する」

チェルシーが紙袋をマドカに渡した。中身は2人分の衣服で、どちらもマドカとクロエの服のサイズ通りだ。今の2人はISスーツという格好なので街を出歩くには目立つ。その配慮らしい。

「地味すぎず目立たない。なるほどいい選び方だ」

「ありがとうございます。役目は果たしましたので私はこれで。御武運を」

簡単に挨拶をしてチェルシーが立ち去る。どこまでも『あくまで命令されたので来ました』という雰囲気を漂わせたままだった。

「……まあいい。K、これに着替えろ。すぐに行くぞ」

「はい」

マドカは袋からパーカーにズボン、クロエにワンピースを取り出してすぐに着替え始めた。流石に今いる森の中まで入ってくるような物好きはいないので気にせず着替えたようだ。

「K、お前英語は話せるか？」

「ドイツ語と日本語しか無理です。英語は勉強中なので……」

「分かった。なら道中は、『イギリス観光に来た盲目のドイツ人の少女と日本人の友人』という設定で行く。英語に関しては私に任せろ」

「ご迷惑をおかけしますM」

「私は元々、初陣のお前のサポート役だから気にするな」

各国の亡国企業の支部を転々としていたマドカは、色んな国の言語を使える。一夏もマドカに外国語を習っていたことが幸いして色んな場面で役に立っている。

待機形態の杖を突きながら歩くクロエを支えるマドカ。2人の少女はイギリス観光と銘打って、女性権利団体イギリス支部への道を歩いて行くだった。

「マドカ、あのお菓子は何でしょうか？」

「ん？……ああ、スコーンだな。紅茶によく合うらしい。日本でも売っているか

ら今度買ってみると良い」

「はい。そうします……この音は……マドカ、ちょっとあっちに行きましょう」

「あ、おい待てクロエ……って、仕方がない。Mよりオペレーターへ、少し寄り道する」

『了解。ちゃんと任務はこなしなよ?』

「分かっている」

「マドカ、早く来てください」

「……楽しそうだな。これも兄さんの影響か」

## 祝福の花火

### 60話

（一夏、サラ（一夏視点））

「C、ブースターでかかるGに問題はなかったか？」

「飛行中に聞いて欲しかったわよ隊長。問題ないわ。速度を聞いた時は死を覚悟したけど、亡国製のISって凄いわね。体に負荷が掛からなかったもの」

「それは僥倖。さて、ここだ」

フランスのとある市街地、女性権利団体フランス支部の目の前に俺達はやってきた。今はISを解除してフランスに送り込んでもあるスパイから俺達用の服を受け取り、ISスーツの上から着ている。俺は世界でも有名人で、ウェルキン先輩も元イギリス代表候補生とあってISに関わる人が見れば身バレしてしまうので2人とも

髪型を変えたりサングラスを掛けたりして変装している。

「で、どうやって中に入るの？」

先輩が聞いてくる。今回襲撃する女権団の施設には、色んな企業やフランス政府との癒着やら何やらの証拠だったり物品がこれでもかとおある。情報や証拠に関してはウチの電子工作班がもう抜き取ったので破壊してもいい。物品はどうせ証拠になるか分からないので一緒に壊す予定だ。1番の目標は2度とフランスで活動が出来ないようにする事。

要は、この建物の全てを塵に変え、ここのトップを殺す。もちろんその時に生き残りの雌どもに俺達の力を示すことも忘れてはいけない。つまり普通に入って普通に壊して普通に殺して普通に逃げればいい。

「正面突破に決まっているだろう？ 幸い周りには誰も居ないからここでISを展開だ」

「了解よ」

そしてISを展開する。俺はユニコーン、先輩はブラスト・ガルスだ。

「身バレ防止のため一人称を変える。私がビームサーベルで入り口を開け、受付をしているであろう奴を殺す。Cはその騒ぎで外に逃げようとする者を殺せ。ハイパー・バズーカを2丁貸しておこう。中までは入ってこなくていい。ISが来たら報告しろ」

「ありがとう隊長。要は待機ね。分かったわ」

ハイパー・バズーカを二丁展開して手渡す。先輩はそれを確認し自分の拡張領域に入れた。そして俺は背中のバックパックに収納されたビームサーベルを取り出してスイッチを押し刃を出す。先輩が飛行を始めたのを見て俺は構えた。

「さてと……恐怖しろ、絶望しろ、貴様らの目の前にいるのは多少強い亡霊だ」

壁を切り裂き、中に入る。中では無駄にプライドの高そうな、ブランド物のバッグやらを身につけた女達が俺の姿に驚きながら見ている。

「あ、IS!?なんでこんなところにいるのよ!!」

『私は亡国企業。女尊男卑を助長する貴様らのようなクズゴミを処理しに来た』

ボイスチェンジャーで声を変えて宣言する。俺の言葉で中にいた女達が叫びながら一斉に逃げ出した。

あーあーあーあー……権力を傘に女は全てが許されると思っているゴミどもめ。ISが無ければ何もできないクズの分際で……

俺は左腕につけている盾のビームガトリングガンを構える。ユニコーンには手頃な火力の武装がないので今回は特別に威力を下げる調整をしている。

(ゴメンなユニコーン……本当はお前に人殺しをさせたくは無いんだが……今更だ

よな。恨んでくれて構わない)

『ううん……私は……マスターの力になりたい。だから……大丈夫』

そうか。いつもありがとうユニコーン。

『発射』

「「「「ぎゃあああああああ！！！！！」」」」

肉が千切れる音や汚い叫び声が聞こえる。それに続くように一階のフロアには大量の血が飛び散り白い床を赤く染めていく。

俺は薙ぎ払うように左腕を水平に動かしある物全てを破壊していく。植えられた木、階段、床、受付、PC、ソファ、etc……女権団の施設を念入りに、これでもかと言うほど破壊する。やがて弾が切れたのかビームが出なくなった盾を拡張領域に戻し、今度は両腕に新たな盾を装備した。フルアーマーパッケージにある盾を持ってきた。NT―Dを使えばファンネルとしても使える代物だ。

グチュグチュと肉塊となった女どもの死体を踏んで進む。原型を留めていない階段を飛んで登り次の階へ。

「何よあんた!! どうしてISが私達を狙うの!! 私達のおかげであんた達IS乗りは……けぷ……」

ヒステリックに叫ぶ女をビームサーベルで両断し進む。どうやら現状は建物全体に知れ渡っているようで、色んなところから焦った声や悲鳴が聞こえる。ISの機能でサーモグラフィを使うと、どうやらこの階にデータの保存場所の一つがあるらしい。

『隊長。周りの人達が爆音に驚いて野次馬してるわ。どうする?』

『絶対に傷つけないように威嚇射撃、ISがいる事をアピールすれば良い。確か、標準武装にアサルトライフルを入れていたはずだ』

『分かったわ。ボイスチェンジャーで避難勧告もしく?』

『頼んだ』

外は先輩が上手くしてくれているらしい。俺も安心して虐殺出来る。

少し歩き、嚴重に設置された鉄扉の前に着いた。天井にはちょっとした機関銃が設置されていたが難なく破壊。対IS兵装では無かったので全くダメージが無かった。

「ん……意外と硬いな。IS用の合成金属か」

ISの装甲を使うくらい大事なものが入っている。おそらくそういう事だろう。とりあえずビームサーベルで壁を切り裂いて中に入ると出てくるわ出てくるわ、大量の書類が。あーあー……いや、全部燃やし尽くすんだけどさ。

「うーん……あ、ビームサーベルの出力を上げれば良いのか」

書類を焼き払うのに手頃な装備がないから仕方ないね。両手にビームサーベルを持って振り回すと次々に書類が消えていく。あらかた片付いたな。次だ。

『ねえ隊長、どれくらい逃げさせる？』

『いや、もう良いだろう。女権団上層部の人間は逃げていないだろうか？』

『私が確認した感じ1人も居ないね。しっかりやってくれたまえ』

割り込みでレイさんが通信してきた。だったらもういいか。さっさと上まで行こう。俺はまた両腕にシールドを呼び出し、水平に向ける。そのまま少し浮いた後俺は回転を始めた。

『カーニバルだ。楽しく踊ってくれ』

そのまま上昇しながらビームガトリングガンを発射。360度に回転しながら発射されるビームの嵐は、壁を貫通しながら人間に風穴を空けていく。一階ずつ上昇

していくたびにたくさんの悲鳴が聞こえやがて無くなる。そして気づけば血の匂いが建物中に充満していた。そんなところへ無粋な邪魔が入る。

「これ以上やらせないッ!!」

『むっ……?』

突如瓦礫の中から飛び込んできた影、天井の無くなり丸見えになった太陽の光で反射するそれは……銃口だった。そのまま俺に向かって発射された銃弾は全て俺の胴体を捉えていた。

「死ね死ね死ね死ね死ね死ねええええええええ!!」

今まで突っかってきたどの女よりもヒステリックな叫び方をしながら銃を乱射するISは、次に左手に剣を携えながら突っ込んできた。

『まさか本当にISがいるとは……そして耳障りだ。吹っ飛べ』

生半可な攻撃じゃユニコーンにダメージは与えられない。全身装甲の利点として、人体全てを装甲が覆っているのでこの装甲を破らなければシールドエネルギーまでたどり着けないという事実がある。代わりに下手に装甲が歪めば全身の駆動に支障が出るけどな。

真っ直ぐ突っ込んだできたISが俺のすぐ近くまで来た瞬間に俺は左腕のシールドで思いつき殴り飛ばした。ISは別方向に吹っ飛び建物の壁を碎きながら墜落していく。

『隊長、すごい音がしたけど大丈夫？』

『ISが出た。標準的なラファール・リヴァイヴだが……乗っている人物が問題だ。しっかり確認したわけではないが恐らく支部長が搭乗している』

『ホントにISがいたの!? たかが民間組織になんてISが……誰かが横流ししている？』

『分からない。取り敢えず、支部長は確実に殺さなければならぬ。今外まで吹っ飛ばしたから任せていいか？』

『本当？一回くらいは実戦で戦いたかったのよね。援護はいらないわッ!!』  
『分かった。私は引き続き建物の処理を行う』

先輩の戦闘見たかったんだけどなあ……後でログでも見るか。  
はい、じゃあ視点変わります。

『マスター……メタい』

俺はお前からメタいって言葉を聞きたくはなかったよ。

くサラ視点く

「あれね」

建物の一角が崩れている。隊長、結構派手にぶっ放したわね。

「さて、私もボイスチェンジャーを使おうかしら。……………あー。あら、結構変わるじゃない」

準備もできたことだし、あのISが復帰してくる前に軽く私のISの紹介でもしておこうかしら。

私のIS『ブラスト・ガルス』は開発者のレイさん曰く、

『サラ君の戦闘データを投影した結果こうなったのであり決してロマンに走ったわけじゃない。逆にどういう戦闘スタイルを取ればこの機体のコンセプトとマッチ出来るんだろう……』

ていう評価を頂いたわ。全く……失礼しちゃうわね。近寄って殴って離脱して撃ってまた近寄っての繰り返しなだけなのに。ああごめんなさい、話を戻すわ。機体コンセプトはシンプルに超近接格闘型。カラーリングは全体的にネイビーよ。

両腕に装備されるL字のシールドの先にはトゲがついていてスパイクシールドとして殴りつけることができるわ。元々が盾だから耐久性も抜群で安心安全よ。他には鞭のようにしなるバインダーに取り付けられた粘着式地雷の集合体、チェーシマイン。粘着式だから相手にくっつけることでゼロ距離での爆破を可能とするの。隊長のユニコーンに巻きつけた瞬間は本当にスカッとしたわね。

後は脇の近くに取り付けられている電磁式アンカー。射出することで相手のISを磁力で固定し、巻き取って強制的に敵ISとの距離を詰めることが出来る。相手を引き寄せるか、自分から近づくかは状況次第ね。

その他、アサルトライフルやバズーカとかの通常兵装も少し積んでるわ。今回はブースターを拡張領域に入れるために殆ど外したけど、相手との距離を詰めるのに苦勞するようなら普通に射撃にチェンジするわね。でもコアとの相性が悪いのか銃

器はロクなものが入らないわ。

浮遊ユニットが無いからスラストを背部バックパックや脚部ブースターに依存してるのがネックだけど私にはちょうどいい。元々ISの浮遊ユニットは360度見渡すことができるハイパーセンサー使用時には視界の邪魔だったし。

まあ取り敢えずこんな所かしら。あ、見た目はレイさん曰く色変えたシュツルム・ガルスだそうよ。元ネタがあるのにも驚きだけど、再現できるレイさんが一番おかしいと思うの。ガンダムって言う作品らしいけど、今度見てみようかしら……？

「クソッ!!私の城が……」

瓦礫が崩れ、中から隊長が吹っ飛ばしたであろうラファール・リヴァイヴが出てきた。装備は標準的なものね。

『ここから先は私が相手になるわ』

「ッ……2機目のIS!!なんでよ、なんでISが私達を狙ってくるの!!」

『あら、理由は貴女が一番分かっているはずよ?』

「……その何が悪いっていうのよ!!篠ノ之博士は、今まで虐げられてきた女性達に復讐のチャンスを与えた!!女性をアクセサリーとしか思っていないような男共なんて要らないわ!!」

暴論ね。こういう言い方はアレだけど、男性がいるおかげで私達は子供を孕めし人類という種が続いていくことができる。男性の消えた人類なんて150年もあるれば確実に滅ぶのに。

『何を言っても無駄なようね。まあ……どの道貴女が生き残る未来はないのだし別にどうでも良いけれど……さあ、私と戦いましょうか!!』

「ッ……きゃあ!」

足下の瓦礫を投げただけなのに大袈裟ね。さてと……やっちゃいましょうか。隊

長に私の覚悟を見てもらわなくっちゃ。

『行くわよ!!』

スラスターを吹かして加速した私はラファールの懐に入り、両腕に装備したスパイクシールドで殴る。

「ちょっと……なんでちゃんと飛ばないの!? 動きなさいよ!! このっ……!!」

吹っ飛んだ先で体勢を立て直そうとするラファールだけど、何やら挙動がおかしいわね。なんというか、初心者って感じが……

『ねえ……貴女、ISの搭乗時間は?』

「はあ?……5時間くらいよ。それがなんなのよテロリスト!!」

『……………』

本当にふざけてるのかしらコイツ女性をアクセサリーとしか思っていないような男？

まるっきり逆ね。ISをアクセサリーとしか思っていない女は訓練もすることなく、ただ持ってるから私は偉いだなんて……同じ女性として恥ずかしい。

『気が変わったわ』

「見逃してくれるのかしら？ 当たり前前よね。私達のおかげで今は夜1人で出歩いても男なんかには襲われることもない」『黙れ』……ッ!？」

アイツの言葉を遮って私は近づいた。

『今から貴女を出来るだけ惨たらしく、屈辱的に殺すわ。こんなに殺意が湧いたのは初めてよ。苦しまないように一瞬で殺すつもりだったけど……はあ、なんでこんな世の中になっちゃったのかしら』

私は二つのチェーンマインを取り出して両手に持った。そして歩いてさらにアイツに近寄る。まともに飛ぶこともできないのか、地面を擦って下がろうとするラファールに向けて電磁吸着式アンカーを打ち込む。

『逃がさない』

「ひい!?……やめて!! な、なんでもするから!! 欲しいのは何? お金? 男? それとも権力? 知り合いでもなんでも使って用意してあげるからあ!!」

脚部装甲にくっついたアンカーを巻き、くっついたラファールをアンカーごと持ってくる。

「いやだいやだいやだ!! まだ死にたくない!! 私は……こんなところでえ!!」

最後の抵抗と言わんばかりか、引き寄せられてる時に手に持ってる銃で私に向

かって発射してくるラファール。ISの補助で真っ直ぐ歩いている私にほとんどの弾が当たるけど無傷よ。亡国製IS ってほんとに凄いね。

『さよならまであと10秒くらいかしら？』

引き寄せたラファールにチェーンマイン二つを直接巻きつける。粘着式だから解けることなく装甲に張り付いた地雷達は、ピ…ピ…と起動音を発し始めた。

「あああああああああああ！……！」

ついに発狂、なまじ音がするし、視界のほとんどで地雷が確認出来るからもう助からないことは分かっているよね。そうよ、そんな生易しい物じゃないもの、コレ。

『爆発まで3……2……1……！』

「ああ……………しに……………たく……………n」

『ゼロ』

背を向けた直後、今までに類を見ないような爆発が起きた。爆心地であるラファールリヴァイヴの姿が見えないくらい凄い煙で目視では確認できないけれど、ハイパー・センサーを使うと……

『生命反応無し。ミッシェンクリア……………さようなら、サラ・ウェルキン。表で生きた私。もう後戻りできないわ』

やがて煙が晴れると、肉片すら残っていない爆心地でボロボロになって焦げたらファールの装甲と光るISコアがあった。着地してコアを回収すると、すぐ近くでまたも爆音が聞こえてきたわ。

ああ……………終わったのね。

『おめでとうC。仮入社は終わりだ。さようならサラ・ウェルキンと言ったな？では私からこの言葉を送ろう。ようこそ、我らが亡国機業へ。モノクローム・アバター全員が、改めてC……君を歓迎しよう』

右手にビーム・マグナムを持ったユニコーンが静かに降りてきた。ふと視線を変えると、上空から貫かれ完全に破壊された女権団フランス支部があった。いえ、元ね。

『ありがとう隊長。コアも回収したから次に向かいましょう』

『ふっ……気配が変わった。迷いは無くなったな？』

『ええ、お陰様でね』

『それは僥倖』

ボイスチェンジャーを使ったままの会話はなんか変な感じがするわね。和やかな雰囲気なのが余計に。

『ではドイツに行こうか』

『了解』

私達はスラスターを点火して、ドイツに向けて飛行を始めた。

……………ごめんね、セシリア。貴女の憧れた先輩はもう死んでしまったわ。

---

パキン……

「あっ……先輩から頂いたティーカップが……先輩、どうして代表候補生をお辞めになったのでしょうか？ 貴女ほどのIS操縦者が……どうして」

## 親 娘 家 族

### 61話

くクロエ、マドカ（クロエ視点）

「ちい!!なんでISがこんなにいる!?!面倒臭い!!」

「M、無駄口を叩く暇があるなら早く落としてください」

「分かっている!!お前は余裕そうで良いな!?!」

む、失礼ですねマドカ。私だって結構辛いのですよ?

……おっと、失礼しました。クロエ・クロニクルと申します。現在、女性権利団体イギリス支部の破壊任務の途中でして。15分ほど前に襲撃を始めたのですが、なんとISが出現したのです。それも5機も。ただの民間組織であるはずの彼女達が5機もISを持つことは確実にありえないはずなのですが……何にせよ、突破しな

ければ任務は果たせません。そこで私達は戦闘を行っています。Mは近接装備を積んでいないので遠距離支援を主にしてもらい、私が前線で戦っています。

「捕えました」

不用意に突っ込んできた一機をアームドアーマーVNのクロード掴みました。こ  
うも抵抗されると面倒ですね……潰しましょう。

「いやあああああ！……！」

クロード元来の能力を使います。超振動させることで標的をシェイクさせることが  
出来ます。振動に影響でどんどん減っていくシールドエネルギー。この間も2機  
ほどのISが私に向かって銃撃してきていますが、ここで私はワールド・ページを  
発動させることにより掴んでいるISごと姿を消しました。こうなるとMにも見え  
ないので誤射が怖いのです。

回避している間にいつのまにか掴んでいたISの機能が停止していたようです。コアだけ抜き取って人と装甲は捨てましょうか。束様にも変な物を拾っちゃいけませんと言われていますから。

「えっ……ッ!？」

「ひっ!？」

おや、何やらドチャッと変な音がしました。敵ISのパイロットの方々も恐怖の表情を浮かべています。いっくん様には無理をするなと言われましたが、元々なんとも思いませんので悪しからず。あの方の前ではつい意地を張ってしまいます。何故でしょうか？

「戦場で止まっただけじゃありませんよ？」

「ッ!?!?!?!?!」

右腕のアームドアーマーBSを拡張領域へと戻し、二つ目のVNを代わりに装着した私はお二人の後ろでワールドパージを解除。姿を現すと同時にお二人をVNで掴みました。頭部を掴んでいます、SEに阻まれて握り潰せません。このままでは両腕が使えませんし……ああ、そうですね。

『M、今大丈夫ですか？』

『ああ、思っていたより弱くてな。そろそろ片付きそうだ』

『分かりました。終わったらまた言ってください』

どうやらまだのようです。仕方ありません……

「死にたくない……死にたくない!!」

「だったら早く撃ちなさいよ!!」

……うるさいですね。先ほどからゼロ距離でアサルトライフルを連射してきてい

るお二人ですが、全身装甲となった黒鍵には効きません。いくら撃ったところで無駄です。

そのままお二人を拘束したまま射撃を受け続けること20秒ほど経つと、Mからようやく連絡が来ました。

『待たせたなK。意外としぶとくてな……今から狙い撃つ』

どうやらMの方は終わったようです。私は両腕を広げました。

「な、何する気!？」

「クソ……早く離しなS……」

「……は？」

私の右腕で更にもがいていたラファール・リヴァイヴの方がISごと閃光の中へと消えていきました。リミッターを外したMのスターブレイカーによる長距離射

撃です。少なくなっていたシールドエネルギーでは攻撃に耐えきれなかったようですね。

「ああ……なんで……」

おや、汚いですね。こんな空中で失禁されては下の方々に迷惑が……誰もいませんでしたね。

「申し訳ありません。ISに乗っている以上こちらとしても逃すことはできないです……それでは」

「いやだ!!なんで私が……なんで私がああああああ!!……!!」

改めて両腕のVNでISを握りグッと力を込め装甲の歪む音と悲鳴が聞こえなくなつた頃、最後の1人の処理も完了しました。とりあえず落ちているであろうISコアを全て回収しましょう。話はそれからです。

「上出来だK……うっ……予想通りだが、エグい光景だな」

「そうでしょうか？」

「あー……いや、お前はそのままでもいいか」

「どう言う意味です？」

少なくとも褒められていないということはわかりました。最近、Mがズバズバと言ってきた感じがします。いえ、変に遠慮されても困るのでいいですけどね。

「とりあえず建築物の破壊だ。一思いにな？」

「分かりました」

Mの指示でVNを戻しもう一度BSに換装した私は女権団イギリス支部の真上からBSを放ちます。現行ISの火力を優に超えた必殺の一撃が建物を消滅させました。

「えっと……ぶい？」

「いや、ピースしながらあの天災っぽく言われてもな……第一、VNのクロードピースを作っても恐ろしいだけだぞ？」

むう……昔の束様を真似てみたのですが、Mには不評でしたか。帰還したらいくん様にもやってみましょう。どんな反応をするのか楽しみです。

「ISコアの回収は終了したし、一旦日本に戻ろう。K、ブースターを渡す」  
「分かりました」

Mから受け取ったブースターを背部に接続。ほんの少しだけ吹かせ確認を完了した私とMは瓦礫の山となったこの地を振り返る事なく、イギリスを後にしました。

「クーちゃんお帰り!!どこも怪我してない!？」

「た、束様……大丈夫です……大丈夫ですから……」

一旦帰還した私とマドカはISを整備班に私補給待ちです。なのですが……ISを渡した瞬間、束様が背後から現れて抱きついてきました。柔らかな感触は安心感を覚えますが多少苦しいです。

「ごめんね……本当にごめんね!!」

「……なにがですか？」

急に束様が謝ってきました。どうしてでしょう？何か不祥事を起こして後処理を私に頼むのはいつもの事ですが、普段はここまで涙ぐみながら謝ってきたりはしません。

「私が……私がクーちゃんにちゃんと教育しなかったら……」

「ごめんねええええええええええ！！！！！」

何のことか分からない私がもう一度聞くと、さらに力を強めて大号泣しました。そして、このカオスな現場に救世主が来てくれました。

「教育不足？」

そう、レイ様です。作業用のゴーグルを外しながら私の元へとやってきました。束様はまだ私に抱きついています。IS スーツは元々露出が多いので束様の長い髪が素肌に当たって少しくすぐったいです。

「うん一夏君に聞けば、博士は元々他人には興味がなかったそうじゃないか。でも今は違う。博士は博士なりに常識を学びすっかりした大人に近づきつつある。そんな時、気づいてしまったんだよ」

「束様が努力していることは知っていましたが……気づいたこととは何でしょう？」

「

「クロエ君は遺伝子強化試験体……持っている知識や常識には偏りがあるし、何よりは戦闘用として作られた。そんな君が、殺人の重さを知っているわけがないだろう？ そんな事では効率よく敵を排除できないからね」

「…なるほど？」

「あんまり分かっていないみたいだね。まあこれから学んでいけばいいさ。今でこそ『天災』なんて呼ばれてるけど、博士だって人の子さ。まだ幼く、自我が確立していなかった頃に親御さんから学んだ事……人殺しとかの常識は知っている。だから、常識人になりつつある博士は、娘のように思っている君にそう言ったことを教えなかった事を後悔しているんだよ。でも、君はなんてことはないように、機械的に目標を潰していった。博士には耐えられなかったんだろうね」

「……なるほど、そういうことですか」

つまり束様は私の事を心配してくださっている、という事ですね。

「まあ、中国への出撃までまだ30分はあるんだ。しっかり休憩しておくといいさ。あ、黒鍵を展開してもらえる？ バンシィパッケージの調整が終わったからね」

「分かりました」

一旦束様に離れてもらい、調整されたパッケージをインストールして装着……はい、大丈夫そうですね。レイ様にお礼を言おうとしましたが、いつのまにか姿が消えています。そういえば、レイ様はいつくん様とサラのオペレーターも兼任していましたね。過労で倒れなければいいのですが……

「束様」

「ひっぐ……どうしたのくーちゃん？」

どうやらまだ泣いていたようです。珍しい光景にまだ見ていたい気持ちを抑えながら、私は束様に言葉を続けます。

「敵を排除することが、私の存在意義です。そうあれ、と作られたのですから、それが果たせて満足しています」

「ッ……でも……」

「ですが、束様が望むなら……無闇な排除はしません。あくまで任務ですので、必要最低限に留めます。それでも嫌だというのなら……」

「い、言うのなら……？」

「いっくん様に物理的説得をお願いします♪」

「ひいひい！？！？　くくく、くーちゃん!? そんな……そんな恐ろしいことを言うようになるなんて……ああ、誰だよこんな風に育てたの!!……私だあああああ  
ああ!!!!!!」

ガツンガツンと頭を床にぶつけながら絶叫している束様。見ていて面白いですが、いっくん様はどれだけ恐れられてるのでしょうか……

「束様」

「うう……どうしたの？」

「心配してくれてありがとうございます。私は束様に想って貰えるだけで十分幸せ者です。あの時、私を連れ出してくれたから……今のクロエ・クロニクルがあるんですよ？」

「くーちゃん……うん。こちらこそ、何も言わずに私に……束さんについて来てくれてありがとうございます」

私から抱擁をすると、束様はこれ以上ないくらいの笑顔で私を抱きしめて返してくれました。

---

「……………私が最初からお兄ちゃんと一緒に織斑千冬の元にいたら、また何か違ったのかな？ 私は最近、クロエが羨ましい」

## 予想内の予想外

62話

（一夏、サラ（一夏視点））

やあ、フランスとドイツの国境付近で立ち往生している俺だ。何故かって？ ハハ……俺も予想外だったんだけどね……

「そのこの所属不明IS 2機に警告する。武装を捨てて投降しなさい!!」

『それは出来ない相談だな。フランス代表候補生……シャルロット・デュノアと  
いったかな？』

『隊長……これどうするのよ……？』

知らん。俺だって早く逃げたいんだ。

俺とCの目の前にいるのはフランス軍所属だと思われるラファール・リヴァイヴ2機とオレンジに塗装されたラファール・リヴァイヴが一機……シャルロットだ。いつのまに帰国していたのか、思い当たることといえば……父親との和解が1回目より早かったせいで夏休みにデュノア社で話をしたのか……

『…………やるしかないな』

『了解』

俺はビーム・マグナムとシールドを、Cは両手にスパイクシールドを持ち構える。シャルロット達もアサルトライフルを取り出して待ち構えているようだ。

『次はこちらが警告させてもらおう。このライフルはラファールの装甲ならば容易く貫き絶対防御ごとISを消滅させる。死ぬ覚悟は出来ているか？』

いやだよなんでシャルロットと戦うんだよはあマジで帰りたい……どうせC1人

でも勝てるだろうし俺だけブースターつけて帰って良いか？

『……Cさん、泣いちゃうよ？頑張ってマスター』

……だよなあ。ありがとうユニコーン。

「絶対防御が効かないわけないわ。そんな脅しでここを通れるとは思わないことね  
!!」

随伴のラファールが何か吠えている。Cの方を向くと、仕方ないといったように首を振っている。ガルスシリーズの顔面で首振ると滑稽に見えるな……なんの恨みもないけど君に犠牲になってもらうかー

『では味わっていただこう』

「ッ!?危ないッ!!」

宣言してすぐにビームマグナムを先ほど吠えたラファールに向けて撃つ。圧倒的な熱量がラファールの装甲を飲み込もうとしたところで……シャルロットが投げたシールドが行手を阻み、しかしそれすら消滅させてラファールに命中した。

「え……うそ……」

『む……防がれた分足りなかったか……』

大気圏内ということもなつて威力減衰するのは分かっていたが、シールドに阻まれたことによって多少威力が落ちたのか、ラファールの装甲を全壊させるだけに留まった。しかしそれでも威力は充分。絶対防御によりエネルギーの尽きたラファールは待機形態へと戻り操縦者は真っ直ぐ落下していった。あーあ、この高さじゃ死ぬな。

「そうはさせんツ!!」

『……………マジかよ』

急に落下していた女がその場に停止した。この方を向けば黒いISがこちらに向かつて手を伸ばしているではないか……ラウラの『シュヴァルツェア・レーゲン』だ。シャルロットのそばにいたもう一機が急いで女を回収し下がった。おいおい……ラウラとシャルロットの両方相手にするのかよ……やりにくいったらありやしないな。

「ありがとうラウラ」

「ああ、間に合ってよかった」

『ドイツの遺伝子強化試験体……ラウラ・ボーデヴィツヒか。C、アイツが連れてくるであろう量産機達の相手は任せた。私は候補生2人をやる』

『仕方ないわね……私だってあの2人とやりあってみたいけど今日は譲るわ。手を抜いて負傷したら私が殴り飛ばすわよ』

『ははっ、こいつぁ手厳しい』

さて……シャルロットとラウラから帰国したという連絡は受けてない。諜報部からもそう言った報告は上がってないし。ったく、雑魚しかいない簡単な任務だと思っただのにさあ……

『さて、会話を楽しんでいるところ悪いが私たちにも任務がある。退いてもらおうか』

「ほう……1対2か、舐められたものだな」

ツツアイク  
『枝は完成していないだろう？ならば増援は気にすることはない』

「ツ!! 貴様、それをどこで……まあいい、捕縛してから聞くだけだ!!」

『無駄だ』

ラウラがAICで動きを止めてくる。俺は一切抵抗することなく効果を受け、機体性能で無理矢理引きちぎる。

「なに!？」

『終わりか？ならばこちらから行こう』

「ラウラ下がって!!あのライフルはまずい!!」

「わかった!!」

俺がビームマグナムを構えると2人はすぐに散開して俺から距離を取った。なるほど、狙いを集中させないつもりか。

『逃さん』

俺は背部スラスターを吹かしシャルロットへ向けて飛行した。カスタムされているとは言っても所詮ラファール。ユニコーンの加速とスピード、さらには操縦者の負荷（俺には丁度いい）を完全に無視した高速での旋回も合わさってすぐに追いつく。俺はランドセルの収納部を展開しビームサーベルを取り出しシャルロットに向けて振り下ろす。

「くっ……!! 速いッ!？」

間一髪で回避したシャルロットだが、ビームサーベルの熱で浮遊ユニットが少し溶けている。流石に過剰な威力だな。

『どうした代表候補生、その程度か!!』

俺が斬りつける、シャルロットが躲すと言った攻防が何手か続くと、彼女は急上昇。俺が見上げた瞬間に正面から衝撃を受けた。

『……レールガンか』

「先ずは一撃……私達のコンビネーションを舐めてもらっては困る!!」

どうやら俺はシャルロットとラウラに直線になるように誘導されたい。やっぱり良いコンビだよなこの2人。俺がそう感動していると上空からアサルトライフ

ルの銃弾が降り注いだ。

「よそ見してる暇はあるのかい？」

「このまま捕らえさせてもらおうぞ!!」

両手に『ガラム』を持ったシャルロットが俺に牽制し、その隙にラウラがワイヤーブレードを展開して肉薄してきた。

『今日は武装をあまり積んでいないんだ……Eパックの残量も少ないのだから勘弁して欲しいな』

「「なっ!？」」

ワイヤーブレードが当たる瞬間に左腕の盾で弾きワイヤー部分をビームサーベルで切断。驚きの表情を浮かべているラウラを掴みシャルロットに向かって投げる。

「くっ、この程度……っ!?」

「ラウラッ!!」

やられたらやり返す……倍返しだ。ラウラがPICで体勢を立て直したときにはもう遅い。俺達は直線状にいたのでビームマグナムに持ち替え出力を落として発砲した。

「はあああああ!!--!--!」

ラウラが両腕をこちらに向けている。どうやらAICで攻撃を受け止めようとしているらしい。隙だらけなので再度ビームサーベルに持ち替えてラウラを切り捨て……ずにシャルロットへと向かった。

「僕の方に来るの!？」

『貴様のほうが面倒だからな』

ラピッドスイッチでブレードに持ち替えたシャルロットは片手でグレネードを放りながら突撃してきた。へえ、切り結ぶつもりか。通りざまにグレネードを払えば、爆薬ではなく煙幕が入っていたのか当たりが白く染まる。ジャマー付きのよう  
でISの機能でも認識できない。

「はあ!!」

『甘い』

「うぐうっ!？」

俺の背後から上段で振り下ろしてきたブレードをビームサーベルで受け止め腹を思い切り蹴り付けた。しっかり膝を折って蹴ったのでそこそ吹っ飛んだシャルロットは回転しながらP I Cで立て直した。だけど……

「強い……ッ!?」

『チェックメイトだ』

「うわあああああ!……!」

シールドをシャルロットに向けてビームガトリングガンを発射。シャルロットは抵抗する暇もなく弾丸の雨に晒されて撃墜していった。瞬時加速を使い、落ちていくシャルロットを受け止めればどうやら気絶しているらしい、どうしたものか。

「シャルロットを返せテロリスト!!」

『ほう……耐えたか』

声の主、ラウラに振り替えると、所々装甲が融解しながらもギリギリ原型を留めているシュヴァルツェア・レーゲンがいる。ラウラ自身の表情も苦虫を噛み潰したようで相当無理をしたのだと見える。それにしてもAICだけでビームマグナムを止められるとは思っていなかった。出力を下げたとはいえ、第3世代機を舐めて

いたらしい。

『無論返すとも。殺すつもりは毛頭無い』

「なに……?」

なんで俺がシャルロットを殺さないといけないんだ。全く……はあ、今からラウを倒してからドイツ行くんだもんなあ……めんどくせえ。

『えー、こちらレイです。ボスからの勅令を伝えるよ』

『ッ……』

このタイミングでレイさんからの通信。しかもボスから直々に……? 一体なんだ。

『亡国の存在は十分に実感出来たからもう撤退して良いってさ。女権団だけ狙われ

ているって思わせれば、どの国の女権団も民衆からの弾圧で当分なにも出来ないだろうってね。それと優先度が変わった。一足先に帰還したKちゃんが持ち帰ったIS コア数個、どうやら正式に登録されてない未確認のコアだったらしくてね。S君も確保したようだしそれを持ち帰ることを優先するようにとのことだよ』

『……了解した。敵ISを振り切った後、ブースターを接続して帰還する。C、通信を聞いたな？そちらはどうだ』

『とつくに終わってるわよ。コイツら……弱すぎて詰まらないわ』

『では帰るとしよう。私もすぐ終わらせる』

軽く通信を終えてラウラに向き直る。俺はシャルロットを抱えているから責めることができず、何故か急に黙ったからだろうか怪訝な顔でこちらを見ている。

『ああすまない。どうやら我々の任務は終了したらしくてな。シャルロット・デュノアを返す代わりに我々を見逃す……と言うのはどうだ？』

「……………私達に好条件すぎる気がするが？」

『それが理解出来ているなら十分だ。さあ、どうする？』

俺は交換条件として提示するが相手に有利すぎるのだ。少し悩んだ後苦虫を噛み潰したような表情でラウラは言った。

「……………分かった」

『賢明な判断に感謝しよう』

俺はゆっくりとラウラに近づき両手でシャルロットをラウラに渡す。

『さらばだラウラ・ボーデヴィツヒ。願わくば2度と戦場で出会いたくないな』  
「こちらこそ願い下げだテロリストツ!!」

『……我々は亡国機業、世界に変革をもたらす者だ!!テロリストなどと言ってもらっては困るな。では失礼する』

怒髪天なラウラを横目に俺はブースターを取り付けフランス領空を離脱した。

『なんでアイツらと戦ってたんだよ。何がしたいんだ俺はッ』

# あの日の戦友たちは今敵となる

---

著者    ゼノア plus +

発行日    2020 年 12 月 28 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/146466/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。

---